

北谷町文化財調査報告書 第19集

北谷町の綱引き

— 北谷三ヵ村大綱引き(ウーナ)を中心に —

2000年3月

沖縄県 北谷町教育委員会

北谷町の綱引き

— 北谷三ヵ村大綱引き(ウーナ)を中心に —



旗頭のガーエー（1998年）



北谷の大綱（ウーナナ）



字玉代勢のミルク（1998年）



字北谷のフェーヌシマ（1998年）

発刊によせて

私たちは、伝統芸能・行事の継承・発展という言葉をよく耳にする。しかし、それを実現したという話はほとんど聞かない。正に言うは易く、行うは難しである。伝統芸能・行事の証言者が次々に他界、あるいは高齢化し、さらには終戦を境に日々社会状況が激変していく中においてはやはり聞き取り調査にも一定の限界があるのは確かだろう。しかし、この程発刊された本調査報告書にはその影響は少しもない。聞き取り調査は北谷三カ村を中心にしながらも、他集落までも調査の範囲を広げ、比較検討するという緻密な調査にただただ驚嘆している。その調査項目を見ていると実に多様だ。「綱の材料と綱の形態」「備え・示威行為」「衣装」「綱の引き方」「組織」「祭祀儀礼」など実に多岐に渡っている。調査員の方々の苦勞が偲ばれる。

1 ページ、1 ページ読み進めていくと、往時の人々の熱い思いが伝わってくる。五穀豊穡と無病息災を祈願し、旗頭を天高く掲げ、綱を引き合った村人たち。村落共同体の意識に堅く結ばれていた当時、“綱引き”は村人たちをさらに堅く結束させた強い絆の祭事であったことがひしひしと伝わってくる。私たちの先祖が何を想い何を願ってきたか、数百年の時空を超えて伝わってくる。

ところで、地域に伝わる伝統芸能や行事はその地域の歴史と文化に根ざした貴重な歴史的遺産であるばかりか、その地域の将来の文化の向上発展の基礎をなすものであると言われている。従って、この伝統芸能や行事は地域独自の歴史・文化環境を形作る重要な要素であり、今後の個性豊かで活力に満ちた本町の町づくりには欠かせないものである。私たちは、本報告書を我が町の文化の活性化に役立てると共に、先人たちの信仰習俗を理解するテキストとして活用し、さらにはそこに盛られた調査の成果を我が町の民俗文化財として、来る21世紀へ継承していきたい。

最後になりましたが本調査報告書を立派に完成させていただきました沖縄国際大学の平敷令治先生、調査員の方々、そして聞き取り調査にご協力いただきました証言者の方々に心より厚く感謝と御礼を申し上げます。

平成12年3月31日

北谷町教育長 當山 憲一

目 次

口 絵

発刊によせて

凡 例

第一章 北谷三カ村大綱引き（ウーナ）の概要

1. 三カ村の概況	1
2. 大綱引き（ウーナ）の由来	1
3. 大綱引きの進行過程	5

第二章 北谷三カ村大綱引きの構造

1. 綱の材料と綱の形態	10
2. 備え・示威行為	21
3. 衣 装	71
4. 綱の引き方	99
5. 組 織	111
6. 祭祀儀礼	118
7. 綱の処理儀礼	135

第三章 旧北谷村各字の綱引き

1. はじめに	137
2. 各字の概況	137
3. 各字別綱引きの構造	139
(1) 砂 辺	139
(2) 下勢頭	149
(3) 平安山	155
(4) 桑 江	161
(5) 北 谷	167
(6) 伝 道	173
(7) 玉代勢	177
(8) 野 里	183

解 説

付 録

1. 大綱引き実行委員会議事録	200
2. 北谷三カ村大綱引き実行委員会	210
3. 北谷三カ村大綱引き実行委員会名簿	211
4. 1998年北谷三カ村大綱引き関係文書目録	212
5. 米軍基地立ち入り許可申請書コピー	217
6. 米軍基地立ち入りパスコピー	220
7. 北谷三カ村大綱引き掲載資料目録	223
8. 1998年北谷三カ村大綱引きへの取り組み	224
9. 伝承者・協力者名簿	228
10. 北谷町綱引き調査団ミーティング記録	230
11. 綱引き調査団合同調査日誌	236

第一章 北谷三カ村大綱引き(ウーンナ)の概要

1. 三カ村の概況

北谷三カ村とは、かつて北谷の行政機関であった間切番所が存在した北谷村と、伝道村、玉代勢村を総称した名称である。この三カ村は北谷グスク南側に立地し、西は那覇から本島北部まで延びる街道に接し、村の前面には「北谷ターブックゥ」と呼ばれた水田地帯が広がっていた。『北谷町史』等を参考にして、1935（昭和10）年頃の三カ村を復元したのが図1-1である。これを見ると、西には馬場と県道が南北に走り、さらにその西側に沖縄県営鉄道嘉手納線が走っていた。馬場の東には北玉小学校があるが、これがかつての北谷間切番所跡である。

北谷集落の北側には伝道集落、その間には桑江殿内、ノロ殿内があり、道を隔てた玉代勢集落には、樹昌院があった。

2. 大綱引き(ウーンナ)の由来

綱引きは沖縄本島地域を中心に宮古諸島、八重山諸島にもみられ、さらに奄美や日本本土、および中国、韓国にも伝統行事としての綱引きが行われている。沖縄ではいつ頃から行われていたのかは確定することはできないが、1713年に首里王府で編纂した『琉球国由来記』巻四に次のように記されている。

綱引（唐称祓河）

当国、何代始乎。効和漢之俗者歟。於大路中挽之。

是争勇力之業、且国中有疫病時、払除疫鬼ト云テ

引事也。

1713年頃には沖縄でも綱引きが行われているが、いつ頃かということは確認できない。この記録を見ると「挽」は「勇力を争う」の意に使われて、「引」は「国中に疫病がある時にその疫鬼を払除する」儀礼に使われて、早くから「挽」と「引」は使い分けられていた（平敷令治、1978：41）。

北谷においてもいつ頃から大綱引きが始まったのかは明らかにすることはできなかったが、北谷三カ村には「ウーンナは300年の歴史があり、毎年不作続きであったが、なぜか、寅年の時だけ豊作だったことから、これをお祝いして始めたのがきっかけで寅年に行っている。」という伝承が残っている。

13年マールの大綱引き（ウーナ）は、旧暦の6月25日には北谷で行い、翌日の26日には玉代勢で引いた。綱引きは正午からスネーがあり、その後引いた。

綱引きについての記述として『北谷町史 第四巻 資料編 新聞資料』（1985：68）では「北谷間切の綱曳」が1902（明治35）年8月3日の琉球新報で報じられ当時の様子うかがえる。

北谷間切の綱曳は既報の如く客月三十一日執行せり近郷近在の男女老幼、無慮一万数千人同村の馬場に集まり、非常の雑踏を極め嘉手納警察署より巡查一名出張非常を警戒し斯くて綱曳は同日午後五時頃終了、南方の勝利に帰したり。又翌一日には同間切玉代勢村の綱曳にて、北谷同村の人民等は前日の盛装にて、加勢をなし、午後五時頃引揚後一同隊を組んで村中を練り廻はりたり

その年は寅年にあたり、大勢の人々で綱引きが行われたことや、翌日には玉代勢で行った様子うかがえる。

『北谷町史 第四巻 資料編 新聞資料』（1985：306）は1914（大正3）年8月17日にも行われた様子が記されている。

十三年廻の催し

十三年廻りの北谷大綱と云ふのが非常な人気となりて昨日北谷村の綱曳は近来稀なる盛観の裡に催された。此日、朝来炎暑焼くが如く寒暖計は華氏の九十二度内外を示したれども、北谷綱の人気は此の炎暑に怯むべくもあらず、那覇・首里よりの見物人は朝まだきより馬車を連ねて北谷街道に数珠繋ぎとなり、往き通ふもの引きも切らざる程であった。綱曳の場所は北谷馬場で、北谷字の入口よりは馬車も俾も一步も進むことが出来ない。蟻の足だに通らない雑踏の中を分け入りて馬場に出づると、馬場の両側は数町に渡り棧敷がズラリと並んで早や人を以て満されて居る。

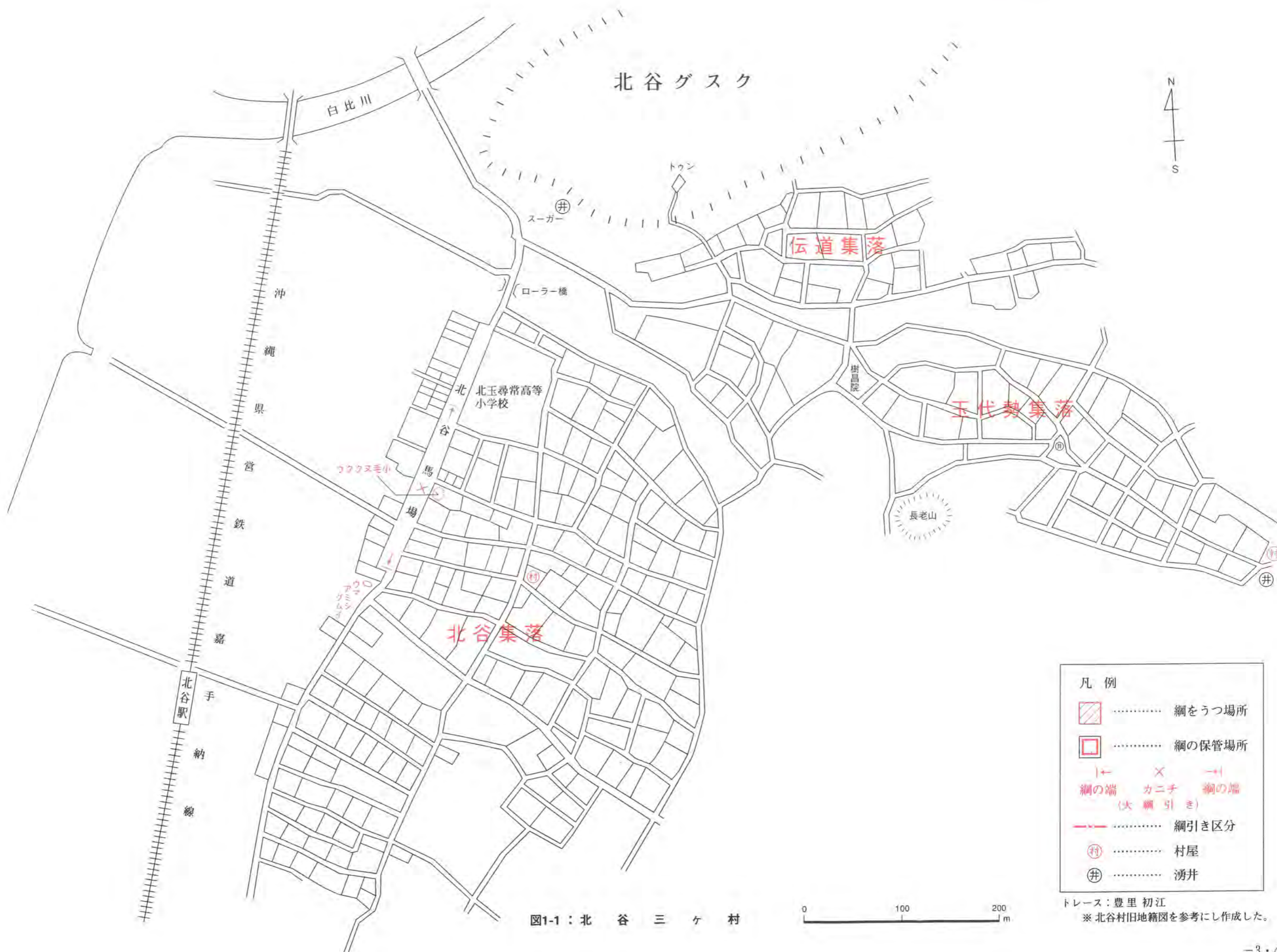
△未曾有の盛況－（中略）－勝敗を決す－

戦前は昭和元年にあたる1926（大正15）年の寅年にも行われた。その後、1938（昭和13）年にも行われたが、このときは15年戦争初期ということもあり、非常時であることから大幅に簡略化されたということであった。戦後は36年ぶりに1974（昭和49）年に復活し、その時は台風接近中で雨の中ハンビー飛行場で行っている。その後1986（昭和61）年に行っている。

参考文献

北谷町史編集委員会編、『北谷町史 第四巻 資料編新聞資料』、北谷町役場、1985。

平敷令治、「沖縄の綱引(2)」、『沖縄国際大学文学部紀要 社会学科篇』6-1・2、1978。



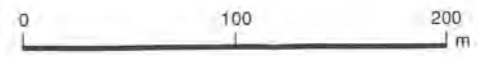
北谷グスク



凡例

-  網をうつ場所
-  網の保管場所
-  網の端 (大綱引き)
-  カニチ
-  網引き区分
-  村屋
-  湧井

図1-1：北谷三ヶ村



トレース：豊里 初江
 ※北谷村旧地籍図を参考にし作成した。

3. 大綱引きの進行過程（8月16日〈旧暦6月25日〉）

36年ぶりの復活(1974年)から3回目となる北谷三カ村大綱引き(ウーンナ)は、1998(平成10)年8月16日に行われた。ここでは、大綱引き当日の進行過程を時間の流れに沿って紹介したい。

なお、ミチジュネーの時間は正面本部席前の通過時点を記録したため、大雨で途中中止となったクシダカリ字北谷の「下り口説」から伝道の全演目については時間を記録することができなかったことを予めお断りしておきたい。

(1) ミチジュネー

- 13:00 会場(安良波公園)入りした順に写真撮影が始まる。
- 14:45 ミチジュネーのメンバーらが整列をはじめ。
- 14:55 メンダカリ字北谷の旗頭2旗(「招豊作」・「清風」)を先頭に、カニチグチ前の定位置に集合。
- 14:59 旗頭の後に、ブラチリ集合。
- 15:00 開会宣言(田場健儀さん〈北谷〉)。
- 15:05 開会あいさつ(照屋宏さん〈玉代勢〉)。
- 15:07 三カ村大綱引き実行委員長あいさつ(照屋信正さん〈北谷〉)。
- 15:12 大会長あいさつ(辺土名朝一さん〈北谷町町長〉)。

① メンダカリ(雌綱)

記録：宜野座亜紀

高良 都

- 15:17 ポラの合図でミチジュネー開始。
メンダカリ旧字北谷の旗頭定位置よりスタート(「招豊年」12人、「清風」12人)。旧字北谷のチヂンの後に、旧字玉代勢のメンバーが続く。
クシダカリ旧字北谷の旗頭2旗を先頭に、海側よりスタート。北谷のチヂンの後に、旧字伝道が続く。
旧字北谷のブラチリ本部席前を(大人2人、子ども39人)通過。
- 15:21 旧字北谷のソーグ(4人)通過。
- 15:23 旧字北谷の縮太鼓(20人)通過。
- 15:26 稲シリ節(踊り7人、地謡2人)通過。
- 15:28 上り口説(踊り3人、地謡2人)通過。
- 15:29 揚口説(踊り3人、地謡2人)通過。
- 15:30 下り口説(踊り2人、地謡2人)通過。

- 15:32 クワーディーサー (踊り4人、地謡2人) 通過。
- 15:35 前ヌ浜 (踊り3人、地謡1人) 通過。
- 15:37 金細工 (踊り3人、地謡3人) 通過。
フェーヌシマ中央を通過。
- 15:38 黒島口説 (踊り10人、地謡2人) 通過。
- 15:42 貫花 (踊り15人、地謡3人) 通過。
- 15:43 祝い節 (踊り10人、地謡2人) 通過。
- 15:44 加那ヨー (踊り16人、地謡2人) 通過。
- 15:50 チヂン (踊り15人、地謡2人) 通過。
- 15:52 旧字玉代勢先頭のミルク (2人) 通過。
- 15:53 旧字玉代勢の旗頭 (「招豊年」11人) 通過。
- 15:55 旧字玉代勢の旗頭 (「祈豊年」10人) 通過。
- 15:56 ブラチリ (39人) 通過。
- 15:58 ソーグ (5人) 通過。
- 15:59 締太鼓 (24人) 通過。
- 16:00 休憩

<16:00 休憩時の旗頭の位置>

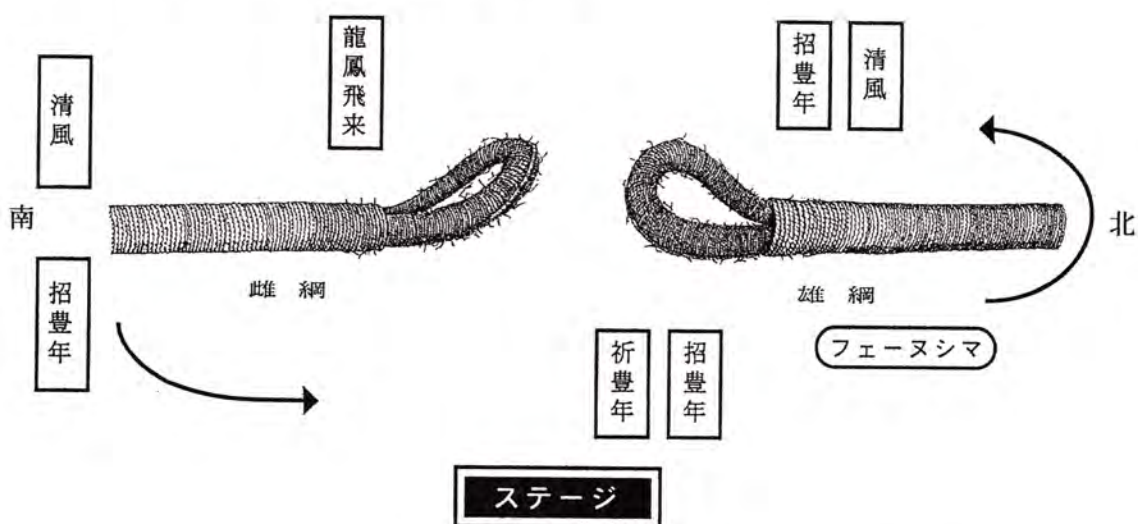


図1-2 休憩時の旗頭の位置

作図：大城清太

- 16：11 ポラの合図でミチジュネー再開。
 16：14 稲シリ節（踊り11人、地謡2人）通過。
 16：16 祝い節（踊り19人、地謡2人）通過。
 16：17 金細工（踊り3人、地謡2人）通過。
 貫花（踊り15人、地謡4人）通過。
 16：18 加那ヨー（踊り21人、地謡2人）通過。
 16：21 前踊（4人）通過。
 16：22 チヂン（踊り11人、地謡3人）通過。

② クシンダカリ（雄綱）

記録：新城 明彦

宮里真由美

- 16：26 旧字北谷の旗字は「招豊年」（13人）と「清風」（12人）本部席前通過。
 16：31 ブラ（30人）・ソーグ（4人）・締太鼓（24人）本部席前通過。
 メンダカリの旗頭「招豊年」半周。
 16：34 稲シリ節（豊年万作を願う。踊り7人、地謡2人）通過。
 16：36 上り口説（旅立ちの踊り。踊り3人、地謡4人）通過。
 16：36 揚口説（踊り3人）通過。
 16：40 大雨のためミチジュネー中止の放送。
 下り口説（踊り2人）。
 クワーディーサー（20代の女性の踊り。踊り4人、地謡2人）。
 前ヌ浜（踊り3人、地謡2人）。
 金細工（鍛冶屋の踊り。踊り3人、地謡2人）。
 黒島口説（豊年を願う。踊り10人、地謡2人）。
 貫花（恋人に貫花を作ってあげる。踊り18人、地謡2人）。
 祝い節（50～70代の女性の踊り。踊り12人、地謡3人）。
 加那ヨー（30～40代の人々の踊りで、恋人を偲ぶもの。踊り18人、地謡2人）。
 チヂン（70～80代の女性。踊り8人、地謡2人）。
 旧字伝道の旗頭「龍鳳飛来」（10人）。
 ブラチリ（32人）。
 ソーグ（2人）。
 締太鼓（24人）。
 チヂン（7人、地謡2人）。
 貫花（踊り16人、地謡3人）。
 加那ヨー（踊り19人）。
 16：50 旗頭ガーエーのため、各字とも旗頭を所定の位置に移動する。

- 16:58 雌雄のカニチグチ近くで、掛け声とともに旗を上下に振り、その周りでは、鉦鼓や締太鼓が囀したてる。
- 17:09 旗頭のガーエー終了。その後各字の旗頭は所定の場所に固定された。

(2) ガーラシ(支度)・綱の動き・カニチ焼き

記録：高良 都 (メンダカリ)

宮里真由美(クシンダカリ)

① ガーラシ(支度)

- 17:11 ガーラシ登場。
メンダカリからウミナイビと供・クシンダカリから按司と供。
- 17:15 双方のガーラシがカニチグチの近くでにらみあった後、一旦それぞれの綱の半分辺りまで後退する。
- 17:20 双方のシタクが再度カニチグチ辺りまで進む。その際メンダカリのウミナイビは、紅型の打掛を脱ぎ白装束で登場する。
- 17:21 双方のシタクがにらみ合う。
- 17:22 ガーラシ退場。
- 17:23 双方のガーラシが退場すると、綱寄せの係がカニチグチの周りに集まった。
- 17:28 「ユシレーハイヤ」の掛け声に合わせて綱寄せがはじまる。
- 17:31 雌雄の綱が結合されると綱を一旦下ろし、雌雄の綱がはずれないようにロープで結わえた。
- 17:32 8人の男たちによって、カニチ棒が準備された。
- 17:36 雌雄の綱がカニチ棒で結合され準備完了の合図。
- 17:37 大会長の振り下ろす旗の合図で1回目の綱引き開始。
- 17:42 終了。引き分け。
- 17:45 そのままの位置から2回目の綱引き開始。
- 17:47 終了。勝敗はクシンダカリに軍配があがる。
- 17:49 カニチ棒をはずす。

② カニチ焼き

- 17:51 4～5人の男性が、カニチ焼きの準備。
- 17:52 カニチ焼きに使用するワラ束が雨で濡れたため別のワラ束を車から下ろす。
- 17:54 メンダカリの男性2人、カニチ焼きに用いるワラ束1つを綱の後方へ運ぶ。
- 17:56 ワラ束への点火の準備。
- 18:00 ワラ束移動(カニチグチへ)の合図。
- 18:03 カニチグチ付近で双方のワラ束に点火。

- 18:04 双方のワラ束を、雌雄の綱のカニチグチの上に掲げ数回ぶつけあう。
- 18:06 終了宣言の後、メンダカリはワラ束を車に積み、かつてのンマアミシグムイの場所に向かう。
- クシндаカリは、4人の男たちがカニチ焼きのワラ束をインディアンオーク号あたりの海岸の方へ持って行き、そこにワラ束を置いてワラに向かって手を合わせた。
- 18:09 クシндаカリのワラ束を持って行った男たちが、会場へ戻る。
- 18:17 メンダカリのワラ束がンマアミシグムイへ到着。ワラ束を放置して会場へ戻る。

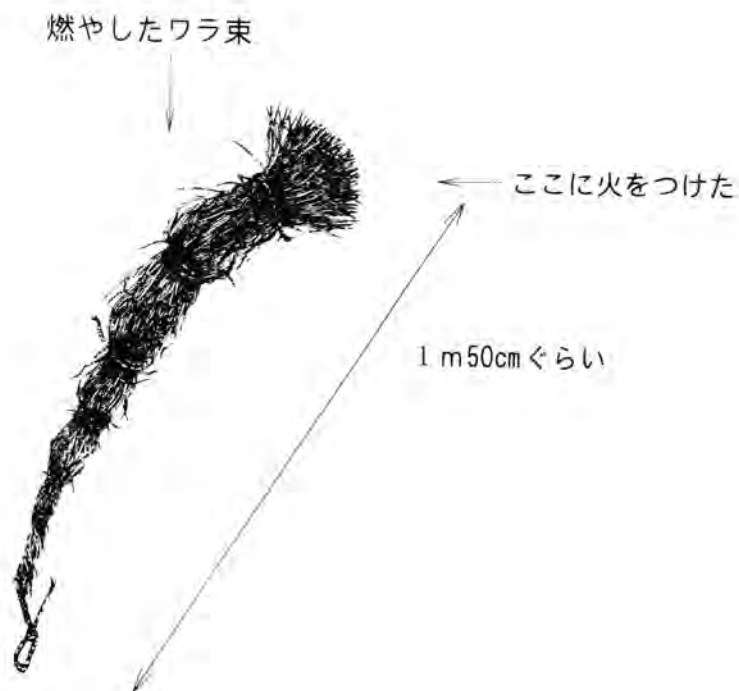


図 1-3 カニチ焼きに用いるワラ束

作図：大城清太

第二章 北谷三ヶ村大綱引きの構造

1. 綱の材料と綱の形態

(1) 綱

① 戦前

綱は雌雄1本ずつで材料は稲ワラであった。材料の稲ワラは集落内でまかなえたようである。戦前の綱引きに関しては聞き取りが充分でなかったためこれまで紹介された文献から見てみた。

三日程前から、各々の組頭が銅鑼鐘を鳴らしながら村の通り毎にあるくと、それぞれの家庭で何束必要か判っているの、門の前に準備しておく。そうすると、銅鑼の後ろを追う子供たちがそれを運び集め、最終的には前ノ渠の村屋にあつめ、大きなガジュマル下で役割分担をきめて作業をはじめる。3日目の午前中には直径1m、長さ100mの雄綱と雌綱ができあがり、馬場に運ばれ夕方まで待った。『字誌北谷』：135)

綱は、太さが約70cm・長さが約100mもある大綱で、馬場の南側に雌綱・北側に雄綱を前もって準備しておいた。『北谷町史第三巻 民俗下』：62)

1986年の『北谷三ヶ村大綱引き』パンフレットによると、昔の綱は、メージナ、ナカジナ、クシジナと雌雄それぞれ3本ずつからなる綱(1)となっている。ティーンナ(手綱)の本数などは不明である。

② 戦後1回目(1974年)

綱は雌雄それぞれ1本で、材料は稲ワラである。戦後は水田がないため、材料の稲ワラは名護市字羽地から購入した。『北谷町史』によれば、この頃までは綱に関して不明な点があったようで、与那原の綱を調査し補ったようである。また、綱の作製に関して屋慶名から技術を導入して作製したようである。綱の長さは約100mほどで、直径は約75cmほどであった。ティーンナ(手綱)の本数と長さは不明であるが、直径は写真から推測して9cmほどであったようである。

註

(1) 1926(大正15)年の大綱引きではこの形態であったとの伝承あり(高江洲敦子確認)

③ 戦後2回目(1986年)

綱は雌雄それぞれ1本で、材料は稲ワラである。材料の稲ワラは前回と同じく名護市宇羽地から購入した。綱はまず3人1組となり時計廻りに捻りながら打っていく。そして出来上がり次第、綱の先端を持っている人が引っ張り、打つ人が作業しやすいようにした。

出来上がった綱は会場である米軍ハンビー飛行場跡に運びこまれ、ウーンナに仕上げた。カニチ部分はドラム缶を鉄筋で固定し、それに綱を巻き付け整形していった。綱をある程度整形した後は、砂糖キビを縛る市販の綱をつかい、カニチ口部分は数10cm間隔、それ以外は約1m間隔で縛っていった。この時、キビ用の綱は2本まとめて使用し、木槌で縛り口付近を叩きながら縛っていった。また作業がしやすいように、ウーンナと地面の間には、厚手の板が所々に敷いてあるが、カニチ口部分は細目の綱を使ってきれいに仕上げる必要があるため、ブロック等を使い人の腰の高さまで上げた。

カニチ口表面に巻き付ける細目の綱は木槌で叩きながらカニチ口の先端中央から両端に向かってウーンナに巻きつけていった。

完成した綱の長さは雄綱が74.1m、雌綱は75.1mであった。また直径は両綱ともカニチ口部分で70cmほどであった。またカニチ口の長径は両綱とも約4mであった。ティーンナの本数は不明であるが、直径は写真から推測して9cmほどであったようである。

④ 戦後3回目(1998年)

綱は雌雄それぞれ1本で、材料は稲ワラであった。材料の稲ワラは羽地ではワラを細切れに切り込むようになっていたので、金武町字屋嘉から15t購入した。綱の長さは雌雄それぞれ約75mほどで、直径は55cm~70cmほどであるが、綱の端は35cmほどであった。

ティーンナの取付には少々ムラがあり、本綱に結んだ綱の結び目から余った綱が場所によっては70cmほどあり、それらも含めると雌雄それぞれ50本ほどで、長さが1mほど、直径は9cmほどであった。

イ. 綱打ちの詳細

綱打ちは雌雄とも旧北谷町役場跡地にて行われた。ここの全敷地を大きく2つに分け、ワラの保管と、最初のワラ仕分けと完成した綱の保管は庁舎内を使用し、綱打ちは駐車場を利用した。それぞれ役割を決めて行われた。

稲ワラは、北谷町役場庁舎内にすべて搬入されており、まずそれを適当な太さの束にする(写真2-1)。それを足漕ぎの脱穀機を使い整え、綱打ちとなる(写真2-2)。綱打ちは一度に5本打っており(写真2-3)、それは順次庁舎内に取り込むようになっている(写真2-4)。打ち終わると板に綱の長さを書いて針金でくくり保管した(写真2-5)。この時綱の長さがすぐにわかるように綱を打つ場所から10mの所に印があり、これで長さを計測した。また完成した綱がわかるようにボードに綱の長さ、本数、日付が記録されていた(写真2-6)。大綱の整形は、会場となる安良波公園にて行われた。整形はまず、綱を重ねて置くため



写真 2-1 ワラの選別



写真 2-2 ワラ束を整える



写真 2-3 網打ちの様子



写真 2-4 完成した網の収納の様子



写真 2-5 網の保管の様子

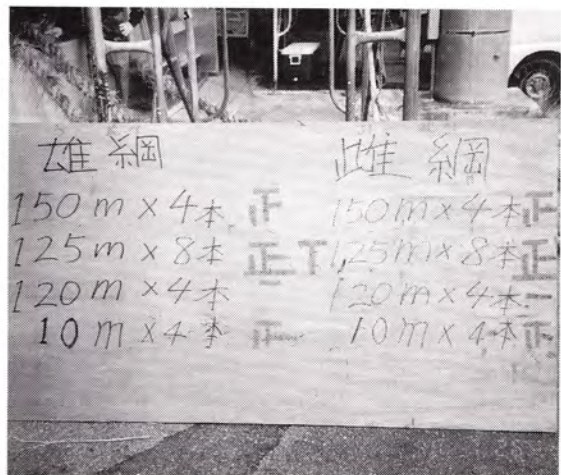


写真 2-6 網の記録板

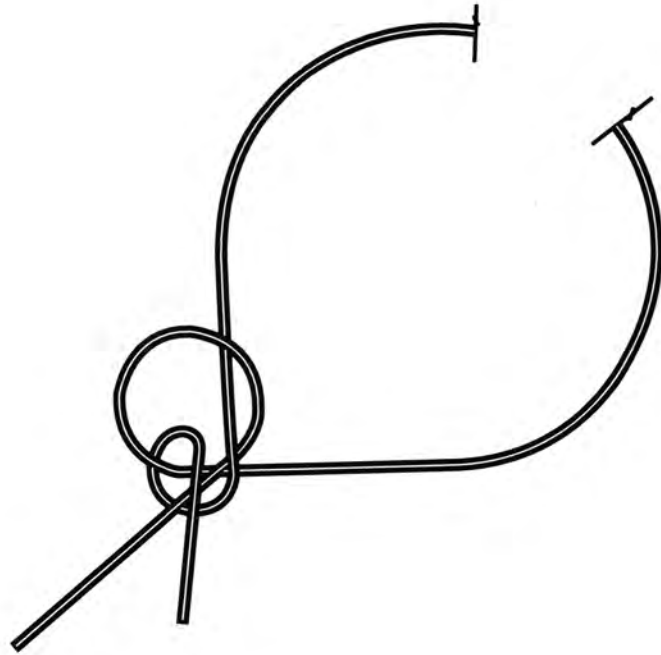


図 2 - 1 大和結び

北谷三カ村大綱引き実行委員会提供

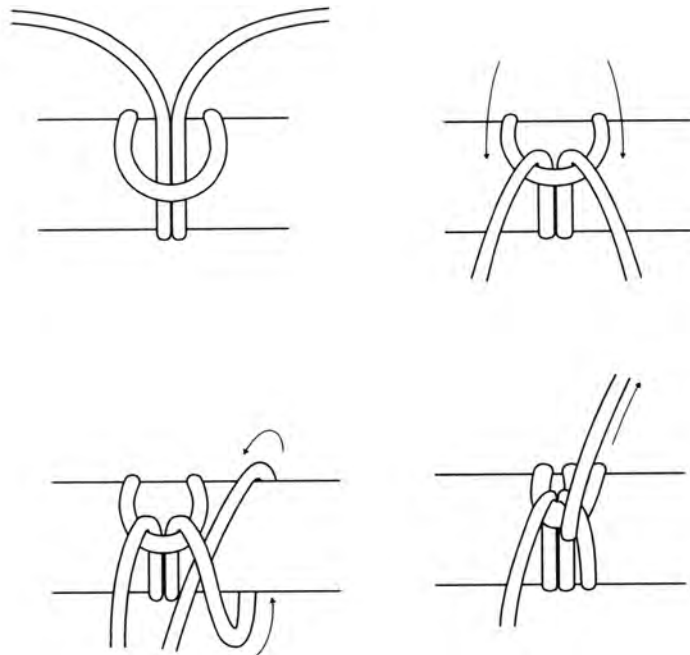


図 2 - 2 カニチの化粧

作図：高良都・トレース：豊里初江

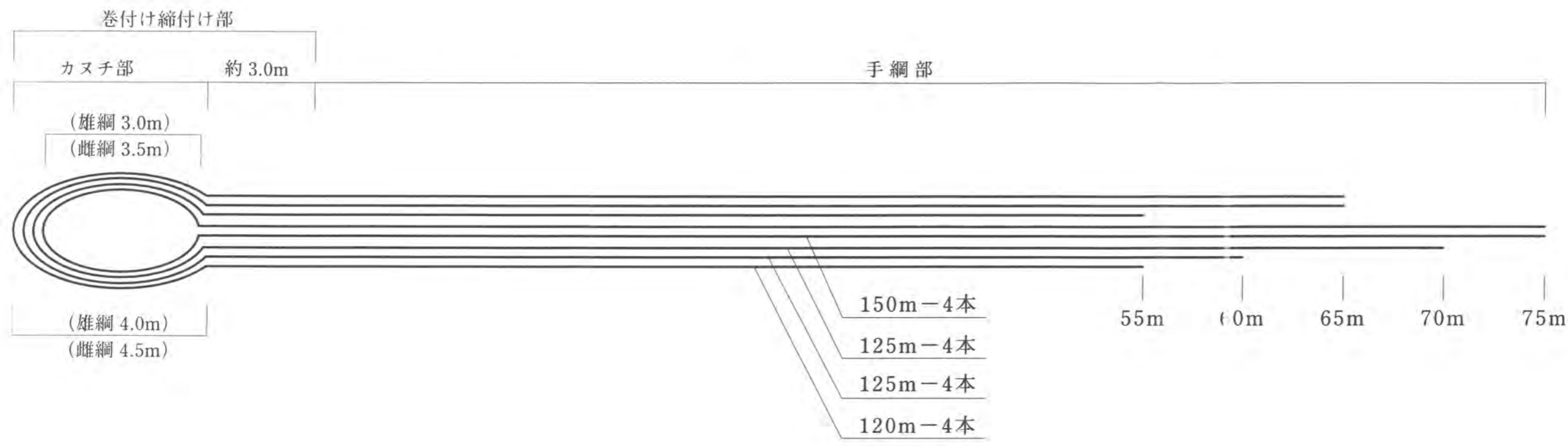


図2-3：雄網、雌網組上げ図 (1998年)
(約 1/100)

(北谷三ヶ村大綱引実行委員会提供)

の杭打ちから始まった。杭は縦横4cmの木製で一般に市販されているものである。これを大綱の幅に近い74cm間隔で2本打ち、このセットを3m間隔で打っていった。杭の本数は21組42本であったのでカニチ口から杭の端までで63mとなる。

次に綱の整形が始まる。まず、使用する綱をすべて杭の横に伸ばして並べた。次に数m間隔で50人程で綱を持ち、綱を打ったのと同じ方向にねじった。これは綱の強度を上げるために行われたものである。当初は専用の機械を使用しようとしたが使い馴れていないためこの方法をとった。

この作業の後、綱を二つ折りにして杭の間に入れていった。前述したように、綱は最長150mを始めとして様々な長さの綱がある。これをきちんと2つ折りするわけではなく、幾分加減して全体として同じ太さになるようにした。また、カニチ口になる部分には整形用の木型を入れ、整形しやすいようにした。今回のウーナの作製に当たっては、宜野湾市の大山区から技術指導を受けていた。そのため木型を使用するなど、ウーナ作製のポイントとなる部分は大山の綱作製技術が導入された。

整えられた綱は、ワイヤーを掛けフォークリフトを使い持ち上げる。そして木槌で叩きながら市販のポリエチレン製ロープで締めていった。ロープは「大和結び」(図2-1参照)と呼ばれている結び方で、砂糖キビを収穫する際にキビを束ねる結び方と同じである。綱の結び方はほとんどこれのみを使用していた。おろす際には杭を抜き、9cm角の角材を枕木として置いていった。この作業と平行してカニチ口も市販のロープを使い結んでいった。この部分は輪になっているため人力で行われた。鉄筋で作られた手製の鉤を使いロープを通し木槌で打ちながらカニチ口の内側と外側から2人で締めていった。

カニチ口の化粧は30mの綱2本、20mの綱2本の計4本、雌雄合わせると8本使用した。化粧はまずカニチ口の先端に30mの綱を二つ折りにしてひばり結びで結ぶ。その後それぞれ端に向かって回し結びを交互に繰り返して巻いていった(図2-2参照)。カニチ口の部分を終わると後は巻きつけていった。この化粧法は大山区の指導者が北谷用にアレンジしたものであり、大山区の綱とは異なるようである。

ティーンナはほぼ1m間隔で大綱に結んでいった。これも大和結びであるが、その長さは計測しながらではなく目分量で、平均1mほどであった。また、1カ所の結び目から同じ長さで2本出ているものもあり厳密に取り付けてはいないようであった。雌雄ともそれぞれ50本ほどである。

《安良波公園での綱打ち作業》

記録：宮里真由美・高良 都

8月7日(金)(綱運搬)

9:15 旧役場より綱をユニック(クレーン付トラック)にて搬送開始(1回目)。

10:25 会場となる安良波公園にユニック到着。

- 10:30 大綱を作るための杭打ち始まる。
- 10:56 ユニックから綱おろし終える。
- 11:40 ユニック到着（2回目）。
- 12:09 ユニックから綱おろし終える。
- 12:12 昼食。
- 13:43 ユニック到着（3回目）。
- 14:13 ユニックから綱おろし終える。
- 15:04 ユニック到着（4回目）。
- 15:31 ユニックから綱おろし終える。
- 16:28 ユニック到着（5回目）。
- 16:50 綱おろし作業終了。

8月8日（土）（雄綱作り）

- 9:15 作業開始。
- 9:17 それぞれの綱をねじり直した。
- 10:52 カニチ口を整形する木型到着。
150mの綱4本をロープでまとめた。
- 13:08 カニチ口を整形する木型を鉄筋で固定。
- 13:48 まとめた150mのロープを杭の間に入れる。
- 14:07 120mの綱2本を杭の間に入れる。
- 14:10 125mの綱4本を杭の間に入れる。
- 14:20 綱が切れるのを防ぐため、市販の麻製ロープ110mの間にはさみ込み麻製ロープを金具で止めた。
- 14:48 10mの綱を木型付近に入れた。
- 14:53 125mの綱2本を杭の間に入れる。
- 14:58 125mの綱1本を杭の間に入れる。
- 15:00 125mの綱1本を杭の間に入れる。
- 15:03 10mの綱1本を木型付近に入れる。
- 15:05 125mの綱1本を杭の間に入れる。
- 15:08 150mの綱1本を杭の間に入れる。
- 15:40 10mの綱2本を木型付近に入れる。
- 15:45 フォークリフトを使い綱を持ち上げ木槌で締めながら市販のポリエチレン製ロープでくくっていった。

16：08 木型を外した。

8月9日（日）（雌網作り）

9：11 綱を並べる。

9：38 それぞれの綱を捻り直した。

10：00 中断（休憩）。

10：15 捻り直し再開。

11：00 中断（休憩）。

11：10 捻り直し再開。

11：20 125mの綱2本を杭の間に入れる。

11：25 150mの綱4本を杭の間に入れる。

11：38 125mの綱2本を杭の間に入れる。

11：43 125mの綱4本を杭の間に入れる。

11：48 綱が切れるのを防ぐため、市販の麻製ロープ110mの間にはさみ込んだ。
麻製ロープを金具で止めた。

11：58 150mの綱1本を杭の間に入れる。

12：03 120mの綱1本を杭の間に入れる。

12：07 120mの綱1本を杭の間に入れる。

12：09 125mの綱1本を杭の間に入れる。

12：12 125mの綱1本を杭の間に入れる。

12：15 125mの綱1本を杭の間に入れる。

12：21 中断（休憩）。

13：00 フォークリフトを使い綱を持ち上げ木槌で締めながら市販のポリエスチレン製ロープで括っていった。

8月10日（月）（カニチ口部分の化粧）

9：15 作業開始。

9：23 作業場所にテント移動。

9：29 化粧用の綱を運ぶ。

9：48 30mの綱を巻き始める（1本目）。

10：15 30mの綱を巻く（2本目）。

11：53 20mの綱を巻く（3本目）。

11：58 中断（昼食）。

…以下、午前中の作業の繰り返し…

(2) カニチ棒

① 戦前

戦前のカニチ棒は松材で、崎原（1978）によれば、タキギを販売する店や材木屋から借用了り、松林から切り倒して間に合わせていた。本数は雌雄をつなぐカニチ棒と、メー・ナカ・クシジナを結ぶナカニチ棒の合わせて5本を使用した。寸法は不明である。

② 戦後1回目（1974年）

この時に使用されたカニチ棒は、崎原（1978）によれば電信柱を購入して作製した。寸法その他は不明である。

③ 戦後2回目（1986年）

材質は松材であった。また長さについては「奇数がカリーだから」という理由から、13尺3寸（約4m）となった。直径は約20cmほどであった。加工は切り出してきた松の表皮を鎌でそぎ落とし、次に丁寧に表面を磨き、最後に棒の両端に市販のロープを巻き付けた。

④ 戦後3回目（1998年）

材質は松（リュウキュウマツ）である。寸法は長さ4m88cmで直径は18cmであった。またカニチ棒が綱から抜けるのを防ぐため、市販のポリエスチレン製ロープを通す口径25mmの穴を、端から51cm内側、その反対側の端から49cm内側にドリルで開けた。

イ. カニチ棒作製の詳細

まず、郷友会の会員の一人が所有している林から適当な大きさの松を選びチェーンソーを使い切り倒した。次に使用する大きさに切り、4人がかりで石柱を運ぶ要領で車の使用できるところまで運んだ。

切りだした松材は、旧北谷町役場跡地に運び、ここで仕上げた。まず表皮を鎌等を使ってそぎ落とし、ある程度そぎ落とした後は耐水ペーパーで磨いた。その後両端の角をとり、ドリルで穴を開けた。すべての整形が終わった後に中央に赤いペンキで幅10.7cmの目印を書き、市販のポリエスチレン製ロープを両端の穴に通した後巻いた。

参考及び引用文献

- 金城 至盛 編『字誌北谷』 1986年
嘉手納町史編纂委員会編『嘉手納町史 資料編2』民俗資料 1990年
北谷町史編集委員会編『北谷町史 第三巻資料編2』民俗下 1994年
北谷町史編集委員会編『北谷町史 第三巻資料編2』民俗上 1992年
北谷町史編集委員会編『北谷町史 第五巻資料編4』北谷の戦時体験記録（下） 1992年
平 敷 令 治「沖縄の綱引き」『沖縄の祭祀と信仰』 1990年
崎 原 恒 新「北谷三ヶ付の大綱引き」『まつり』 1978年

2. 備え・示威行為

(1) 旗頭

北谷、伝道、玉代勢の北谷三カ村で行われる大綱引き（ウーナ）には、旗頭（ハタガシラ）が用いられる。この旗頭は、戦前、北谷や伝道、玉代勢の各字で毎年引く綱引きには使われず、大綱引きだけに使われていた。三カ村では、旗頭もナナクミワイで分けられることから本数は、北谷が4本、玉代勢が2本、伝道が1本、合計7本となっている。この7本という本数は戦前から変わっていないようで、『琉球新報』1914（大正3）年8月17日付、「北谷の綱曳」の記事に東方に4本、西方に3本と記されている。三カ村でそれぞれ何本の旗頭を所有していたのか、この内容では不明だが、本数の割り合いは変わらないように思える。この項では、戦前から戦後3回行われた大綱引きでの旗頭の様子について報告する。なお、ここでいう旗頭とは、竿頭の飾りをはじめ、旗竿に掲げた旗や吹流しなどの飾りも含めた全体のことをいう。

① 北谷

戦前の旗頭の様子について『字誌北谷』（1986）には、「夫々前渠と後渠と旗頭四竿づつ竿頭には桜、梅燈籠、豊作を象徴する旗頭を作り」とあるが、このような具体的な内容まで聞くことはできなかった。しかし、本数に関しては戦前からメンダカリ（前村渠）、クシダカリ（後村渠）とも各2本で、1926（大正15）年と戦時体制下の1938（昭和13）年の大綱引きの際にも旗頭を出した。旗頭を持つ練習は、メンダカリが屋号シーサーニー（獅子根）近くのソンドウ（村道）や組合敷地で、クシダカリは北玉尋常高等小学校で行った。戦前、旗頭の製作は、部落内に製作者がいたようだが（屋号不明）、何らかの理由で作ることができず、結局、桑江方面に住んでいた浦崎姓を名乗る方に依頼した。この浦崎さんは、後に（時期は不明）泡瀬（現沖縄市）に引っ越した。戦後初の1974（昭和49）年の大綱引きの際にも浦崎さんに製作していただいた。戦前、1926（大正15）年の大綱引きの旗頭持ちは、北谷出身の青年だけでなく、北前や石平の方からも加勢があったようだ（仲村新正さん談）。

戦後は1974（昭和49）年にハンビー飛行場跡地で大綱引きを行った。この時は、台風14号の影響もあって悪天候の中での大綱引きであった。北谷の旗頭はメンダカリ、クシダカリ各2本で、メンダカリは竿頭の飾りに梅の花を象った。2本とも同じ型であった。クシダカリの竿頭の飾りは、満月を表したような丸い形に雲がかかった形をしていた（写真にて確認）。これら竿頭の飾りの中にロウソクや電灯等で明かりを灯すような工夫はされていなかった。

竹製の旗竿には、長方形の旗を掲げた。旗には「招豊年」、「清風」と書かれていた。

旗に書かれた文字はメンダカリとクシンダカリ共に同じであったが、旗を縁取る色がメンダカリは水色、クシンダカリは赤色、と異なっていた。旗の文字に関しては、崎原恒新「北谷三カ村の大綱引」(1978)に、

北谷のハタガシラのメー、クシとも一番頭は昔から「祈豊年」であったが二番頭の文字がついに思出せず、いろいろな文案から今回は「清風」に決めたという。

とある。上記の文章だと旗の文字は「祈豊年」とあるが、実際には「招豊年」の旗が掲げられていた。いずれにせよ“豊年”の語を基本としていることがわかる。また旗を掲げる横竿の両先端には、槍と金の玉が付けられていた。そして横竿の先には吹流しが取り付けられていた。

旗竿には竹を用い、その作りは竿下を旗頭持ちに支障をきたさない程度間隔を取り、その上部は棕櫚縄を巻いてあった。その他にも、旗頭のバランスを保つ縄が3本ついていた。

1986(昭和61)年の大綱引きには、北谷から4本の旗頭が出た。前回の大綱引き同様メンダカリ、クシンダカリ各2本である。竿頭の飾りも前回と形が異なった。メンダカリは、太鼓を象り中心に左巴紋の模様を入れた形(旗の文字は「招豊年」と、広げた扇子の中心に“祝、大綱”と書かれた形(旗の文字は「清風」)になった。一方、クシンダカリは梅の花を象った形(旗の文字は「招豊年」と、星型の中心に“祝”と書かれた形(旗の文字は「清風」)になった。これらに明かりを灯すような工夫はされていない。竿頭の飾りは、渡嘉敷唯文さんがデザインを考案、製作した。渡嘉敷さんによると、太鼓型と扇子の飾りは、戦前、住んでいた東風平村(現町)字東風平で見学した、旧暦8月15日に行われる綱引きの旗頭のデザインを参考にしたという。教員であった父親の赴任先が東風平村内にあったこともあり、その際に見学した綱引きに出た旗頭の形を渡嘉敷さんは覚えていたことから、それを基に作ったという。東風平では太鼓型が東、扇子が西であったそうだ。また梅と星型の飾りは、戦前、那覇(具体的な場所までは不明)で見たものを参考にしたという。

旗に関しては、文字がメンダカリ、クシンダカリとも「招豊年」、「清風」と前回と変わりはないものの、旗の縁取りがメンダカリは紺色に、クシンダカリは黄色に、と前回と比較すると変化が見られた。また旗に“字北谷”と字名が書かれていた。前は旗に字名を書き入れてなかった。旗を掲げる横竿も先の尖った矢と三叉に分かれた矢になった。その横竿の先には吹流しが取り付けられている。

旗竿は竹であるが、竿に棕櫚縄を3カ所程度に分けて巻かれていた。その中でも旗竿の中央に巻く棕櫚縄は、少々盛り上がるように巻いており、これはカイマタを当てる部分として使われた。旗頭のバランスを保つ縄の数は3本であった。

1998(平成10)年の大綱引きは、北谷の旗頭はメンダカリ、クシンダカリ各2本であった。竿頭の飾りは、北谷町砂辺にあるDESIGN&PLANコクバヤサンに、1986(昭和61)年の大綱引きで使った飾りを基に製作を発注した。86年の飾りは重くて、

なおかつ旗竿も太かったので持ち手から「持ちにくい」との意見がでたことから今回は軽量化を図った。竿頭の飾りは、メンダカリは太鼓を象り、その中心に左巴紋を入れた形（旗の文字は「招豊年」）と、星型の中心に“祝”と書いた形（旗の文字は「清風」）、クシダカリは、梅の花を象り周囲に松、竹を配した形（旗の文字は「招豊年」）と、広げた扇子の中心に“祝、大綱”と書いた形（旗の文字は「清風」）であった。旗頭の長さは、メンダカリ、クシダカリ共に旗竿の長さを5mに統一し、竿頭の飾りはそれぞれ110～120cm前後で、全長610～620cmであった。これらに明かりを灯す装置はつけていない。また前回（86年）と今回（98年）とを比べると、86年にメンダカリだった扇子型が98年にはクシダカリに、86年にクシダカリだった星型が98年にはメンダカリと移動がみられた。

旗は、86年の大綱引きで使ったのが北谷ノロ殿内に保管されていたので、それを利用した。旗にはメンダカリが「招豊年」と「清風」と書かれ、その文字の右下や下に“字北谷”と書かれている。旗の縁は紺色。クシダカリは「招豊年」と「清風」と書き、その文字の右下や下に“字北谷”と書かれている。旗の縁は黄色。旗を掲げる横竿もメンダカリ、クシダカリとも先の尖った矢と三叉に分かれた矢であった。この横竿の先には吹流しが取り付けられていた。また旗を掲げる縦竿はなく、縄を使って旗竿に括り付けた。

なお、大綱引き終了後、北谷の旗頭4本は字北谷郷友会より北谷町教育委員会文化課へ寄贈された。

表2-1 北谷の旗頭変遷表（戦後）

開催年	メンダカリ	クシダカリ
1974年	桜（招豊年） 旗の縁は水色 桜（清風）	満月に雲がかかる（招豊年） 旗の縁は赤色 満月に雲がかかる（清風）
1986年	太鼓（招豊年） 旗の縁は紺色 扇子（清風）	梅（招豊年） 旗の縁は黄色 星（清風）
1998年	太鼓（招豊年） 旗の縁は紺色 星（清風）	梅（招豊年） 旗の縁は黄色 扇子（清風）

※本表は、三ヶ村でも竿頭の飾りが特に変化した北谷に着目した。

1974年のクシダカリの竿頭の飾りは筆者が写真から判断した。

（ ）内は旗の文字。



写真2-7 左：北谷メンダカリの旗頭(梅)・右：玉代勢の旗頭(ボタン)
 このときの大綱引きは、台風の影響もあってほとんどの旗頭の飾りが風で飛ばされて骨組みだけになってしまった。



写真2-8 北谷メンダカリの旗頭(梅)(1974)



写真2-9 玉代勢の旗頭(ハチカク)(1974)

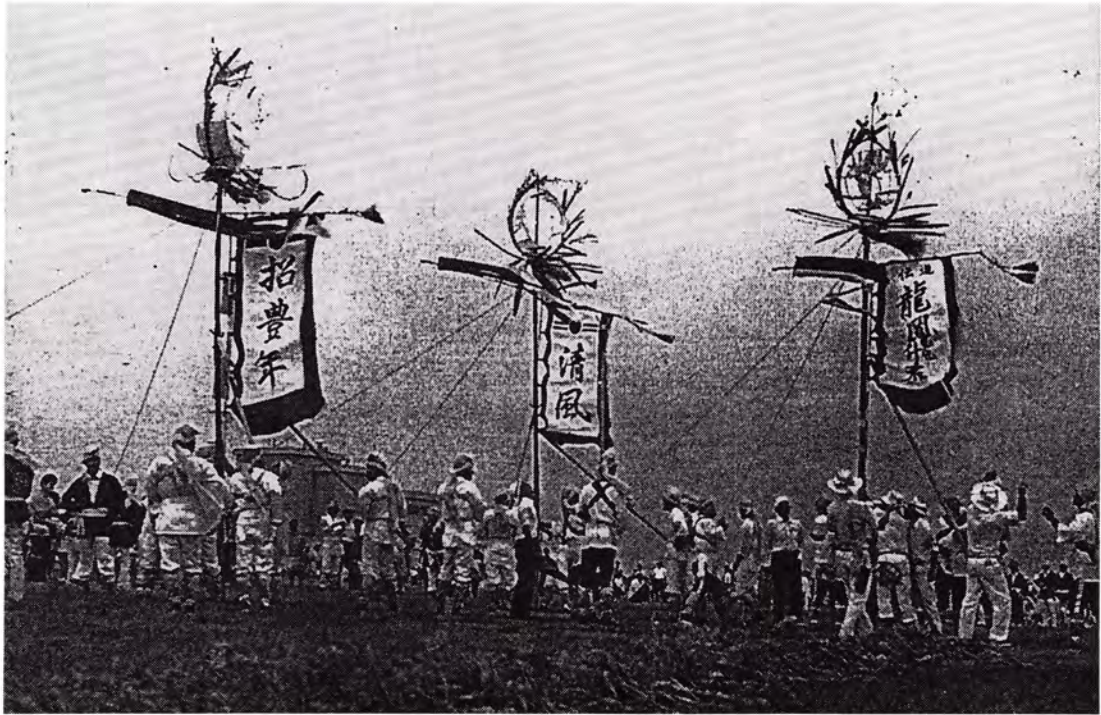


写真2-10 左、中央：北谷クシダカリの旗頭・右：伝道の旗頭（菖蒲）（1974）

※以上、1974年の大綱引きの写真に関しては金良宗吉氏撮影

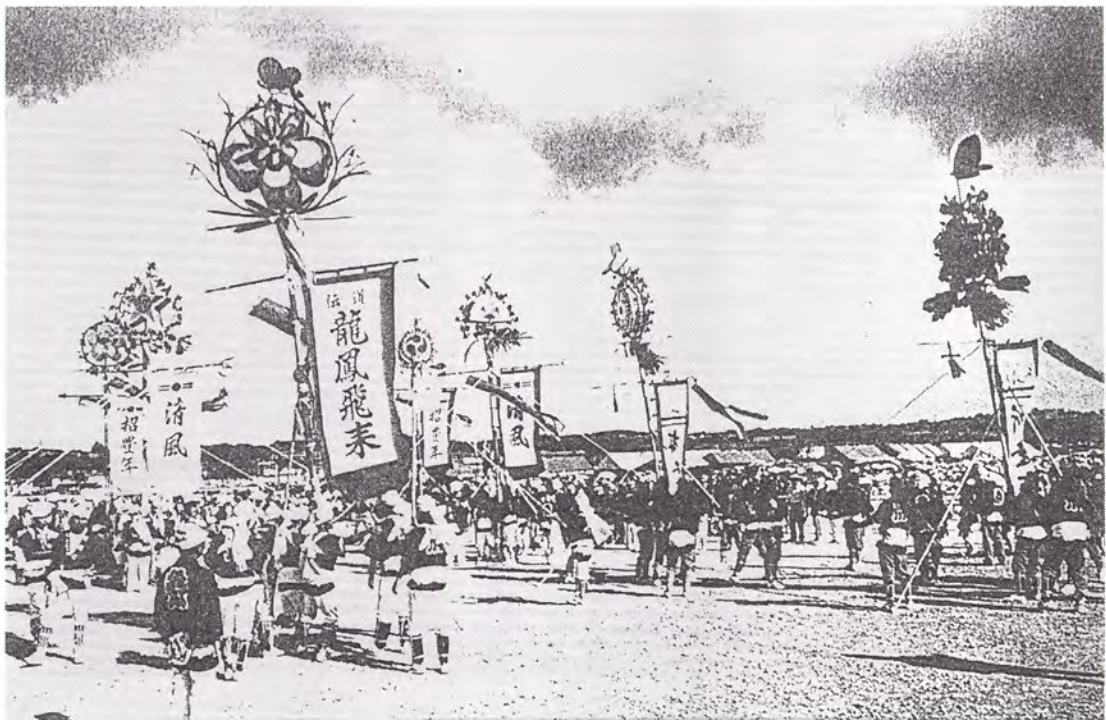


写真2-11 1986年の旗頭。1974年の旗頭と比べて伝道は飾りと旗字に変更がなく、玉代勢は飾りに変更はないが旗字に変更がみられた。また北谷は旗字に変更はないが、飾りは1本を除いて全て変更となった。三カ村とも1986年と1998年の旗頭とでは、さほど変わりはない。（撮影：仲米政雄氏）



写真 2 - 12



写真 2 - 13



写真 2 - 14

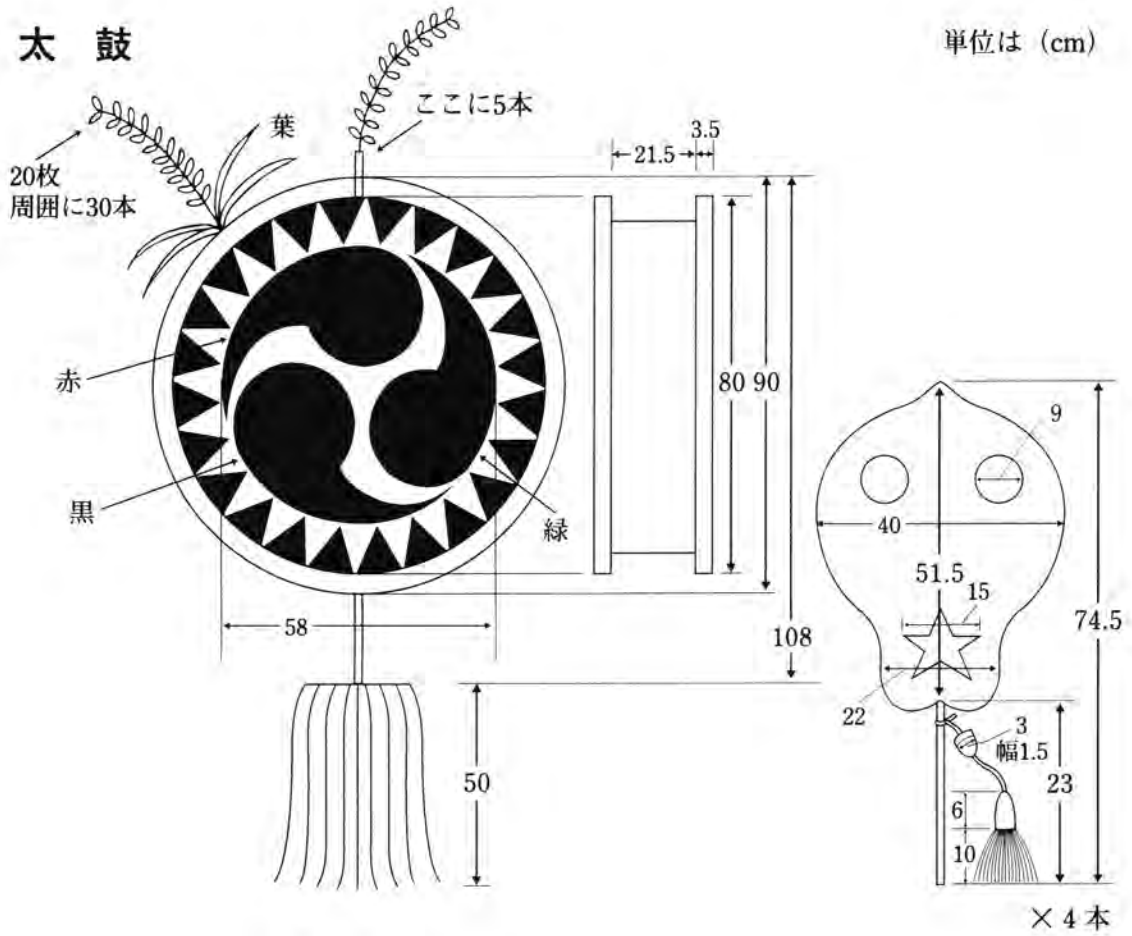


写真 2 - 15

▲北谷の旗頭 (1998)。左上から太鼓 (メンダカリ)、右上は星 (メンダカリ)、左下は梅 (クシダカリ)、右下は扇子 (クシダカリ)。

太鼓

単位は (cm)



星

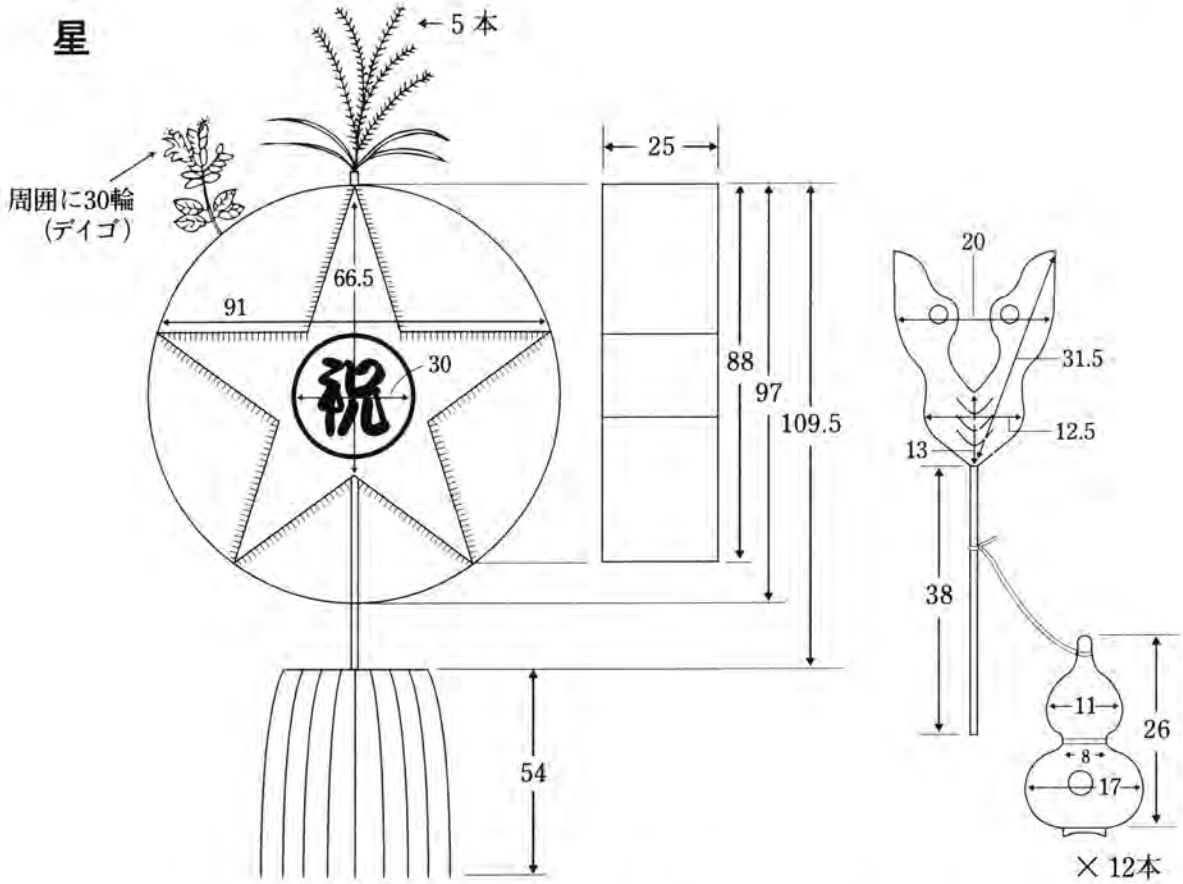
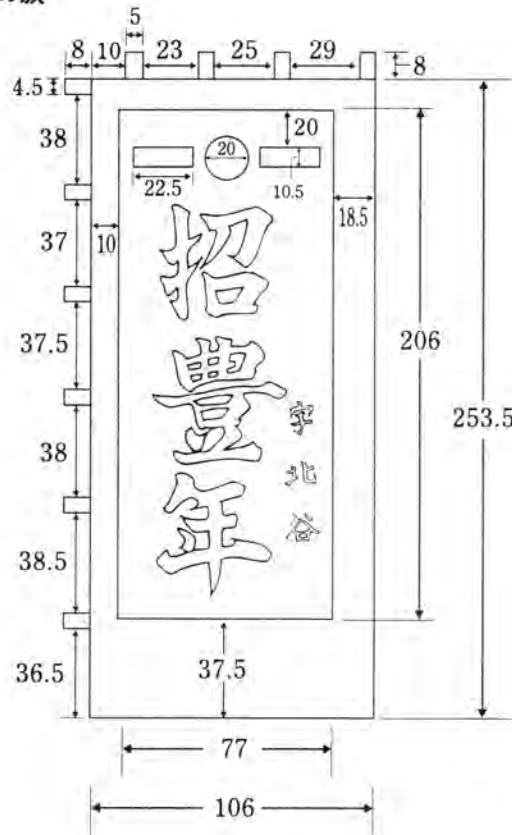


図2-4 北谷の旗頭(メンダカリ)・灯笼 (図2-4-14・16・17作成:住福一郎さん)

旗 (縁は紫色)

単位は (cm)

太鼓の旗



星の旗

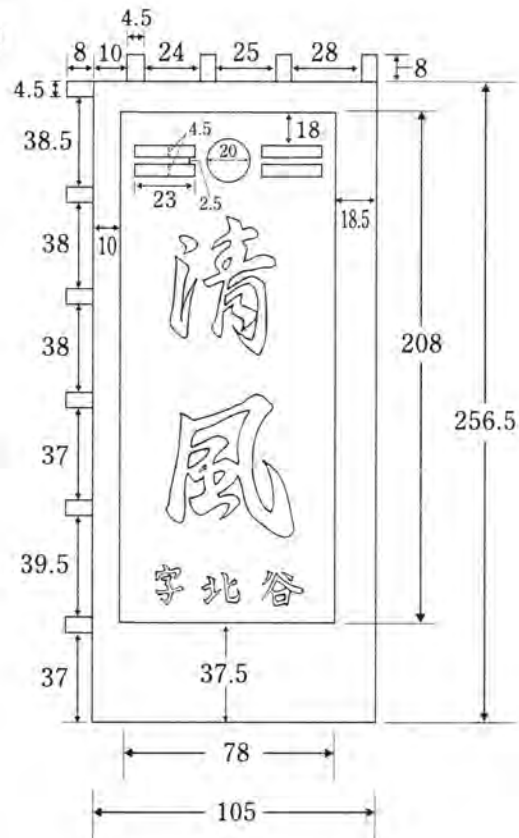
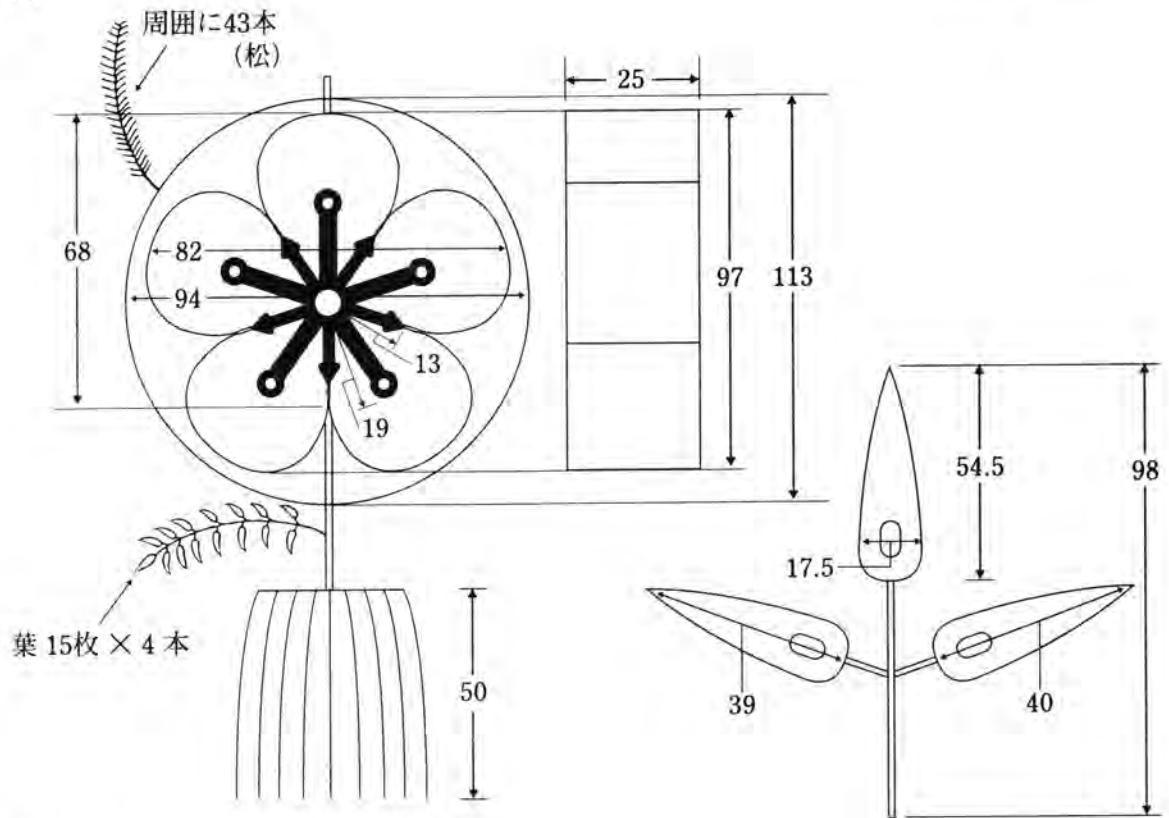


図2-5 北谷の旗頭(メンダカリ)・旗

梅

単位は (cm)



扇子

× 4本

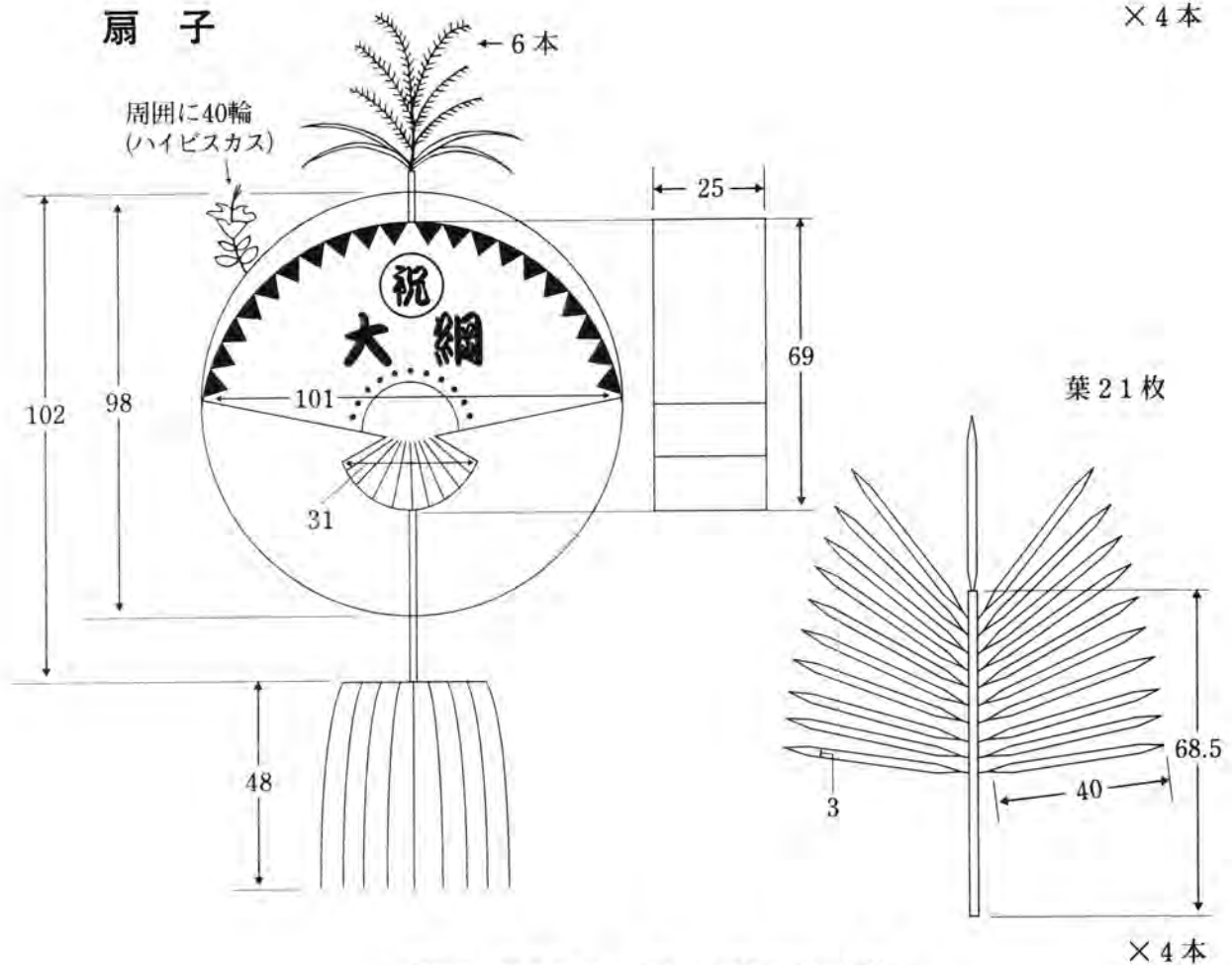
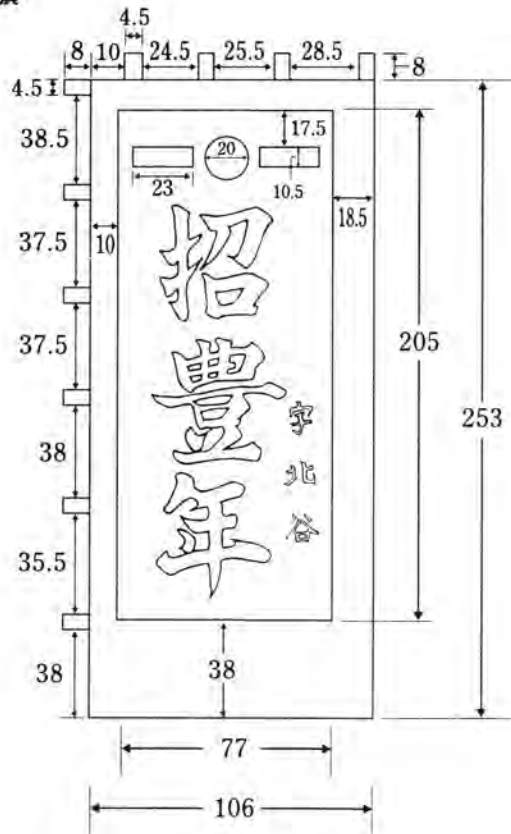


図2-6 北谷の旗頭(クシンダカリ)・灯笼

旗 (縁は黄色)

単位は (cm)

梅の旗



扇子の旗

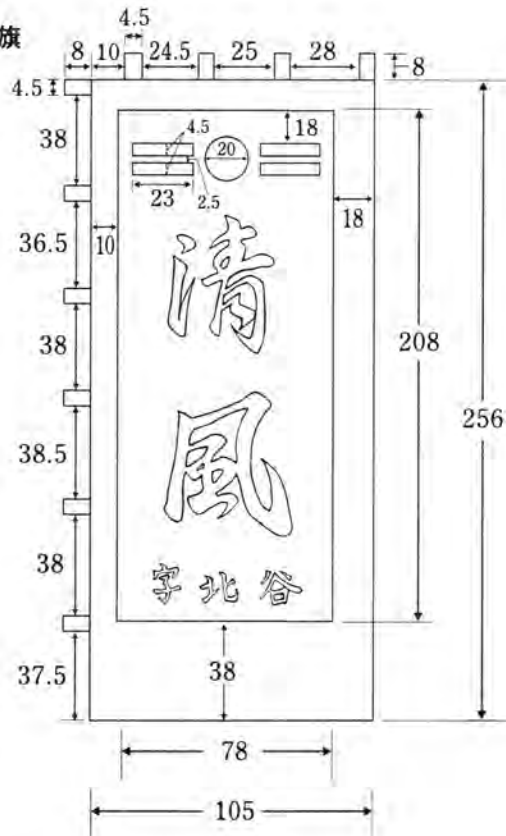
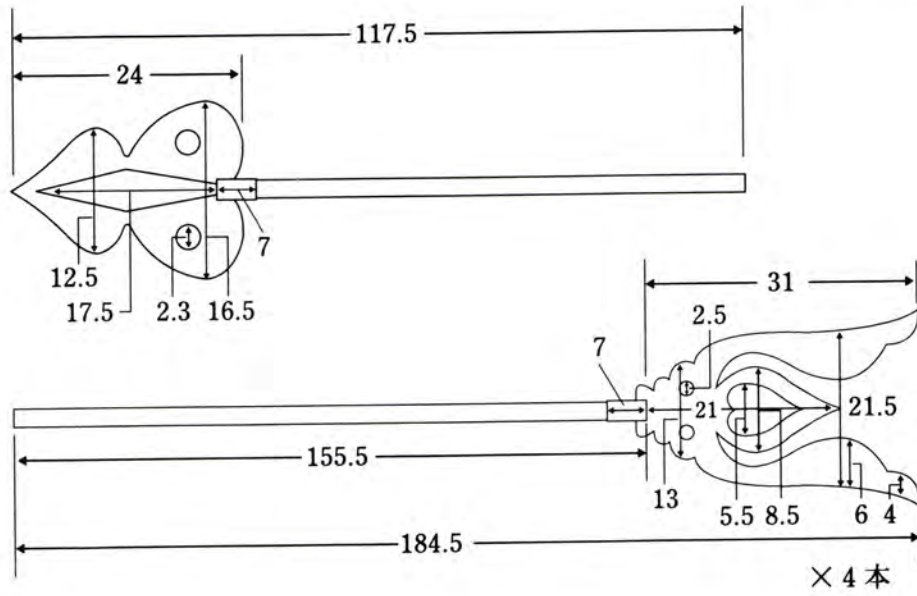


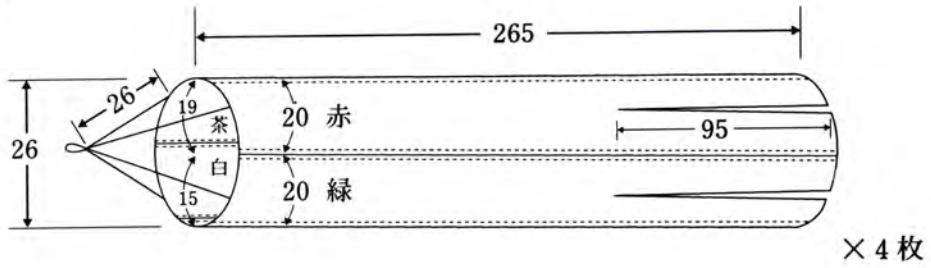
図2-7 北谷の旗頭(クシンダカリ)・旗

横 竿

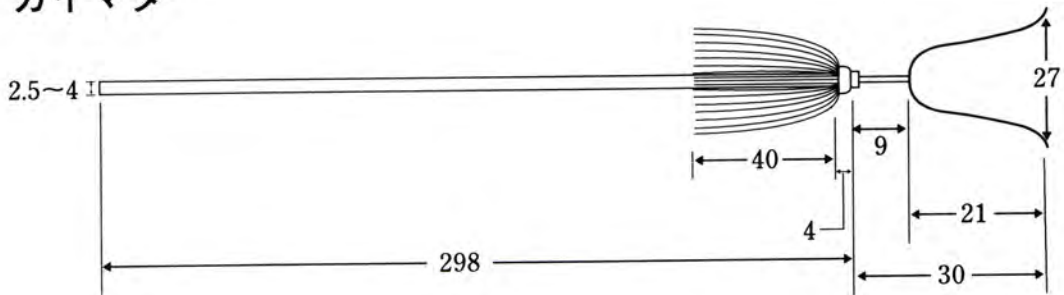
単位は (cm)



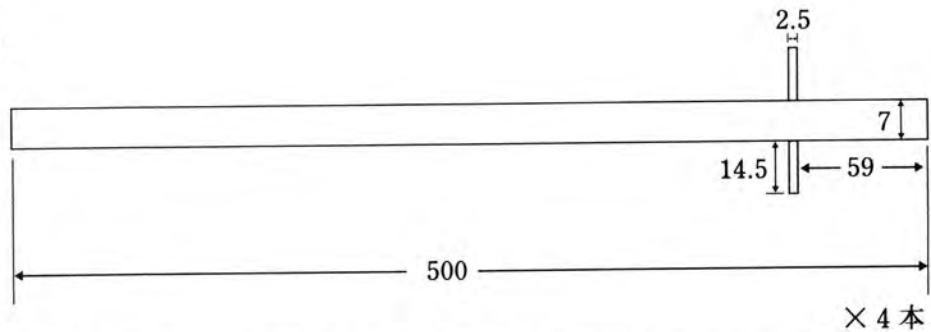
吹流し



カイマタ



旗 竿



※ 横竿、吹流し、カイマタ、旗竿はメンダカリ、クシンダカリ共通。

図2-8 北谷の旗頭・その他の用具

② 玉代勢

戦前、玉代勢は大綱引きの場合、北谷のメンダカリに玉代勢のイーダカリ（アガリ）が属し、北谷のクシンダカリに玉代勢のシチャンダカリ（イリ）が属した。玉代勢にある2本の旗頭も二手に分かれた。

玉代勢の旗頭は、戦前から牡丹の花を象った“ポタンドゥールー”と、八角形で面に八卦を配した“ヒヤッチ”、あるいは“ハチカクドゥールー”であったという。2本のトゥールー（灯笼）の上には蝶が取り付けられていた。戦前まで旗頭は、ムラヤー（村屋）の天井裏に保管され、大綱引きの時期になると津嘉山政徳さんの父親が修理にあたっていたという。旗頭の骨組みは竹で作られ、トゥールーの下にはスルガー（棕櫚縄）を下げた。2本の旗頭のうち“ポタンドゥールー”は玉代勢のイーダカリの旗頭で、大綱引きには北谷のメンダカリに属した。また“ハチカクドゥールー”は玉代勢のシチャンダカリの旗頭で、大綱引きには北谷のクシンダカリに属した。旗に関しては、戦前どのような様子だったのか、例えば文字が書かれていたのか、それとも絵だったのか、は聴取できなかった。

旗頭のバランスを保つには、縄とカイマタを使った。縄は旗竿に取り付け、旗頭が倒れかかるとその縄を引いて体勢を立て直した。カイマタは二又に分かれた金具を鍛冶屋で作らせ、傾いた旗頭をカイマタを使って押し、その体勢を整えた。

旗頭を持つのは青年の中から力の強い者を選んで持たせた。持ち方の練習は竹竿の先に20kg程のワラ束を括り付けて行った。持ち方は腰に巻いた帯の上に竿底を乗せ、それを前から手で押さえた。1926（大正15）年の大綱引きには、屋号カカジ（嘉数）、屋号テルヤ（照屋）、屋号アガリジョウ（東門）から旗頭持ちが出た。屋号アガリジョウからの持ち手は、その当時19歳（申年生）だった。1938（昭和13）年の大綱引きに照屋光久さんはシチャンダカリに属し、カイマタを扱う担当で旗頭は持たなかったという。

戦後、1974（昭和49）年の大綱引きには、戦前と違ってメンダカリとクシンダカリの二手に分かれることなく、全てメンダカリに属した。旗頭はポタンドゥールーとハチカクドゥールー⁽¹⁾で、製作者は桑江出身で後に現在の沖縄市泡瀬に引っ越した“桑江小のタンメー”と呼ばれた方であった。この時の竿頭の飾りは、竹で骨組みを作り、その周囲に紙を貼りつけた。ハチカクドゥールーの側面には、“クーチンカー”という幾何学模様が施されていた。旗は「歓喜」と「招豊年」で文字の上に“玉代勢”と書かれていた。旗の縁は「歓喜」が青色、「招豊年」が赤色であった。旗を掲げる横竿の先には、吹流し取り付けられていた。旗竿には、棕櫚縄を2～3カ所に分けて巻いた。また旗頭のバランスを保つために縄を付け、カイマタも使った。

1986（昭和61）年の大綱引きに玉代勢はメンダカリに属し、前回同様、2本の旗頭を出した。竿頭の飾りはポタンドゥールーとハチカクドゥールーを出した。ポタンドゥールーの下には、ポタンの葉が4カ所に、またハチカクドゥールーの下にはモンバイ（軍配）を4枚取り付けつけた。旗の文字はポタンドゥールーが「祈豊年」、ハチカクドゥールーが「招

豊年」であった。双方とも文字の右側に“字玉代勢”と書かれ、また文字の上には交叉する2本の鎌と稲穂が描かれ、旗の縁も2本とも赤色となった。この旗を掲げる横竿の先は槍状になっており、そこに蝶結びしたフサを付け、その反対側に吹流しを取り付けた。横竿も1本の棒ではなく2本の棒で、旗竿に取り付けられたアルミ製の金具に、その棒をはめ込んで組み立てる仕組みであった。旗を掲げる縦竿は、北谷や伝道が竹竿を使わずに縄を使って旗竿に括り付けたのに対し、玉代勢は旗を竹竿に通して旗竿に括り付けた。旗竿は長さが4m20cmで、旗頭持ちが持つ部分を除いて紅白のテープを巻いた。旗頭のバランスを保つために縄3本とカイマタを用いた。

このときの旗頭は、津嘉山政徳さんが製作し、骨組みもアルミ製になった。ハチカクドゥーラーは、骨組みに障子紙を貼りつけた。ポタンドゥーラーの花の部分は、比嘉カズオさんにボタンの絵を描いていただき、それを貼りつけた。そして側面には障子紙を貼りつけた。

1998（平成10）年の大綱引きに玉代勢はメンダカリに属した。旗頭も1986（昭和61）年に使用したのを修理して使った。津嘉山政徳さんをはじめ、照屋光久さん、仲村渠敏雄さんの3人で修理、工作した。竿頭の飾りに変化はないものの、前回、ハチカクドゥーラーの下に飾った4枚のモンバイから赤い団扇2枚と3枚1セットの葉2枚に変わった。この赤い団扇には「三カ村が手を取り合っている様子」、という意味で黄色い三つの円で三角形を描き、そこに「三、ヶ、村」と書いた。またポタンドゥーラーの下には、2枚のモンバイと葉2枚が取り付けられた。津嘉山さんによると、トゥーラーの下に飾るモンバイと葉の配置は、1986（昭和61）年の旗頭が本来の形だという。旗頭の長さは旗竿が415cm、竿頭の飾りがそれぞれ120cm前後（灯籠部分の高さで、蝶の部分は含んでいない）で、全長およそ535cmであった。旗は1986（昭和61）年に使用したのを使い、ポタンドゥーラーに「祈豊年」、ハチカクドゥーラーに「招豊年」を取り付けた。旗竿は竿頭部分に棕櫚縄を巻き、その上に紅白のテープを巻いた。旗頭のバランスを保つために3本の縄をつけ、カイマタを3本用いた。旗竿にはカイマタを当てたときに滑らないよう、アルミを円形に加工して旗竿にはめ、カイマタ当てとして使っていた。

大綱引き終了後、旗頭
は津嘉山政徳さん宅に保
管された。



写真2-16

旗頭に取り付ける団扇の製作
（1998・玉代勢）



写真 2-17 玉代勢の旗頭(ボタン)



写真 2-18 玉代勢の旗頭(ハチカク〈ヒヤッチ〉)



写真 2-19 ハチカクドゥールーに描かれたクーチンカー

横竿のはめ込み部分
(左右)
下の槍と金の玉の棒
をそれぞれにはめ込む

カイマタ当て

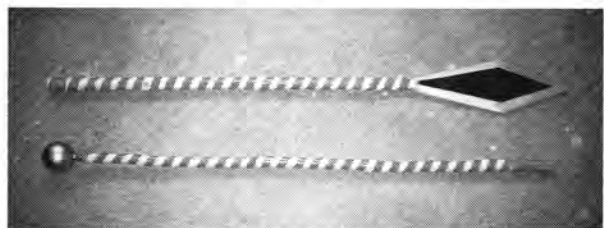
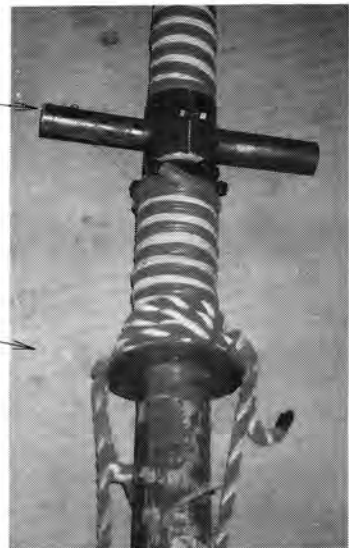
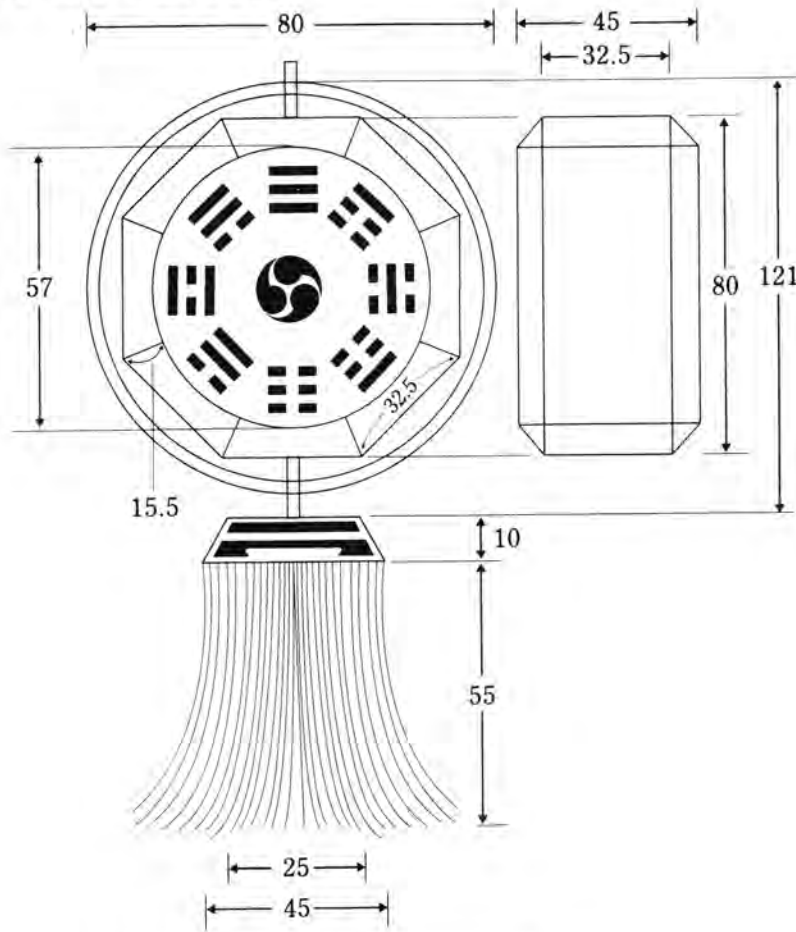


写真 2-20 旗竿の様子

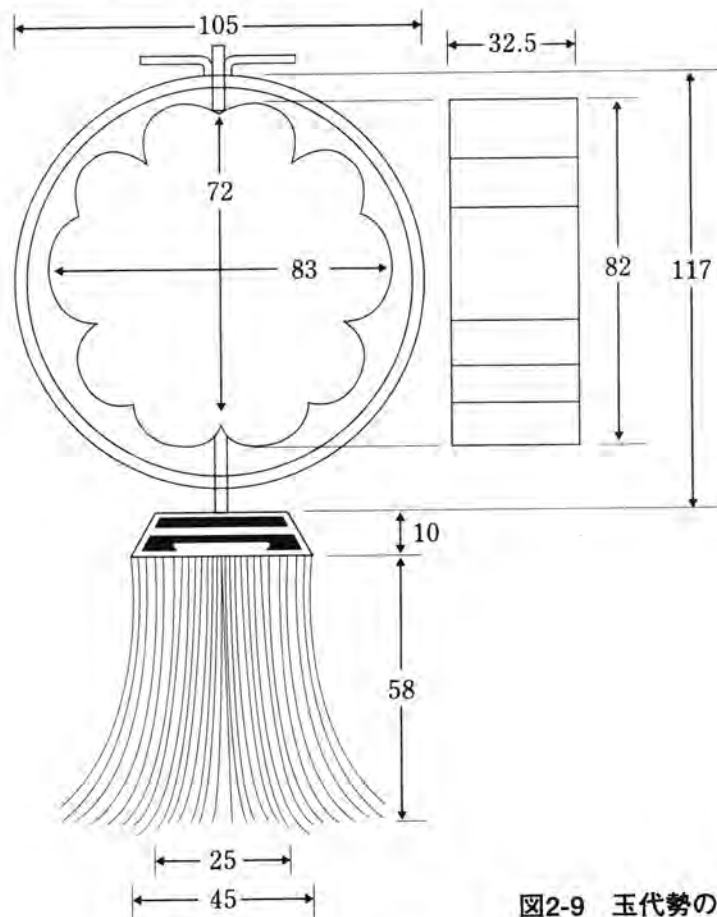
ハチカク (ハヤツチ)

単位は (cm)



側面は和紙
 花(ツバキ)の数
 つぼみ 44本
 花 46本

ボタン



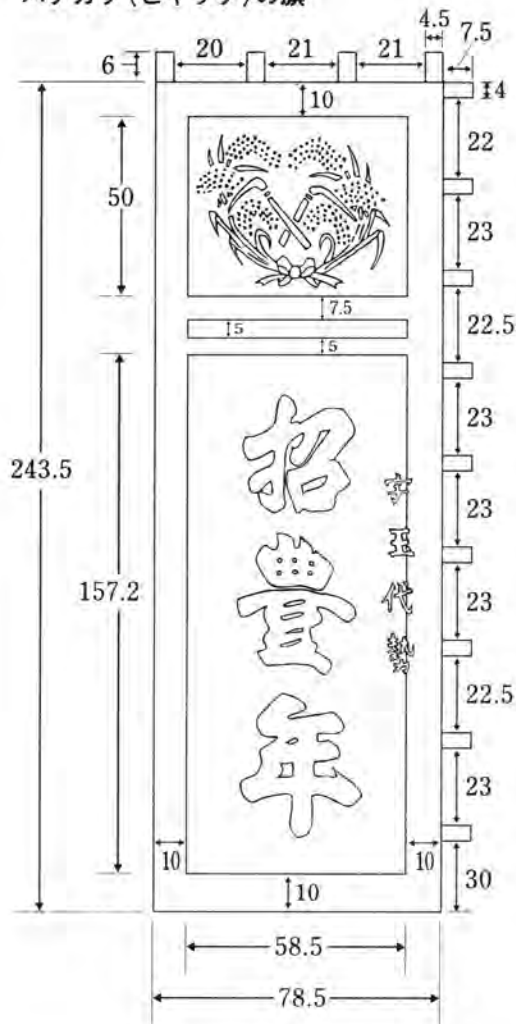
側面は和紙
 花(ボタン)の数
 つぼみ 23本
 花 25本
 ※花は赤、黄、桃色の三色。

図2-9 玉代勢の旗頭・灯笼

旗

単位は (cm)

ハチカク(ハヤツチ)の旗



ボタンの旗

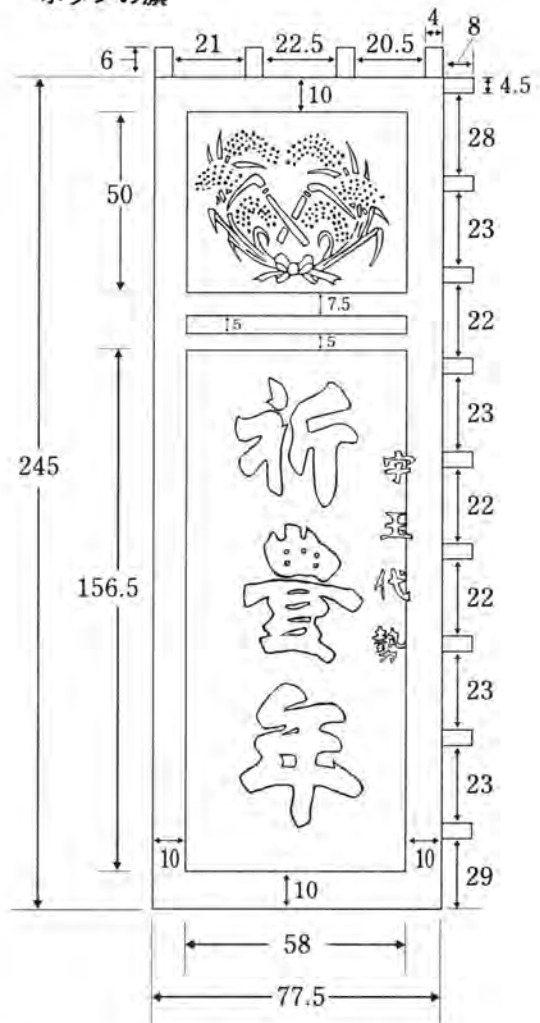
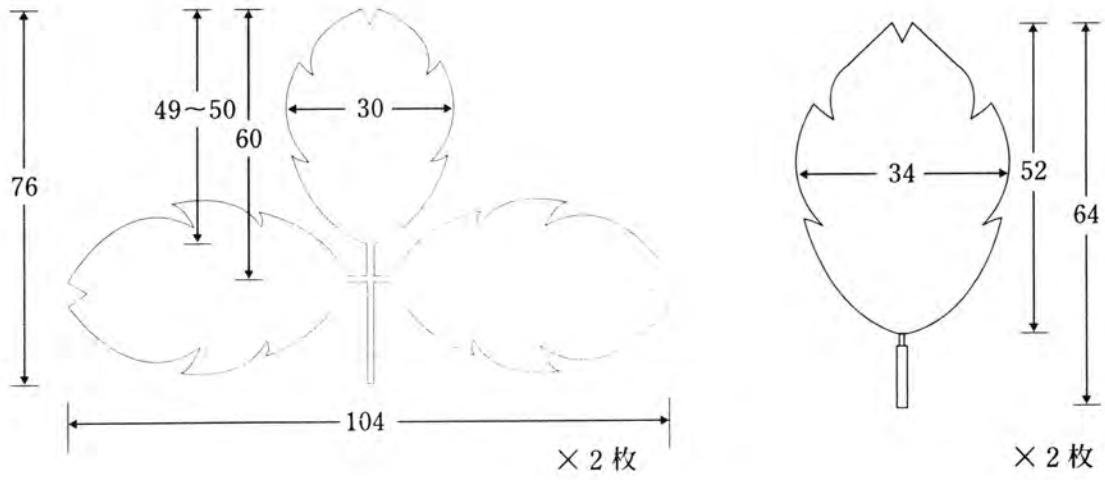


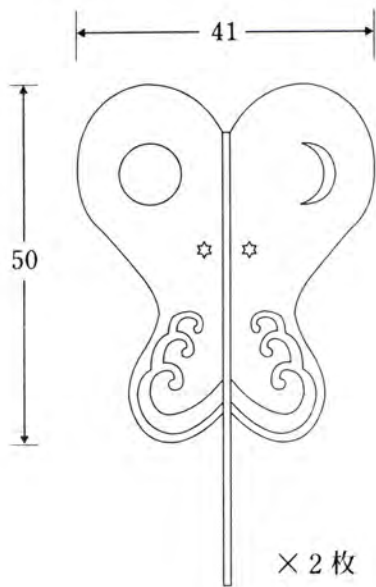
図2-10 玉代勢の旗頭・旗

葉

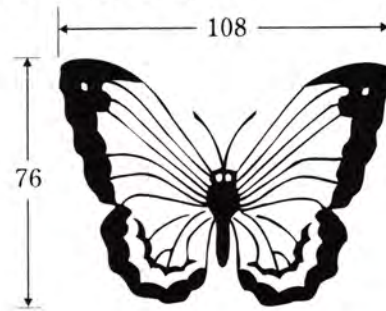
単位は (cm)



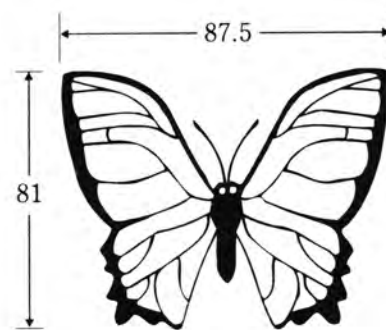
モンバイ



ボタン用の蝶



ハチカク (ハッチ) 用の蝶



吹流し

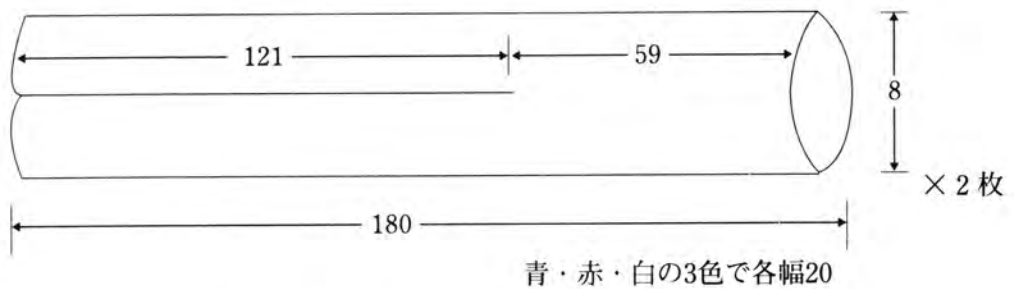
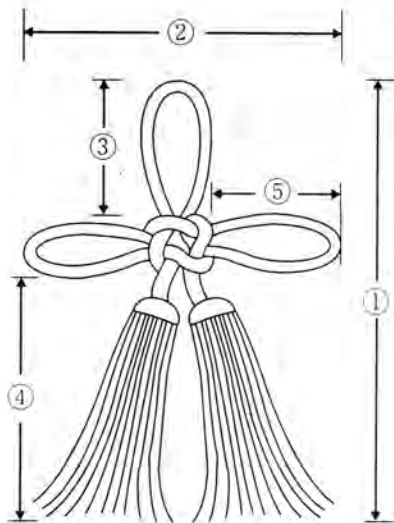


図2-11 玉代勢の旗頭・その他の用具 ①

単位は (cm)



※大 (赤・緑) 小 (赤) あり。

① … 赤 25.5、赤・緑 43

② … 赤 14、赤・緑 24

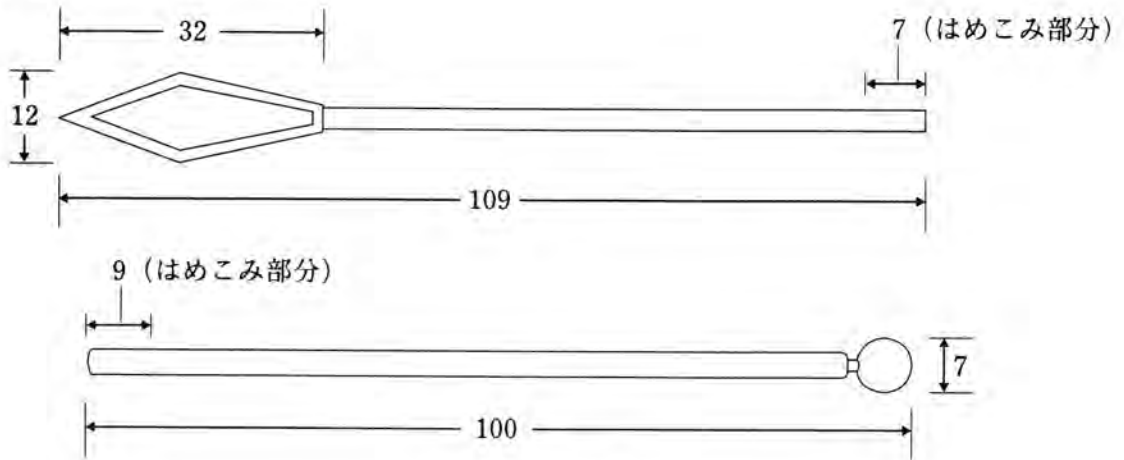
③ … 赤 6、赤・緑 13

④ … 赤 15.5、赤・緑 22.5

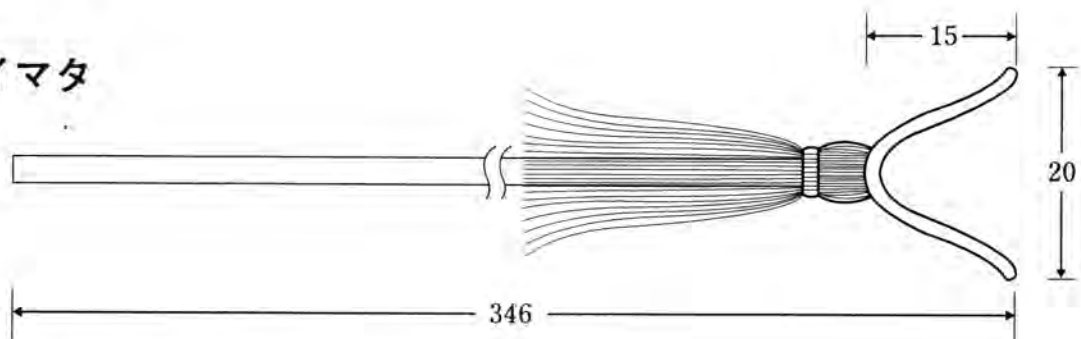
⑤ … 赤 6、赤・緑 10

・大は横竿に、小はモンバイ等に取り付ける。

横 竿



カイマタ



横 竿

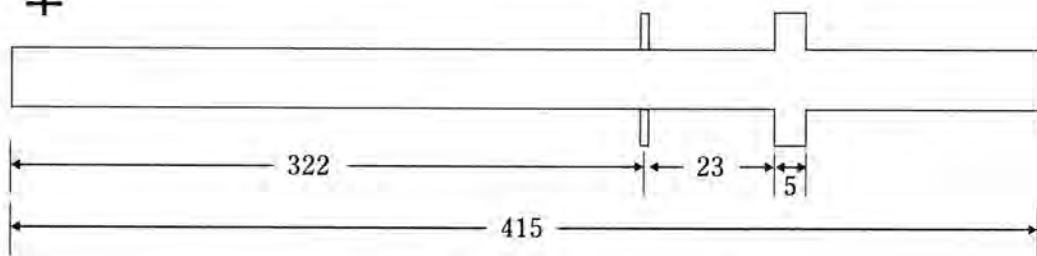


図2-12 五代勢の旗頭・その他の用具 ②

③ 伝道

大綱引きの場合、伝道は北谷のクシンダカリに属した。旗頭は1本であった。戦前は屋号ウフヤ（大屋）に保管されていた。伝道にムラヤー（村屋）はなく、ウフヤが集会場的な役割を果たした。そこのアサギに旗頭を保管していた。旗もウフヤに保管されていたが、後に字のヤクミ（役目）の家で保管したのではないかとのことであった。竿頭の飾りは、菖蒲の花を象ったものであったが、何故菖蒲を象ったのかは不明である。一方、掲げる旗は現在のように「龍鳳飛来」だったのかはわからないが、絵ではなく、文字が書かれていたようだ。旗頭にはバランスを保つために縄が4～5本、また二又に分かれた金具を作り、これをカイマタと言った。このカイマタで倒れかかる旗頭にあてて体勢を直した。

戦後、1974（昭和49）年の大綱引きには、菖蒲の花を象った旗頭を出した。製作は沖繩市の泡瀬方面で作らせた。旗は「龍鳳飛来」で文字の上に“伝道”と書かれていた。旗の縁は赤色であった。旗を掲げる横竿には吹流しをつけた。旗竿には棕櫚縄を6カ所程に分けて巻いた。1986（昭和61）年の大綱引きにも菖蒲の花を象った旗頭を出した。菖蒲の花の上には一羽の蝶が飾られていた。この時の製作者は、渡嘉敷唯文さんと北谷の4本の旗頭と合わせて渡嘉敷さんに製作を依頼した。

1998（平成10）年の大綱引きも菖蒲の花であった。旗の文字は「龍鳳飛来」で文字の上に“伝道”と書かれていた。旗は前回1986（昭和61）年に使ったのが紛失したことから新調した。注文先は、宜野湾市我如古にある京屋旗店である。寸法は北谷の旗を参考にした。

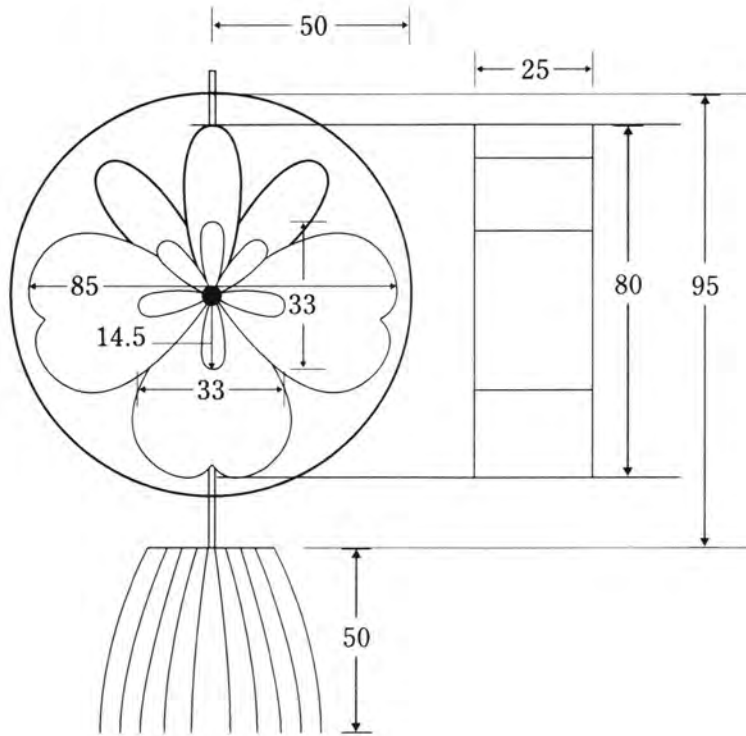
旗頭の長さは、旗竿が5m、竿頭の飾りが95cm（灯籠部分の高さで、蝶の部分は含んでいない）で、全長およそ6mであった。旗を掲げる横竿は弓矢の型でそれに旗を通す。旗を通す縦竿はなく、縄を使って旗竿に括り付けた。旗竿には3カ所、棕櫚縄を巻いた。竿底に近い部分に巻いた棕櫚縄は、旗頭持ちの滑り止めとして巻かれていた。またカイマタは3本使い、旗竿の中間にも北谷と同様、カイマタ当てとして棕櫚縄が巻かれていた。旗頭の竿頭の飾りは、北谷と同様、砂辺にあるDESIGN&PLANコクバヤサンに製作を発注した。

大綱引き終了後、旗頭はウフヤに保管された。



写真2-21 伝道の旗頭、菖蒲（1998）

菖蒲

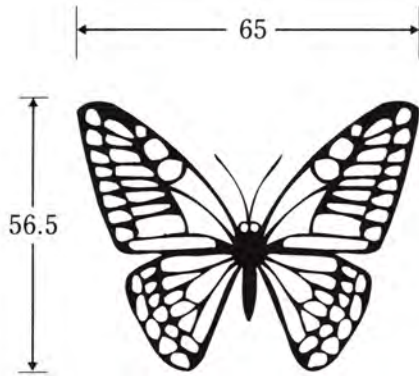


単位は (cm)

側面の葉の数
大6枚、小24枚

灯籠下の葉
数………12枚
長さ……54
厚さ……5

蝶



旗

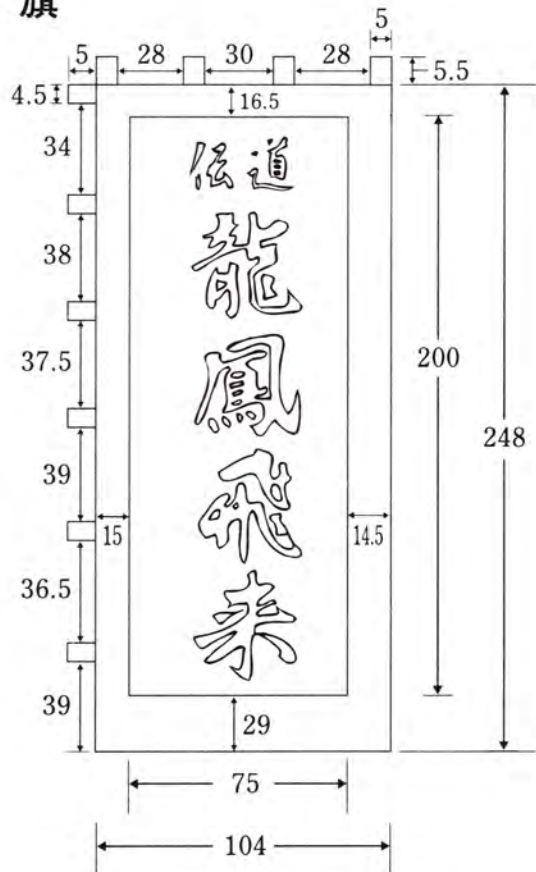
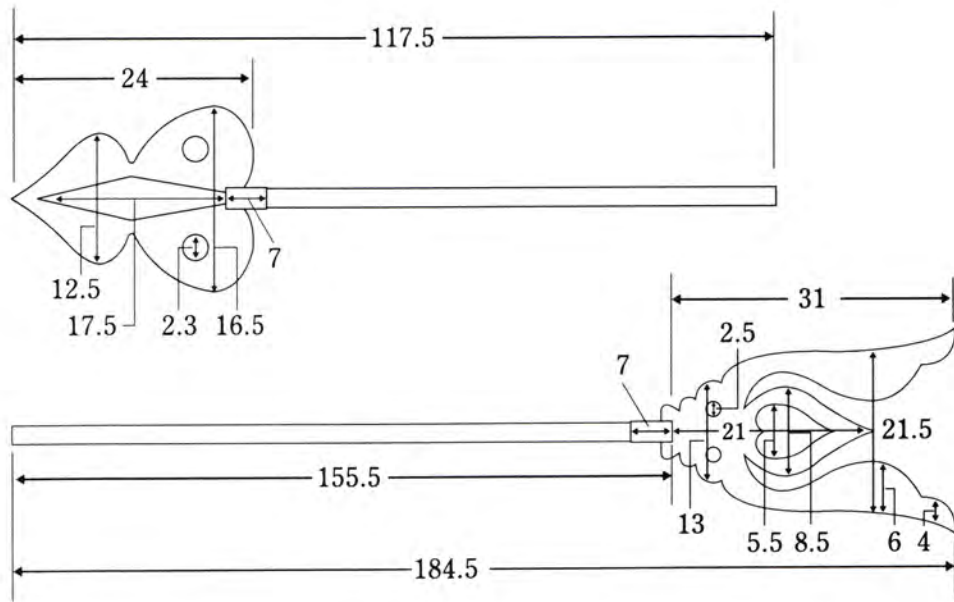


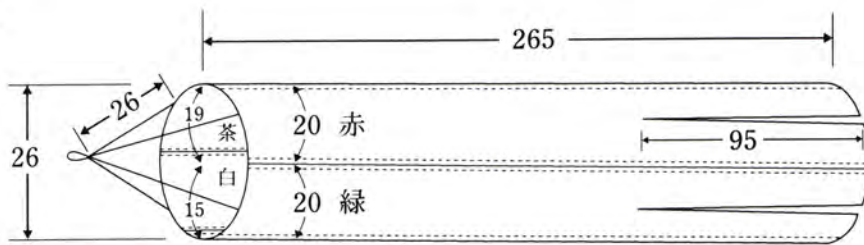
図2-13 伝道の旗頭

横 竿

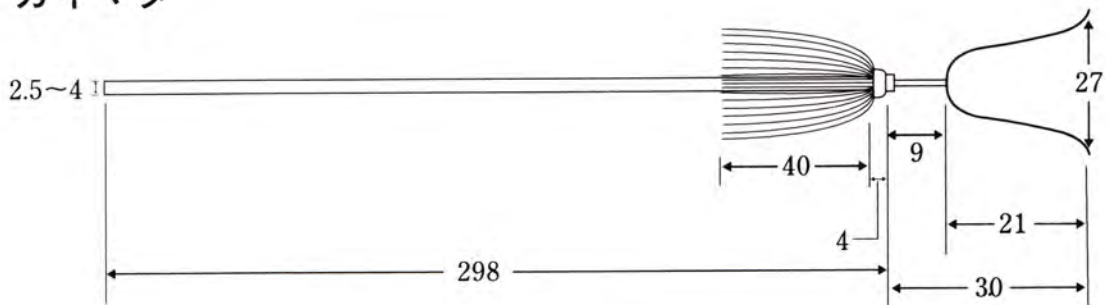
単位は (cm)



吹流し



カイマタ



旗 竿

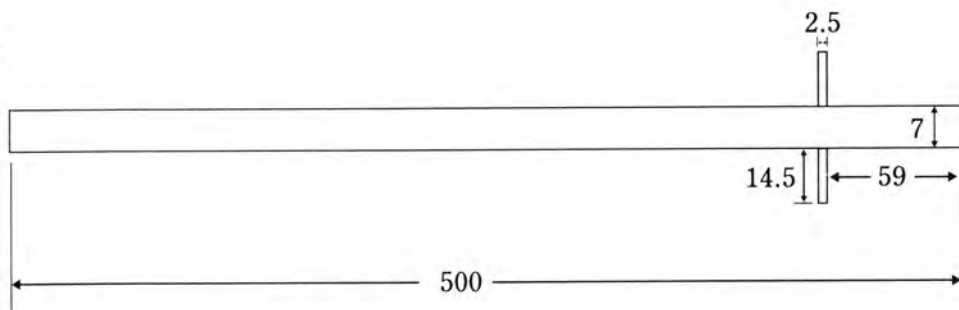


図2-14 伝道の旗頭・その他の用具

④ 旗頭の練習と持ち方

1998（平成10）年の北谷三カ村大綱引きにむけて旗頭の練習が、6月中旬から始まった。それに先駆けて北谷三カ村大綱引き実行委員会では、1998（平成10）年5月23日（土）に中城村にある成田材木店で旗頭用の竹竿14本を発注した。14本の中には練習用の竿も含まれている。竹竿の長さは、1986（昭和61）年の大綱引きで使った旗竿が玉代勢に保管されていたこともあって、それを参考に5mとした。また86年の旗竿が太くて持ちにくかったとの意見も留意し、あまり太くない竹竿を選んだ。当初、材木店には5mの竹竿はなく、6m50cmの竹竿しかなかったので、別発注となった。この他にもカイマタ用の細い竹竿と、旗頭を立てる杉材の杭も発注した。

さて、旗頭の練習は、北谷では旧北谷町役場駐車場で6月17日（水）から始まった。練習日は、月・水・金曜日の午後7時からであった。大綱引きの日が近付くにつれて練習場所が北玉小学校グラウンドでボラチリやソーグチリ、テークチリも含めて合同練習を行った。旗頭の練習方法は、竹竿（棕櫚縄などは巻いていない）の先にタイヤを括り付けて重みをつけた。タイヤに穴を開けて縄で竹竿と結び、ずれ落ちないように固定した。またバランスを保つ縄は3本取り付けた。このような竿を持って練習した。練習も後半になると、練習用の竿に前回（1986年）使った飾りを取り付けて練習した。玉代勢では、6月20日頃から北玉小学校グラウンド（旧北谷町役場駐車場も利用した）で毎週日曜日午後2時から4時まで練習した。大綱引きの日が近くなると練習日を増やした。練習は竹竿の先にタイヤを串刺し状にし、タイヤの周囲に蒲葵の葉をつけてそれを持った。竿には3本の縄を取り付け、カイマタも使った。戦前は、竹竿の先に束ねたワラを括って練習したという。伝道は北谷町保険相談センターの駐車場や広場で練習した。同所ではボラチリやソーグチリ、テークチリ、踊りの練習も行っていた。練習用の竿は、竹竿にタイヤを串刺し状にし、縄を3本つけたものであった。

北谷をはじめ玉代勢、伝道の旗頭の持ち方は、旗頭持ちが腰にサラシを巻き、その上に旗竿の底を乗せる。片方の手（下側）でそのサラシと竿底を前から押さえ、もう一方の手（上側）で旗竿を握る。その際、持ち手は竿頭の飾りを見ている。風の強かった綱引き場（安良波公園）では、旗頭持ちが向かい風の状態で旗頭を持ち、いく分旗頭を反対側に倒すように持った。いわゆる吹いてくる風に旗頭を持たせるのである。そして旗竿を握る手で竿を反対側に軽く押し、風に押し戻されないようにした。このように旗頭を持つと、ソーグのリズムに合わせて旗頭を上下に揺らしつつ、膝を軽く曲げ屈伸しながら前進した。

旗頭のバランスを保つには、旗竿に括り付けている縄とカイマタを使った。縄は3本ついでおり、持ち手のバランスが保たれている時には、縄を弛ませておく。そして旗頭が傾くと、縄を操る者は傾いた竿の反対側に移動し、縄を引っ張って体勢を立て直す。あまり縄を強く引っ張り過ぎると、位置的に旗頭を中心となる持ち手に旗頭の重さだけでなく、縄を引っ張る力も加わるので、その分負担が大きくなる。カイマタは、先が二叉に分かれ

た金具を竹棒の先につけたもので、旗頭が傾いたときや、また横にするときに使う。三カ村とも本数は3本であった。先の縄でも旗頭を横にするときに、倒す側の反対側に縄を操る者が移動し、ゆっくりと倒す。縄に比べるとカイマタの方が扱いやすい。



写真2-22 旗頭の練習（北谷）
練習も後半に差し掛ると以前使った旗頭
やカイマタを使って、本番を想定した練
習を行った（北玉小学校グラウンド）。



写真2-23 旗頭を持つ（伝道）
腰に巻いた布の上に旗竿の底を乗せて
左手で押さえ、右手で竿を支える。

⑤ 旗頭ガーエー（1998年）

1998（平成10）年の大綱引きの旗頭ガーエーは、雨の降りしきる中で行われた。雨によってミチジュネーが中断し、およそ30分後に残りのミチジュネーは中止、そのまま旗頭ガーエーに移った。本部席のある野外ステージに向かって北側にクシンダカリ（北谷、伝道）、南側にメンダカリ（北谷、玉代勢）とに分かれ、雌綱と雄綱との間に全ての旗頭が集合した。旗頭はクシンダカリ側が野外ステージ側から北谷の「清風」、真ん中に北谷の「招豊年」、海側に伝道の「龍鳳飛来」の順で一列に並んだ。一方、メンダカリ側は野外ステージ側から北谷の「清風」、次に北谷の「招豊年」、三番目に玉代勢の「祈豊年」、海側に「招豊年」の順に並んだ。野外ステージ前にはボラチリとソーグチリが、旗頭の後方にはテークチリがスタンバイしていた。そしてボラが鳴り、ソーグの合図とともに旗頭を持ち上げ、ソーグのリズムに合わせて上下に振り、双方の旗頭を近づけた。旗頭ガーエーは、およそ5～6分行き終了した。1986（昭和61）年の場合、雄綱、雌綱のカニチグ

チ近くに集合した7本の旗頭の周囲をミチジュネーの参加者がそれぞれ属するメンダカリ、クシндаカリに分かれて取り囲んだ。また旗頭ガーエーの最中にチヂンを打ったり、メーカタ（舞方）をする者もいた。

メンダカリ

網（雌網）

玉代勢（ハチカク〈招豊年〉）●

テ
ー
ク
チ
リ

玉代勢（ポタン〈祈豊年〉）●

北谷（太鼓〈招豊年〉）●

北谷（星〈清風〉）●

ボラチリ、ソーグチリ

クシндаカリ

網（雄網）

●伝道（菖蒲〈龍鳳飛来〉）

●北谷（梅〈招豊年〉）

●北谷（扇子〈清風〉）

テ
ー
ク
チ
リ

野外ステージ

図2-15 旗頭ガーエーの配置(1998)



写真2-24 旗頭ガーエー(1998)

(2) 楽 器

大綱引きには、北谷、伝道、玉代勢の三ヵ村でそれぞれボラ（ブラともいう。法螺）、ソーグ（鉦鼓）、テーク（締め太鼓）、チヂン等の楽器を使う。ボラやソーグ、テークの担当者をそれぞれ“ボラチリ”、“ソーグチリ”、“テークチリ”と言い、これらの楽器隊をまとめて“チンク”と呼んだ。“〇〇チリ”とは、集団、もしくはグループという意味を表しているようである。この他、ミチジュネーに参加する踊りには、三味線弾きが地謡として一緒について回る。ここではボラやソーグ、テーク、チヂン、三味線等の大綱引きに使われる楽器類について報告する。

ボラチリは、ホラ貝を使った。戦前、伝道では尋常小学校低学年の男子、女子が参加した。ボラチリのボラは、音の鳴る物と鳴らない物の2種類ある。北谷で音の鳴るボラは、年配者2人が吹いていたという。その後を音の鳴らないボラを持つ4～5歳以上の男児、女児が続いた。ボラチリで使うホラ貝は海から取ってきた。玉代勢でも就学前から尋常小学校の男子、女子が参加した。ホラ貝は恩納村仲泊辺りから購入した。購入したホラ貝は、先を削って口部分を磨いて音が鳴るように作った。ボラチリの指導は父兄が行った。音の出るボラは、尋常小学校6年くらいから高等科ほどの子どもに吹かせた。ボラはスネーの始まりと終わりの合図として使われた。1998（平成10）年の大綱引きでは、北谷が小学校低学年を中心に男子女子合わせてメンダカリが39人、クシンダカリが30人参加した。玉代勢は、小学2～6年生の男女39人が参加した。伝道では、小学生を中心に7～17歳の男女32人が参加した。ボラは、前回1986（昭和61）年の時に使ったボラに不足分を追加、購入して使った。



写真2-25 ボラ
右から音の鳴るボラ（長さ30cm）、音の鳴らないボラ（長さ25cm（中）、長さ18cm（左））。



写真2-26 ソーグとバチ
ソーグの直径約13cm。上のバチは練習では使われたが、音の響きが良くなかったので綱引きには使われなかった（伝道）。

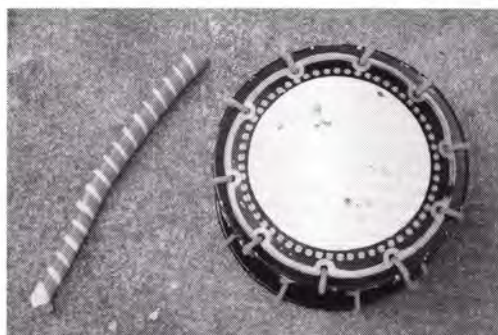


写真2-27 テークとバチ
テークの直径30cm、バチの長さ約40cm

ソーグチリは戦前、北谷では16～17歳の男性2人が使った。伝道、玉代勢では今でいう中学生以上の男子が使った。個数は玉代勢でメンダカリ、クシダカリ共に3～4個程であった。ソーグは字所有ではなく、余所から借りてきたようだ。1998（平成10）年の大綱引きでは、北谷がメンダカリ、クシダカリ各4人の男子が参加した。玉代勢は中学生が5人、伝道は15歳と17歳の男子2人が参加した。伝道では、ソーグを津波三味線店（具志川市平良川）から購入した。

テークチリは、締め太鼓を使った。戦前、伝道では18～19歳程の青年が使った。1938（昭和13）年の大綱引きの時にテークチリとして参加した伊礼喜栄さんは、部落の戸数が少ないのでスーガシラ（惣頭）から「人数がないから出なさい」と言われ参加したと言う。締め太鼓は、字で玉上や桑江辺りからまとめて借りてきたそうだ。玉代勢では、20歳ぐらいの青年が締め太鼓を使った。締め太鼓は、旧暦7月にエイサーもあったことから字で所有し、普段はムラヤー（村屋）に保管されていた。北谷では7クミあったサーターグミ（砂糖組）毎に締め太鼓が1個ずつあり、それと不足分を野里（現嘉手納町）等から借りてきた。1998（平成10）年の大綱引きでは、北谷がメンダカリ20人、クシダカリ24人の男性が参加した。また玉代勢では、高校生以上の男性24人が参加、伝道は15歳以上の男性24人が参加した。

チヂンは戦前、三カ村共通で50～60歳代の年配の女性が使っていた。1998（平成10）年の大綱引きでは、北谷のメンダカリから15人、クシダカリから8人参加した。玉代勢は11人。伝道ではおよそ70歳代の女性7人が参加した。

ドラガニは、三カ村とも数はそう多くはなく、1～2個程であった。特に北谷ではフェーヌシマ（南ヌ島）も参加するので、戦前はメンダカリ、クシダカリに分かれてドラガニを使った。1998（平成10）年の大綱引きでは、参加人数の不足もあって、メンダカリとクシダカリ、どちらにも属せずにミチジュネーを行った。この時、ドラガニは2個使われた。



写真 2-28 テークとチヂンのパチ作り（伝道）

三味線弾きは、大綱引きの踊りのスネーと一緒にまわった。戦前、北谷は踊りの指導者も兼ねて砂辺から頼んできた。三味線弾きは北前や石平辺りからも来た。伝道の場合、北谷と同様、砂辺から三味線弾きと踊りの指導者を頼んできた。砂辺からは屋号ニシノイリー（西ノ伊礼）、ニシノマツダグラー（西ノ松田小）、ユナシチャグラー（与那下小）の方が来ていたそうだ。玉代勢は、大綱引きの2～3ヵ月前から砂辺から三味線弾きと、指導者を招いて練習した。踊りの種類によって三味線弾きが変わったそうだ。1926（大正15）年の大綱引きまでは、ヤードゥイ（屋取り）部落の屋宜、仲山から三味線弾きを招いた。屋宜は玉代勢でもアガリ側の指導を、仲山はイリ側の指導を行ったという（照屋光久さん談）。

（3）チンクの姿勢と打ち方（1998年）

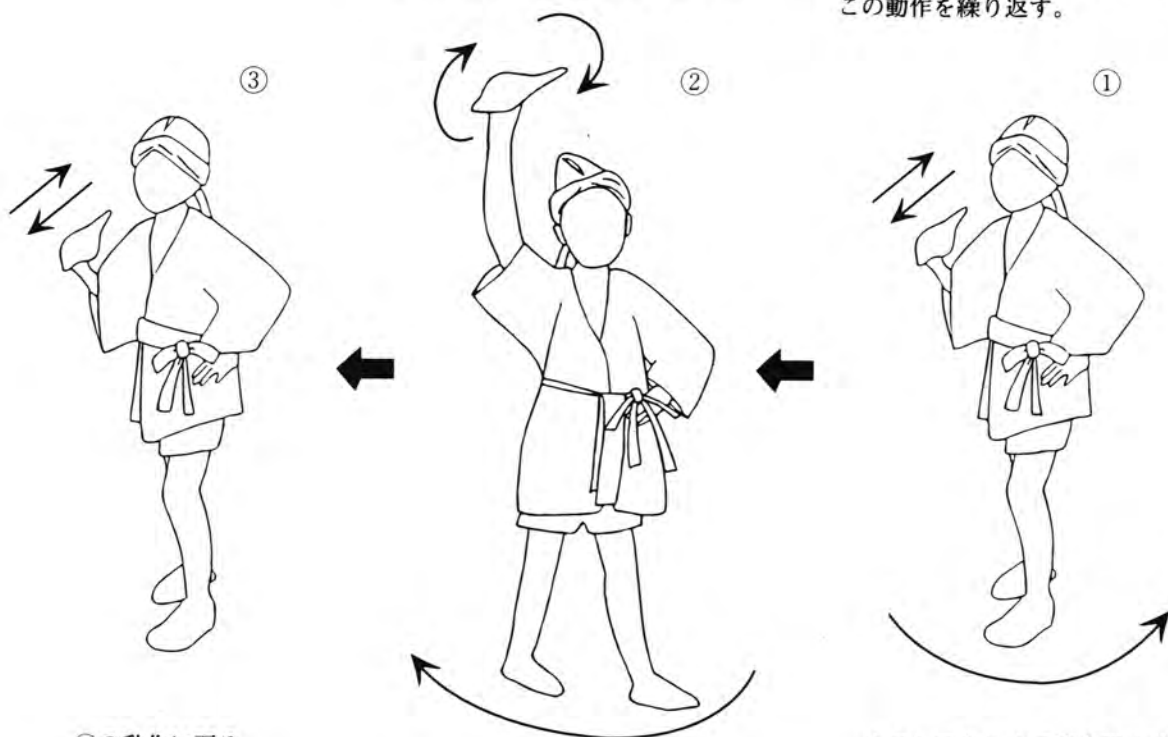
北谷三カ村でミチジュネーの音頭をとっているのは、ボラチリ、ソーグチリ、テークチリの、いわゆるチンクで、スネーの始まりはボラで合図し、旗頭など行進のリズムはソーグやテークでとる。隊列はボラチリが先頭で次いでソーグチリ、テークチリと続く。ボラチリでも先頭に音の鳴るボラを吹く者がおり、その後ろに音の鳴らないボラを持つ子ども達が並んだ。

それぞれの楽器の持ち方は、ボラチリが右手にボラを持ち、左手は腰にあてる。足は左足を一步前に出して、右手に持つボラをソーグのリズムに合わせて前に突き出しては戻す動作を繰り返す。ソーグチリやテークチリも左足を一步前に出し、左手にソーグ、もしくはテークを持ち、右手にバチを握る。そして楽器を打ち鳴らし、リズムに合わせて膝を軽く曲げる。

チンクのリズムは三カ村共、それぞれ若干の違いはあるものの、共通点として一定のリズムを打ち鳴らした後、左手方向に回って後方を向き“サー、サー、サー、サッ”と囃子を入れる。そのとき、ボラチリの中でも音の鳴るボラを持つ者は「ブー、ブー、ブー、ブッ」と4回吹き、音の出ないボラを持つ者は頭上にボラを上げて、ボラを持つ手を左回りに回す。しかし玉代勢の場合、音の出るボラは吹かず、音の出ないボラと共にボラを頭上まで上げて、左回りに回した。ソーグチリとテークチリも顔の高さまで楽器を持ち上げて打ち鳴らす。その中でもテークチリの場合、進行方向に向いているときは、顔の高さまでバチを上げて垂直に振り下ろして叩く。そして後方に向くと、太鼓を持つ手を顔の高さまで上げて叩くが、北谷の場合は後方に向いて叩く際、バチの使い方が前方を向いているときの打ち方と変わらないものの、玉代勢、伝道はバチを頭の後ろまで回して叩いた。後方を向いたときにもボラチリ、ソーグチリ、テークチリ共に左足が一步前が出る。“サー、サー、サー、サッ”の囃子が終わると、左手方向に回って再び進行方向を向き、この一連の動作を繰り返しながら行進する。

ボラを左回りに回す(“サー、サー、
サー、サッ”と声を出しながら)。

ソング、テークのリズムに合わせて
ボラを突き出しては引っ込める。
この動作を繰り返す。



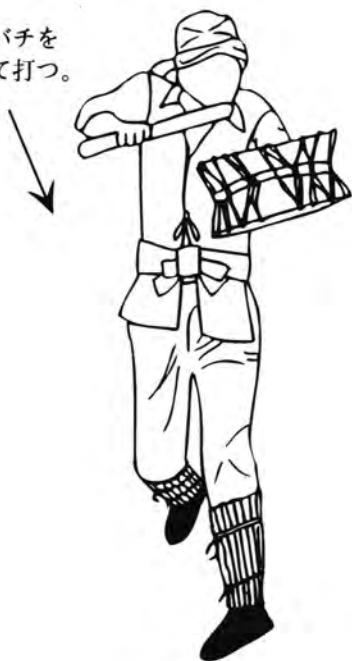
①の動作に戻る。

ボラを回す動作が終わると右手方
向に回って前方を向く(矢印。③
の動作に移る)。

リズムに合わせて膝を軽く曲げる。
一定のリズムを打ち鳴らした後に
左手方向に回って後方を向く(矢
印。②の動作に移る)。

図2-16 ボラチリ(音の出ないボラの場合)の動作

手を伸ばしてバチを
垂直に降ろして打つ。



北 谷

バチを頭の後ろに
回してから打つ。



五代勢、伝道

図2-17 テークの打ち方

(4) ミチジュネーと綱引き場の様子

北谷三カ村の大綱引きは、戦前まで旧暦6月25日に北谷のンマイー（馬場）で、翌日26日は玉代勢のナカミチ（中道）で綱を引いた。ミチジュネーの開始は、午後1時頃で3～4時に綱引きは終わった。

北谷で引く25日には、北谷のメンダカリとクシンダカリはそれぞれ、玉代勢と伝道を字界近くまで行って出迎えた。玉代勢のシチャンダカリ（イリ）は、部落内のヒージャーヌイーに集合し、屋号西門→屋号高志場→屋号花内の前を通り、そこから右に曲がり、屋号首里仲本→屋号桑江殿内の屋敷の裏道を通って北谷のスーガー（塩川・湧泉名）とケンドウ（県道）近くのT字路に出て、伝道と合流した。この時、北谷のクシンダカリ側がカーヌイー橋グワー（後のローラー橋）⁽³⁾ 辺りで出迎えてくれた。北谷のクシンダカリと玉代勢のシチャンダカリ、伝道が揃うと、北谷のクシンダカリの旗頭を先頭に北谷のンマイーに向かった。この時にミチジュネーの順番をめぐって伝道と玉代勢でトラブルがあったようだ。ンマイーへは北谷のクシンダカリを先頭に入場するが、次に入場するのは伝道ということで玉代勢に対して「イッターヤ アトルヤル。クマー リンドウヌ サチ」と言ってトラブルが起こった。中には「絶対に伝道は2番だから」と年配者が怒って六尺棒を持って喧嘩になることもあったようだ。一方、玉代勢のイーダカリ（アガリ）は、部落内のムラヤー（村屋）に集合し、そこから田んぼ道を通り、北谷の屋号シーサーニーの前を通って北谷のメンダカリと合流した。シーサーニー付近で北谷のメンダカリが出迎えた。そこで合流した後、シーサーニーの前を通過し、西側へと進んでンマイーに出た。

ンマイーに用意してある綱の周囲は、六尺棒を持った青年達が立っていたそうだ。1938（昭和13）年の大綱引きには、日の丸の小旗（紙製）を持って参加したという。ンマイーには、浦添や宜野湾方面から来たテンプラ屋やスイカ売りなどの出店もでた。ミージョーキに飴を入れて売る者もいた。各家庭ではこの日にかぎり、ご馳走を作って家の中に置いて、綱引き参加者や見学者が家に上がって自由に食べられるようにした。また屋号サクマの方が北谷城の麓にあるスーガー（塩川）を囲って水を販売していたという。

翌日26日には、玉代勢のナカミチに向けて、北谷と伝道が入場してきた。北谷のクシンダカリと伝道が玉代勢入りしてくる頃には、玉代勢のシチャンダカリが屋号桑江殿内の後ろで出迎えにきたという。その後、先の玉代勢のシチャンダカリが北谷に向かったような道順でヒージャーヌイーまでスネーし、そこで休憩の後に綱引き場のナカミチに向かった。また玉代勢のイーダカリ側は、北谷のメンダカリが北谷の屋号シーサーニーを通過して、タメシアジマーという十字路を過ぎ、アリビラーという坂を上って玉代勢入りした。アリビラーの坂では、風当たりが強かったので旗頭を斜めにして行進したという。玉代勢に入ると玉代勢のイーダカリと合流し、ムラヤーで休憩の後、ナカミチに向かってスネーした。北谷のメンダカリは、前日に玉代勢のイーダカリがスネーしてきたようにシー

サーニーの前を通過して玉代勢に入場した。

玉代勢のナカミチは、北谷のンマイーよりも道幅が狭いことから、青年達が通りの木を伐採して旗頭が通過しやすいようにした。また屋敷の垣根に竹や板などを使って観覧席を設けた。観覧席は、親戚の方々用にと設置したところもあった。この日は那覇、宜野湾方面からも多くの見物人が訪れたので、ナカミチ周辺の木や草を踏んで葉がなくなるほどであった。ナカミチ近くの家では、鍋にお茶を沸かして踊り手に振る舞ったり、チブガー（湧泉名）にも人が集まって水を飲んでいて、また綱引きの当日には出店も並んだ。出店は“イージュテンプラ⁽⁴⁾”というテンプラ屋が浦添の伊祖からやって来た。鍋を持ってきて綱引き場から離れた所で商売をしていたが、離れていても匂いがするので買いに来る人はいた。テンプラは中身のない、カタハランブー（タラシーアングギー）で値段は2～3銭であった。この他にもスイカ売りや、ジーマーミー売りが来ていた。スイカ売りは仲西辺りから荷馬車にスイカを積んで来ていた。先のテンプラ屋は、綱引きが終わっても晩までそこにいて、モーアシビ（毛遊び）に出掛ける青年男女がこのテンプラを買っていた。

戦後、大綱引きは戦前のように北谷、玉代勢と2日に分けて引くことはなく、1日だけとなっている。1974（昭和49）年には、北谷は北玉小学校に集合し、県道24号を通過して綱引き場のハンビー飛行場跡に向けてメンダカリ、クシンダカリの順番でスネーした。玉代勢は4区公民館（現宇地原区公民館付近）に集合して、そこから綱引き場に向ってスネーした。伝道は、屋号ウフヤ（大屋）に集合し、そこから北玉小学校に向けてスネーして北谷と合流した後、会場に向けてスネーした。

1986（昭和61）年の大綱引きはハンビー飛行場跡で行われ、北谷と玉代勢は直接会場に集合した。そして綱の周囲を取り囲む区画整理中の道路を回ってスネーした。伝道は、1974（昭和49）年同様、ウフヤから綱引き場までスネーして、北谷のクシンダカリと合流した。1998（平成10）年の大綱引きは安良波公園内で行われ、北谷と玉代勢は公園に集合した。伝道はウフヤに集合の後、そこから旗頭を先頭にボラチリ、ソーグチリ、テークチリ、婦人の踊りの順に並び50m程（吉原937番地、照屋久盛さん宅前まで）ミチジュネーを行った。その後、出場者は乗用車に分乗して安良波公園に向かった。



写真2-29 ウフヤからのミチジュネー(伝道)

安良波公園では、雄綱雌綱の周囲を反時計廻りでミチジュネーを行った。野外ステージ前を本部席とし、そこからスネーを開始した。スネーの先頭は、北谷のメンダカリで、その後を玉代勢が続いた。次に北谷のクシンダカリ、その後に伝道が続いた。北谷のクシンダカリが本部席を通過している最中に大雨が降ったので、伝道が本部席前を通過することではなく、ミチジュネーは中止となった。

これらメンダカリとクシンダカリのミチジュネーとは別に北谷のフェーヌシマ(南ヌ島)が単独で列をなしスネーを行った。本来ならばメンダカリとクシンダカリ、2組のフェーヌシマがスネーをすべきであったが、1998(平成10)年は人数不足のため1組だけとなった。

註

- (1) 玉代勢のハチカク(ヒヤッチ)ドゥールーと類似する型が、沖縄市泡瀬で見られた。泡瀬では、1998(平成10)年11月1日に“泡瀬まつり大綱引き”を行った。そこで東の3旗ある旗頭のうち1番灯笼、2番灯笼の型が八卦の形をした灯笼で、その上には蝶が飾られていた。旗はそれぞれ馬の絵で閉口、開口となっていた。北谷三カ村の旗頭を桑江から泡瀬に移り住んだ浦崎さんに製作を依頼したこともあったことから、泡瀬の旗頭との関係という点で興味深い。
- (2) 字北谷のサーターグミは、ミーグミ(新組)・マージャグミ(真謝組)・メーグミ(前組)・アガリグミ(東組)の四つのクミであったが、分離、合併を経てミーマージャグミ(新真謝組)・ミアガリグミ(新東組)・イリムティグミ(西表組)の7組となった(その変遷については、『北谷町史』第3巻資料編2民俗上参照のこと)。
- (3) 伊礼勝善さん(伝道)によると、北谷からの出迎えにはガーラシも参加していたという。
- (4) 浦添村(現市)伊祖から来たテンブラ売りであった。伊祖では婦人達を中心にテンブラ売りやテンブラ揚げ、田魚売り、ラッキョー売りなどを副業的に行っていた。テンブラ売りは、農閑期や闘牛、村遊び、運動会などの行事に行い、遠くは美里村(現沖縄市)や東風平村辺りまで出かけた。



参考文献

- 「北谷の綱曳」、『琉球新報』、1914(大正3)年8月17日。
金城至盛、『字誌北谷』、1986。
崎原恒新、「北谷三カ村の大綱引」、『まつり』31号、まつり同好会、1978。
北谷町史編集委員会編、『北谷町史』第3巻資料編2民俗上、北谷町役場、1992。
『北谷町史』第3巻資料編2民俗下、北谷町役場、1994。
『北谷町史』第5巻資料編4北谷の戦時体験記(下)、北谷町役場、1992。
浦添市史編集委員会編、『浦添市史』第4巻資料編3浦添の民俗、浦添市教育委員会、1983。
『浦添市史』第1巻通史編、浦添市教育委員会、1989。
宜野湾市史編集委員会編、『宜野湾市史』第5巻資料編4民俗、宜野湾市、1985。
「北谷三カ村 大綱引き」パンフレット、1986。

(5) フェーヌシマ

① フェーヌシマについて

フェーヌシマとは、沖縄県内各地に分布する芸能のひとつである。「フェー」とは方位の南のことをいう。そのため「南の島」「南島」「南之島」という漢字が当てられることがある。この名称とともに、意味不明な歌詞が歌われるために南方から伝えられた芸能ともいわれているが、いまだ明らかにされていない。

このフェーヌシマの芸態的特徴として、大城學は「フェーヌシマ系の芸能」の中で以下の7点をあげている（大城學、1992：38～44）。

- 一、四人以上の人数で、主に男性が演じる。
- 二、仮面を被ったり、仮装したりする。その場合、顔を隠す工夫をする。特異な扮装をする。
- 三、棒を持つ。棒の先端に金属輪を付けることもある。棒を打ち合う所作がある。
- 四、跳躍したり、転がる所作がある。また、手を高くあげたり、足を高くあげる所作もある。上体を後ろに反らす所作などもある。
- 五、演技中に、掛け声や奇声を発する。
- 六、使用される楽器はドラ、太鼓、ホラ貝、鉦、笛、三線などである。
- 七、意味不明な歌詞が歌われる。

このようにフェーヌシマは、沖縄の芸能のなかでも独特なものである。しかし、伝承の経緯や歌詞の意味など不明な点が多く、今後の調査・研究が待たれる。

『那覇市文化財調査報告第1集 那覇安里のフェーヌシマ』によると、沖縄県内にはフェーヌシマ及び同系統と思われる芸能が27ヵ所の地域に分布している。それを名称別に分類してみると以下のようになる。⁽¹⁾

フェーヌシマ：名護市字嘉陽、恩納村字名嘉真・仲泊、金武町字伊芸、読谷村字長浜、北谷町字北谷、宜野湾市普天間・野嵩・新城、北中城村字熱田、中城村字津波、那覇市安里

ペンシマ：伊江村字西江上

棒：糸満市字真栄里、玉城村字垣花、与那国町与那国（祖納）

棒ふり：上野村字野原・新里

ヨンシー・棒：多良間村字塩川

ハイヌスマカンター棒：石垣市新川

ハイヌスマ棒：石垣市大川・登野城・平得・大浜

シングルロー：竹富町字竹富

ダートゥダー：竹富町字小浜

獅子棒：竹富町字黒島（東筋）

タイラク：竹富町字黒島（保里）

これら「フェーヌシマ系の芸能は、沖縄本島及び周辺諸島では、旧暦七月・八月のムラ踊り（豊年祭）で演じる。宮古島の上野村字野原は旧暦八月十五日のマストゥリヤー、上野村字新里は旧暦六月の豊年祭で演じ、多良間村は旧暦八月の八月踊りで演じる。八重山諸島では旧暦八月・九月の種取祭や結願祭、節祭で演じている。その他、不定期に催される民俗芸能大会等に出演して、上演の機会を得ている⁽²⁾」という。

北谷に伝わるフェーヌシマも名称だけでなく、前に挙げた諸特徴を有していることなどから、県内各地に分布するフェーヌシマ系芸能に類すると思われる。

② 北谷のフェーヌシマ

イ. 由来

北谷のフェーヌシマは、13年間のフーチゲーシ（風気返し、無病息災のこと）の神行事として、旧北谷村では字北谷だけに伝わるものである。その由来について、金城睦弘は「沖縄本島中部の南の島踊ー北中城村熱田、及び北谷村字北谷の事例ー」のなかで次のように報告している（金城睦弘、1976：120）。

北谷村字北谷における南の島踊も、またその由来等については不明である。ただ、若干の伝承者の中には宜野湾間切普天間から入ってきたと言う人もあり、また、否定する人もあって、なお根気強い調査を必要としている。大正三年（一九一四年）以来北谷の南の島踊にかかわってきた八十九歳の古老金城睦定氏にも尋ねてみたが、明確な答えは得られなかった。

今回の調査でも、この報告と同様「宜野湾から入ってきた」（フェーヌシマの指導者である末吉清吉さんが古老から聞いたことがある）という話も聞かれたが、ほとんどの方がわからなかった。

ロ. 組織

フェーヌシマの演技者は、字北谷出身の壮・青年で構成された。戦前は年齢に制限はなかったが、17～18歳から30代前半までの希望者の中から体格の良い者を選んだという。

メンダカリ（前村渠）・クシンダカリ（後村渠）2組あり、各組鉦打ち1人、演技者12人の13人で構成されていた⁽⁴⁾。戦前はその組の出身者で構成されていたが、戦後2回（1974・1986年）の大綱引きでは人数が足りないため、出身地に関係なく2組に分けたという。

今回の大綱引きでは15歳から43歳までの字北谷出身の男性（鉦打ち2人、演技者22人の24人）で構成されていた。そのうち6～7人は前回の参加者であった。2組に編成することができないため、メンダカリ、クシンダカリ合同で演技した。

練習は、戦前は10日ぐらい前から始めたという。仕事を終えた後、夜、ムラヤーに集まりメンダカリ、クシンダカリに別れて練習をした。練習のしすぎで筋肉痛になり、便所できがむことができなかったという。

今回の大綱引きでは6月から練習を始め、北玉小学校で月・水・金曜日の週3回、約1時間程度練習した。

ハ. 期 日

戦前、フェーヌシマを踊ったことのある照屋正吉さんによると、戦前は12年毎の大綱引き以外に毎年9月に行われる北谷長老祭やムラアシビでも演じられたという⁽⁵⁾。また、北谷出身の伊礼肇氏が衆議院議員に当選したとき、その祝賀会で演じられたり、1942（昭和17）年3月に嘉手納警察署がアマカービラから嘉手納大通りの南に移転しているが、その落成祝いの余興として読谷村字長浜の棒とともに演じたという（他、津嘉山孫栄さん・上間盛英さん談）。

戦後は、1950（昭和25）年に戦争で離散していた住民が、北谷村に帰村した祝いが北玉小学校であった。この時にフェーヌシマが演じられた。しかし、それ以降1974（昭和49）年に大綱引きが復活するまで演じられることはなかった。1974（昭和49）年、大綱引きとともにフェーヌシマも復活すると、翌1975（昭和50）年に開催された沖縄国際海洋博覧会でも演じられた。また、最近では1999（平成11）年に具志川市で演じられている。

ニ. 装 束

上下黒の空手着を着る。その上から水色地に紫で縁取った袖無しの陣羽織のような法被^{はっぴ}（金城睦弘の報告では「ハウイ」と呼んでいる）を羽織る。1981年の大綱引きではメンダカリは紫、クシダカリは黄色の縁取りであった。

そして、プリント柄の五角形のクブシー（腹掛）を掛ける。脛には白黒縦縞の脚絆^{すね たてじま きゃはん}を巻き、足は黒の地下足袋を履く。頭には赤毛のカンター（かつら）を被った。髪は、戦前はフィリピンウー（マニラ麻）やシマウー（芭蕉）の繊維を赤く染めた物を用いた。戦後は手芸用のビニールの紐を使っている。

今回はオレンジ色の紐を使用した。また、これまで1本の顎紐^{あごひも}でかつらを固定していたが不安定なため、今回は顎紐^{あごひも}を2本にして安定するように工夫している。

ホ. 小道具・楽器

フェーヌシマー棒 約126cmの棒の上端に直径約5.5cmの金属輪3本を取り付けてある。

材料には堅くてよく撓る檜^{しな}を用いている。戦前は馬車持ちに注文して北部から取り寄せた檜で作った。今回はスポーツ店に注文した。

棒の長さは前回まで約106cmであったが、今回は演技者の体型にあわせて約20cm長く



写真2-30 フェーヌシマの装束

した。また、上端の金属輪も鉄製であったのをステンレス製にした。前回まで先端の金属輪や止め具が外れて人に当たることがあったため、外れないように補強されている。金属輪は、必ず3本の輪が交差するように取り付けるといふ。

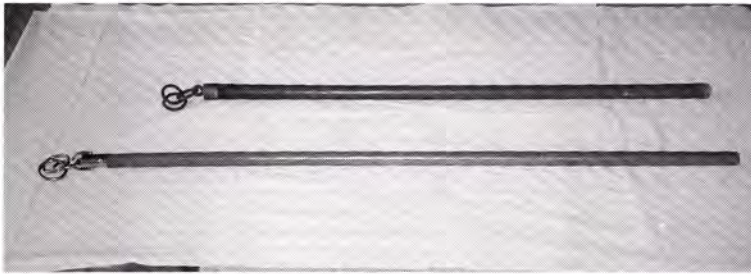


写真 2-31 1974年の大綱引きで使用したフェーヌシマ棒(上)と
今回(1998年)使用した棒(下)

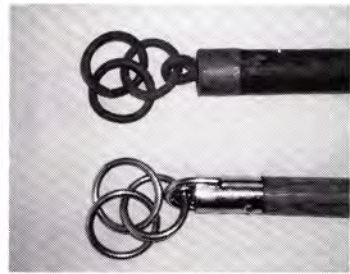


写真 2-32 先端部の金属輪

かね
鉦 直径30 cm程度の真鍮製の銅鑼。^{どら}

上下に2個ずつ穴を開けて紐を通し、そこに左腕を差し込んで持ち歩く。



写真 2-33 鉦打ちの二人

へ、歌 詞

演技の最後にみんなで銅鑼の音に合わせて歌を歌うが、歌詞の意味について、ほとんどの方がわからないということであった。しかし、末吉清信さんは、歌詞全体の意味は知らないが、その一部を以前に古老から聞いたことがあるという。それは次の通りである。

金はジャーシ(座主?)が持っている。相手(敵)は松林の中から、姿勢を低くしながらのぞいている。だから眠ってはいけない。

歌詞は以下のとおりである。

カーニヤ サングワンジャーシヌ
ウージュミーヌ クージュミー
ウングルシングル マーチヌヤマ
マーチヌシンカラ ミンボージャーガ
ターチヌミンプリ チンチキティ
スリ イーメンイーメン
チクチクタン ターチンターマーヨー (ハウーハウッ)

佐喜真興英は『シマの話』で宜野湾村(現市)新城のフェーヌシマについて紹介しているが、その歌詞が北谷の歌詞と類似しているので引用することにする(佐喜真興英、1982:259~262)。

(前略) 先づ銅鑼をたゞきながら一人の男が舞台に飛出すと、続いて巫鈴様のものと一端に金輪をつけたジャンジャン音のする棒を持って八人の男が出て来た。巫鈴を置いて銅鑼の音に和して舞台を廻りながら躍った。次に棒を巫鈴に代へ坐して

シュンジ ナリタヤ ヒャク ナリフ ヒルヤ ガマクニ
サギリリティィ クルービン クルービン ユルヤ ウ斯巴ニ
ウカサリティィ クルビン クルビン

の歌を歌ひ立って

ワシタガ ウームイスル ユーアリ チミンサマ
サジントガ ナラワ シツカリ シツカリ
シシャシガ ウシユーイ アン ヌ チラ
アン チボ クーポー

と歌ひながら、変な所作を演じた。更に棒を置き空手で、

サマワマチュシヌ ジマヤスリ ヤマヌミンボウジャガル
カニヤサングワンカニ ウジュミヌ クジュミ
ディンヌ メーヌ ヤークヤーク クチョーヤサミシンスリ
ヤマダヌフトウキ ウングル シングル
キジムン ジャシヌ マチュシ マチュヤマヌ
ミンポージャガル ターチヌミンブニ
チンチキティィ タチヌミンブニ ミシタクトウ
スリ イーメン イメン チク チク テン
スリ イーメン イメン チク チク テン
ヤマイラバヌン ヤマイリ タチジトウイ
ウナイタミス ヤマビルダ チンダラヨ

と云ふ訳の分らぬ歌を歌った。(後略)

※原文では、歌詞はローマ字表記であるが、ここではカタカナ表記にした。

前半の「シュンジナリタヤ～アンチボ クーポー」までの歌詞については、那覇市安里のフェーヌシマの中で踊られている「ひょうたん踊り」の歌詞と類似している。このような歌詞は宜野湾市普天間で演じられていたフェーヌシマでも一部ではあるが同様の歌詞であったことが『宜野湾市史』で確認できる(1985:559)。この他、これと同様な歌詞は名護市宇野古や金武町宇伊芸のフェーヌシマでも歌われている。

後半の「サマワマチュシヌ～ヤマビルダ チンダラヨ」の歌詞は、北谷のフェーヌシマと同じ言葉が各所にみられ、同系統の歌詞と思われる。現在のところ、この系統の歌詞は他の地域では見られず、宜野湾の新城と北谷のフェーヌシマのみにみられる。

ト. 隊形・演目

1986年の大綱引きまではメンダカリ、クシндаカリ 2組に分かれ、ミチジュネーとは別に雄綱・雌綱の側で演じていた。しかし、今回は2組編成することができなかつたため、1組で雌綱の最後尾から雄綱の最後尾に向かって、単独でスネーした。

演目は、フェーヌシマ棒を振り回したり、打ち合う「棒巻」、空手の型のような「手」、「歌」、「ダチムッチー」の4つからなる。ダチムッチーとは「二人組み⁽⁶⁾合わせで、相手の股ぐらに頭を突っ込み、相手の腰を抱え、この形で」後方に回転していく技（下図参照）であるが、危険であるということで、1950年の北玉小学校での上演を最後に行われていない。この技は宜野湾の新城にもあつたようで、佐喜真興英は「ハウハウと叫びながら二人宛組み、一方の股に他方の首を入れヒックリ返りながら楽屋に入った。」と記している（佐喜真興英 前掲同）。その他、那覇市安里や恩納村仲泊にもこの技が伝承されており、何れも一番最後に演じられている。以下、北谷のフェーヌシマの演目を写真やイラストで図解することにする。

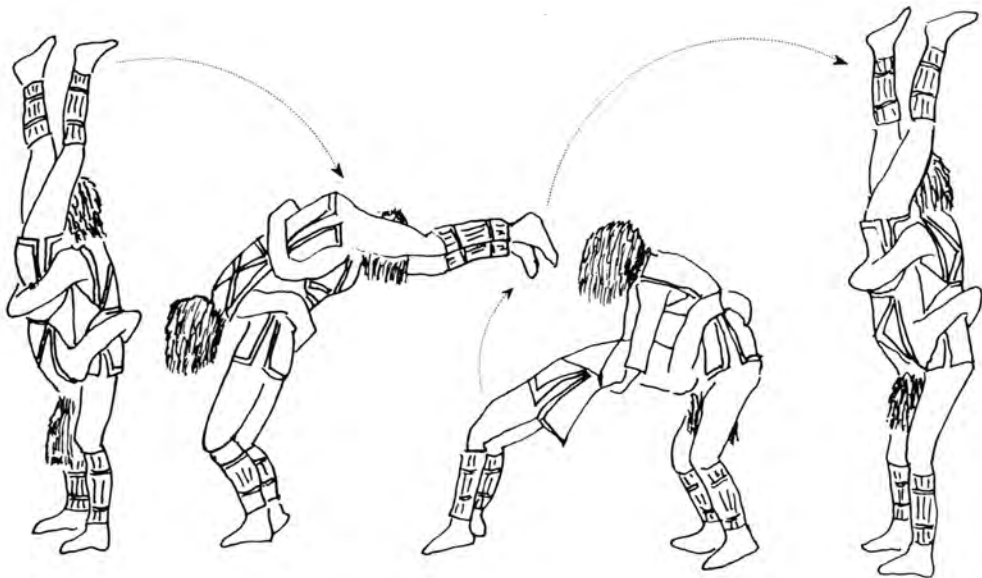


図 2-18 一番最後の演目であったダチムッチー

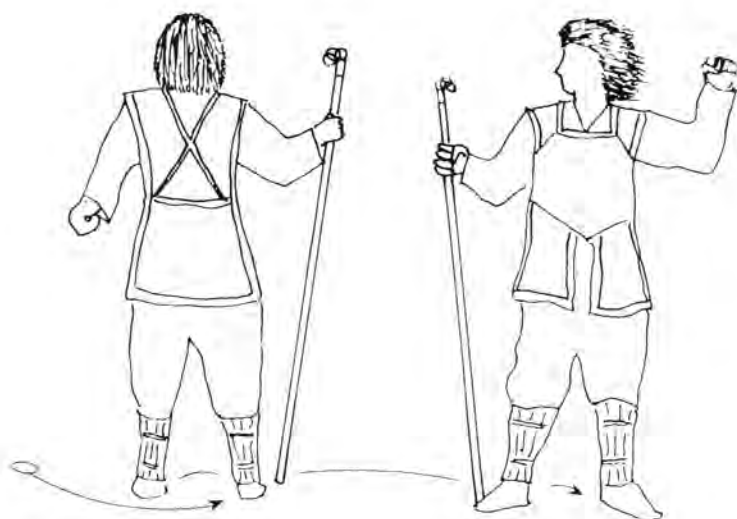


図 2-19 2列縦隊になり、銅鑼の音に合わせて、右足を踏み出すと同時に、地面に棒を突く。左足を踏み出すときには、左腕を肩の高さまで挙げ、左側方を振り向く。これを繰り返して数歩前進して入場する。「ハウーツ」といいながら上体を反らす（以後、上体を反らす時は常に「ハウーツ」という）。

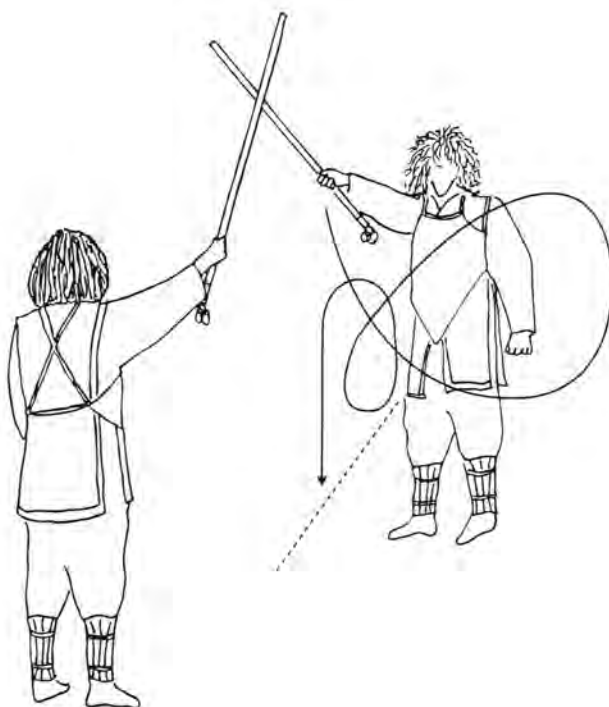


図 2-20 銅鑼の音とともに隣の者と向き合い、右手で棒の先端付近を持ち、上段で打ち合う。その後、棒で8の字描く。棒で地面を叩きつける。棒の先を地面に着けたまま、棒を後ろ手で左手に持ち替えながら、棒を跨ぐ。そして、左手で8の字を描き、再び棒を右手に持ち替え、上体を反らす（この間ずっと銅鑼を打ち続ける）。次の銅鑼の音と共に飛び跳ねながら正面を向く。そして、上体を反らす。

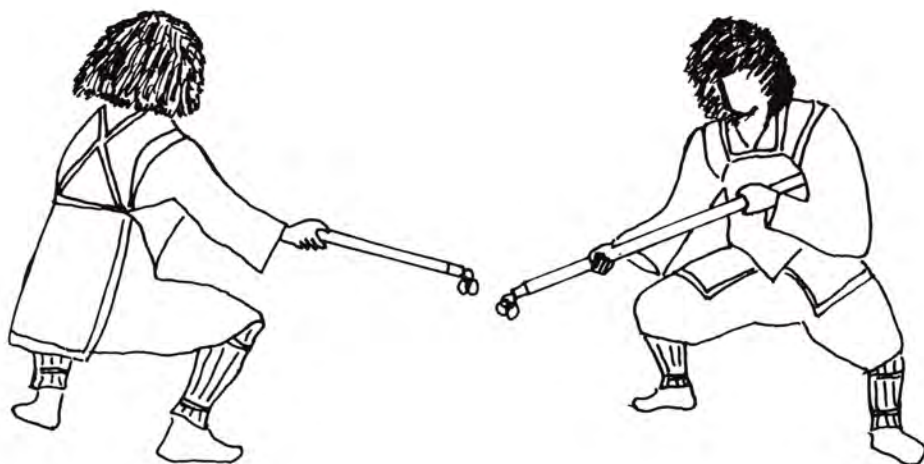


図 2-21 飛び跳ねながら互いに向き合い、棒を本手（順手）に持ち、右上段から振り下ろす。再び飛び跳ねながら、左上段から振り下ろす。

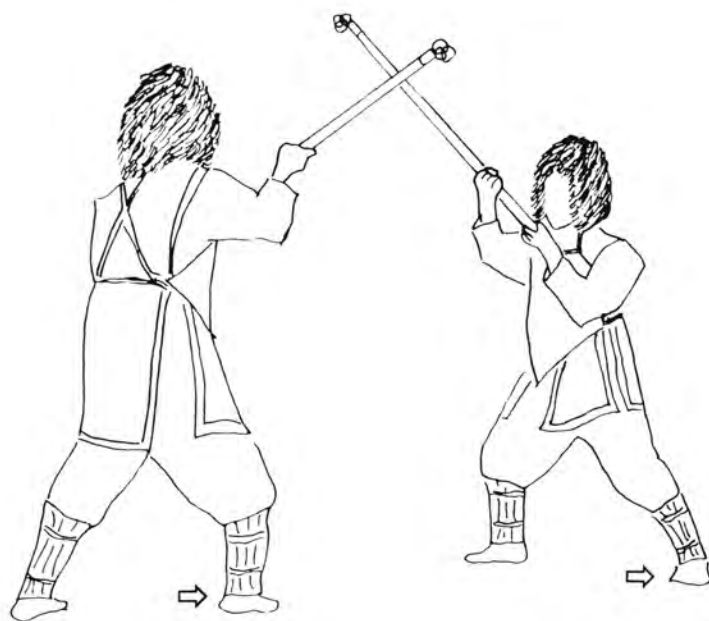


図 2-22 右足を1歩踏み出しながら、右上段で棒を打ち合う。相手は左足を1歩さがり棒を打ち合う。次に左足を踏み出しながら左上段で打ち合う。相手は逆に右足を1歩さがりながら打ち合う。今度は相手が右、左と1歩ずつ踏み出しながら同じ動作を繰り返す。

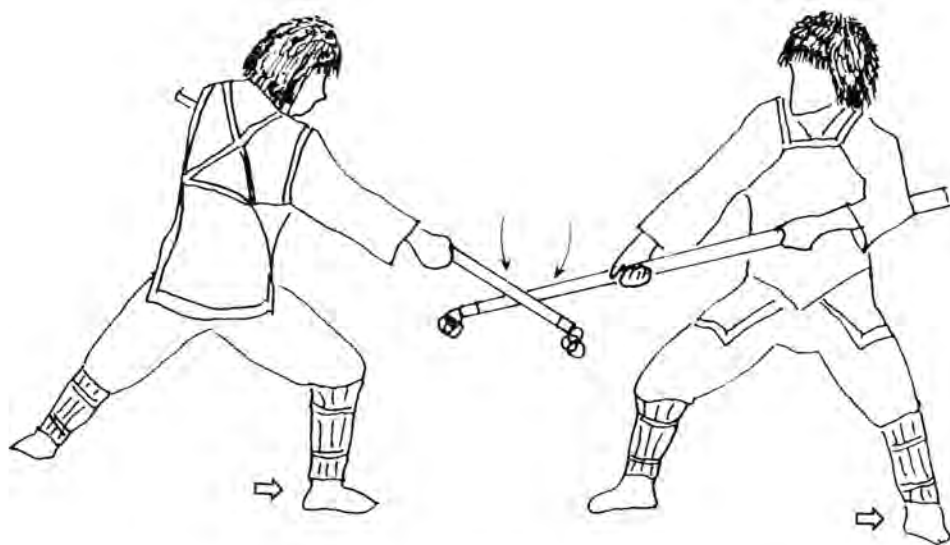


図 2-23 同じ足さばきで左右下段で1人2回ずつ打ち合う。

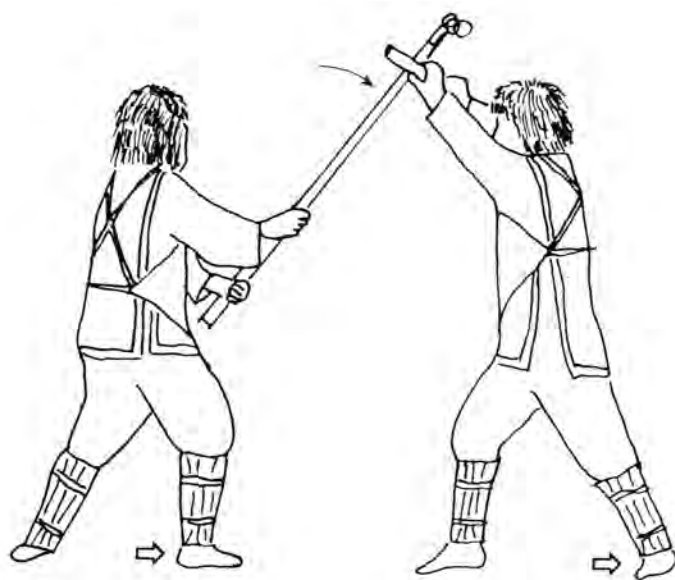


図 2-24 右足を踏み出しながら上段から正面に振り下ろす。相手は左足を1歩引きながら、棒を横一文字に持ち上段で受ける。

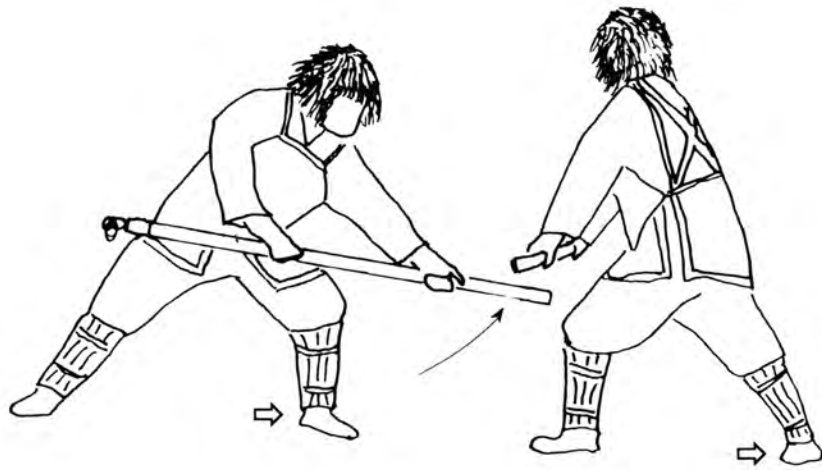


図 2-25 左足を踏み出しながら下段から正面に振り上げる。相手は右足を引きながら下段で受ける。次に相手が同じ動作を繰り返す。

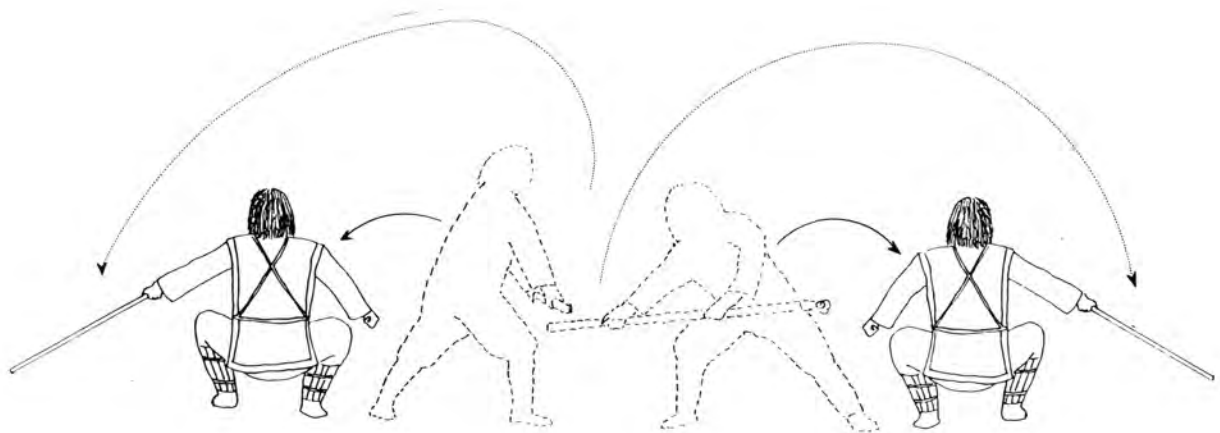


図 2-26 飛び跳ねながら列の外側に後ろ向きに座り込む。棒は右手で持ち振り上げながら半円を描き、地面に叩きつける。再びジャンプして立ち上がり、上体を反らす。



図 2-27 飛び跳ねて1列縦隊になり上体を反らす。そして、右手で棒を持ち、棒で反時計回りに円を描き、地面を叩きつける。



写真 2-34 棒を引きずりながら、小走りで反時計回りに回る。途中で棒を1ヵ所に置いた後、再びもとの2列縦隊に戻り、上体を反らす。

撮影：赤嶺朋子

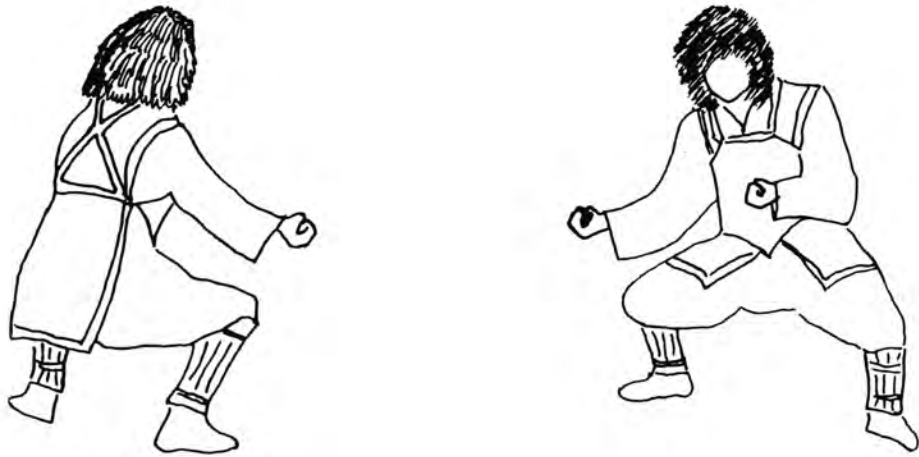


図 2 - 28 銅鑼の音とともに右足を踏み出しながら、手は右中段裏突き（裏拳）。左拳は左脇に構える。次の銅鑼の音とともに左右逆の構えをする。その後、上体を反らす。

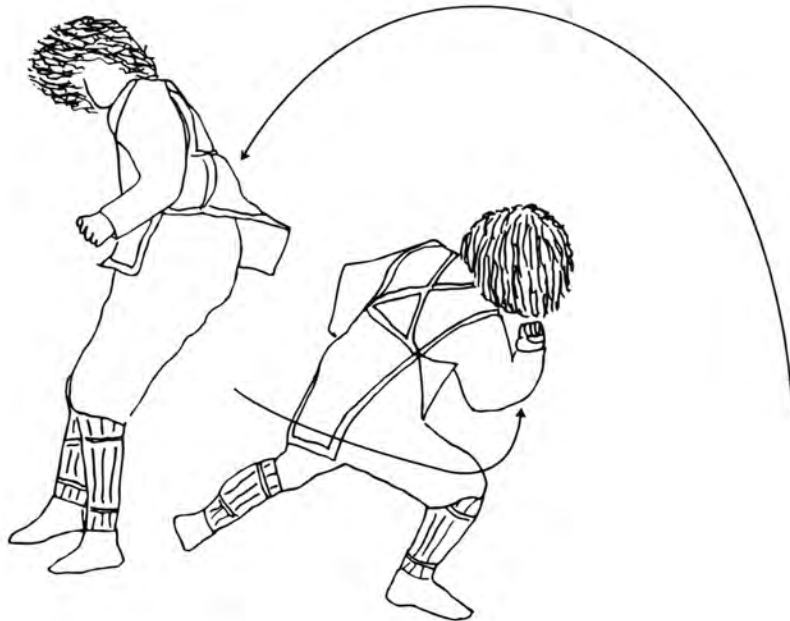


図 2 - 29 銅鑼の音で右足を踏み出しながら右腕で相手の足を払う。相手は飛び跳ねてこれを交わし、互いの位置を入れ替わり、向かい合って上体を反らす。今度は相手が同じ動作を繰り返す。

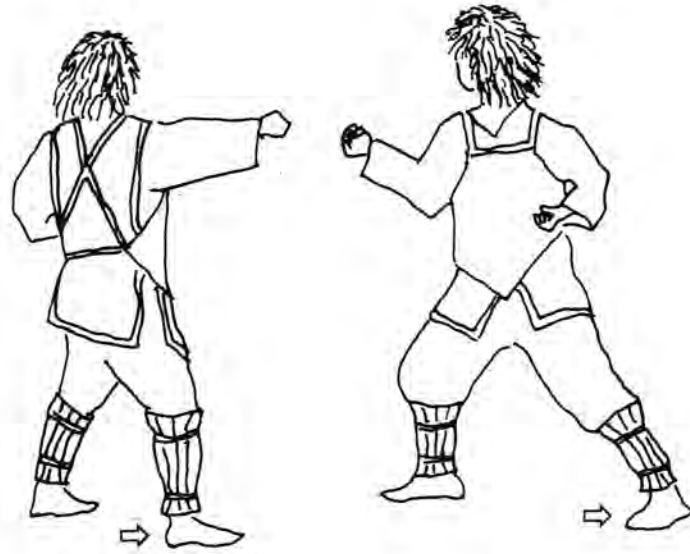


図 2-30 右足を踏み出しながら、右中段順突き。左手は左脇に構える。相手は左足を引き、左中段腕受けをする。右拳は右脇に引く。次に左足を踏み出しながら左中段順突き。右拳は右脇に引く。相手は右足を引き、右中段腕受けをする。左拳は左脇に引く。次は相手が同様の動作を繰り返す。



図 2-31 右足を踏み出しながら右手は下段を順突きする。左手は左脇に構える。相手は左足を引きながら、左下段払い。右拳は右脇腹に引く。次に左足を踏み出しながら、左手で下段を突く。次は相手が同じ動作を繰り返す。終わると上体を反らす。

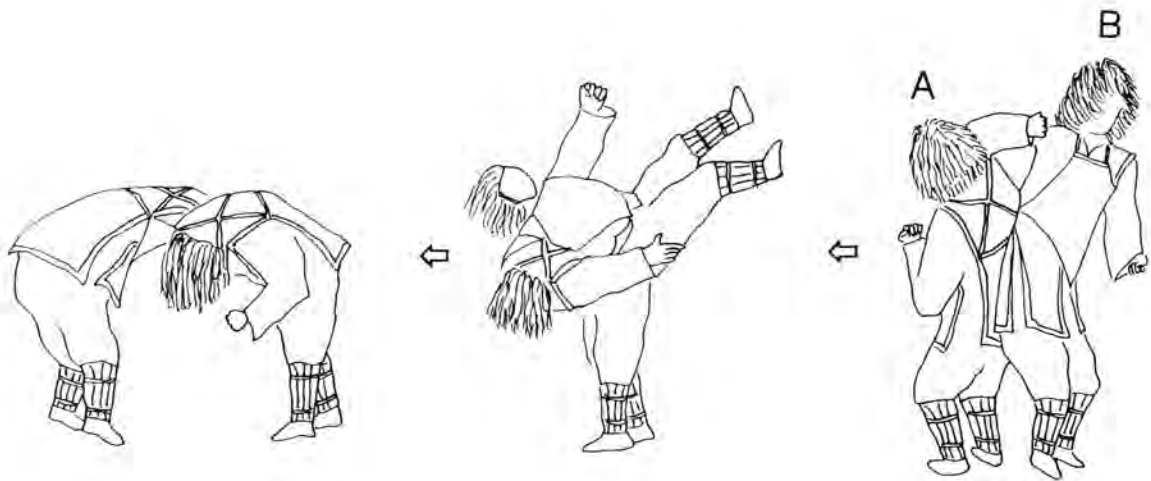


図 2-32 互いに右腕を掛け合い、背中合わせになる。Aが前屈みになりBを背負い、BはAの背中の上で回転する。その後、互いに向かい合い上体を反らす。次はBとAが逆になり繰り返す。

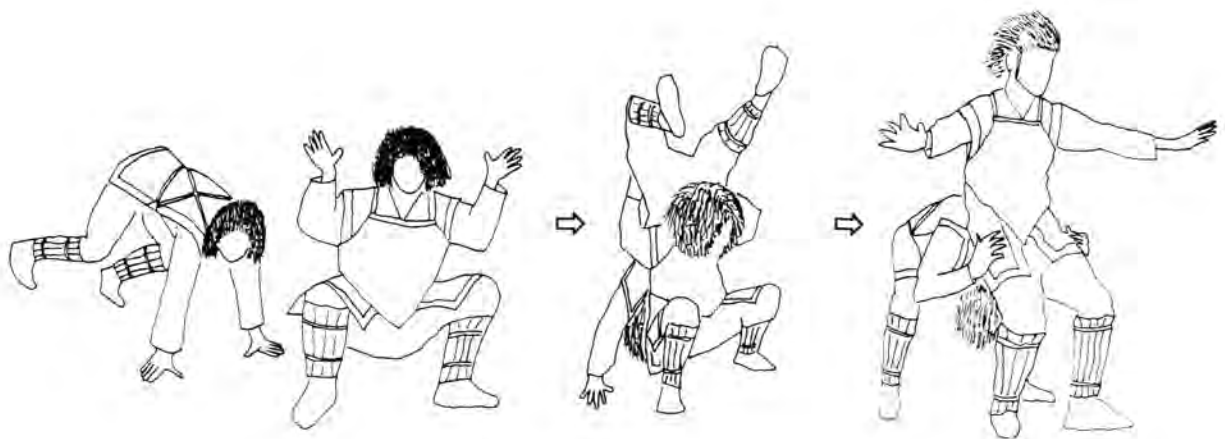


図 2-33 前の者がしゃがみこみ、後の者が前の者の背中の上ででんぐり返しをして、前に進む。これを交互に2回繰り返す。その後上体を反らす。

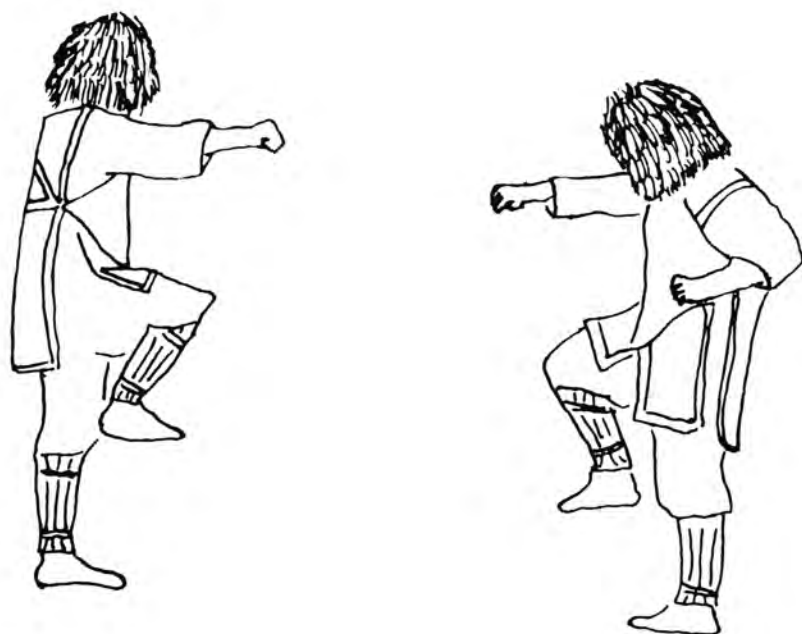


図 2-34 互いに向かい合い、上体を反らす。そして、銅鑼の音に合わせて、足踏みをして、左右の手は交互に中段突きしながら、歌を歌う。歌が終わると、上体を反らす。飛び跳ねながら正面を向く。上体を反らす。1列縦隊になり、鉦打ちを先頭に小走りで反時計回りに回りながら、各自の棒を取る。そして、2列縦隊になり、入場と同様に棒を地に突きながら、数歩前進して終了（戦前はこの動作ではなくダチムッチーで終了したという）。

註

- (1) 『那覇市文化財調査報告書第1集 那覇安里のフェーヌシマ』(1981)、大城學「フェーヌシマ系の芸能」(1992: 37~38)を参考にした。また前者では伊江村字西江前の「あかきな」も含まれていたが、筆者の見た限り同系統の芸能とは思われない。また、後者の論文でも含まれていなかったため、「あかきな」は一覧からはずした。
- (2) 大城學、前掲同、1992: 37
- (3) 新里まゆみ、1998年調査メモより
- (4) 『北谷町史』(1994)では、鉦打ち1人、演技者8人の9人とある。
- (5) 金城睦弘は、北谷長老祭で演じられたフェーヌシマの様子について次のように報告している(1976: 122)。

北谷長老祭は毎年八月十五日(旧暦)に行われ、その日は獅子を先頭にした南の島踊の団が村屋から長老前山まで道スネーして、長老前に演技を奉納した。夜になると、ムラヤーの前に作られた仮設舞台では「組踊 伏山敵討」などと共に南の島踊が上演された。

- (6) 金城睦弘の報告(1976)や『北谷町史』(前掲同)と今回上演されたフェーヌシマとでは、演

目の順序が異なっている。前者では最初に歌を歌ってから「棒巻」「手」と続くのに対し、後者は「棒巻」「手」「歌」となっている。また、今回の調査では「棒巻」という名称を聞くことができなかった。

参考文献

- 大城 學、
「フェーヌシマ系の芸能」、『沖縄文化』(第二十七卷二号通巻七十六号)、『沖縄文化』
編集所、1992。
- 川平 朝中、
「フェーヌシマ踊(南風島踊)」、『沖縄県史23 各論編11(民俗2)』、沖縄県教育委員会、
1973。
- 宜野湾市史編集委員会編、
『宜野湾市史 第五巻資料編四』、宜野湾市、1985。
- 金城 睦 弘、
「沖縄本島中部の南の島踊—北中城村熱田、及び北谷村字北谷の事例—」、
『沖縄芸能史研究』(創刊号)、沖縄芸能史研究、1976。
- 崎原 恒 新、
「北谷ミカ村の大綱引」、『まつり』(31号)、まつり同好会、1978。
「南島踊(フェーヌシマ)調査報告」、『しまうた』(第八号)、しまうた文化研究会、
1981。
- 佐喜真 興 英、
「シマの話」、『佐喜真興英全集』、新泉社、1982。
- 北谷町史編集委員会編、
『北谷町史 第三巻資料編2 民俗下』、北谷町役場、1994。
『北谷ミカ村大綱引き』(パンフレット)、北谷ミカ村大綱引き実行委員会、1986。
- 名護市教育委員会社会教育課編、
『全島南ヌ島大会』(パンフレット)、1992。
- 那覇市教育委員会編、
『那覇市文化財調査報告書第1集 那覇安里のフェーヌシマ』、
那覇市教育委員会、1981。
- 「ムラの伝統芸能、北谷村の《南の島踊》」、1977年5月1日付『沖縄タイムス』。
『第1回民俗芸能祭、ふえーぬしまの集い』(パンフレット)、沖縄文化協会、1998。

(6) ミチジュネーの演目（ミルクを含む）

はじめに

1926（大正15）年の北谷三カ村大綱引きは、現在のような揃いの衣装はなかったが、婦人等は自前のクンジーに身を包み踊ったという。戦時体制が進むにつれ、学校行事やムラの行事にも変化が見られた。たとえば、1937（昭和12）年日中戦争が始まり日本が戦勝をあげると、旧北谷村でも小学生らが学校行事として、それを祝う提灯行列をしたという証言があった。また昭和13年の大綱引きのミチジュネーの際には、子ども達は日の丸の小旗を振りながら歩いたという。そして、ムラに残された女性、子ども、お年寄りだけで簡略化して大綱引きをしたそうである。

表2-2～4は、字北谷・玉代勢・伝道それぞれの演目を記したものであるが戦前に関しては、聞き取り調査で得られた範囲なので、今後の調査によっては増える可能性もある。

① 戦前

戦前の三カ村大綱引きについては、1926（大正15）年と1938（昭和13）年の様子を聞くことができた。大正15年のミチジュネーも現在と同様に、先頭を飾るのは旗頭・ブラチリ・ソグ（鉦鼓）・締太鼓の列であった。舞踊も表2-2の字北谷を例にとると、稲シリ節・上り口説・揚口説・下り口説・クワディーサー・前の浜・金細工・黒島口説・貫花・加那ヨー・チヂューで、1998年のミチジュネーと2、3の違いは見られるがほぼ同様の演目であったことがわかる。字玉代勢のミチジュネーの先頭には、なぎなたを持った女性が付いていた。また“ミルク（弥勒）”については、「戦前はなかった」「戦前から大綱引きに出ていた」など両方の証言があった。

1938（昭和13）年のミチジュネーに関しては、日中戦争が本格化して、青年達のほとんどは出征していたので、スネーや踊りが無い簡単な祭りをしたが、フェーヌシマはやったそうである。

② 戦後

1950（昭和25）年と1962（昭和37）年の寅年には、北谷三カ村大綱引きは開催されなかった。大綱引きが復活したのは、1938（昭和13）年の綱引きから36年経過した1974（昭和49）年であった。

1974（昭和49）年のミチジュネーで、旗頭・ブラチリ・ソグ・締太鼓・祝い節・サーサー節の6つは、字北谷・伝道・玉代勢で共演された演目である。それらの演目に加えて字北谷は、ガーラシ・稲シリ節・上り口説・下り口説・クワディーサー・万歳・前又浜・黒島口説・貫花・みなとくり・加那ヨー・南之島が演じられた。この中でも、ガーラシ・クワディーサー・南之島は字北谷に限られた演目で、1986年・1998年の大綱引きでも披

露された。

戦後、第2回目にあたる1986（昭和61）年のミチジュネーにおいても前回と同様に大綱引きには欠かせない、旗頭・ブラチリ・ソグ・締太鼓の他に、舞踊では加那ヨーとチヂンが共通した演目であった。字玉代勢ではミルクが復活し、字伝道では北谷と同じ貫花が踊られた。

③ 今 回

1998（平成10）年の大綱引きは、戦後第3回目にあたる綱引きであった。ミチジュネーでは三カ字同一の演目である旗頭・ブラチリ・ソグ・締太鼓・貫花・加那ヨー・チヂンが熱演された。また字北谷はガーラシ・クッディーサー・南之島の他にも8つの舞踊を群舞し、字玉代勢はミルクの他に前回にはなかった稲シリ節・金細工・前踊が加えられ、字伝道では三カ字で唯一のなんだき節が披露された。

ブラチリに参加したのは小学生男女、締太鼓は高校生の男子が担当した。貫花となんだき節は小中高生などの若い女子が演じ、祝い節・加那ヨーは30代～40代の婦人、稲シリ節は60代の女性、チヂンはそれ以上のおばあさん達が踊った。ミチジュネーの時は、戦前も現在と同じようにサンシン（三線）があったということである。また今回フェヌシマの希望者には、はじめ体格の大きい人がいたが、ペアが組みにくいので旗頭へ変更してもら

表2-2 字北谷の演目

	1926 (大正15)年	1938 (昭和13)年	1950 (昭和25)年	1962 (昭和37)年	1974 (昭和49)年	1986 (昭和61)年	1998 (平成10)年
旗 頭	○		開 催 さ れ て い な い	開 催 さ れ て い な い	○	○	○
ブラチリ	○	○			○	○	○
ソグ (鉦鼓)	○				○	○	○
締太鼓	○				○	○	○
ガーラシ		○			○	○	○
稲シリ節	○				○	○	○
上り口説	○				○	○	○
揚口説	○					○	○
下り口説	○				○	○	○
クッディーサー	○				○	○	○
万 歳				○			
前ヌ浜	○			○	○	○	
金細工	○				○	○	
黒島口説	○			○	○	○	
貫 花	○			○	○	○	
祝い節 (めでたい節)				○	○	○	
みなとくり				○			
加那ヨー	○			○	○	○	
サーサー節		○		○	○		
チヂン					○	○	
チヂュヤー	○						
南之島		○			○	○	○

った。それはフェースシマは相手を持ち上げたり、相手の上を前まわりで転がったりする
 など、二人の体を使って技を演じるため、体格に差があると安全に技ができないという理
 山からであった。

表2-3 字玉代勢の演目

	1926 (大正15)年	1938 (昭和13)年	1950 (昭和25)年	1962 (昭和37)年	1974 (昭和49)年	1986 (昭和61)年	1998 (平成10)年	
ミルク (弥勒)	△	△	開 催 さ れ て い な い	開 催 さ れ て い な い		○	○	
旗 頭	○	○			○	○	○	
日の丸		○						
ボラチリ	○	○			○	○	○	
ソーグ	○				○	○	○	
太鼓	○				○	○	○	
稲シリ節	○							○
なぎなた	○	○						
めでたい節						○		
さーさー舞い						○		
祝い節						○	○	○
金細工		○						○
ぬち花								○
加那ヨー	○	○					○	○
チヂュヤー節								
ティーマートゥー	○	○						
谷茶メー	○							
ヌブイクドゥチ	○	○						
チヂン太鼓		○					○	○
前 踊		○				○		

表2-4 字伝道の演目

	1926 (大正15)年	1938 (昭和13)年	1950 (昭和25)年	1962 (昭和37)年	1974 (昭和49)年	1986 (昭和61)年	1998 (平成10)年	
旗 頭			開 催 さ れ て い な い	開 催 さ れ て い な い	○	○	○	
ブラチリ		○			○	○	○	
チンク					○	○	○	
太 鼓					○	○	○	
めでたい節					○			
さーさー舞い					○			
貫 花							○	○
なんだき節								○
加那ヨー							○	○
チヂン		○					○	○

3. 衣 装

はじめに

戦前の北谷三カは、現在のように軍用地料などもなく、農作業の中からの収入は限られていたので、大綱引き（ウーナ）の衣装も、出演する演目によって、紺地（クンジー）あるいは芭蕉（バサー）、緋（イーチリー）と大まかな指定だけであった。着物の柄に関しては北谷村は百姓ムラであったので、柄物の着用は好まれなかったことから、地味な着物をつけていたという（末吉文さん談）。また当時は、字にムラヤー（村屋）があり村芝居の為の衣装が保管されていたので、村芝居の衣装をそのままシタクがつけたりしていたこともあったという（旧字北谷・照屋正吉さん談）。

昔は手持ちの着物の中で一番良い着物からつける人が多かったが、13年に一度の大綱引きということで、新調した着物をつけてミチジュネーに参加する者もいた。

1974（昭和49）年に復活した北谷三カ村大綱引きは1998（平成10）年の大綱引きで戦後3回目となるが、大綱引きの衣装はそのつど各字の費用でもって新調されている。13年に一度ということから、着物の色や柄にも流行があり、回を重ねるごとに、艶やかで華やかな衣装に変化してきた。戦後の大綱引きでは、各字に数名の衣装担当者が選出され、その衣装担当者らによって衣装や小道具などが揃えられる。

1974（昭和49）年の大綱引きの際には、那覇市平和通り商店街桜坂付近の通称「イトマンヤ」でミチジュネーの演目ごとに30m～40m程の反物を購入し、その反物を各字の衣装担当者が、大・中・小のサイズに裁断をしたものを支給して、各自で縫ってもらった。各字の地謡には、柄違いの既製品の浴衣を支給した。1986（昭和61）年の大綱引きからは、具志川市平良川にある「津覇三味線店」より、三カ字の衣装と小道具をまとめて購入し支給するようになった。

（1）字北谷メダカリ・字玉代勢

① 旗 頭

戦前の旗頭の衣装は、各自で白いシャツに白ズボンを用意し、頭にはマンサージを巻き、襷（タスキ）は、北谷でいうマヤーガーキー（胸部に襷をかける方法）をしていた、という（當山苗盛さん談）。

1974（昭和49）年の大綱引きでは、白のシャツに白の長ズボン。頭には紫色のマンサージを巻き、紫色の襷掛けをして、腰には白い長^{ながさーじ}巾を締め、脚には黒足袋を履いていた。

1986（昭和61）年の大綱引きでは、背中に「祭」の文字がプリントされた青色の法被（ハッピ）に紫色の襷をして、腰には旗頭を支えるためのサラシを巻き、水色の長ズボンに白

黒のキハン（^{きわはん}脚絆）を巻き、靴は白に黒の3本線の入った運動靴が支給された。1998（平成10）年の大綱引きでは、青のムムヌチハンターの上着に同色のズボンをつけ、青の地下足袋を履いていた。いずれも素材は木綿であった。北谷ではムムヌチハンターの呼称は聞けなかった。古老たちは単に「那覇の大綱挽の衣装と同じ衣装」と話していた。ムムヌチハンターの上着右袖には「北谷三ヶ村大綱引き」という文字が入っており、腰には白のサラシが幾重にも巻かれ、頭には紫色のマンサージを巻いていた。マンサージの色の意味について、ある古老は、おそらく沖縄の着物の色では紫と黄色が王、あるいは高貴の象徴を意味しているからではないかという。



写真 2-35 1974年の旗頭衣装(金良宗吉氏撮影)



写真 2-36 1986年旗頭衣装(仲米政雄氏撮影)



写真 2-37 1998年旗頭衣装



写真 2-38 ムムヌチハンター衣装(上着)

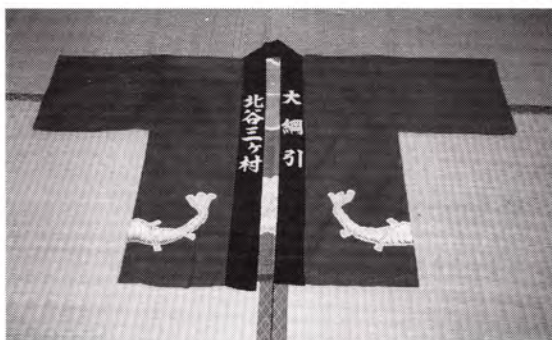


写真 2-39 1986年の法被(前)

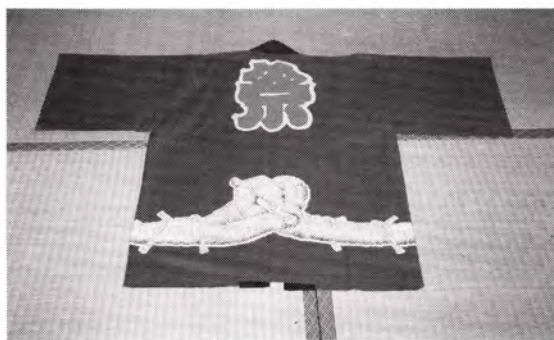


写真 2-40 1986年の法被(後ろ)

② ブラチリ

右の写真(2-41)は昭和13年の大綱引き(ウーンナ)のブラチリの衣装である。白の上着と七分丈ズボンを着用。マヤーガーキーに襷掛けをし、靴下と運動靴を履いているのがわかる。頭には白のサージをメウキーにしており、隣にいる子供も同じようにメウキーにしている。1974(昭和49)年の大綱引きでは、白の野球帽に「北谷三ヶ村大綱引」とプリントされたタオルを締めて、白のYシャツに白のズボンをつけ、水色のサテン地に紫で縁取られた陣羽織をはおった。1986(昭和61)年と1998(平成10)年の衣装に、たいした違いはみられない。いずれも、背中に「祭」の文字が書かれており、雄雌の綱のカニチを結合させた図柄がデザイン化されていた。頭には紫のマンサージを、腰には紫の長巾を締めていた。



写真2-41 伊禮シボクさんと長男
(新垣カメ氏提供)



写真2-42 1998年ブラチリ

③ 締太鼓

1974(昭和49)年は白のYシャツの上から水色のサテン地に、紫の縁取りがされた陣羽織をはおり、脚には白黒のキハンを巻いて、黒足袋を履き、腰には紫の長巾を締めていた。

1998(平成10)年は、頭には紫のマンサージを巻いて、法被に白の長ズボンを着用。そして腰には紫の長巾を締めた。脚には白黒のキハンを巻いて、白の運動靴を履いた。



写真2-43 1998年の締太鼓

④ 実行委員会

実行委員長(照屋信正さん:左)・大会長(辺土名朝一町長:右)は、大会用の法被に白の長ズボンに白い靴を履いて、頭にはマンサージを巻いていた。



写真2-44 1998年実行委員会

⑤ 字北谷メンダカリ、玉代勢の女踊り

イ. 稲シリ節

水色のユクアヤー(横綾)の文様の着物。水色の着物丈は長めに着付け、白足袋に赤い鼻緒^{はなお}の草履^{ぞうり}を履いていた。また黄色のユクアヤーの着物丈は短めに着付け、袖口は野良着という^{こと}で、小さく袖まくりをし、素足に赤い鼻緒の草履を履いていた。麻色のアヤヌナーカ(縦綾)の着物にはトゥイグラーとカキジャーの文様がはいつていた。



写真2-45 ユクアヤー



写真2-46 タティアヤー

ロ. 上り口説

ライトブルーで二の紋がついている着物。「あずまからげ」という着付けの仕方で、角帯をウシクミ(押し挟み)で締め、紫の長巾を上より結んだ。頭には白の請け鉢巻^{うはちまき}をサン結びにして、脚には白黒のキハンを巻き、白足袋に赤い鼻緒の草履を履いた。これまで、二歳踊りの衣装といえば、黒の着物が主流であったが、近頃は華やかな色の着物へと変わってきている。



写真2-47 上り口説

ハ. 揚口説

山吹色の着物。黄金の角帯を貝の口で大きく結び、紫の長巾を右下に結んでいる。最初に、紅白のねじり紐を肩からさげて花籠を持って踊り、次に黒の陣笠を持って踊った。足もとは白足袋に赤い鼻緒の草履を履いていた。



写真2-48 揚口説

二. 下り口説

無地の黒衣装で、白の請け鉢巻をサン結びにした上から紫の紙笠を被っている。角帯をウシクミで締めて、さらに右腰下に紫の長巾を結んでいる。足には白足袋にキハンを巻いて、赤い鼻緒の草履を履いていた。右手にチーグシをもって旅の道行きを表し、若々しく踊る。



写真2-49 下り口説

ホ. クワディーサー

白のカカンの上に、赤胴衣（アカドウジン）を着けて、上から華やかな黄色地に松枝・垂桜・菖蒲文様の紅型（プリント地）の衣装をはおる。頭を琉髪にし花笠を被り、紫の長巾を後ろで締めて垂らしている。「四つ竹と呼ぶ竹片を2個ずつ両手に持って、カッチ、カッチと鳴らして踊る」（『琉球舞踊入門』宜保栄治郎1979）。見ていてとても華やかな古典の祝儀舞踊である。クワディーサーは字北谷に限られた演目である。衣装の金額が大きいことから一部個人負担もあった。



写真2-50
クワディーサー(前) クワディーサー(後ろ)

ヘ. 前又浜

黒の無地衣装。頭には白の請け鉢巻きを結んで、紙笠を被った。^{えんじ}臙脂の角帯をウシクミに締めて、さらに紫の長巾を結んだ。足もとは白足袋に白黒のキハンを巻いて、赤の鼻緒の草履を履いていた。



写真2-51 前又浜

ト. 金細工

^{かなふいー}加那兄は黒衣装を着けて、角帯をウシクミで締めて、頭には^{まんざいがき}万歳笠（編笠）を被り、^{ふいご}鞆と^{かなこ}金子を天秤に担いで踊った。アンマーは紫地の着物をウシンチーにして着けていた。^{もーしー}真牛は灰色と青地の着物を着けて、紙笠を被った。



写真2-52 金細工

チ. 黒島口説

頭には花染め手^{ていさいじ}巾を巻いて、クバ笠を被った。黒地に黄色のタティアヤーの中に、トウイグワー文様がいっている着物で、帯は本物のミンサー帯を締めており、素足に赤い鼻緒の草履を履いていた。



写真2-53 黒島口説

リ. 貫花

字北谷の衣装は、黒地にミチグム（水雲）やトーニーの文様がいっている。

この柄は那覇では「クジリゴーチ（崩れ格子）」、首里では「ムルドウッチリー（総緋）」と呼ばれているもので、北谷ではほとんどのお年寄りが「クジラゴーチ」と呼んでいた。頭を琉髪に結び上げ紫の長巾にて女結びをし、右肩袖抜きで、腰には紫の長巾を締めていた。そして、貫花（紅白の花を糸で綴ったもの）を首にかけて踊った。字玉代勢の衣装は黄色地のクジリゴーチを字北谷と同様に着付けを行った。



写真2-54 字北谷



写真2-55 字玉代勢

ヌ. 祝い節

字北谷は、紫地の着物にハサンピーマー（はさみ）・イチチマルグム（五つ丸雲）の文様がいっている。丈は長めに着付け、着物と同じ紫色の扇子をもって踊る。足もとは白足袋に赤い鼻緒の草履を履いた。頭にはタオル掛けをして、その上から紙笠を被った。1986（昭和61）年の大綱引きでは、手にデイゴの造花を持って踊った。また着物も本バサーで着物丈を短くし素足に草履であったという（仲村渠敏子さん談）。しかし、今回は「自分たちにもチュラジンを着せてほしい」という婦人たちからの要望により、華やかな紫の衣装に替えたのだという。字玉代勢の衣装には、緑地に黄色のインヌフィサー（犬の足跡）の文様がいっており、婦人たちは扇子を持たず手踊りで踊った。



写真2-56 字北谷 祝い節



写真2-57 字玉代勢 祝い節 (亀谷長久氏撮影)

ル. 加那ヨー

字北谷の衣装は、紫地の着物にティンカキジャーとカーヌティカー（井戸の杵）文様かはいっている。右肩からは赤染み手巾をかけ、腰には紫の長巾を女結びにし、頭には紫の紙笠を被って踊る。字玉代勢の衣装は麻地色にグバンヌミー（碁盤目）・ハサミ・などの文様かはいっている。肩には赤染み手巾をかけ、頭には紫の長巾で女結びにする。



写真2-58 字北谷 加那ヨー (右)



写真2-59 字玉代勢 加那ヨー

ヲ. チヂン

バサージンに似たプリント地の衣装で縦綾の中にカキジャーとトウイグラー文様かはいっている。着物丈は短く着け、素足に紫色の鼻緒の草履を履いていた。60歳以上の年配の婦人たちが、左御紋「三巴」のチヂンを持ってリズムよく踊る。



写真2-60 チヂン

ワ. 地謡衣装

地謡全員が同じ衣装をつけることはない。一つの演目に平均2人の地謡がついており、同じ演目の地謡同士で、黒地あるいは紺地に決められており、錦糸の帯を締めて頭には花で飾られたクバ笠を被っていた。



写真2-61 地謡

⑥ フェーヌシマ(南之島)

フェーヌシマは、黒の薄手の空手着（胴着）に、フェーヌシマ棒を持って演じる。黒の空手着の上からは、水色のサテン地に袖なしのチャンチャングワーと呼ばれる陣羽織じんばおりをはおる。本来フェーヌシマは、メンダカリとクシンダカリに一組ずつ編成され、陣羽織の縁取りもメンダカリが紫、クシンダカリが黄色と決められている。しかし、今回の大綱引きでは、人数不足によって1組だけの出場であったため、メンダカリのカラーである紫色で縁取られた陣羽織をつけていた。陣羽織の上からは、クブシーという五角形の腹掛けを前に掛けている。「クブシーとは中国よりもたらされたものが胸当てとして南島一円で比較的近年まで用いられられたものであろう」と記している（『琉球服装の研究』1991：144）。また『東恩納寛惇全集5巻』では「農村婦人の胸当て、汗カザミのことをユダチという。本来は汗取りの肌衣が後に弓取りの胸当てに転用された」とある（東恩納、1978：565）。

頭にはキジムナーを連想させる赤カントウ（かつら）を被る。赤カントウは1本1本手芸用のオレンジ色のビニール紐を結んで髪形を整えていく。まず最初に手芸品店の人が習って、婦人部の婦人たちが、手作業で作製した。

小道具にはフェーヌシマ棒がある。フェーヌシマ棒は、沖縄市の中央パークアベニューにあるスポーツ店で購入した。棒の先には3個の輪が取り付けられていた。フェーヌシマの衣装は戦前・戦後とクブシーの柄とカントウの色以外にほとんど変化は見られないという。戦前も現在と同様に黒の空手着に、柄の無いクブシーにチャンチャングワーをつけていたという（字北谷の照屋正吉さん・上間盛英さん・當山苗盛さん談）。フェーヌシマを指導してきたノロ殿内の末吉清信さんが保存する前回の写真を見ると、カントウの色は赤紫に近い色の手芸用のビニール紐であった。戦前は、フィリピンウ（マニラ麻）やシマウ（島芭蕉）の繊維を染めてカントウを作製していたという。保管については村屋で保管していたのではないかという意見が多いがはっきりしない。しかし現在は保管場所も大変で難しいことから、綱引きを終了すると参加記念として支給している。



写真2-62 字北谷 フェーヌシマ(前)



写真2-63 字北谷 フェーヌシマ(後ろ)

⑦ 字玉代勢のミルク(弥勒)衣装

今回の大綱引きでは、樹昌院の住職（喜瀬守）と副住職（喜瀬志郎）親子がミルクに扮した。玉代勢にミルクが存在するのは何故か？、またどうして玉代勢だけからでるのか？といった詳しい伝承はどなたからも得られなかった。しかし、住職の話では、人々の弥勒信仰によって弥勒菩薩が現れ、世果報（ユガフー）や嘉利（カリー）をムラ人にもたらし、幸せに導いていくという意味から存在するようになったのではないかという話が聞けた。ミルクに扮する人を選定するには特別に決まっていることはなく、年齢や生まれ年も関係ないとのことであった。

戦後の第1回目はミルクはミチジュネーには参列していなかった。ミルクが復活したのは1986（昭和61）年の大綱引きからである、1986年の大綱引きでは、住職の喜瀬守さんと照屋宏さんがミルクに扮した。現在のミルク衣装や仮面を保管する津嘉山政徳さんによると、ミルクの衣装には特別な呼称はなく、単にミルクヌチン（弥勒の着物）と呼んでいるという。戦前・戦後とミルクの衣装に変化は見られず、現在の様な黄色の衣装を纏まとっていたという（字玉代勢 照屋光久さん・宮平苗さん談）。

1998（平成10）年のミルクは、白い手袋をはめ、右手に軍配団扇をもって団扇を左右に振り、足もとは白足袋に白い鼻緒の草履を履いていた。そして、ミルクの体型のふくよかさを演出するためにお腹の中にタオルをいれたり、鍋をいれたりして膨らませていた。ミルクは字玉代勢のミチジュネーの先頭に付く。ミルクの仮面は戦後字で所有してなかったもので照屋秀さんが、八重山出身の知り合いに頼んで仮面を借り、衣装は那覇の市場にて購入した。3回目の仮面は津嘉山政徳さんが那覇の市場で購入した。しかし実際に被ってみると、仮面がとても重く息がしにくかったことから、再度仮面の中を削り取り、空気穴を大きくあけたりと工夫をした。戦後、ミルク衣装と仮面は北谷大綱引きが終わると、津嘉山政徳さん宅の倉庫に大切に保管されているが、戦前のを保管していたという記憶のないことから、恐らく当時は村屋に保管されていたのではないかという話であった。



写真2-64 1986年のミルク
（仲米政雄氏撮影）

表 2-5 ミルク衣装寸法

	ミルク衣装
身 丈	137.5 cm
肩 幅	35.0 cm
袖 付	70.0 cm
袖 幅	39.5 cm
袖 口	70.0 cm
後ろ幅	35.0 cm
前 幅	30.0 cm
衿 下	55.0 cm
衿 幅	5.5 cm
衿下がり	65.0 cm
だき幅	32.0 cm
素 材	木 綿
色	黄 色

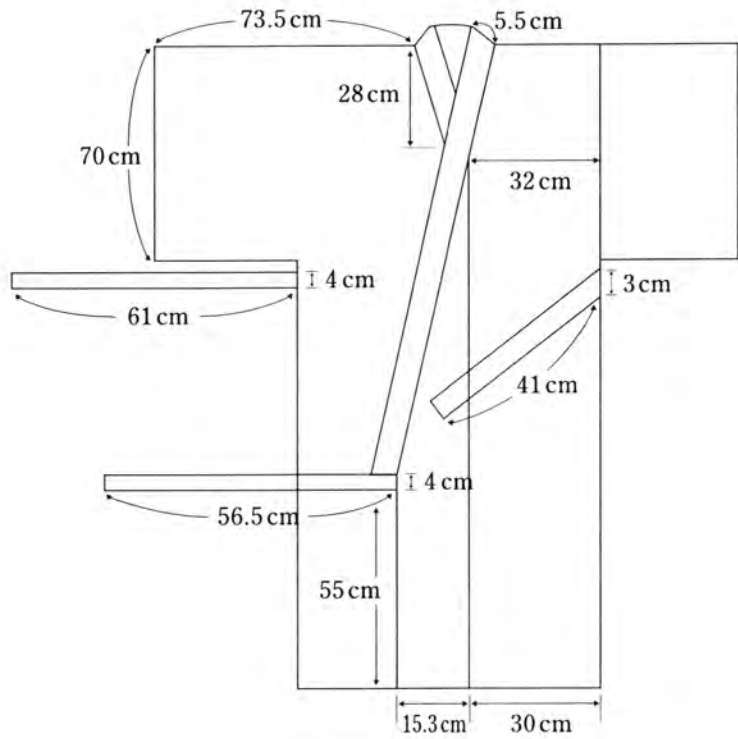


図 2-35

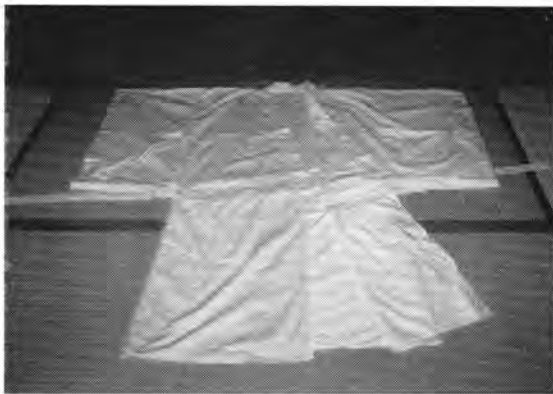


写真 2-65 前身ごろ



写真 2-66 後ろ身ごろ



写真3-67 ミチジュネーをするミルク



写真2-68 住職の被った仮面



写真2-69 副住職の被った仮面

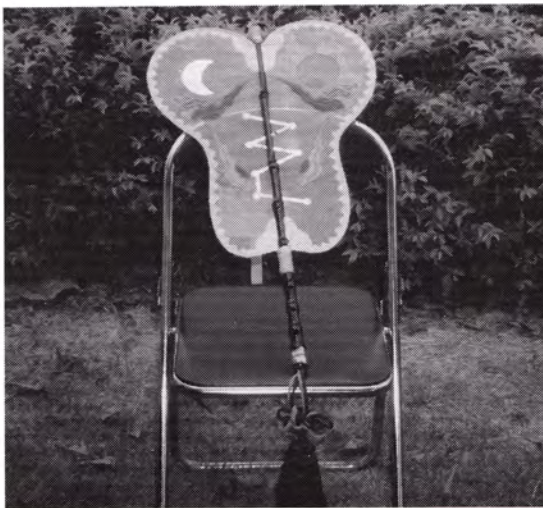


写真2-70 住職の持った軍配団扇



写真2-71 副住職の持った軍配団扇

⑧ ノロの衣装

ノロは綱引きの拝みに際しては、衣装を纏わなければならないという。しかし、戦後になってからは、残念ながら一度も袖をとおすことなく、綱引き当日は衣装を取り出して、ノロ殿内の神仏に供えて拝みをいれるだけである。

着用をしない理由について、北谷ノロの末吉文さんは「神様から白衣装をつけなさいというお告げがないから」と話していた。

表2-6 ノロ衣装寸法

	打ち掛け
身 丈	142 cm
肩 幅	34 cm
袖 口	52 cm
衿 下	33 cm
衿 幅	18 cm
素 材	木 綿
色	クリーム



写真2-72 ノロの打ち掛け

表2-7 白襦袢寸法

	襦 袢
身 丈	90 cm
肩 幅	22 cm
袖 口	21 cm
袖 幅	28 cm
衿 幅	6 cm



写真2-73 白襦袢

表 2-8 カカン寸法

	カカン
胴 廻	124 cm
麻 紐	70 cm
材 質	絹
色	クリーム



写真 2-74 カカン

神サージ (白の光沢のある柄もの)
 神サージの長さ…279cm
 神サージの幅…… 37cm

神サージ (無地のクリーム色)
 神サージの長さ…284cm
 神サージの幅…… 38cm

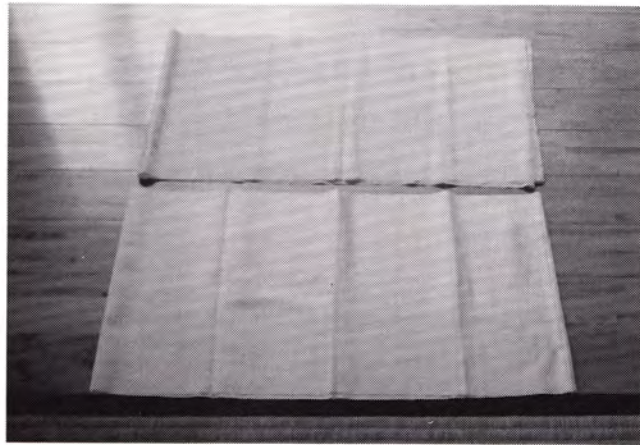


写真 2-75 神サージ

表 2-9 胴衣寸法

	胴衣
身 丈	98 cm
袖 口	26 cm
袖 幅	28 cm
色	白



写真 2-76 胴衣

⑨ 字北谷メンダカリ・ガーラシの衣装

戦後第1回目のウミナイビの衣装は、鶴を刺繍した金縷の打ち掛け姿で、供は黄色地の紅型に赤い縁取りのされた着物であった。その下からは、ドゥジンをつけて、現在の様な舞踊化粧はせず、頭に鉢巻や着物に襷掛けをした記憶もないという（伊禮康雄さん談）。

戦後ガーラシの衣装はノロ殿内で保管されて代々継承されていくが、戦後第1回目(1974年)の時の衣装は、台風の影響で、衣装が濡れたり、汚れて痛んだりしたため、第2回目(1986年)にドゥジン・ナカグミ（色物紅型）・按司の着物・兜を新たに仕立てさせたという（ノロ殿内末吉文さん談）。1998年の大綱引きの衣装は1986年から継承された衣装である。しかし、今回は衣装の襟部分のみを、本番2日前に拝みをいれてから、過去3回とも衣装の世話係をしている仲村渠敏子さんによって取り替えられた。

綱引き当日のウミナイビとその供は、北谷町保健相談センターにて化粧を済ませた後、ノロ殿内にてガーラシの衣装に着付けをする。白の肌着の上より、白衣装をつけてから紅型衣装をはおる。紅型衣装の文様には、垂桜・流水・藤・菖蒲・燕・鳳凰などが描かれていた。ガーラシの際に双方の支度を乗せたソージが、綱の後方からカニチグチに向かって登場してくる。綱の半分までくると、いったんは後退。その後ウミナイビと供は、紅型の衣装とその上から結んでいた紫の長巾をはずし、白衣装に襷掛けをして、白鉢巻の仇討ち姿で再登場する。



写真 2-77 衣装がとりだされる



写真 2-78 ウミナイビとその供



写真 2-79 髪をつけているところ(前)



写真 2-80 髪をつけているところ(後ろ)

表 2-10

ガーラシのウミナイビ打ち掛け(紅型)寸法

	打ち掛け
身 丈	153.5cm
肩 幅	33.0 cm
袖 口	75.0 cm
衿 下	61.0 cm
衿 幅	16.3 cm
衿下がり	26.0 cm
だ き 幅	30.0 cm
肩 明	20.0 cm
素 材	木 綿
色	黄色地紅型



写真 2-81 ウミナイビの打ち掛け

表 2-11 白衣装寸法

	白衣装
身 丈	140.0 cm
肩 幅	35.3 cm
袖 口	41.0 cm
袖 幅	36.0 cm
衿 下	62.5 cm
衿 幅	5.5 cm
だ き 幅	26.0 cm
幅	15.0 cm
前 幅	28.5 cm
色	白
素 材	絹

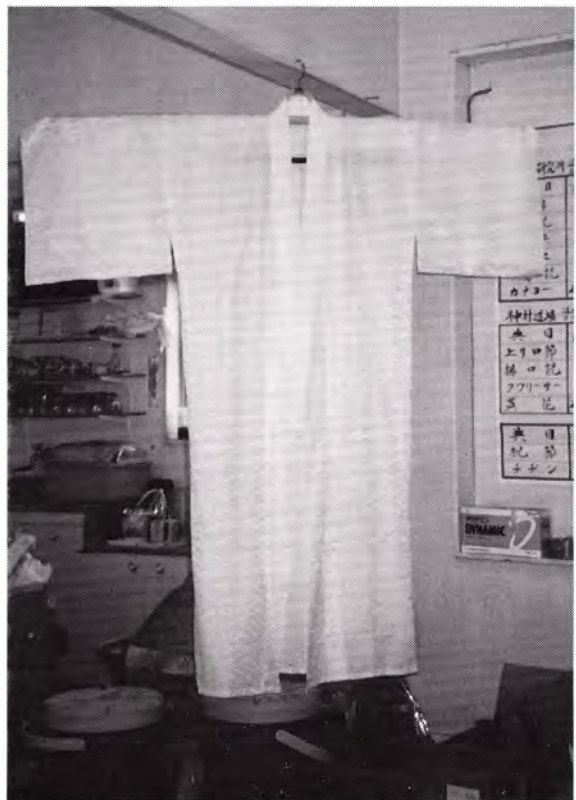


写真 2-82 ウミナイビの白衣装

表 2-12 按司の衣装寸法

	着 物
身 丈	151.0 cm
肩 幅	23.5 cm
袖 口	49.0 cm
袖 幅	42.0 cm
衿 下	64.0 cm
衿 幅	6.0 cm
前 幅	26.3 cm
色	緑
素 材	金 綿



写真 2-83 按司の衣装

表 2-13 按司の羽織寸法

	羽 織
袖 幅	34.0 cm
袖 丈	52.0 cm
前 幅	29.0 cm
袖 縁	16.0 cm
前幅縁	8.0 cm
前 紐	31.0 cm
肩明幅	4.0 cm
色	黄土色
素 材	サテン



写真 2-84 按司の羽織

表2-14 供の衣装寸法

	着物
身丈	141.0 cm
肩明き	20.0 cm
肩幅	26.0 cm
袖幅	34.0 cm
袖口	45.0 cm
だき幅	27.0 cm
衿巾	6.0 cm
衿下がり	63.0 cm
合幅	15.3 cm
色	青
素材	絹



写真2-85 供の衣装

(2) クシンダカリ

① 旗頭の衣装

クシンダカリ（後村渠）の衣装は、青のズボン、青の地下足袋である。衣装の注文はメンダカリ、クシンダカリ一緒に行った。メンダカリも同様のものである。右袖には「北谷三ヶ村大綱引」と記されていて、前止めはムムヌチハンターで、白の縁取りがされている。頭のマンサージはメンダカリが紫で、クシンダカリは黄で一つ結びである。

腰には旗頭を持つために白のサラシやタオルを巻いている。やはり持つものが旗頭だけに持ち手には力強さと風格がある（写真2-86）。

1974(昭和49)年のクシンダカリの場合、白ズボンに白シャツ、頭は黄色のマンサージを巻いていた。さらに黄色の襷がけをして、腰にも長巾を巻き、ふくらはぎには白黒縦縞のキハン（脚絆）に黒足袋を履いていた。1986(昭和61)年は白シャツの上から青地に「祭」と書かれた法被をはおり、白ズボンとふくらはぎには白黒キハンを巻いていた。



写真2-86

右クシンダカリ、左メンダカリ

② 鉦鼓隊

イ. ブラチリ・チンク (字北谷クシダカリ・伝道)

1986年の綱引きの場合は中学生・高校生が中心だったようだが、今回は小学生を中心に構成されている。胸元の部分には「北谷三ヶ村大綱引き」と記され、袖口と裾の部分に文様が施され、背中部分には綱の絵に「祭」と描かれた法被をはおる。違いといえばメンダカリとクシダカリのマンサージの色が違い、メンダカリは頭に紫のマンサージを巻き、腰には紫の長巾を蝶結びにする。

クシダカリは黄色のマンサージを頭に巻き、腰には黄色の長巾を結ぶ。手には鈴がついたボラを持っている。太鼓と鉦鼓に合わせて「サーサーサーッサー〜」と元気な子どもたちのかけ声のリズムでボラを振り回している。今回、ブラチリの衣装は白ズボンと白靴は一括購入し、支給されたものを履いている(写真2-87)。チンクの衣装は白靴に白ズボンとその上から白黒キハンをつけている(写真2-88)。



写真2-87
ブラチリ



写真2-88
チンク

1974年は白シャツに白長ズボン、ふくらはぎには白黒キハンを巻いていた。「北谷三ヶ村大綱引き」と記されたサージを白帽子に巻いていた。1986年の時の衣装は白シャツの上から法被をはおり、黄色のマンサージを巻いていた。チンクは4人でブラチリと同じ衣装で白いシャツに法被をはおり黄色のマンサージを巻いていた(写真2-89・90)。



写真2-89 1986年のブラチリ



写真2-90 1986年のチンク

ロ. 縮太鼓

ブラチリと同じ青の法被をつけて頭には黄色のマンサージ。腰には黄色の長巾を巻いている。白長ズボンとその上から白黒縦縞のキハンをつけて白の靴を履いている（写真2-91）。手には太鼓を打つ棒と縮太鼓を持ち力強く打つ。1974年の衣装は頭にはサージを巻き、白のワイシャツに白のズボンで、ふくらはぎには白黒キハンで陣羽織（写真2-92）をつけていた。1986年になると頭にはマンサージを巻き、白シャツ、白長ズボンに法被をはおり、襷掛けをしていた。ふくらはぎには白黒キハンを巻き、白い靴であった。



写真2-91 1998年



写真2-92 1974年（金良宗吉氏撮影）

③ 字北谷クシンダカリの女踊り

イ. 稲シリ節

踊るメンバーは7人である。そのうちの2人は水色の横縞にトウイグワの着物をつけて手には杵とミージョーキーをそれぞれ持っていて、白足袋に赤い鼻緒の草履を履いている（写真2-93）。本来、稲シリ節は百姓の踊りなので足袋を履いてはいけなかったのだが、長時間踊り続けると指がすれて痛くなるということで、個人的に履いていたそうだ（仲村渠敏子さん談）。その他の2人は黄色の横縞にトウイグワの文様の着物をつけて裸足に赤い鼻緒の草履である。残りの3人はこっけい踊りである。ベージュの横縞であるアヤヌナーカにトウイグワの文様の着物と腰にはワラの帯をしている。一人は瓢箪を持ち、ねじり鉢巻きをしていて、赤い鼻緒の草履である。他の2人は鉢巻きをしてクバ笠をかぶって踊



写真2-93 稲シリ節



写真2-94 1986年の稲シリ節（仲米政雄氏撮影）

るが、それぞれ持っている物が違う。1人は瓢箪を持ち、1人はクバオージを手を持っている。1986年に行われた時の衣装は全員同じ芭蕉の着物をつけて、黄色のマンサージを女結びにして笠をかぶり、足袋は履かずに黒い鼻緒の草履を履いた。手に持っている道具は杵、瓢箪、ミージョーキーであった。(写真2-94)

ロ. 上り口説

ライトブルーの紋付きの着流しに、あずまからげ(つぼみ)にして、帯は黄金色のおしこみで締め、頭には白請け鉢巻きをしている。二才踊りの着付けの仕方、両側の裾を上につまみあげて帯にはさむことを「あざま」とするという(『琉球舞踊』、1985:



写真2-95・96 上り口説

1)。足は白黒縦縞のキハンをつけて、白足袋に赤い鼻緒の草履を履いている(写真2-95・96)。両手には末広の扇子を持って踊る勇壮な姿の二才踊りである。

1974年は黒衣装であった。1986年は臙脂の帯をおしこみで、頭は前結びで巻いていた。ふくらはぎには白黒キハンに、白足袋に黒い鼻緒の草履で手には末広の扇子を持っていた。

ハ. 揚口説

3人で踊る。緑の半襟に山吹色の着物、黄金の帯には赤や緑の花文様が施されている。帯は貝の口で結び、足には白のステテコ、白足袋に赤い鼻緒の草履で、手には陣笠で金色の縁に紋付きである。紅白のねじり紐を肩から下げて花籠をもって踊る場面もあり、その間は陣笠を被っている(写真2-97・98)。



写真2-97・98 揚口説

踊りを終わると道具を保安要員が運び移動していく形を取っている。1986年の衣装は薄紫の着物で、扇の柄の帯をして白足袋に草履を履いていた。

1986年の場合は、花籠は手作りであったが、今回の1998年の綱引きの場合には花籠を具志川市の衣装を入手したところで一緒に購入した。なぜ1974年の際には揚口説がなかったかという問いに対して、本来は「高平良万歳」と演目は決まっていたが、覚えられなかったので1人で踊った。そのために1986年からは揚口説にかえた(仲村渠敏子さん談)。

二. 下り口説

黒衣装に臙脂の帯をおしこみで締め、ふくらはぎには白黒縦縞のキハンと白足袋に赤い鼻緒の草履を履いている。白請け鉢巻きをし、実行委員会の紙笠を被る。「下り」とは薩摩から琉球への帰路をいい、長期のつとめを果たした首里王府の役人達が船で帰る途中の光景や、旅立つ際の別れ際の光景を二才踊りとしたもので、手にはチーグシを持つ。安良波公園の海岸沿いで踊る光景は力強さを感じさせる(写真2-99)。1986年は黒の紋付き衣装に臙脂の帯を締め、白鉢巻きを前結びにして、ふくらはぎには白黒キハンに黒い鼻緒の草履を履いた。

ホ. クワーディーサー

メンダカリ、クシンダカリとも4人ずつで構成される。クワディーサーは希望者が多いことから未婚者に限定されている。着物は黄色の紅型で、中からは赤胴衣を着け、赤足袋に赤い鼻緒の草履である(写真2-100・101)。鉢巻きはメンダカリ、クシンダカリと色に違いがあるが、クワーディーサーだけは、両方とも紫色の長巾を結んでいる。

1974年、1986年も同様の衣装であったが、台風によって笠も壊れ、紅型の着物も雨に濡れて縮んでしまった。他の踊りの衣装より予算がかかったので、自己負担もあった。



写真2-99 下り口説



写真2-100 クワーディーサー



写真2-101

へ. 前又浜

黒地の着物に臙脂の帯をおしこみにして、帯下には黄色の帯をする。白黒キハンと白足袋に赤い鼻緒の草履を履いている。頭は白請け鉢巻きをして実行委員会の紙笠を被る。道具は持たずに手踊りである（写真2-102）。1986年は黒衣装の着物を着けていた。



写真2-102 前又浜

ト. 金細工

3人で構成されているが、肩からフーチー式（フーチとカナコ）を持って踊るのは加那兄（カナフィー）で、濃紺の着物に臙脂の帯を貝の口という締めかたをする。白黒縦縞のキハンを巻き、白足袋に赤い鼻緒の草履を履いている。頭には黄色の鉢巻きを一つ結びにして後ろに流し、その上から赤白の花がついた万歳笠（編笠）を被る（写真2-103）。アンマー役の着物は紫地に白の花文様で少し黄色の文様が入った着物をウシンチーにしている。頭の鉢巻きは一つ結びにして後ろに流す（写真2-104）。



写真2-103 加那兄(カナフィー)



写真2-104 アンマー



写真2-105 真牛(モーシー)

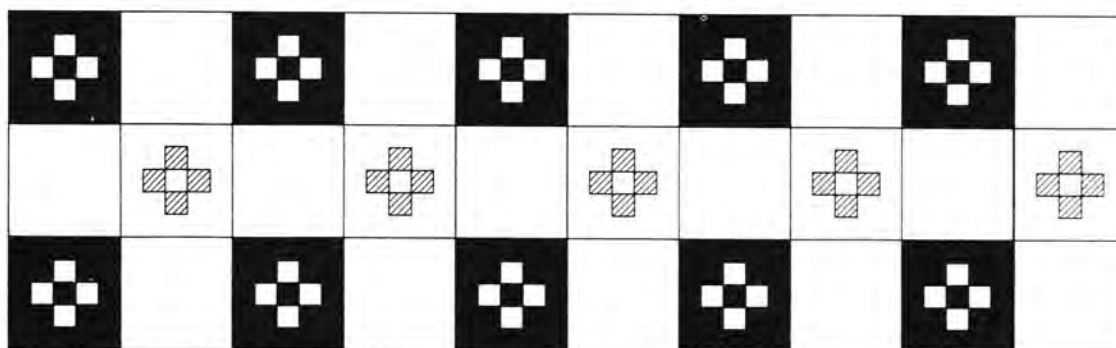


図2-36 真牛（モーシー）の衣装模様

遊女役の真牛（モーシー）の衣装は、無地の部分が灰色で交互に紫地にピンク色の花模様と、黒地に黄色の花模様のシチガーラ（格子）で、アンマーより華やかさがある着物をつけている。長巾は黄色で蝶結びである。マンサージを前結びにして大会用の笠を被る（写真2-105）。

1986年の衣装は黒衣装で、頭のマンサージは後ろに結び、臙脂の帯に赤紐の万歳笠を被った。紫地に白の花文様で少し黄色の文様が入った着物を着ていた。写真資料からの確認だったので、もう一人踊り手がいるが確認できなかった。フーチ一式は1986年までは舞踊研究所から借用していたが、今回の1998年の際には字で一式購入した。（仲村渠敏子さん談）。

チ. 黒島口説

黒地に黄色の縦縞が入り、白の横縞文様とトゥイグラーの文様が入っている。雰囲気は庶民の娘風でミンサー織（本物）の帯に、頭には花染み手巾を前結びにして、クバ笠を被る。素足に赤の鼻緒の草履を履いている（写真2-106）。

戦前もバサーで1974年の時、1986年も本バサーだった。



写真2-106 黒島口説

リ. 貫花

黒地に白の文様が入った衣装で、首里ではムルドウッチリーというが、北谷ではクジラゴーシ（崩れ格子）といていた。図柄は縦横縞のカキジャーやトーニなどである。右肩袖抜きで、中からは赤の襦袢を着ている。頭には黄色のマンサージを前結びにし、腰には黄色の帯を女結びにしている。肩からは紅白の花を貫き、両端に紅白のふさがついたものをかけ、帯には四つ竹を挟み、白足袋に赤い鼻緒の草履である（写真2-107・108）。

1986年の衣装も今回と同じようにクジリゴーシを着けていた。



写真2-107・108 貫花

ヌ. 祝い節

今回は紫地の着物に黄色と白の十字（ハサミピーマーともいう）文様が入っている。帯を女結びにして大会用の笠を被る。両手には着物にあわせて紫色に白がかり花文様があしらわれた扇子を持って踊る。白足袋に赤い鼻緒の草履を履いている。（写真2-109）。



写真2-109 1998年の衣装



写真2-110 1986年の衣装（富山憲一撮影）

写真資料から1986年にも「祝い節」が演じられており、薄紫の地に黄色や紫色の文様が入っている着物であった。白足袋に草履を履いており、頭には笠を被っていた。手にはデイゴの花を持って踊った（写真2-110）。1974年の場合は手踊りであったが、1986年には字北谷は手踊りだけでは寂しいのでデイゴの花を持って踊った（仲村渠敏子さん談）。

ル. 加那ヨー

すこし明るめのピンクがかかった紫地に、図柄は縦縞縞のカキジャーと白の縞模様で黄色と緑色の文様の入った着物である。頭にはマンサージを前結びにして、さらに紙笠を被る。腰には長巾を女結びで結ぶ。右肩からは赤染めのテーサージをかけて踊る（写真2-111）。1986年の衣装は紫地に白抜き文様の入っている。



写真2-111 加那ヨー

ヲ. チヂン

チヂンは60歳以上の方々が持っている。着物はメンダカリ、クシンダリとも共同購入している。芭蕉（プリント地）の着物に緑と茶のアヤヌナーカの文様で、カキジャーやトウイグワーなどの文様が入った着物に帯をしている。頭には大会用の紙笠を被っている。白足袋に赤い鼻緒の草履を履いている。1986年は黒衣装のジongoピーマーの衣装であった（写真2-112）。



写真2-112 1986年のチヂン
（富山憲一撮影）

④ 伝道の場合

イ. 貫花

青地に黄色や赤のクジリゴーチ（崩れ格子）の文様が入っている。字北谷同様に右肩は袖をおろし、中から赤の襦袢を着ている。頭は鉢巻きを一つ結びにしている。腰には同様の長巾を前結びにしている。白足袋に赤い鼻緒の草履を履いている。肩からは紅白の貫花を下げている。四つ竹を手にして「南嶽節」も踊る（写真2-113）。1986年は青地に鳥、亀模様の衣装に右肩袖抜きで赤い襦袢を着ていた。鉢巻きは前結びであった。



写真2-113 伝道の貫花

ロ. 加那ヨー

明るめの紫地に白のティンカキジャーの文様で黄色と緑色の文様の入った衣装である。頭はマンサージを前結びにし、その上から大会用の紙笠を被る。帯は女結びにし、白足袋に赤い鼻緒の草履である。右肩には赤のティーサージをかけて踊る（写真2-114）。1986年は紫地の着物に、頭にはマンサージを前結びにし、帯は花織であった。



写真2-114 伝道の加那ヨー

ハ. チヂン

60歳以上の方々が持っている。着物はメンダカリ、クシンダカリとも共同購入している。芭蕉の着物に縦縞縞にカキジャーやトウイグワーなどの文様が入った着物に帯をしている。頭には大会関係者用の紙笠を被っている。白足袋に赤い鼻緒の草履を履いている。チヂンには左御紋（三つ巴）が描かれている。

⑤ その他の大会関係者

北谷大綱引きの青い法被に、白いズボン、白い靴で統一。頭にはクシンダカリの黄色のマンサージをしめている。その上からサンエー北谷ハンピータウンからの紙笠を被る（写真2-115・116）。前回の1986年も、サンエー北谷ハンピータウンと、那覇にある儀間本店から紙笠を提供してもらった。



写真2-115・116 関係者の衣装

⑥ 地 謡

メンダカリ、クシダカリの衣装は全部統一とまではいかなかったが、黒地の着物あるいは紺地の着物に金糸の帯で統一され、黒い鼻緒の草履である。頭には造花のついたクバ笠を被り、肩から紐をかけて三味線を下げて弾く（写真2-117）。

伝道のチヂンの地謡の中には女性と少年がいた。女性は青地に文様の入った着物で、黒帯を締めていた。そして少年は緑の着物に帯は花織であった。

1974年の衣装は一緒に購入した。柄は全部同じ物を集めるのには限界があったので、だいたい何種類かの柄の浴衣を集めて衣装とした（仲村渠敏子さん談）。

笠には花がついていた。1986年には紫地の着物に、帯は金糸の帯を締めた。白足袋に黒い鼻緒の草履を履いた。



写真2-117 地謡の衣装

⑦ 北谷メンダカリ・ガーラの衣装

衣装は字北谷のノロ殿内に保管されている。ガーラに選ばれた4人の着付けもここで行う。頭には兜^{かぶと}をかぶる。

雄綱：按司と供(1998年)

衣装は字北谷のノロ殿内に保管されていて、男性2人の按司である。按司役は仲村時博君が選ばれ、頭には金色地に金糸文様が施されている頭巾を被り兜状のものをつける。兜には太陽の形をしたものがついている。着物は黄緑色に金糸文様で、金色の帯を締める。本来はウフウビだが普通に結んだ。上からはおっているのも茶色地に頭から被っていた布地に縁取りしたチャンチャンコのようなものをつける。中からは白ズボン、ふくらはぎにキハンで



写真2-118

白足袋を履いて黒鼻緒の草履である。手には大扇を持ち、腰には刀をさして、立派な出で立ちである。供は島袋善俊君が選ばれ、青地に金糸で文様が施された頭巾を被り、冠には月の形（写真2-118）が施されている。着物は青地で金色の帯をしめ、腰には刀をさしている（写真2-119）。ズボンにキハンを巻き、白足袋に黒い鼻緒の草履を履く。

衣装に関する事では、現在の青年たちは背丈が昔より大きくなったので、今回は採寸して仕立て直しをしようとしたが、綱引き当日以外は袖を通してはいけないということで採寸することができなかった。それで中からつける肌襦袢とかさね衿は取替え、ステテコと足袋は購入した。着物はゆき幅

がとれないぐらいのぎりぎりの大きさであったので、次回新調するためにも採寸しておき、北谷ノロ殿内と相談して衣装を新調するということを考えていると担当の仲村渠敏子さんが話していた（P86.87：按司と供の衣装サイズ参照）。

1974年の場合、衣装は黒衣装にラメが入っていた。写真資料からは覆面をしていることが確認できた。1986年に最初登場する時に覆面をしていた。戦前に関しても1938（昭和13）年の支度は黒地の衣装に覆面をしていたという（仲村信正さん・仲村渠敏子さん談）。今回1998年の衣装は1986年の衣装と同じであったが、覆面はしていなかった。

⑧ その他

1974年の綱引きのプログラムが「北谷三ヶ村の大綱引」（崎原恒新、1978：86）に収録されているが、それによると上述した演目以外に、クシンダカリでは嶺舞踊研究所が行った「獅子舞」や、字北谷が行った「村興し」「めでたい節」「サーサ節」などがある。この「村興し」は、字北谷の人だけではなく、他字にもお願いして参加してもらった（仲村渠敏子さん談）。1998年の綱引きの時には字北谷の場合メンダカリは踊ったが、クシンダカリは踊らなかった。さらに字伝道においても「サーサ舞い」「めでたい節」が演じられたようである。

そのほかに1974年、1986年と「なぎなた」を嶺舞踊研究所が演じた。



写真2-119

参考文献・資料

東恩納寛惇、『東恩納寛惇全集5』、第一書房、1978。

崎原恒新、「北谷三ヶ村の大綱引」、『まつり31号特集宗教民俗』、1978。

沖縄伝統芸能の会編、『琉球舞踊－鑑賞の手引き－』、沖縄県商工労働部観光文化局文化振興課、1985。

辻合喜代太郎、『琉球芭蕉布』、はくおう社 1973。

田中俊雄・玲子、『沖縄織物の研究』、紫紅社 1983。

平敷令治・恵原義盛、『沖縄・奄美の衣と食』、明玄書房 1974。

宜保栄治郎『琉球舞踊入門』、那覇出版 1979。

辻合喜代太郎・橋本千栄子、『琉球服装の研究』、関西衣生活研究会、1991。

4. 綱の引き方

(1) シタクのガーラシ

① 構成員と役柄

イ. シタクとその役柄

ミチジュネーから旗頭のガーエーと続き、シタクのガーラシが始まる。北谷ウーナのガーラシには、クシダカリ（後村渠）からは按司とその供、メンダカリ（前村渠）からはウミナイビ（王女または姉妹）とその供に扮した4人のシタク（支度）が登場する。

シタクの役柄は一般的に歴史上の人物といわれており、各地でその配役はさまざまであるが、北谷ウーナではなぜ按司とウミナイビなのだろうか。聞き取り調査においては、綱の雌雄を男女に見立てて子孫繁栄を祈願するのと同様、シタクの役柄にも男女を象徴させているというのが大方の回答であるが、字北谷の津嘉山フジさんは、シタクは綱の神であり、ウミキ（男性神役）ウミナイ（女性神役）を意味しているという。確かに按司は雄綱側から、ウミナイビは雌綱側から登場し、両者とも男女が雌雄と関連している。一方、字北谷の伊礼孫一さんからは具体的な由来を聞くことができた。伊礼さんは、1938（昭和13）年のシタクをつとめた方で、当時、字北谷では有名なムヌシリ（物知り）であった（故）山川直普さんから聞いた話だという。「むかし、宜野湾按司の家来であった悪謝名と呼ばれる謝名親方が、伊佐浜で月見の宴を催したいといい、伊佐村の村頭に酌をする若い娘を連れてくるように申しつけた。村頭は、19歳と17歳になる自分の娘二人を連れて行き、酌をさせた。謝名親方は、二人の娘を大変気に入って連れて帰ると言い出し、村頭がそれを拒むと即座に村頭の首を切った。目の前で父親を殺された姉妹は仇討ちを決意し、今帰仁城で武芸の修行を積み、3年後見事に仇を討った。」という姉妹の仇討ちが北谷ウーナのガーラシの由来であるというものだが、なぜ宜野湾間切の話が北谷のウーナに結びつくのかはわからない。これは「姉妹敵討」という組踊の内容にもなっている。

配役については、その役に最もふさわしい20歳前後の青年が選出された。役員たちによって選考され、断ることは出来なかったという。シタクには、すべて男性が扮することになっているが、戦前はどんな行事にも女性が大舞台に上がることなどあり得なかったものでそれは当然のことだったという。また、当日までその配役は関係者以外に知らされることはなかった。

選考基準として戦前は、家柄が良く、頭脳明晰で容姿・体格の優れた者といわれ、家族にとっても大変名誉な役だったという。特に顔立ちが重要視されたので、本人にとっても自慢であったらしい。しかし一方では、「シタクの役をした人は早死する」とか「シタクは綱の神なので、神になるということは死ぬこと」などという噂もあり、恐れられたこともあったというが、実際にそういうことはまったくなかったという。



写真提供
伊禮康雄氏

写真2-120 1974(昭和49)年の按司とウミナイビ



写真2-121 1986(昭和61)年の按司
(本町企画課提供)



写真2-122 1986(昭和61)年のウミナイビ
(本町企画課提供)



写真2-123 1998(平成10)年の按司



写真2-124 1998(平成10)年のウミナイビ

ロ. 構成員と専門部会

戦前は、各字にスーガシラ（現在の区長にあたる人）をはじめとする役員が組織されており、字の行事や諸活動はその役員らを中心に運営されていた。大綱引き（ウーンナ）に関する取り決めや諸準備活動も、その役員らを中心におこなわれていた。

戦後は、三カ字の代表者で構成される大綱引き実行委員会を結成し、そのなかで役割分担をして各専門部会を設置した。専門部会は、三カ字合同で組織されるものと各字ごとに組織されるものがある。ガーラシは戦前から字北谷だけの出し物であるので、字北谷が単独で専門部会を組織し、ガーラシに関する諸準備や配役の選考、当日のシタクの世話などを取り仕切った。配役は、雄綱側のシタクには字北谷のクシダカリから、雌綱側のシタクには字北谷のメンダカリから選出される。これは、綱引きの組分けを雄綱はクシダカリ、雌綱はメンダカリとして分かれているため（第5節参照）、専門部会での係の配置に関しても同様である。1914（大正3）年の大綱引きから歴代のシタクと役員を聴取してきた範囲で列記する。

註：①名前 ②生年（M：明治／T：大正／S：昭和）・干支・当時の年齢 ③屋号

[1914（大正3）年]

メンダカリ：①（故）伊 禮 正 幸	②M18・酉・29歳	③イリー
①（故）照 屋 正 安	②M18・酉・29歳	③メーティーラ
クシダカリ：①（故）當 山 苗 直	②M33・子・14歳	③不明
不明		

[1926（大正15）年]

メンダカリ：①（故）末 吉 亀次郎	②M41・申・18歳	③カンバーシーシグラー
①（故）山 村 温 真	②M41・申・18歳	③ヤマムラグラー
クシダカリ：① 山 川 直 徳	②M44・亥・15歳	③クシマスドゥイグラー
①（故）伝 道 行 正	②M44・亥・15歳	③ナカジョウ

[1938（昭和13）年]

メンダカリ：①（故）金 城 至 英	②T10・酉・17歳	③イリカネグスクグラー
①（故）宮 城 謹 一	②T8・未・19歳	③アメク
クシダカリ：① 伊 禮 孫 一	②T11・戌・16歳	③ナカイリー
①（故）新 垣 盛 徳	②T8・未・19歳	③クシタケーシ

[1974（昭和49）年]

メンダカリ：① 伊 禮 康 雄	②S24・丑・25歳	③アガリモー
① 新 垣 恒 夫	②S25・寅・24歳	③ピシタケーシグラー
クシダカリ：① 津嘉山 哲 也	②S29・午・20歳	③クシミーラムイ
① 新 城 善 美	②S30・未・19歳	③イーバルディンドー

[1986(昭和61)年]

メンダカリ：①宮 城 健 二 ②S44・酉・17歳 ③アメク
 ①照 屋 重 光 ②S42・未・19歳 ③カニクティーラグラー
クシндаカリ：①照 屋 淳 ②S45・戌・16歳 ③イリティーラグラー
 ①當 山 和 彦 ②S44・酉・17歳 ③イリベーチングラー

[1998(平成10)年]

メンダカリ：①仲 村 哲 治 ②S54・未・19歳 ③ナカンドカリ
 ①安 里 和 記 ②S56・酉・17歳 ③シーサーニー
クシндаカリ：①仲 村 時 博 ②S55・申・18歳 ③ジオーイージグラー
 ①島 袋 善 俊 ②S52・巳・21歳 ③クラーシャー

ガーラシ専門部：金城 至 佑・津嘉山 操・津嘉山 信 行

” 衣装係：仲村渠 敏 子

” 誘導係：伝 道 有 信 (クシндаカリ)・仲 村 駿 一 (メンダカリ)

1974(昭和49)年にシタクをつとめた津嘉山哲也さんによると、当時シタクに選ばれて躊躇ちゅうちよしていると、あるお年寄りから「うまんちゅ(万人)」の「うま」にかけて午年の津嘉山さんが選ばれたのだから、絶対に断ってはいけないといわれたという。しかし、上記の歴代のシタクを見てみると、特に午年生まれに限られていることはない。その他の共通点も見当たらないので、年齢や干支に関する特別な選考条件はなかったと思われる。

② 衣装とその管理

イ. シタクの衣装

戦前は、シタクや踊りの衣装などはすべて個人で持ち寄っていたという。大綱引き(ウーナ)のためならといって着物を買うところもあったが、ほとんどの家は金銭的ゆとりがなかったので、砂辺や下勢頭など、ムラアシビの盛んな地域や親戚などから借りていたようである。大綱引きの準備費用をはじめ、シタクや踊りの衣装などを字費で賄うようになったのは、やはり戦後の軍用地料の影響である。

戦前と1974(昭和49)年の衣装について、「七四年のときは間にあわせて沖縄の土族の黒衣の着物をつけたが本来はヨロイ、カブトにハカマをつける。組踊の按司の衣装を使って以前はそれを他村から借りてやったものであるという。ソージの上ののる二人の内一人は按司で刀と軍配、お供は組踊のお供の衣装で刀をさす。メーバー(メンダカリ)はミージナなので女装した男二人、内一人はウミナイビであと一人はお供である。今回のツナでは白衣、二人とも白鉢巻それにナギナタを立ててもっていた。」(崎原、1978: 82)とある。

戦後の記録(写真2-120~124)を見ると、1974(昭和49)年と1986(昭和61)年・

1998（平成10）年の衣装とは異なっていることがわかる。1974（昭和49）年は、按司もウミナイビも衣装で供との区別をしているが、1986（昭和61）年・1998（平成10）年のウミナイビの衣装は両者まったく同じで供との区別がない。今回は、1986（昭和61）年の大綱引きにノロ殿内に保管した衣装を着用した。衣装に関しての詳細は、「第3節 衣装」を参考にしていきたい。

ロ. 管理状態

現在、シタクの衣装や小道具はすべて北谷ノロ殿内に保管されており、大綱引き（ウーナ）以外に使用することはない。ノロ殿内ではこれを神聖なものとして扱い、持ち出すことも禁じている。北谷ノロ殿内の末吉文さんによると、本来ノロ殿内は拝みごとに関わる家で、年中行事などに関してはムラヤー（村屋）が拠点であった。しかし第二次大戦でムラヤーが完全に消滅してしまったので、戦後はノロ殿内で管理しているという。

1974（昭和49）年の大綱引き復活に際しては、今回の衣装係をつとめた字北谷の仲村渠敏子さんが当時の衣装も担当し、シタクの衣装や小道具などをすべて揃えた。当時、仲村渠さんと諸活動を共にしていた字北前の稲嶺ヨシさんに協力を依頼したという。1986（昭和61）年にも仲村渠さんが中心となって、シタクの衣装は再度新調された。仲村渠さんによると、シタクの衣装を新調するときには「ウガンサギ」といって、ノロ殿内でその報告の拝みをしてから新旧の交代をするという。また、ウガンサギされた古い衣装は、ノロ殿内でしか後利用できないのだという。今回は、保管状態の良かった前回の衣装を使用することになり、仲村渠さんはサイズの確認のため本番2日前にノロ殿内家人にその申し入れをした。しかし、たとえ今回の配役でも大綱引き以外に袖をとおしてはいけないということであったので採寸することは出来ず、確認だけして陰干しをしたという。その際にもノロ殿内家人による拝みをおこなってから、衣装が取り出された。ウミナイビの白装束が短めであったのと、中襟に黄ばみがあったので、この二つだけは今回新調された。それぞれの肌着や足袋は個人用として用意し、保管はしない。

当日、出番の終わったシタクはその足でノロ殿内に戻り、無事に役を果たしたことを報告して着替えた。終了後の衣装は、係の責任のもとクリーニングに出され、また12年間ノロ殿内に保管される。

ハ. 化粧・着付け

北谷ノロ殿内の末吉文さんによると、当日、シタクはノロ殿内で準備を整えて出発する習わしになっているというが、これも本来ならムラヤーで準備をして出発させるべきであるという。実際に戦前は、シタクの準備はムラヤーでおこなわれ、ムラアシビなどで手慣れた人たちが着付けなどをしてあげたという（仲村渠敏子さん談）。1974（昭和49）年の大綱引き復活から、着付け等は嶺舞踊研究所の稲嶺盛秀さん、稲嶺末子さんに依頼している。今回は、北谷町保健相談センターで化粧をしてからノロ殿内に移動した。主に下地化粧は盛秀さんがおこない、眉や目、口紅など、仕上げの化粧は末子さんがおこなった。

男役と女役との化粧の仕方は、特に唇の形に変化があり（写真2-125・126）、女役は上唇だけに山があるが、男役の場合、上唇の山が下唇と対称になっているという（末子さんの談）。

シタクには、朝から誘導係が付き添い、移動の手配や、時間の確認などの世話をした。化粧を終えたシタクらがノロ殿内に到着すると、ノロ殿内家人による拌みがあった。火の神とすべての香炉に15本ずつ線香をたてて、シタクが到着したこと、衣装を取り出して準備に取り掛かること、そして大綱引きの成功を祈願した。8月9日におこなわれた字北谷のメーウガミ（綱引き前におこなわれる安全祈願）では、按司の冠が取り出されて神棚に供えられた（写真2-127）。拌みが終わると、ノロ殿内家人によって神棚の下から衣装が取り出され、着付けを開始した。準備が整うと、誘導係と供に会場入りし、それぞれの控室で出番を待った。今回のウーナナでのシタクの一日は次のとおりである。

- 10：05 ウミナイビの化粧開始
- 10：25 按司の下地化粧開始
- 10：50 按司の下地完了
- 10：56 按司の供の下地化粧開始
- 11：02 ウミナイビ完了
- 11：20 按司の供の下地完了
- 11：23 按司完了
- 11：27 ウミナイビの供の下地化粧開始
- 11：36 按司の供完了
- 11：40 按司役とその供役ら保健センター出発
- 11：45 按司役と供役がノロ殿内へ到着



写真2-125 男役（按司）の化粧



写真2-126 女役（ウミナイビ）の化粧



写真2-127 字北谷メーウガミ（北谷ノロ殿内）

- 12:00 ウミナイビの供完了
ウミナイビ役ら保健センター出発
- 12:11 ウミナイビ役らノロ殿内へ到着
- 12:25 ノロ殿内にてガーラシの拝み
- 12:28 稲嶺盛秀さん・末子さん・仲村渠敏子さんらノロ殿内到着
- 12:30 足袋・下着（襦袢・ステテコ）着替え
- 12:33 ノロ殿内保管の衣装を取り出し、按司役ら着付け開始
- 12:45 ウミナイビ役ら着付け開始
- 12:50 按司役ら着付け終了
- 13:00 ウミナイビ役ら着付け終了
- 13:15 シタクら4人揃ってノロ殿内出発、会場入り（それぞれの控えテントへ）

③ ガーラシ

イ. シタクの登場

今回はミチジュネーの途中、突然の雨で中断した。しばらくして、旗頭のガーエーで再開すると、シタクはそれぞれ綱の最後尾で待機した。順序として、旗頭のガーエー、ガーラシ、綱寄せと続いた。1974（昭和49）年・1986（昭和61）年の両年は、綱を寄せてカニチをあわせてからシタクが登場しているが、今回はシタクが退場してから綱を寄せた。

戦前のシタクの登場の仕方については、聞き取り調査において二通りの回答がある。1926（大正15）年の大綱引き（ウーンナ）を記憶しているという字北谷の津嘉山篤信さんや1938（昭和13）年の大綱引きを記憶しているという當山苗盛さんによると、竹で編んだチニブ（チヌブともいう）というものにシタクを乗せて、青年4人で担いで登場させたという。しかし、字北谷の柴田安貞さんによるとシタクは綱の上に乗って登場したといい、カニチの部分にシタクを乗せ、男も女も総出で綱を担いでカニチグチまで寄せていく様相は実に見事であったという。

戦後復活の際の記録を見ると、「ツナをひく前にガーラシがある。〈ガーラシ〉というのは竹で編んだ〈ソージ〉（チニブと同じとみてよい）に横棒二本とおして青年四人でかつぐ。これがそれぞれのツナに一組ずつあり、この上にシタクがのる。」（崎原、1978：82）とある。1974（昭和49）年のガーラシについては、北玉小学校からのミチジュネーもあり、便利さに配慮したのか、飾り付けたトラックの荷台にシタクを乗せている。1986（昭和61）年もほぼ同様に、軽トラックの荷台にシタクを乗せた。今回は戦前の様相に戻そうという意見を取り入れ、シタクを乗せる板の台を製作し、担ぎ手をつけることにした。製作については、ガーラシ専門部会の金城至佑さんが設計し、北前在住の元大工當真嗣松さんに製作依頼した。担ぎ手については、全体的な参加者の減少で人員をまかなうことが困難であったので、北谷町商工会青年部に協力依頼し、16人の担ぎ手をそれぞれ

れ8人ずつ配置した。

1974（昭和49）年・1986（昭和61）年には、シタクはミチジュネーに並列していることが記録されており、1938（昭和13）年にシタクをした伊礼孫一さんによると、ミチジュネーで相手とすれ違うときは、シタクはにらみ合うように教えられたという。また、1974（昭和49）年にウミナイビ役をした伊禮康雄さんによると、シタクは前だけを向いて絶対によそ見をしたり動いたりしてはいけないと教えられたという。

ミチジュネーでの順序は、1974（昭和49）年は、旗頭→シタク→ブラチリ→チンク→踊りという順で、1986（昭和61）年には、旗頭→ブラチリ太鼓→シタク→踊りの順で並列している。今回シタクは、ミチジュネーには並列していない。

ロ. 示威行為

ガーラシは、これから戦うということ表現するため、綱を引く前にカニチグチまで登場してくるのだという。北谷のガーラシは特別に示威を表現する行為はない。1974（昭和49）年・1986（昭和61）年のガーラシの役員をした字北谷の仲村新正さんによると、綱を引く前にカニチグチで顔を合わせるのには戦いを意味するためであるという。旗頭のガーエーの後、両シタクはいったんカニチグチまで登場し、顔をあわせてから、綱の半分までの所まで後退する。そこで、按司と供は冠をはずして覆面のようなもので顔を隠し、ウミナイビは白衣装に白鉢巻を巻いて武装し、再度前進してくるのだという（写真2-128・129）。本来ウミナイビはドウジンにカカン姿であったという。また、シタクは退場する際、決して後ろを振り向かず、役目が終わると綱引きには参加せず、そのまま会場から姿を消すのだという。1986（昭和61）年にはシタクが向かい合っている間に、綱を引く合図の旗が振り下ろされ、一斉に綱を引き始めると、シタクは静かに退場していった。

今回のガーラシは、按司とその供は左の腰に刀をさしており、按司は右手で軍配を前にかざしている。ウミナイビらは、左手でなぎなたを立てている。この形態は、前回と比較



写真2-128 1989年按司の覆面姿(本町企画課提供)



写真2-129 1989年ウミナイビの白装束
(本町企画課提供)

してもほとんど差異はないが、今回はウミナイビらのなぎなたを持つ手が逆であった。本来、戦いには武器は右手で持ち、いつでも攻撃できる態勢でいるものだという。シタクの再登場では、ウミナイビらは打ち掛けを脱ぎ、白鉢巻きに替えて武装しているが、一方の按司とその供は同じ装いのまま再度前進し、両者しばらくにらみ合った後、ゆっくりと退場していった。今回は按司らの覆面姿はなく、戦後は1974（昭和49）年・1986（昭和61）年とも覆面姿の記録写真が残っているが、これを記憶している人はほとんどいない。戦前の覆面姿についても聞くことはできなかった。

（2）綱引きの時刻

① 戦前

戦前から大綱引きは、日中おこなわれる「昼綱」である。字北谷においても字玉代勢においても、毎年の年中行事としておこなわれていた綱引きは夜綱であるのに対し、大綱引きは午前10時頃から準備にとりかかり、午後3時頃から綱を引いた。字北谷では、それぞれの集合場所（第2節 備え・示威行為 参照）で準備を整えると、ミチジュネーの列を連ねて会場の北谷ンマイ（馬場）に向かった。また、翌日の玉代勢でもほぼ同様の日程でおこなわれた。

② 今回の当日の流れ

- 9：00 各字ごとに化粧・着付け
- 13：00 役員会場集合
- 14：00 参加者会場集合・写真撮影
- 14：53 旗頭を所定の位置へ設置
- 15：00 開会式
- 15：14 ミチジュネー開始
- 16：35 雨で一時中断
- 16：55 ガーエーの準備のため旗頭移動
- 17：02 旗頭のガーエー
- 17：11 シタクの登場（ガーラシ）
- 17：22 シタク退場
- 17：28 綱寄せ
- 17：32 カニチ貫き
- 17：37 綱引き一回目開始
- 17：42 終了（引き分け）
- 17：45 綱引き2回目開始

- 17:47 終了（クシダカリの勝ち）
- 17:49 カニチ棒をはずす
- 17:51 カニチ焼きのワラ束が運ばれる
- 18:03 カニチ焼き（点火）
- 18:06 終了宣言

（3）かんぬきの合わせ方

① 綱寄せ

戦前は、綱引き場の北谷ンマイ（馬場）で大綱を作り上げ、前日までは二番ガニチ以降をつないで綱寄せの態勢に用意したという。今回もほとんど差異はなく、大綱引き4日前に完成した大綱は、カバーをかぶせて本番に備えた。綱は、一晩夜露に濡らすぐらいがちょうど良いといい、前日にカバーをはずして枕木を取りはずした。雄綱はカニチの輪が横に向いた状態で立てておき、雌綱はカニチの輪が上に向いた状態で後ろに反らせて、それぞれ六尺棒で支えて（写真2-130・131）綱寄せの態勢を作った。



写真2-130 雄綱



写真2-131 雌綱

綱を寄せてくるときには「ユシレー」というかけ声とともに、戦前はツナガシラと呼ばれる青年がカニチの上に乗し、カネを鳴らして勢いづかせながら皆の呼吸をあわせたという。男女総出で両綱を寄せてくると、雄綱に雌綱をかぶせるようにカニチを合わせた（写真2-134・135）。1986（昭和61）年の記録によると、綱を寄せる際は「ハルエイハーイヤ」と声をかけている。このかけ声に関して、聞き取り調査においては記憶が定かではないという人が多く、その中でも「ハーイヤ」というのが大方である。今回は、シタクのガーラシが終わると綱寄せが始まった。「ユシレーハーイヤ」というマイクの声に続き、綱を一呼吸分ずつ寄せていく。寄せる呼吸にあわせてドラが2回鳴る。両綱それぞれ9回寄せて来たところで、雄綱だけを1回多く寄せて雌綱に近づけた。雄綱は、素手で支えながら寄せていき、雌綱は六尺棒を使って、反らせたカニチの輪を支えながら寄せて、雄綱に雌綱をかぶせるように連結させた。1974（昭和49）年の綱寄

せの記録写真を見ると、雄雌とも素手で綱を担ぎ、しかも雌綱は頭の上まで担ぎ上げており、当時の勇壮さや歴史的な趣を感じさせている（写真2-132・133）。



写真2-132 雄綱(金良宗吉氏撮影)



写真2-133 雌綱(金良宗吉氏撮影)

② カニチ貫き

戦前からカニチ棒を貫くときは、連結させる際にカニチ棒と綱とが大きく跳びはねる恐れがあるので、カニチグチ付近には女性や子どもたちは近づくことはできなかったという。また、綱を引く前で気持ちも高ぶっているのであらゆる危険を伴い、戦前からカニチ棒を貫く役は、力持ちで俊敏、しかも権力のある青年でなければならなかったという。カニチを貫く人を「カニチチジャー」といい、今回のカニチチジャーを以下に列記する。

字北谷：比嘉 正・安里順一・新城次美・新城 清・田場雅秀・津嘉山務

字玉代勢：仲本朝永

字伝道：伊禮 毅



写真2-134 カニチ連結部A



写真2-135 カニチ連結部B

今回は、綱がカニチ貫きの態勢に整うとステージ前に用意されたカニチ棒を肩に担いでカニチグチまで運んで来た。カニチ棒を貫く際のあらゆる危険を想定して、カニチグチ付近では保安係が厳重に警戒し、緊張感に包まれた。カニチ貫きの青年らは、肩に担いできたカニチ棒を一旦腰に抱え直すと、慎重に、そして一気にカニチの連結部に貫いた。綱の反対側には、貫いたカニチ棒を受け取る役目がいて、あらかじめカニチ棒の両端に取り付

けてあった縄を綱との連結部に結び、固定した。この一連の行為は、今回綱作りの指導をいただいた宜野湾市大山の方々に補佐していただいた。

(4) 引く回数

『北谷町史 第三巻』では、毎年の綱引きは2回、大綱引き（ウーンナ）は1回引いたと記述されているが、聞き取り調査においてははっきりしない。両方とも1回ずつ、または両方とも2回ずつ引いたという回答に分かれるのだが、どちらの回答にしても曖昧である。毎年の綱引きと混同してははっきり覚えていないというのが大方の回答である。1回引いたという回答については、大綱引きは「ユーリカター」といって、誰でも自由に参加できたので、見物人の多いクシンダカリがいつも勝っていたという。見物人はカニチグチを越えては参加せず、那覇方面から来る人よりは嘉手納方面から来るの方が多かったため、クシンダカリが優位だったということである。2回引いたという回答については、いつも引き分けだった覚えがあり、2回引いて自然に引き分けにしたという。

戦後は1974（昭和49）年・1986（昭和61）とも、大綱引き定日の6月25日に近い日曜日を利用し、その日1日で終了しているが、綱を引く回数は1回であった。大綱引き復活の際は、戦前の記憶を呼び戻しながら復活させ、1回引くことになったはずである。実際、1974（昭和49）年には戦前の経験者が豊富であり、今よりも記憶が鮮明であったはずなので、大綱引きは1回引くものであったのではないだろうか。

今回は、実行委員会において引く回数を2回に増やしてはどうかという意見が取り上げられた。本来2日間おこなわれた大綱引きも今では1日で終了させているし、また、前回1回きりでは物足りなかったという意見もあり、協議の結果、勝敗に関係なくそのままの位置で2回引くことに決まったのである。

参考文献

- 小野重朗、『十五夜綱引きの研究』、慶友社、1972。
- 北谷町史編集委員会編、『北谷町史 第三巻 民俗 上』、北谷町役場、1992。
- 『北谷町史 第三巻 民俗 下』、北谷町役場、1994。
- 真栄城兼良、『北谷村史』、北谷村役場、1961
- 金城至盛、『字誌北谷』、1986。
- 崎原恒新、「北谷三カ村大綱引き」、『まつり 31』、まつり同好会、1978。
- パンフレット、『北谷三カ村大綱引き』、北谷三カ村大綱引き実行委員会、1986。
- 平敷令治、『沖縄の祭祀と信仰』、第一書房、1990。
- 「沖縄の綱引き(1)」、『沖縄国際大学文学部紀要 社会学科篇』 4-1、沖縄国際大学、1976。
- 「沖縄の綱引き(2)」、『沖縄国際大学文学部紀要 社会学科篇』 6-1・2、沖縄国際大学、1978。
- 古家信平、『火と水の民俗文化誌』、吉川弘文館、1994。
- 沖縄大百科事典刊行事務局、『沖縄大百科事典』、沖縄タイムス社、1983。

5. 組織

はじめに

字北谷・伝道・玉代勢は「北谷三カ」と呼ばれるが、その働きは戦前戦後を通して大綱引き（ウーンナ）だけではなく、「葬式のガン、ヌンドウンチや樹昌院の運営」にも費用をナナクミワイ（7組割り）で負担している「連合組織」である（『北谷町史 民俗 上』1992：63）。ナナクミワイのその割合は、北谷が4、玉代勢が2、伝道が1で、大綱引きにおける旗頭もナナクミワイの通り、北谷から4本、玉代勢から2本、伝道から1本ずつ大綱引きに出す。

北谷三カで行われる大綱引きは、字北谷が運営の中心であるので、今回の大綱引きの「北谷三カ村大綱引き実行委員会」の委員長も旧字北谷郷友会会長がなった。

三カ村合同の組織には、北谷三カ村大綱引き実行委員会と専門部会がある。北谷三カ村大綱引き実行委員会は、委員長1人・副委員長2人・委員・事務局長から組織され、委員長と副委員長は、三カ村それぞれの郷友会会長が担当する。委員も三カ村それぞれから同じ人数出るのがその選出法は、前回の実行委員を経験した人や、戦前の大綱引きを経験した人などが選ばれた。また、年齢も40代から70代くらいと幅広く選出される。さらに専門部会の委員は、三カ村の実行委員会で選ばれ、そこで承認を得て活動が始まる。

（1）戦 前

① 北谷・伝道・玉代勢の三カ村

イ. 老人の役割：50～60代の年輩女性が、チヂンを打った。

ロ. 婦人の役割：字北谷の青年部女性部は、シタクの衣装の準備や着付けを行った。

ハ. 青年の役割：ソーグは字伝道・玉代勢では10代半ば以上の男性が担当した。また
テークチリは、三カ村とも青年男性が受け持った。

ニ. 子供の役割：ボラチリは、字北谷と伝道では、尋常小学校の男女、字玉代勢では、就学前の子供から尋常小学校の児童によって行われた。

（2）戦 後

1998年の大綱引きはおもに次の組織によって運営された。

① 郷友会

イ. 老人会：大綱引き当日、女性はミチジュネーでチヂンを打ち、男性はケガ人が

出ないように参加者ならびに見物人の安全管理や誘導を行った。綱打ちの時には、男性は脱穀機でワラを選別し、長さを調べたり、小束に分けて綱を打つ人に渡していた。男女とも、各字実行委員会の長老評議員として、検討事項に対して意見や審議や承認を行った。

ロ. 婦人会：ミチジュネーの舞踊の練習をし、その衣装を準備し、演舞する。

ハ. 青年会：カニチ貫きのため、メンダカリとクシンダカリの体格のよい青年8人が選ばれた。ソークは、字北谷はメンダカリとクシンダカリの各4人の男性であるが、字玉代勢では中学生男子5人、字伝道は15歳と17歳の男子2人となっている。

ニ. 子供会：ボラチリは、各字毎に多少年齢の規定が異なる。字北谷では小学校低学年の男女、字伝道は小学生男女を中心とし、字玉代勢は小学2～6年生となっている。

ホ. 郷友会の年中行事

戦前は同じムラに住み、いつも顔を合わせていた人々が、戦争でムラを破壊され、戦後は土地を基地に接收され、住む所も同じ北谷町内ではあるが生まれジマではない所であったり、近隣の市町村から生活をスタートせざるを得なかった人々が多数いる。生まれジマで生活していた世代から、他シマで生まれ育った新しい世代が繁栄している。しかし、今でも、毎年の郷友会行事の中で父母・祖父母の世代や、他シマに移動していった人々と交流し、戦前のムラのつながりを確認しあっている。特にニングワチャーの行事は、地域の公民館いっぱいテーブルとイスを出し、みんなでごちそうを開き、舞台の演目を見たり、歓談する様子を見ることができる。

字伝道

ヤマガマウガミ

ニングワチャー

字玉代勢

ニングワチャー

字北谷

旧2月2日 ニングワチャー (クシュクワーシー) ノロ殿内

旧5月4日 ユッカヌヒー 安良波竜宮神・長老山

旧5月15日 5月ウマチー ノロ殿内・北谷城

旧6月25日 綱引きウガミ (豊年祭) ノロ殿内

旧7月16日 盆ウガミ ノロ殿内

② 実行委員会

大綱引きは、「北谷三カ村大綱引き実行委員会」が運営の中枢部となった。「北谷三カ村

大綱引き実行委員会」は事務局のほか、大綱、旗頭、カニチ、衣装・チヂン・舞踊の4つの専門部会に分かれており、各会の委員は三カ字の代表が出て組織された。三カ字の実行委員会のほかに、各字においても実行委員会が組織され、大綱引きにむけて準備や練習が進められていった。各字の委員会はさらに細かく、大綱・旗頭・カニチ・衣装・チヂン・舞踊・地謡・鉦鼓・ブラチリ・締太鼓・ガーラシ・長老評議委員・評議委員・フェーヌシマ（字北谷のみ）などの部会が組織された。

北谷三カ村大綱引き実行委員会

実行委員会は、三カ村合同の組織で、実行委員長（1人）・副委員長（2人）・委員（12人）・事務局長（1人）、合計16人の男性からなる。委員は、北谷・玉代勢・伝道の各字から4人ずつ出た。書記・会計は、実行委員会の役員とは別におくが、そのうち実行委員会の三役は、会の運営のほか、綱引きが行われている他市町村の運営方法や、ワラや綱を確保するための情報を収集する役目でもある。

実行委員会の会議では回を追うごとにワラの注文、綱の発注、旗頭の外注などの準備段階の話し合いや、実際に大綱や旗頭、カニチの製作に入るための意見交換、そのほかにも衣装や鉦鼓の道具などについても2時間近い話し合いが常にもたれた。実行委員会は、カニチ・旗頭・大綱・衣装のそれぞれを調査し、発注・製作を担当する。大綱・旗頭・カニチ・衣装の各専門部会は、演目を練習させたり、まとめたりする係である。

諸経費には、三カ村共通のものと各字負担がある。三カ村共通の経費は、大綱・旗頭・カニチ棒・衣装それぞれの購入に当てられる。各専門部会の代表者は、三役とともに発注・交渉などの責任を負う。

大綱専門部会

今回は、字北谷から8人、玉代勢・伝道からはそれぞれ委員が2人ずつ出て、合計12人で構成された。どこのワラがよいか、大綱に必要なワラの量、値段の交渉、搬入方法などを検討した。今回ワラ発注（購入）係が注文したワラの量は、15tであった。

旗頭専門部会

今回は字北谷から7人、字玉代勢から5人、字伝道から3人、合計15人の委員が選出された。字ごとに代表者を1人決めた。その役割は、旗頭製作の発注交渉をし、棹は材木店に注文する。

カニチ専門部会

今回は、字北谷から2人、字玉代勢・伝道からそれぞれ1人担当が決まった。カニチ棒は、リュウキュウマツを使い、1ヵ月前から準備をする。

衣装・チヂン・舞踊専門部会

今回は、18人担当者がおり、各字から6人ずつ出た。18人中2人は男性である。

「実行委員会」には、三カ字合同の組織と字北谷・玉代勢・伝道の各字の組織もある。この各字の「実行委員会」が各字の組織の運営の中心となり、「長老評議委員・評議委員」

には、おもに組織運営の助言を仰いだ。旗頭やブラチリなどの楽器、各演目には「部会」が組織された。字北谷には、「フェーヌシマ専門部」や「ガーラシ専門部」があるのが特徴的であるが、三ヵ字とも専門部や部会の名称は異なるが、その役割・機能は同じである。以下は、各字の組織を記す。

字北谷

字北谷実行委員会は、実行委員長1人、副委員長は男女2人ずつの4人、事務局長1人の計6人を中心としている。また別に10の専門部会が編成されている。

旗頭専門部：部会責任者は7人の男性、参加者は49人である。

大綱専門部：部会責任者は7人の男性からなる。

カニチ専門部：部会責任者は2人の男性からなる。

衣装・舞踊・チヂン専門部：部会責任者は6人の女性からなる。

地謡専門部：部会責任者は4人の男性からなる。

鉦鼓専門部：部会責任者は3人の男性、参加者は8人である。

ブラチリ専門部：部会責任者は3人の男性、参加者は71人である。

締太鼓専門部：部会責任者は5人の男性、参加者は44人である。

南之島専門部：部会責任者は3人の男性、参加者はカネ打ち2人、踊り22人である。

ガーラシ専門部：部会責任者は2人の男性からなる。

舞踊は全員女性によっておこなわれるが、参加者の年齢によって参加する演目が異なる。

- a. 稲シリ節：40歳以上の女性10人。
- b. 下り口説：30歳から40歳の女性4人。
- c. 前ヌ浜：30歳から40歳の女性6人。
- d. 金細工：30歳から40歳の女性6人。
- e. 加那ヨー：30歳から60歳の女性34人。
- f. 上り口説：30歳から40歳の女性7人。
- g. 揚口説：30歳以上の女性6人。
- h. クワディーサー：20歳から25歳までの未婚女性8人。
- i. 貫花：高校生以上の女性33人。
- j. 祝い節：40歳以上の女性22人。
- k. チヂン：70歳以上の女性23人。
- l. 黒島口説：20歳から30歳の女性20人。

字玉代勢

字玉代勢の郷友会の役員には11グループある。4つの委員、6つの部会と書記・会計である。各組織は、以下の通りである。

長老評議委員：男性12人、女性19人、合計31人である。

評議委員：男性21人である。

三カ村実行委員：若手の男性5人である。

字実行委員：19人の男性からなる。

旗頭部会：部会の責任者は4人、参加者は21人である。

銅鑼（ドラ）部会：2人の男性からなる。

鉦鼓（ソグ）部会：部会責任者は3人、参加者は中学生男子5人である。

ボラチリ部会：部会責任者は8人、部会参加者は小学2年から6年生までの男女混合の39人である。

太鼓部会：責任者は8人、参加者は24人の男性からなる。

女性部会：13人の女性からなる。

書記・会計：男性2人である。

今回の大綱引きでは12の演目を出したが、各舞踊の演目ごとにも部会を設置した。

稲シリ節部会：部会責任者は2人、参加者は11人の女性からなる。

ぬち花部会：部会責任者は2人、参加者は15人とも女性からなる。

祝い節部会：部会責任者は2人、部会参加者は19人の女性からなる。

加那ヨ一部会：責任者2人、参加者は21人、何れも女性からなる。

チヂン太鼓部会：部会責任者は2人、参加者は11人とも女性からなる。

字伝道

字伝道では、北谷三カ村大綱引きに向けて4つの委員、10の部会、4つの担当が組織された。各組織は、以下の通りである。

長老評議委員：男性8人、女性13人、合計21人である。

評議委員：12人の男性からなる。

三カ村実行委員：実行委員長1人、副委員長2人、委員2人、合計5人の男性で構成する。

字伝道実行委員：はじめ5人編成であったが、後日増員し、10人の男性編成となる。

大綱部会：部長1人、総勢7人の男性で構成する。

旗頭部会：部長1人、総勢5人の男性からなり、参加者は10人であった。

銅鑼部会：部長1人、総勢2人の男性で構成する。

ソグ部会：部長1人、総勢2人。部会責任者は前回もソグを担当していた男性からなる。参加者は2人であった。

ボラチリ部会：部長1人、総勢3人の男性からなる。参加者は32人であった。

締太鼓部会：部長1人、総勢5人の男性からなる。参加者は24人であった。

チヂン部会：部長1人、総勢2人の女性からなる。参加者は7人であった。

めでたい節・ティーマートゥ部会：部長1人、総勢5人の女性からなる。

貫花部会：部長1人、総勢5人の女性からなる。参加者は16人であった。

スネーイ部会：部長を1人置き、先輩方にあたる男性3人で構成する。

裏方：部長1人、総勢2人の男性からなる。

衣装：部長1人、総勢6人の女性からなる。

会計：男性1人である。

書記：男性1人である。

③ 双分組織

戦後の北谷三カ村大綱引きは、雌綱のメンダカリと雄綱のクシダカリに分かれ綱を引く。メンダカリは、字北谷のメンダカリと字玉代勢で編成され、クシダカリは、字北谷のクシダカリと字伝道で分けられている。しかし、戦前の大綱引きは現在と組の分け方が異なっていた。『北谷町史 民俗上』(1992:63)によると、「伝道はクシダカリ側に入り、玉代勢はイリグミがメンダカリ側、アガリグミがクシダカリ側に加わって引いた」とある。戦前、大綱引きの練習や綱打ちなども、メンダカリは組合内の広場で、クシダカリは北玉国民学校で別々に練習をしたという。

④ 協力者

イ. 戦前

字北谷・伝道・玉代勢の話によると、字砂辺から「弾き(サンシン)」と演舞指導をしてもらった。ほかにも字玉代勢では、屋宜仲山からも弾きと演舞指導をしてもらったそうである。

ロ. 戦後

大綱製作に関して、宜野湾市大山から指導員を6、7人依頼して、大綱を打つときの指揮や、カニチグチ作り、綱の仕上げなど、細かいところまで指導してもらった。本番のカニチ貫きの時も、綱の連結などをずっと側で指導していた。

参考文献

北谷町史編集委員会編 『北谷町史 民俗上』北谷町役場、1992。



図 2-37 北谷三カ村大綱引き実行委員会組織図

6. 祭祀儀礼

寅年ごとの旧暦6月25日（以下断りが無い限り旧暦である）に行われる北谷三カ村大綱引き（ウーンナ）は、北谷三カと呼ばれる旧字北谷・玉代勢・伝道の三カ字が13年に一度合同で行うマールジナ（まわり綱）である。戦前の北谷三カでは、農作物の豊穰やムラ人の無病息災などの願いを込め、初日の25日には字北谷のシマイ（馬場）で大綱を引き、翌26日には字玉代勢のナカミチ（中道）で大綱を引いた。

沖縄本島のマールジナには、数年に一度綱を引くムラや、北谷三カのように特定の干支の年にあわせて綱を引くムラがある。たとえば、南風原町字津嘉山では7年、あるいは13年ごとに大綱曳きが行われたり、記念すべきことがあるときに綱曳きを行ったりする（『津嘉山大綱曳き』1992：29）。また、糸満市字大里の6月カシチー綱は5年マール、大里村字大里の6月26日の綱引きは、13年マールで卯年に行われる（平敷、1990：89）。

13年に一度の寅年に行われる北谷三カ村大綱引きや、糸満市字大里（6月25日）、大里村字大里のマールジナ（6月26日）は、いずれも6月25日のカシチー（各家庭でもち米を蒸して強飯をつくり神仏に供える折目）前後を綱引きの定日とするものであるが、南風原町字津嘉山の大綱曳きの場合、6月15日のウマチーから18日頃までに日を選んで綱を引く。しかし、津嘉山でも例年の綱引きは、6月25日のカシチー翌日におこなわれるアミシの御願（沖縄本島南部地域に多くみられ、ムラの神女たちが拝所を回り雨乞いの祈願を行う）に綱引きを行い、大綱を曳く年には綱曳き当日に日を繰り上げて、アミシの御願をおこなう。

年中の折目としての6月カシチーや、それと結びつく綱引きについて平敷令治は、稲穂祭の物忌みのはれ、川の水で禊をする年浴（『琉球国由来記』1713年記載）の行事が、1735年（尚敬王23）に6月25日と定められ、近代以降はこの年浴にかえて6月カシチーと呼ばれるようになった、という。また「伊波普猷が〈南島の稲作儀礼について〉で明らかにしたように、年浴は本来稲作事始めの儀礼であった。田ごしらえに必要な水が豊富に得られる事を願う節目、それが年浴であった」と述べたうえで、その頃に行われる綱引きには、稲作に必要な「水」をモチーフとする儀礼的意味が内包されている、という（平敷、1990：78）。

ところで、今回の北谷町綱引き調査で私に与えられたテーマは「祭祀儀礼」と「綱の処理儀礼」である。つまり、大綱引きに関連して行われる祈願や、年中の折目として行うカシチー行事。そして、綱を引き終えた直後に行う「カニチ焼き」などの儀礼について、観察し記録することである。

1998（平成10）年の北谷三カ村大綱引きに関連する祭祀儀礼は、①カニチ棒の用材となる松の木の伐採祈願、②完成した大綱の浄めと大綱引き成功祈願、③大綱引きに先立つておこなわれた各字ごとのメウガミ（前拝み）、④大綱引き当日の北谷ノロ殿内でのカ

シチーウユミと大綱引きの成功祈願などである。

ところで、かつての北谷・玉代勢・伝道の三カ字は、集落の立地が接近していただけではなく、祭祀的にもつながりがあった。たとえば、現在のメーウガミは、字単位での拝みとなっているが、戦前の三カ村大綱引きに際しては、北谷ノロをはじめ玉代勢・伝道の神役たちが綱引き前日の6月24日にはそろってタキでの祈願を行った（『北谷町史』第三巻、1994：424）。

また、『琉球国由来記』巻十四（1713、以下由来記とする）の記録からは、由来記編纂当時北谷ノロが北谷村と玉代勢村の二カ村を管轄し、稲穂祭や稲収穫祭を執りおこなっていたことがわかる。さらに、伝道村からはンマヌチナトウイ（馬の手綱取り）、玉代勢村からはニプトウイ（柄杓取り）と呼ばれる男性神役が選出され、ノロ司祭の5月ウマチーや、6月ウマチーには北谷グスク内の「殿」へ随行した、という伝承もある（末吉文さん談）。

北谷三カ字の拝所については、由来記の巫崇所の項に、北谷村「ヨシノ嶽」（神名、テングノ御イベ）・「城内安室崎之嶽」（神名、イシラゴノ御イベ）、前城村に「北谷巫火神」が記載され、年中祭祀の項には、北谷村・玉代勢村に「北谷城内之殿」が記載されている。これらの御嶽や殿は、現在の北谷グスク内に所在する「東り御嶽」、「西御嶽」、「殿」に該当するものと思われ、前城村の「北谷巫火神」は、現在、北谷ノロ殿内にまつられている。また、田代安定が明治時代に調査した北谷間切の拝所に関する記録には、北谷村に「東り城御嶽」、「イリ城御嶽」、「ノロ社」、玉代勢村に「長老前御嶽」、伝道村に「山ガマ御嶽」などの聖地が記されている（『北谷町史』第二巻、1986：76）。

以下、平成10年8月16日（旧暦6月25日）に行われた大綱引きに関連する祭祀儀礼や、北谷ノロ殿内をはじめ、三カ字の各家庭で行われた6月カシチーウユミ、綱引き直後の綱の処理儀礼などについて観察記録を中心に、聞き取り調査で得られた戦前の態様も加えながら紹介したい。なお、三カ字の拝所については、1995年に北谷町文化財調査報告書第15集『北谷町の拝所』に報告した内容に加筆して紹介した。

（1）大綱引きまでの拝み（1998年）

① 採木の祈願（新暦7月28日）

雌雄の綱を連結するカニチ棒には、松の木が用いられる。そのカニチ棒の用材となるリュウキュウマツの伐採が、北谷町字北上の山中（旧字北谷郷友会員所有）で7月28日（新暦）に行われた。採木は、北谷三カ字（北谷・伝道・玉代勢）大綱引き実行委員会カニチ棒専門部会のメンバーを中心に午前10時頃からおこなわれた。伐採に際しては、伐採される松の木のシー（木の精）の触りなどが伐採者に及ばぬように、三カ字を代表して

旧字北谷の新垣祐喜さんが祈願をおこなった。伐採される松の木の根元には縦約10cm、横約5cmの白紙3枚と、線香15本（ヒラウコウ2枚と $\frac{1}{2}$ ）、そして泡盛が供えられた。

② 綱の浄めと成功祈願（新暦8月12日）

雌雄の大綱が完成した8月12日、第12代旧字北谷郷友会会長（戦後の第1回北谷三カ村大綱引当時）をつとめた栄田安貞さんと、今回の北谷三カ村大綱引き実行委員長の照屋信正さんによって、雌雄の綱に泡盛が捧げられ、綱の浄めと大綱引きの成功祈願が行われた。

③ 各字のメーウガミ（前拝み）

1998（平成10）年8月16日（旧6月25日）の北谷三カ村大綱引き（ウーナ）

に先立って、旧字北谷・玉代勢・伝道の三カ字では、各字ごとにそれぞれの拝所をまわり字民の健康と字の繁栄、そして大綱引きの成功を祈願するメーウガミ（前拝み）を行った。

イ. 旧字北谷のメーウガミ

戦前の字北谷では、旧暦6月24日に字のヤクミ（区長・スーガシラ・ニーセーガシラ）と、北谷ノロが大綱引きに関するメーウガミを行った。字のヤクミらは、まず村屋の敷地内にまつられる火ヌ神で大綱引きの成功を祈願してからノロ殿内に赴き、北谷ノロとともにノロ殿内の神仏を拝み、そのあと北谷グスクに上った。北谷グスクでは、大綱引きの安全と、その加護を殿と西御嶽（イリウタキ・十三神）で祈ったという（末吉文さん・仲村新正さん・津嘉山フジさん談）。

1974（昭和49）年に復活した大綱引きは、36年ぶりの復活ということから、北谷三カ字では、大綱引きに先立って各字のピンシー（酒・盃・花米の入った携帯用拝み道具）を供出し、大綱引き実行委員会の三役と、前北谷ノロ（故末吉カメさん）が旧字北谷・玉代勢・伝道の拝所をはじめ、首里十二カ所（戦後は、慈眼寺・万松院・盛光寺・安国寺・西来院、『沖縄大百科事典』1983）を巡拝して大綱引きの復活を告げる拝みと、三カ字の繁栄を祈願した。また、大綱引き当日（旧暦6月25日が月曜日であったため、一日早め6月24日に挙行された）の北谷ノロ殿内では、旧字北谷郷友会の三役らが



写真2-136 松の木を運びだすカニ子棒
専門部会のみなさん



写真2-137 完成した綱の浄めと成功祈願

尾よく行われることを祈願したあとで、郷友会会員による踊り(御前風)が奉納された。

戦後2回目となる1986(昭和61)年の大綱引きに関連するメーウガミは、字ごとにそれぞれの拝所をまわり祈願を行った。字北谷では、現北谷ノロの末吉文さんと屋号川又端のおばあさん(故仲村渠カナさん、文さんの姉)が、安良波リュウグ・北谷スーガー(塩川)・長老山(北谷長老・字北谷のカー・殿・東り御嶽・西御嶽)などを巡拝し、大綱引きの安全を願った。旧暦6月25日には、郷友会の三役をはじめ、郷友会会員らがノロ殿内の神仏に大綱引きの成功を祈り、さらに末吉雪子さんが踊り(上り口説)を奉納した。大綱引きは新暦の8月3日(旧暦6月28日)に挙行された。

北谷ノロ殿内(1998年8月9日<旧暦6月18日>)

午前9時頃から北谷ノロ殿内には、旧字北谷郷友会会長(大綱引実行委員長を兼任)の照屋信正さんをはじめ、旧字の古老(5人)や、婦人(3人)たちが集まってきた。

北谷ノロ殿内では、まず、①ノロ殿内→②安良波リュウグ→③マタジ(湧水神)→④北谷スーガー(塩川)→⑤綱のカヌチ根軸→⑥長老山→⑦北谷グスクの順序で拝みを行うということが、ノロ殿内の当主である末吉清信さんより伝えられ、その後で北谷ノロの末吉文さんが、ノロ殿内の神仏にメーウガミの趣旨を述べ、次いでウガミサー(拝む人)の知念清子さん(字桑江出身、北谷ノロ殿内では、神事での拝みに対しその拝みの正当性を神意に伺うため、その資質を有する知念清子さんを依頼することが10年来恒例となっている)が加わり、火又神、神棚、カンティンオー(関帝王)を順次拝んだ。

供物は、ノロ殿内のピンシー(酒・盃・花米の入った携帯用の御願道具)と旧字のピンシー。旧字からはピンシーのほか、肴11品を盛った角膳(豆腐・肉・白かまぼこ・紅かまぼこ・昆布・大根・ごぼう・てんぷら・チキン・田芋・サーターアンダーギー)、果物(みかん・バナナ・リンゴ)、7品の穀類(米・麦・大豆・小豆・黍・アカマーミ・オーマーミ)、クバンチン(紙銭)、大小のシルクパンチン(半紙)、



写真2-138 メーウガミの趣旨を述べる北谷ノロ



写真2-139 旧字からの供物

線香が供えられた。

ノロ殿内の神棚に向かって左側にまつる火ヌ神の香炉には、15本の線香3組がともされ、香炉の前には、シルクパンチン（半紙大小各3枚が1組）3組と、その上にフトウチコー1束・24本（ヒラウコウ4枚）・15本（ヒラウコウ2枚と1/2）の線香が供えられた。

二つに区切られた中央神棚の各香炉（左側に今ヌル・中ヌル・先ヌルの香炉、右側にウサチカニマン・クニデーの香炉）には、線香15本の2組がともされ、香炉の前にはシルクパンチン（大小3枚1組）が供えられた。神棚に向かって右側のカンティオーには、線香15本の3組と、シルクパンチン（大小3枚1組の3組）を供えた。

ノロとウガミサーの知念さんが火ヌ神を拝み、次いで神棚とカンティオーを拝んだ。その都度、後方に控える郷友会の方々も手を合わせ、綱引きの安全と、ムラの繁栄を願った。拝みを終えたノロの文さんは、ノロ殿内のピンシーと旧字のピンシーから花米をつまみ、火ヌ神や神棚、カンティオーに供えられたシルクパンチンの上に添え、次いでピンシーの盃に注がれた酒を各香炉の前に捧げた。

10時22分ころ、中央神棚の前には雌雄のガーラシ（支度）が着用する兜や、扇（軍配）が並べられ、再度祈りが捧げられた（戦前、ガーラシに関する拝みは村屋でおこなっていた）。拝みの途中、ウガミサーの知念さんによって安良波リュウグに日の丸（太陽神）を描いた扇を供えるようにとの託宣が伝えられたが、今回は準備が間に合わず見送りとなった。10時30分頃、ノロ殿内での祈願を終えた一行は安良波リュウグへ移動した。



写真2-140 ノロ火ヌ神で祈願を行う北谷ノロの末吉文さん（左）と、ウガミサーの知念さん



写真2-141 神棚に供えられたガーラシの兜



写真2-142
安良波リュウグ（ナカヌシ）全景

安良波リュウグ

現在の安良波公園南端に突出した岩と、沖に連なる二つの岩礁を併せてアラファヌシー、あるいはアラファリュウグという。海岸線に突出したメーヌシー（前の岩）は、洋上に浮かぶナカヌシー（中の岩）へのお通し所である。

洞穴状のナカヌシーには、①ウサチリュウグ（左側）、②イマリユウグ（中央）③火ヌ神（右側）、④カー神（火ヌ神の右側）、⑤ウティンアマカー（①～④の反対側に位置する）が祀られ、それぞれに香炉が安置されている。今回は、安良波公園を主会場として大綱引きが繰り広げられることから、ナカヌシーへ渡っての祈願となった。

11時28分ころ、チャーターしたボートに乗り込んだ北谷ノロの末吉文さん、ウガミサーの知念清子さん、末吉雪子さん（ノロ殿内の女主人）、郷友会会長の照屋信正さん、照屋タキ子さん、仲村渠敏子さん、田場ミサエさんの7人がナカヌシーへ到着し、11時35分頃には調査員を含む全員がナカヌシーへ到着した。

11時45分ころ、中央のイマリユウグの前にノロ殿内のピンシーと旧字のピンシー、肴（角膳盛）、果物が供えられ、各香炉に、フトウチコー1束と、24本、12本、3本の線香、クバンチン（紙銭3枚1組の4組）、シルクバンチン（半紙大小各3枚1組の4組）が供えられると、ノロとウガミサーの知念さんが、イマリユウグの前に座し、拝みをはじめた。拝みを終わると、5つの香炉の前に、ノロの文さんがノロ殿内のピンシーから花米と



写真2-143 ナカヌシーへ渡るため、ボートを待つ北谷ノロと郷友会のみなさん



写真2-144 ナカヌシーへ向かうボート



写真2-145 ナカヌシーでの祈願

酒を捧げ、次いで、郷友会会長の照屋信正さんによって旧字のピンシーから花米と酒が捧げられた。その後、参加者全員に盃がまわされ、11時55分頃ナカヌシーでの祈願を終了した。

マタジ (湧水神)

北谷ノロの末吉文さんによれば、かつてこの拝所には、琉球石灰岩の大きな岩があり、その岩の隙間から水が湧き出ていた、という。そして、その湧泉をマタジウカー、あるいはマタジリュウグと呼び、村落祭祀の中心的役割を果たした近代以前の北谷ノロは、この湧泉で沐浴してから村落の祭祀に臨んだ、という。



写真 2-146 マタジ (1989年建)

このマタジは、ウガミサーの知念清子さんの教えによって、1989 (平成元) 年に北谷ノロ殿内の家人らが建立した。東シナ海を望むマタジには、石碑が建てられ、その石碑の表に「拝所 マタジ 平成元年三月吉日建立」、裏には「湧水神」と陰刻されている。12時10分ころにマタジへ到着した一行は、供物 (以下省略、ノロ殿内を参照、線香・クバンチンなどは安良波リュウグを参照) を供えて祈願を行い、次いで北谷スーガーへと向かった。

北谷スーガー (塩川)

北谷スーガーは、国道58号線北谷交差点北東側に位置する北谷グスク南西側の麓に所在する。現在のスーガーは、コンクリート造の建物のなかに保存されている。建物の左側には「昭和三年九月吉日辰年改修 御大典記念十二組 昭和五十五年九月吉日申年改修 字北谷字民一同」と記されている。

このスーガーは戦前まで、字北谷の人々 (主にクシンダカリの人々) が飲料水や正月の若水を取るカーとして使用した。現在は大綱引きのメウガミのほか、旧正月3日のハチウビー、旧暦8月11日のカーウビーの際に、北谷ノロ殿内の家人らによる拝みが行われている。



写真 2-147 北谷スーガー (塩川)での祈願

13時5分ころスーガーへ到着した一行は、供物を供えて拝みを行い、拝みを終了するとノロ、郷友会会長の照屋さんの順に花米と酒を捧げ、綱のカヌチ根軸へと移動した。

網のカヌチ根軸

米軍キャンプ瑞慶覧のフェンス沿い（国道58号線側）に、人知れず設置されている石碑が網のカヌチ根軸である。この拝所もマタジと同様に、知念清子さんの教えにより、ノロ殿内と郷友会によって建立された。石碑には「網のカヌチ根軸」の銘のほか「昭和六十三年九月吉日辰年建立 字北谷字民一同」の陰刻も確認される。昭和63年の建立以来、北谷ノロ殿内では、毎年の旧暦6月24日には、

この網のカヌチ根軸において綱引きの御願を行うようになった。現在の石碑が立つこの一帯は、かつてウククヌモーグラーと呼ばれる百坪ほどの広場で、字の人々が稲干しや、ウージンガラ（サトウキビの搾りガラ）を干す場所として利用したほか、戦前の三カ村大綱引きをはじめ、旧暦6月25日の毎年の綱引きには、このウククヌモーグラーに設置されていた目印の石を地点にカニチ棒を貫き、雌雄の綱を連結させたという（仲村新正さん談）。

長老山

網のカヌチ根軸での祈願を終えた一行は、14時10分頃にキャンプ瑞慶覧内の長老山へ到着した。長老山について『北谷町史』第三巻は、「沖縄にはじめて臨済宗妙心寺を伝えた北谷長老（南陽紹弘禅師）をはじめ、樹昌院歴代の住職を葬った墓所」と記している。

現在の長老山には、戦後、米軍用地として集落を接収された旧字北谷のカー神をはじめ、旧字伝道や玉代勢の拝所が各字毎に合祀されている。

長老山に到着した一行は、まず北谷長老の墓所と伝えられる場所を拝み（ここでは、線香・クバンチンは6組）、次いで前城島御風水神、その後で戦前の北谷集落内に点在したカントヌカー、ウスクガー、スミムンガー、根神ガー、イナグガー（女井は伝道に所在した）を祀るカー（井戸）合祀所を拝み、さらにクワーディーサー（竜宮神、クワーディーサーの樹の下に祀られていたためそう呼ぶ）を拝んだ。

戦前の北谷集落内に点在したカーについて、北谷ノロ殿内では次のように伝える。東表原に所在したカントヌカーは、北谷村の始祖（ハダカ世）が使用したカー。



写真 2-148 網のカヌチ根軸(1988年建立)



写真 2-149 北谷長老での祈願

また、メンターバルに所在したウスクガーも、カンタヌカーと同様に遠い祖先たちが使用したカー。屋号川ヌ端（カーヌハタ）の西側に在ったスミムンガーは、メーグスクジマ（前城島）の人々や、川ヌ端の家人らが糸の泥染めに使用したことから、その呼称がついた、という。さらに、戦前のノロ殿内南側の屋敷内に所在したニーガンガー（根神井）は、近代以前の北谷ノロをはじめ、ムラの神役たちが斎戒沐浴に使用したカーと伝えている。イナグガー（女井）については伝道のメーウガミを参照されたい。14時50分ころ長老山での祈願を終えた一行は、北谷グスクへと向かった。

北谷グスク

北谷グスクへ到着した一行は、グスク内の「殿」、「東り御嶽」、「グスク火ヌ神」、「西御嶽」の順序で祈願を行った。拜みに際しては、これまでの供物に加え、旧字から9合の米が供えられた。

ところで、「殿」、「東り御嶽」、「西御嶽」は、戦後米軍キャンプ瑞慶覧内の長老山に遷座されていたが、1993年12月25日に北谷グスク内に再度遷してまつられた。その際には、北谷グスク西端丘陵部の「西御嶽」入口南側に所在する「グスク火の神」も、郷友会の基金で建立された。戦前のグスク火の神は、現在の火の神より少し南側に下った所に在ったという（末吉清信さん談）。

現在の殿は、北谷グスク三の郭、南西側に位置する。北谷グスク内の殿について『琉球国由来記』巻十四（1713）は、次のように記す。



写真2-150 前城島御風水神



写真2-151 カー（井戸）合祀所



写真6-152 クワーディーサー（竜宮神）

北谷城内之殿

北谷村・玉代勢村

稲二祭之時、花米九合完、五水八合完（此時、朝神、夕神、二度）神酒一完（此時、惣地頭供物、按司同断）花米九合完、五水四合完（此時、朝神夕神二度）神酒一完（玉代勢地頭）花米九合完、五水六合完（此時朝神、夕神二度）、伝道大屋子・津嘉山大屋子・古味大屋子。シロマシー器、神酒壺完（麦。玉代勢村百姓中）神酒三完（麦。北谷村百姓中）供之。北谷巫ニテ祭祀也。

上記の内容から由来記編纂当時、北谷城内之殿では稲穂祭、稲収穫祭の二祭に北谷ノロが祭祀を執り行い、しかもこれらの祭祀が北谷村と玉代勢村の合同祭祀であったことがわかる。現在は、13年に一度行われる大綱引きのメウガミのほか、毎年の5月ウマチーと、6月ウマチーの際、北谷ノロ殿内の家人や、旧字北谷郷友会による拝みが行われている。

また、殿の東隣には現在「東り御嶽」が祀られているが、戦前の東り御嶽は北谷グスク東端の丘陵部に位置していた。この東り御嶽は由来記にみる「ヨシノ御嶽・神名テンゴノ御イビ」ではないかと推測される。

北谷グスク西端丘陵部には、13個の香炉を安置する「西御嶽」がある。『北谷町海岸・海域地名』（1985：13）の記述から、この西御嶽は由来記に記される城内安室崎之嶽ではないかと推測される。ノロ殿内の家人は、13個の香炉に因み西御嶽を「十三神」、あるいは「十三香炉」と呼ぶ。13個の香炉について、北谷ノロの末吉文さんは、十二支とそれを一つに結ぶ火の神であるというが、十二支の干支がどの香炉と結びつくのかは不明である。さらに、この御嶽への出入りはノロのみが許され、一般の人々の立入



写真 2-153 北谷グスク(殿)での祈願



写真 2-154 北谷グスク(東り御嶽)での祈り



写真 2-155 グスク火の神での祈願

りを禁じた。特に男性の立入りを堅く禁じた拝所だという。

現在、この御嶽では5月ウマチー、6月ウマチーの際に北谷ノロとノロ殿内の家人、そして旧字北谷郷友会の有志らによる拝みが行われているが、戦前は北谷三カ村が合同で行う北谷三カ村大綱引きに先立ってのメーウガミ（6月24日）のみ、この御嶽へ赴き農作物の豊穰やムラ人の健康、そして、大綱引きが首尾よく行われることを祈願したという。普段、立入りを堅く禁じるこの御嶽もその日ばかりは、字北谷のヤクミ（役目）をはじめムラ人の立入りを許した。なお、現在の西御嶽への入場の際には、まず「グスク火の神」で入場の趣旨を述べて許可を得る。特に男性の場合は、この火の神で許可を得られなければ入場することができない。



写真 2 - 156 西御嶽（十三香炉）



写真 2 - 157 伝道ウフヤの火の神と神棚

ロ. 旧字伝道のメーウガミ

伝道の旧家であるウフヤ（大屋）では、旧字からのメーウガミに先立って8月7日（新暦）には、長老山に合祀される字の拝所をはじめ、首里十二カ所、普天間権現、安良波リュウグを回って拝みをおこなった。巡拝は、日ごろからウフヤの拝み事をお願いしているウガミサーを依頼しておこなわれた。

供物は、ウフヤのピンシー、くだもの、ウチャヌク（大中小の餅を三重にしたもの3組）、ウチカビ（紙銭）、白紙、線香などである。



写真 2 - 158 火の神での祈願
（郷友会からのメーウガミ）

ウフヤ（8月13日〈旧6月22日〉）

午前11時過ぎ、ウフヤの御神屋には、
メーウガミに参加する郷友会の有志（男
性15人、女性6人）らが集まってきた。
御神屋には神仏をまつる神棚が設けられ
ている。神棚に向かって左側には火又神
が祀られ、右側の神棚には五つの香炉と、
位牌が安置されている。

拝みに際しては、旧字からのビンシー
のほか、饅頭（9個）の膳一つ、果物の
膳一つ。そして、火又神や神棚の各香炉
には線香15本（ヒラウコウ2枚と1/2）、
さらに各香炉の前に3枚1組の小さな白
紙3組が供えられた。ビンシーの花米の
上には賽銭として70円が添えられた。

祈願は、旧字伝道郷友会会長の津嘉山
正恒さんと、会計の伊禮利治さん、伊禮
喜市さん（ウフヤの主人）、伊禮静子さ
ん（郷友会副会長が参加できないため、
母親の静子さんが代理をつとめた）を中
心に、火又神から神棚の順に行われた。
祈願を終えると会長の津嘉山さんが花米
や、酒を各香炉の前に捧げた。ウフヤで
の祈願を終えた一行は、北谷スーガーへ
と移動した。

北谷スーガー

11時50分ころ北谷スーガーへ到着した
一行は、供物を供えて祈願をはじめた。
スーガーでの供物、参加者はウフヤに同
様（以下省略）。スーガーの詳細につい
ては、旧字北谷のメーウガミを参照され
たい。北谷スーガーでの拝みの後、米軍
キャンプ瑞慶覧内の長老山へと向かった。

長老山

一行は12時10分頃、長老山に到着した。
長老山には旧字伝道の拝所として、①山



写真2-159 神棚を拝む郷友会のみなさん



写真2-160 北谷スーガー（塩川）



写真2-161 北谷長老

洞拝所・御風水神、②カー合祀所（村川・チン川・エーガー・山川井）、③イナグガー（女井）がまつられている。今回のメーウガミでは、この三つの拝所を順次拝んだ。

①の「山洞拝所・御風水神」を伝道の人々はヤマガマーと呼ぶ。ヤマガマーとは、かつての伝道集落中央部に位置した洞穴をいう。戦前、この洞穴の中には4基の厨子甕が安置されていた、という（故伊禮喜信さん談）。

②のカー合祀所には、表に「村川」、「チン川」、裏に「エーガー」、「山川井」と陰刻された石碑がまつられている。かつてのヤマガマー洞穴の前方に位置した井戸を村川、あるいはリンドーガーと呼び、ウブガー（産川）として使用していた。

③のイナグガーは「女井」と陰刻された石碑がまつられている。戦前のイナグガーは伝道集落の旧家であるウフヤの西側に所在した。このイナグガーは、北谷グスクのウナジャラ（按司夫人）が洗髪や、水浴びに使用した井戸という（末吉文さん談）。イナグガーは、戦後の移動の際に、旧字伝道の旧家であるウフヤからの申出によって現在は、旧字北谷カー合祀所にまつられている。

安良波リュウグ

長老山での祈願を終えた一行は、13時ころ安良波リュウグへ到着し、安良波公園内南端の海岸線に突出したメーヌシー（前の岩）から、ナカヌシー（中の岩）へのお通し拝みをおこない、13時15分頃

に大綱引きの安全と字の繁栄を祈願するメーウガミを終了した。旧字伝道では、大綱引きのメーウガミのほか、毎年の旧暦5月にもこの安良波リュウグでの拝みを行っている。



写真2-162 ヤマガマー・村川・チン川・エーガー・山川井での祈願

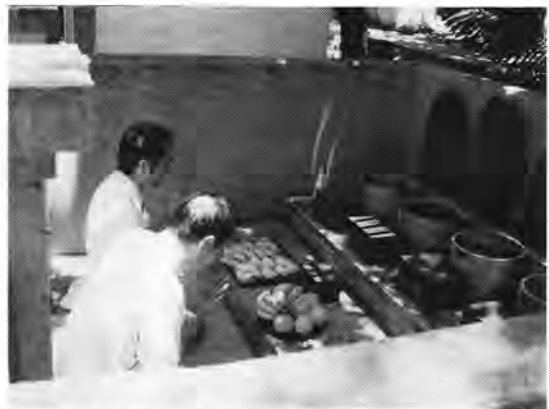


写真2-163 旧字北谷のカー合祀所にまつられる伝道のイナグガー（女井）



写真2-164 メーヌシーからナカヌシーへのお通し拝み（伝道）

八、旧字玉代勢のメーウガミ

玉代勢のメーウガミは、大綱引き当日の午前8時頃から行われた。戦前の玉代勢では、大綱引きの前日（6月24日）に、字の三役らが字内の拝所を回り祈願を行ったという。今回は郷友会役員等の都合により、当日の朝行われることとなった。

長老山（8月16日〈旧暦6月25日〉）

午前8時過ぎ長老山には、郷友会会長の津嘉山正則さんをはじめ郷友会の男性5人と、字の拝み事に詳しい仲村渠ナベさん、知念千代さんの女性2人が到着した。各拝所での供物は、字のピンシー、カガンデー（三重にした大中小の餅3組）、饅頭、くだもの、白紙（大小3枚が1組）、線香（24本、17本、13本、9本）などである。長老山での巡拝は、仲村渠ナベさんを中心に、①「長老」、②「土帝君」、③「樋川」（タメーシヒージャーガー）、の順に行われた。各拝所では、祈願を終えた後、知念さんによって花米と盃が郷友会会長の津嘉山さんに手渡され、津嘉山さんがそれを戴いてから神仏の前に捧げた。また、樋川での祈りの途中、仲村渠ナベさんの歌によって、三カ村の大綱引きが挙行されることを喜ぶ神意が伝えられた。

かつての土帝君は、長老山の東側に位置したアランモー（小高い杜）の一角に所在し、旧暦9月9日（クングッチクニチー）には、「土帝君」拝みを行い、旧暦10月のタントゥイ（種子取）の日には、ムラ中の子どもたちがアランモーに集まり、持参したお握りを食べて健康を願った、



写真2-165 長老山に到着した旧字玉代勢郷友会のみなさん



写真2-166 北谷長老での祈願



写真2-167 土帝君とタメーシヒージャーでの祈り

という。アランモーの北側には、湧泉に樋をかけて水を落とす樋川があった。その樋川を、タメシヒージャーと呼んだ。このヒージャーガーについて、仲村渠ナベさんは、玉代勢村の村立ての際に神々が使用したカーだという。玉代勢集落は、このヒージャーを境にして、集落の東側をイーンドカリ、西側をシチャンダカリと呼んだ。集落のこの区分は、毎年行われた綱引きの組分けに、大方対応するものである。長老山での祈りの後、一行はチブガーへ移動して祈願を行った。

チブガー

チブガーはかつての玉代勢集落東側、現在のキャンプ瑞慶覧内の軍消防署南側の谷間に位置する。チブガーは、産湯や水撫（生児の額につける）での水を取るカーとして使用されたことなどから、ウブガー（産川）として崇められた。このチブガーは、平成7年には旧字玉代勢郷友会による「チブガー復元事業計画」によってカーの形態が復元された。

(2) 大綱引き当日の拝み

① 北谷ノロ殿内

大綱引き当日の午前8時過ぎ北谷ノロ殿内では、ご飯とソーキ汁、刺身、キュウリの酢の物などをノロ殿内の神仏と、母屋の仏壇に供え、一家の健康を願う6月カシチーウユミ（折目）の行事が、ノロ殿内の家人らによって行われた。

午前9時40分頃には、旧字北谷郷友会の三役（会長の照屋信正さん・副会長の田場健儀さん・仲村佳卓さん）らがノロ



写真2-168 仲村渠さんの伝える神意に耳を傾ける郷友会のみなさん



写真2-169 平成7年に復元されたチブガーでの祈願



写真2-170 北谷ノロ殿内のカシチー拝み

殿内を訪れ、字からの6月カシチーの拝みと、大綱引きが首尾よく行われることを祈念する拝みを、ノロを中心に行った。ノロ殿内の神仏の前には、ノロ殿内のピンシー。旧字からはピンシーと米(10kg)、酒(一升瓶2本)、くだものが供えられた。

9時55分ころ、ノロの末吉文さんによって火又神の香炉に線香15本の3組、神棚とカンティーオーの香炉には線香15本が点され、字の繁栄とムラ人の健康、そして大綱引きの開始と無事に終了することを祈念しての拝みが、火又神、神棚、カンティーオー(関帝王)の順に行われた。

火又神での祈りの後、旧字を代表して郷友会会長の照屋信正さんがノロと盃を交わし、神棚とカンティーオーでの祈りを終えると、郷友会の三役それぞれがノロと盃を交わして、綱引き開始の報告と安全を祈念する拝みを終了した。

② 伝道ウフヤ

大綱引き当日の正午過ぎ、伝道ウフヤでは数人の郷友会会員らが、旗頭の組み立てや、ミチジュネーの準備などに余念がない。一方、伝道ウフヤの家人らは、御神屋の火又神と神棚の香炉に線香15本をともして手を合わせ、大綱引きの日を迎えた報告と、成功を願った。

また、綱引きが終了した夕方には、旧字伝道からのオードブルが、御神屋の神仏に供えられ大綱引きの無事終了を告げる拝みもおこなわれた。



写真2-171 綱引きの成功を祈る北谷ノロと郷友会長の照屋信正さん



写真2-172 北谷ノロと盃を交わす郷友会の三役



写真2-173 伝道ウフヤでの当日の拝み
(伊禮喜市さんご夫妻)

③ 各家庭での6月カシチーとシチュマカミラシ

大綱引きの行われる旧暦6月25日は、収穫したもち米を蒸して強飯をつくり、神仏に供える6月カシチーウユミ（折目）である。戦前の北谷三カ字の各家庭でも、毎年旧暦6月25日には、新米で炊いた白カチシーや、豆腐ンブサー、ウチャワキ（お茶うけ）などを火ヌ神・仏壇・神棚などに供え、家庭の平穏や、家族の健康などを願った。神仏に供えたカシチーの残りは数センチ角の長方形に切り分け、サギジョーキー（風通しのよい場所につり下げる蓋付き籠）に入れて保存し、それを数日間いただくこともあった（旧字玉代勢・宮平苗さん、旧字北谷・末吉文さん談）。

また、この日北谷三カでは、実家の兄弟が婚出した姉妹に対し、新米で炊いたご飯を大盛り（ムイブン）にして届ける「シチュマカミラシ」という習俗があった。「シチュマカミラシ」とは、稲刈りや籾摺りに協力してくれた姉妹を実家に招いて、ご馳走などでもてなし、新米で炊いたご飯をムイブン（大盛り）にしてお土産に持たせたり（旧字伝道・伊礼ツルさん談）、夕食に間に合うように実家の兄弟から姉妹の嫁ぎ先に届けたりする家レベルの行事であった（旧字北谷・上間シズさん、旧字玉代勢・宮平苗さん談）。現在は、各家庭で簡単にウチャワキ（お茶うけ）を供えるのみで、姉妹に対す実家の兄弟（実家を継ぐ兄弟）からの「シチュマカミラシ」の習俗は見られない。

参考文献

- 北谷町史編集事務局編、『北谷町海岸・海域地名』、北谷町役場、1985。
- 外間守善・波照間永吉編、『定本 琉球国由来記』、角川書店1997。
- 平敷令治、「沖縄の綱引一備え、怒り、祈り」、『沖縄の祭祀と信仰』、第一書房、1990。
- 南風原町史編集委員会、『津嘉山大綱曳き調査報告書』、南風原町教育委員会 1992。
- 北谷町史編集委員会編、『北谷町史 第二巻資料編1 前近代・近代文献資料』、北谷町役場、1992。
- 北谷町史編集委員会編、『北谷町史 第三巻資料編2 民俗上』、北谷町役場、1992。
- 北谷町史編集委員会編、『北谷町史 第三巻資料編2 民俗下』、北谷町役場、1994。
- 北谷町教育委員会、『北谷町の拝所 —北谷町文化財調査報告書 第15集—』、1995。
- 沖縄大百科事典刊行事務局、『沖縄大百科事典』中巻、沖縄タイムス社、1983。

7. 網の処理儀礼

網を引き終えた後の網を処理する特別な儀礼には、①特定の場所に網を放置する形式、②海や川に網の一部を流す形式、③網の一部などを焼く形式、④網の一部を焼いてから川に流す形式、の四形式がある（平敷、1990：103）。北谷三カ村大綱引きで行われるカニチ焼きの儀礼は、④の形式に類するようであるが、北谷三カ村大綱引きでのカニチ焼きは、網の一部やカニチそれ自体を切り取って焼くのではなく、雌雄のメンバーらによって、あらかじめ準備されたワラ束を用いておこなわれる。

戦前のカニチ焼きは、網を引き終えた後に行うニーセーター（青年たち）の技（空手）が終わってから行った。カニチ焼きに使用するワラ束は、網を引き終えたあと、カニチグチの側で作り、それぞれに棒を差し込んで、その棒を持ち、ワラ束に火をつけてぶつけあうものであった（崎原、1978：82）。

戦前の大綱引きは二日間にわたっておこなわれたが、6月25日の字北谷のンマイ（馬場）を主会場とする大綱引きでは、字北谷の男たちが雌雄のカニチグチ付近でワラ束に火を点け、ワラ束をぶつけ合った後、クシンダカリ（北谷のクシンダカリと玉代勢のイーダカリ、伝道）は、北谷スーガー近くのローラー橋の上からワラ束を用水路に投げいれたり（照屋正吉さん談）、屋号カーガーヌイ（近くのガジマルの木の下に火を消して放置したりした（仲村新正さん談）。メ



写真2-174 カニチグチへ進むメンダカリのワラ束（1998年）



写真2-175 ワラ束のぶつけ合い



写真2-176 ンマイシグムイへ向かうメンダカリの青年

ンダカリ（北谷のメンダカリと玉代勢のシチャンダカリ）は、ンマイの南端に位置したンマアミシグムイヘワラ束を投げ入れた。

翌26日には、字玉代勢のナカミチを主会場に大綱引きが行われたが、玉代勢でも字北谷と同様にあらかじめ準備されたワラ束を用いて、字玉代勢の男たちがカニチ焼きを担当した。クシンダカリの男たち（玉代勢のイーダカリ）は、玉代勢の村屋敷地内広場にワラ束を放置し、メンダカリの男たち（玉代勢のシチャンダカリ）は、ヒージャーイーにワラ束を放置した（照屋光久さん談）。

36年ぶりに行われた1974年の大綱引きは、米軍基地ハンビー飛行場跡地を特別に借用しての挙行となったため、米軍への配慮などからワラ束に火を点けることはなかった。

戦後3回目となる平成10年の大綱引きでは、クシンダカリに軍配があがった直後、メンダカリ・クシンダカリの双方とも5～6人の男たちによって、長さ約1

m50cm、最大直径約30cm程のワラ束が準備された。男たちはカニチグチ付近でライターを用いて火を点け、火のついたワラ束を高くかざして数回ぶつけ合った後、クシンダカリは、4人の男性によって安良波公園内のインディアンオーク号あたりの波打ち際にワラ束を放置し、メンダカリは、3人の男たちがワラ束を車に積み、戦前のンマアミシグムイにあたる場所まで運び、その場所にワラ束を放置した。

なお、大綱引きにおいては雌雄いずれかの綱の勝ちによって次の年の豊作を占う、年占の伝承は確認できない。

参考文献

崎原恒新、「北谷三カ村の大綱引」、『まつり』31号、まつり同好会、1978。

平敷令治、「沖縄の綱引—備え、怒り、祈り」、『沖縄の祭祀と信仰』、第一書房、1990。



写真2-177 戦前のンマアミシグムイに放置されたワラ束（メンダカリ）



写真2-178 波打ち際まで運んできたワラ束（クシンダカリ）

第三章 旧北谷村各字の綱引き

1. はじめに

戦前の北谷村では多くの字で綱を引いていた。たとえば、砂辺と下勢頭の二カ字では、稲の収穫を祝う6月ウマチー（旧暦6月15日）前後に綱を引き、平安山・桑江・北谷・玉代勢・伝道の五カ字では、稲作の予祝儀礼といわれる6月カシチー（旧暦6月25日）前後に綱を引いた。

また、1948（昭和23）年の嘉手納村成立にともない、北谷村から嘉手納村に編成された野里（字の一部）や、屋良でも6月カシチーのころ綱引きを行った。ウマチーやカシチーのように年中の折目を定日とする綱引きは、折目の名称にちなんでウマチージナ（綱）、カシチージナなどと呼ばれる（平敷、1990：76）。現在の北谷町では、旧暦6月14日に綱を引く字砂辺の6月ウマチージナと、13年に一度の寅年に北谷三カ（北谷・伝道・玉代勢）で大綱を引く北谷三カ村大綱引き（ウーンナ）が行われている。

本章では戦前の各字で行われていた、あるいは現在も行われている綱引きについて、調査データに基づき、①綱引きの期日、②綱の材料と綱の形態、③備え・示威行為、④衣装、⑤綱の引き方、⑥双分組織、⑦祭祀儀礼の7項目に整理した。1996（平成8）年は、字砂辺の6月ウマチージナを見学したほか、旧字下勢頭・平安山・桑江の四カ字で戦前の綱引きについて聞き取り調査を行い、1997（平成9）年には、かつての北谷村の一字であった野里の6月カシチージナの見学をはじめ、戦前の北谷・伝道・玉代勢の各字で行っていた毎年の綱引きについて聞き取り調査を行った。

なお、綱の輪の部分については、字あるいは伝承者によって名称に違いがある（例えば砂辺ではカニチ、桑江ではカナチなどのように）が、ここでは「カニチ」に統一した。

2. 各字の概況

【砂 辺】 砂辺は北谷町の北西に位置している。西は東シナ海、東には丘陵（クシムイ）がせまっている。砂辺集落も戦後の一時期米軍によって集落の全域が接収されたが、1954（昭和29）年に返還された。返還後、集落は戦前の集落に近い形で再建されたが、埋立や住宅の増加により、景観がだいぶ変化した。そこで、昭和20年頃の景観を図3-2に示した。綱引きには集落の中央を走る道を境界にして、メンダカリの雄綱とイリンダカリの雌綱に分かれて綱を引いた。

- 【下勢頭】 下勢頭は、1925(大正14)年に字浜川と字平安山から独立した屋取^{ヤドツイ}集落である。先住者の佐久川家にちなみ佐久川屋取とも称していた(図3-4参照)。北は野里集落と接し、東は上勢頭、南は平安山、西は浜川集落と接していた。戦後は、米軍嘉手納飛行場として集落のほぼ全域が接收され現在に至っている。
- 【平安山】 平安山は東シナ海に面した集落で北は浜川、南は伊礼集落と接していた。西側の海岸よりには沖縄県営鉄道が走っていた(図3-5参照)。大正14年までは上勢頭・下勢頭も含めていた。また、集落の北側には平安山又上という屋取集落がある。1902(明治35)年には、北谷尋常高等小学校、1911(明治44)年には村役場が北谷から移転し、さらに県道や県営鉄道平安山駅も設けられたため、戦前の北谷村の中心的な役割を果たしていた。現在は集落のほぼ全域が米軍キャンプ桑江として接收されている。現在の地籍区分では字伊平となっている。
- 【桑江】 東シナ海に面した桑江集落は、北に桑江又後、南に桑江又前、西に桑江又中という屋取集落が広がっていた。西側の海岸よりには県営鉄道が走り、その内側には県道が設けられていた(図3-6参照)。戦後は集落の全域が米軍キャンプ桑江として接收された。戦前の集落は、キャンプ桑江内の海軍病院付近に立地していた。
- 【北谷】 北谷集落は、北谷グスク南の平野部に位置しており、近世には間切番所が設置され、当時から北谷の行政の中心であったことがうかがえる。集落の西側は馬場に接して県道が南北へ走り、県営鉄道もその西側を走っていた。戦前はこの馬場で、北谷大綱引き(ウーンナ)が行われた(図3-7参照)。戦後は米軍キャンプ瑞慶覧として集落の全域が接收された。現在の国道58号、北谷交差点南東側方向が当時の集落の位置である。
- 【伝道】 伝道集落は、北谷グスク南側斜面に位置しており、北谷三カ(北谷・伝道・玉代勢)の中では最も規模の小さい集落である。戸数も昭和20年頃でも26軒ほどであった(『北谷町史』第五巻:55-56)。集落の南側には北谷集落が接している(図3-9参照)。戦後は米軍用地として集落の全域が接收された。
- 【玉代勢】 玉代勢は北谷集落の東側に位置しており、規模は北谷集落の1/4ほどであった。集落の西側には、北谷長老で有名な樹昌院や、樹昌院歴代の僧の墓所である長老山があった(図3-10参照)。この集落も戦後、米軍キャンプ瑞慶覧として集落の全域が接收された。
- 【野里】 野里集落は、野国川の北側に位置していた。『嘉手納町史』(1990:37)には「北谷村中の本字で最大の戸数を擁する大集落で、戸数300余と言われた」とある。嘉手納町史に収録されている集落図に一部加筆したのが図3-11である。この図から当時の野里集落が、整然と区画されていたことがわかる。しかし、戦後は米軍嘉手納飛行場として接收され、現在は残っていない。また、1948(昭和23)年の分村により現在は嘉手納町に属している。

3. 各字別綱引きの構造

(1) 砂 辺

① 期 日

綱引きは「チナヒチ」といい、大正時代から昭和12、3年ころまでは6月ウマチー（旧暦6月15日）前日の14日に綱を引いた。昭和12、3年ごろまで行われていた例年の綱引きは、日中戦争の激化にともない中断された。戦後、綱を引くようになったのは1962（昭和37）年からとのことである。綱引きの再開に際しては、夢のなかで「綱を引きなさい」とのお告げをうけた字の古老からの強い要望があった、という。なお、綱引きの由来などについては伝承されていない。

② 綱引き次第（1996年度・1997年度）

現在の砂辺の綱引きは、戦前のようにワラで作った綱を引くのではなく、1本の麻製ロープ綱を引いている。下記の記録は、1996（平成8）年と1997（平成9）年の綱引きの様子を時間の経過に沿ってまとめたものである。

【1996年7月29日（旧暦6月14日）】

- 18：48 成人男性2人がボラを吹き、ショウゴ（鉦鼓）やドラを叩く。また3人の子ども達が締太鼓、ドラ、ショウゴを打ち鳴らして、綱引き行事の実施を報せた。
- 19：00 砂辺根所の御神屋（屋号根所）では、根所の家人らが火ヌ神に酒と花米、塩を供え、香炉には平御香15本を立てて、手を合わせた。次にウカミグワンス（御神元祖）の香炉の前に、花米を供え、盃に酒を注いだ。ウカミグワンスの次に千手観音の香炉の前に一掴みの花米を供え、酒を注いだ。
- 19：25 御神屋での祈願が終わると、根所当主の知念正一さんと戸主会の男性2人がかつての綱引き場であるナカミチ（現在の砂辺ハウジング通り）に向かった。
- 19：30 ナカミチでは、3人の男たちが雌雄の綱を繋ぐ地点のナカジンに火のついた平御香15本を供えた。そして線香の手前に酒をかけた後、花米を掴み、線香の上に添えた。それを3回繰り返した。これが終わると、酒を1人ずついただき、19時34分頃に終了した。
- 20：08 男たちは、現在の綱引き場である照屋商店前（屋号カーリンドー）に移動した。そこでは、成人男性がボラを吹き、ドラカネ、ショウゴ、大太鼓を打ち鳴らしていた。徐々に子ども達や婦人、年配の方々が集まってきた。
- 20：34 1本の麻製ロープ綱を通り中央に寄せた。照屋商店前の十字路を中心にアガリ

(東)とイリ(西)に分かれた。綱引きは2回行われ、1回目は西側の勝利であった。2回目は東西が入れ替わって綱を引いた。2回目の勝負は東側が勝った。綱引きが終わると、婦人らがカチャーシーを踊った。20時46分に綱引きは終了した。



写真3-1 砂辺根所での祈願



写真3-2 戦前のカニチグチ(ナカジン)での祈願



写真3-3 現在の綱引き場(照屋商店前)で、綱引きの雰囲気盛り上げる男たち



写真3-4 綱引き前の子どもたち



写真3-5 綱引きの様子



写真3-6 綱引き後の婦人たちのカチャーシー

【1997年7月18日（旧暦6月14日）】

- 19：30 ニードゥクル（根所）での拝み終了。
- 20：20 ボラやドラ鐘が鳴り始める。ナカジンでの拝み（知念正一さん）
- 20：40 照屋商店前では、鳴り物での囃しが始まっており、綱も用意されている。
- 20：57 人々が集まり出したので、一斉に鳴り物を鳴らして、綱を引く用意をする。
- 21：08 中央に集合して、旧字戸主会の宮平昌信さんから説明があり、綱引きが始まった。道を境に東と西とに分けているが、人数を調整して均等に分けた。
- 1回目：まず東に引いて、西に引いて、東に引いてスタート。東の勝ち。
- 2回目：1回目とは場所を入れ替える。2回目はまず、西に引いて、東に引いて、西に引いてスタート。西の勝ち。
- 綱を引き終わると中央に揃って鳴り物を鳴らしあい、カチャーシーが始まる。
- 21：18 終了。その場で酒盛りになる。

③ 綱の材料と綱の形態

イ. 綱

砂辺では水田が少なかったため、綱の材料となる稲ワラは字北谷から購入していた。購入資金が字費で賄われたのかどうかは定かではない。綱打ちはメンダカリ（雄）がアシビナー（現砂辺公民館）に生えていたガジマルを利用し、イリンダカリ（雌）がメーヌチャングワー（前喜屋武小）屋敷横のサーターヤー（砂糖小屋）にあった大きなガジマルの木を利用した。

綱は雌雄の綱とも一番綱と二番綱の2本からなっていた。雌雄双方の一番綱には両端にカニチ（かんぬぎ）があり、前方のカニチは雌雄の綱を連結するもので、直径約60cm程であった。後方のカニチは双方それぞれの一番綱と二番綱とを連結するものであった。二番綱は両手でもって引ける程の太さであった、という。双方の一番綱、二番綱それぞれの長さについては不明であるが、雌雄の綱を連結すると、約100m程の長さになったようである。また、雌雄の一番綱には大人5、6人が引けるティーンナ（手綱）が付いていたようだが、その本数については不明である。

戦後、米軍用地として接收されていた砂辺集落だが、1954年に返還された後は、かつての集落を形作れるようになった。そこで1962（昭和37）年には米軍払い下げの1本のロープを利用して綱引きが再開された。ロープの材質は不明であるが、当時沖縄本島中部の小中学校の運動会でもよく活用された麻製のロープであったと思われる。

現在の綱は、那覇市内にて購入した全長約100m、直径約6cmの1本の麻製ロープである。ロープの中央には色の異なる布が3枚結ばれ、中央から1～2m後方の位置には青い布が結ばれている。

ロ. カニチ棒

戦前の砂辺の綱は、雌雄合わせて4本の綱からなっていたので、カニチ棒(かんぬき棒)は雌雄の綱を繋ぐ中央部分に1本、そして雌雄それぞれの一番綱と二番綱を繋ぐカニチ棒が1本ずつ使用された。雌雄の綱を繋ぐ中央のカニチ棒は直径約1尺(30cm)、長さが約5尺(150cm)程であった。雌雄それぞれの一番綱と二番綱をつぐカニチ棒については、中央のカニチ棒より小さかったというが、詳細な寸法については不明である。戦後の綱引きは、1本の麻製ロープを利用しているためカニチ棒は使用されていない。

④ 備え・示威行為

イ. 旗頭

砂辺の綱引きに旗頭は使わ⁽¹⁾なかった。現在おこなわれている綱引きにおいても使用しない。砂辺の旗頭は、旧暦7月7日のハタスガシーと、旧暦8月15日のムラアシビに使われていた。通常は根所(ニードウクル)に保管した。戦前の旗にはサトウキビの絵が描かれていたのを覚えているという(与儀正仁さん談)。『北谷町史』(1992:421-422)では、旗にはサトウキビの絵が書かれ、綱引きが終わると綱も旗も根所で保存したようだが、綱引き行事に旗頭を用いたという伝承は聞くことができなかった。

ロ. 楽器

戦前の綱引きで使う楽器には、ウフチヂン(大太鼓)とグマチヂン(締太鼓)、ボラ、ショウグ、ドラなどがあつた。これらの総称は特になかった。楽器を使ったのは青年男性で、使ってみたいと思う者が使った。ショウグやグマチヂンなど、楽器の練習はなく、先輩方のこれまでの打ち方を聞いて覚えた。ドラやボラは、集合の合図としても使われた。ドラ打ちは屋号蒲犬川小(カマーインカーグワー)に上手な方がいた。また、ボラはメンダカリの屋号牛松田小(ウシマチダグワー)に上手な方がいたという。

1996(平成8)年の綱引きには、子どもや成人男性らがショウグやドラを叩いたり、ボラを吹いたりして綱引き行事を報せた。綱を引く時には、ボラとショウゴ、ドラを叩いた。

ハ. テービー(松明)

戦前の砂辺では、夜に綱を引くことからテービー(松明)が使われた。このテービーは、綱引き場に灯りを灯すだけでなく、時にはガーエーで相手側と叩き合う道具としても使われた。戦後の綱引きでテービーを使うことはない。

さて、このテービーにはサトウキビの搾り殻を用いる。サトウキビの搾り殻を方言でウージガラー、あるいはシブイガラーという。ウージガラーは、サトウキビの収穫後、搾った殻を10日程干し、保管して置いたものを使った。ウージガラーは、砂糖を煮るときや、普段の生活でも燃料として使われていた。綱引きになると、各家から2~3本のウージガラーを集めた。メンダカリ、イリンダカリの双方に本数などの決まりはなかった。集められたウージガラーは、3~4本を束ねて使った。長さは2~3尺。綱引きには年配の方が

テービーを持って、メンダカリとイリンダカリの綱の端から端まで不正がないかどうか見回った。かつてテービーで屋号与那下小（ユナシチャグラー）の家の角が燃えたことがあったようで、それ以来、綱を引く前には屋号与那下小の家に水をかけるのが習わしとなっていた。

二. 綱引場に向かうまで

砂辺では綱を引く前にメンダカリは、屋号前照屋（メンティーラ）の角（屋号津嘉山屋小寄り）にあった広場に集合し、イリンダカリは屋号内犬川小（ウチインカーグラー）の前にあった広場に集合した。そして各組とも綱引き場であるナカミチに向かってミチジュネーを行った。スネーは、イリンダカリが集合場所から屋号前喜屋武小（メーヌチャングラー）とサーターヤー（砂糖小屋）の間の筋道を通ってナカミチに向かった。一方、メンダカリは、集合場所から東側に向かってナカミチに出た。

ホ. ガーエー

綱を引く前になると各組の男たちが、綱の上で踊りや空手を行った。男たちの演武の後に、綱を引いた。そして綱引きが終わると、綱を端に寄せ、カニチグチ付近でシーチェー（エッサー、シーチェースーブとも言う）を行った。これはメンダカリとイリンダカリの青年男性が、互いに腕から肩をぶつけ合う押し合いの競技であった。双方とも青年のなかでも力が強く、大柄の者を前方に、その他は後方から押し合った。

ところでシルークルーの政争時（大正末から昭和初期）、字内の綱引きはシルー、クルーに分かれて綱を引くことはなかったが、シーチェーの際には、テービーでもって相手を叩いたり、押し付けたりすることもあったという。女性達は、綱引きが終わると「チナーマキティン モーイヌ マキユミ、イヤッサ サーサッ サーサッ ハイヤ」と歌い踊った。

⑤ 衣装

特別な衣装はなかった。綱引きには汚れたり、テービーをつけられたりするので、一番ヤナジン（着古した衣服）を着け、濡れたタオルで頬被りをして、綱を引いた。シーチェーに加わる男たちは、メリヤスの長袖シャツに、タオルで頬被りをし、全身に水を浴び、ずぶ濡れの状態で競技に臨んだ。

⑥ 綱の引き方

イ. 綱寄せとかんぬきの合わせ方

戦前の砂辺の綱は、雌雄それぞれが一番綱と二番綱の2本の綱からできており、あらかじめ一番綱と二番綱のカニチを繋いで綱引

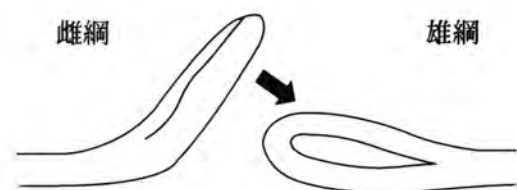


図3-1

き場のナカミチ（中道）に用意した。雌雄の綱を連結するための綱寄せの際には「ハルイヤ、ハーイヤ」のかけ声で雄綱を雌綱の方まで寄せていき、雌綱をかぶせるようにして連結した（図3-1を参照）。雌雄の綱を繋ぐカニチグチは、屋号与那下小と屋号松田小伊礼（マチダグワーイリー）との間であった。カニチ棒を貫くのは、誰という決まりはなかったが、青年の中でも腕力に自信のある者が担当したという。雌雄の綱を連結すると、まず、雄綱側に一度引いて、次に雌綱側に引いてから勝負をスタートさせた。綱を引く場合には、綱の前方を男性が引き、女性は半分から後ろを引いた。また、婚出女性の場合、実家側の綱を引くのではなく嫁ぎ先の綱を引いた。特別なシタクなどは出なかったが、綱を引く前には綱の上に数名の男性が乗って、踊りや空手などを披露した。

ロ. 綱引きの時刻・引く回数

砂辺の綱引きは、午後の7時～10時頃にかけて行われるユルジナ（夜綱）であった。大正7年か8年頃、一度だけヒルジナ（昼綱）を引いた。この頃からチンクが出るようになった、という。綱引きは2回行われ、1回目が終わるとエッサー（シーチェーともいう）をしてから2回目に移り、2回目を終わると再びエッサーをし、そのあと角力があつた。

⑦ 双分組織と綱引きの運営

戦前の砂辺では、南北に延びる集落中央の道を境に、メンダカリの雄綱と、イリンダカリの雌綱に分かれて綱を引いた。集落中央の道から南西側がメンダカリ、北東側がイリンダカリであった。メンダカリは、前チンジュと中チンジュ（チンジュはサーター組、葬式の手伝いの単位）で構成され、イリンダカリは、後中チンジュと西チンジュで構成されていた。綱打ちは、メンダカリがアシビナーのガジマルの木を利用し、イリンダカリは屋号内インガーグワー横のガジマルを利用した。

綱引き行事は、21歳から45歳までの男性たちで構成する二才組の中から選ばれたニーセーガシラ（二才頭）と、15歳から20歳までの男たちで構成する若者組の中から選ばれたワカムンガシラ（若者頭）を中心に行われた。彼らの任期はいずれも1、2カ年であった。チンク・ボラ・ソープガニも二才組のメンバーらが担当した。カニチ棒を貫く役は特に決まっていなかったが、カニチ棒は重いので力のある者が貫いたという。女性の組織は特になかった。

綱引きは、砂辺本集落の老若男女のみで行われ、砂辺ヌメーなどのヤードウイ（屋取集落）の人々が綱引きに参加することはなかった。綱引きが終了すると、メンダカリの綱は、屋号メンティーラ（前照屋）で保管され、イリンダカリの綱は屋号チカジャン（津嘉山）で保管した。

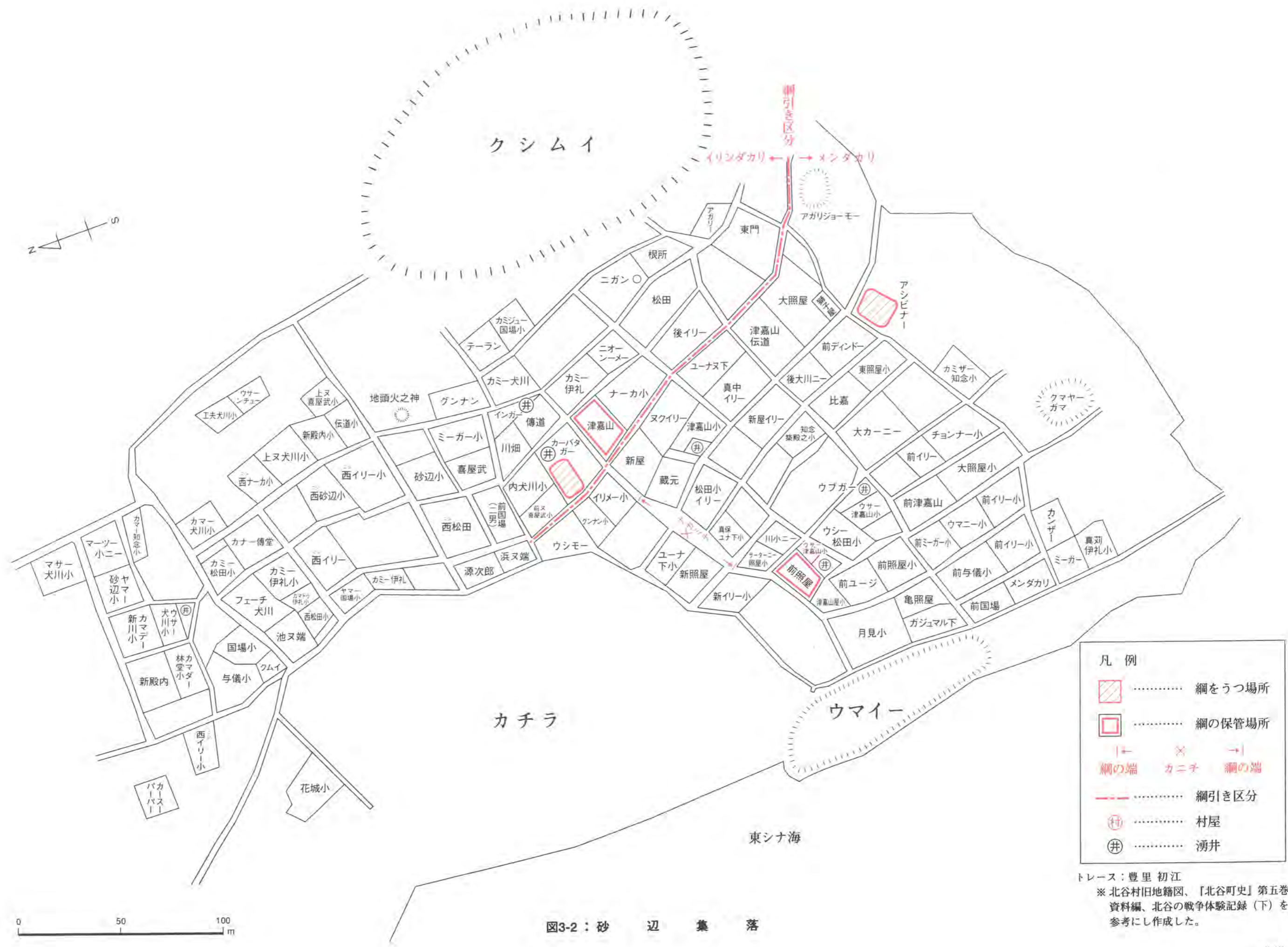
⑧ 祭祀儀礼

砂辺では、旧暦6月14日の綱引きに関する拝みや、旧暦8月15日の獅子舞いに関する

拝みは、戦前から男性の拝みといわれ、女性が関与することはなかった。戦前の砂辺では、綱引き当日の夕方になると、根所の当主をはじめ、ムラのヤクミ（役目）らが綱の神（綱引き場のナカミチで雌雄の綱を合わせるカニチグチ付近。ナカジンとも称す）へ豊作を感謝する祈りを捧げた。ムラ人たちは、男たちの祈りが終わるのを待って綱を引いた。各家庭では、ウユミ（折目）と称して、ご飯、御汁などを火ヌ神や、仏壇に供えてからナカミチへ出て綱を引いた。

現在の綱引きは、1本の麻製ロープを引き合う。1996（平成8）年の綱引きは、新暦の7月29日（旧暦6月14日）に行われた。その日の夕方、根所の御神屋では、神仏（神棚に向かって左側にムラデー火ヌ神、中央にカミウグワンス〈神御元祖〉、右側に千手観音画像が安置される）の前に、根所のピンシー・塩・ご飯・トーフンブサーなどが供えられ、当主の知念正一さんと、知念敏子さん（根所の娘）の二人によって祈願が行われた。

祈願を終えた知念正一さんは、旧字戸主会の役員らと共に戦前のナカミチ（現在の砂辺ハウジング通り）へ赴き、綱の神・地の神への祈願を行った。祈願には、根所のピンシーと、ウチャヌク（大中小三重の餅三組）、線香15本、白紙（小さく切った半紙3枚）を供え、字民の健康と字の繁栄を願った。なお、砂辺では雌雄の綱の勝敗によって豊作の吉凶を占う年占の伝承や、綱引き後に行われる綱に関する特別な処理儀礼などは確認できない。



凡 例

- 網をうつ場所
- 網の保管場所
- |← × →|
網の端 カニチ 網の端
- 網引き区分
- 村屋
- 湧井

トレース：豊里 初江
 ※ 北谷村旧地籍図、『北谷町史』第五巻資料編、北谷の戦争体験記録(下)を参考にし作成した。

図3-2：砂 辺 集 落

(2) 下勢頭

① 期 日

下勢頭では、綱引きのことを「チナフィチ」といい、旧暦6月15日のウマチーの日に綱を引いていたが、のちに16日に変更され、1941（昭和16）年頃を最後に途絶えてしまった。16日に綱を引いたことについて、字の古老たちは、15日の月よりも16日の月のほうが満ち満ちた月なので、その日に綱を引くようになったのではないか、という。綱引きの起源については明治20年代～30年代ではないか、という。

② 綱の材料と綱の形態

イ. 綱

下勢頭では、毎年綱を新調するのではなく、綱を引き終わると綱を保管し、次の年はその綱を修繕して使用した。綱の保管場所はメンダカリ（前村渠）が下ヌ亀花城のアサギに保管していたが、昭和7、8年頃からは屋号前ヌ平良小で保管するようになった。クシンダカリ（後村渠）は屋号大佐久川で保管した。綱は雌雄とも2本の綱からなっており、2本の綱を連結すると各綱とも長さが40mにもなったという。各綱の最大直径は60cm程であった。綱の材料は稲ワラであった。ワラの調達は集落内で十分まかなえた、という。綱の修繕などは、メンダカリが屋号下ヌ亀花城の前の道から、屋号前ヌ平良小（喜友名家）前の道路に場所を移した。クシンダカリは、屋号大佐久川の前の道路で行った。また、雌雄の綱にはティーンナ（手綱）が数本付いていたようだが、その本数や寸法については確認できない。

ロ. カニチ棒

雌雄合わせて4本の綱で構成されていたので、カニチ棒は雌雄の綱を連結する中央のカニチ棒と、雌雄それぞれの前綱と後綱を繋ぐカニチ棒を1本ずつ用いた。雌雄の綱を連結する中央のカニチ棒の長さは7尺（約210cm）、太さは45～50cm程度であった。また双方の綱の前綱と後綱を繋ぐカニチ棒の長さは3尺（約90cm）であった、というが、太さについては聴取できない。カニチ棒には、チャーギ（イヌマキ）やアrik（アデク）が用いられた。雌雄の綱をつぐ中央のカニチ棒は、クシンダカリの屋号大佐久川で保管した。

③ 備え・示威行為

イ. 旗頭と楽器

下勢頭の綱引きに旗頭は使われなかった。

綱引きには、ボラとドラ2個、ソーグ2個、太鼓3個が使われた。これらの楽器類は、メンダカリ、クシンダカリと決まっておらず、字所有であった。そして綱引き前になると、子ども達がよく鳴る楽器の取り合いをしていた。ソーグには大きさが異なるウームナー

(大) とミームナー (小) があつた。楽器の練習はなく、子ども達は先輩方のを聞いて覚えた。メンダカリとクシンダカリとでリズムに違いはなかつたようである。そして、綱引き当日になると、子どもたちがドラや太鼓を叩きながら字内を回つて綱引きを報せた。ボラは、息とボラ口が合わないとうまく鳴らないため、誰にでもできるようなものではなかつた。クシンダカリでは、屋号池根小 (クムイニグラー) にソーグ、ボラの上手な方がいた。またメンダカリには、屋号加那津覇 (カナーツハ) にボラやソーグ打ちの上手な方がいた。ボラは綱引きの時だけではなく、青年を集める時や、村芝居の練習の際にも、集合の合図として使われた。

ロ. テービー (松明)

綱引き当日の昼間に、14~15人程の子どもたちが、楽器を鳴らしながら字内を回り、テービーの材料となるサトウキビの搾り殻、いわゆるウージンガラを各家から集めた。各家庭には搾り殻を提供するランクがあり、イチバンチネーの一等は5束、ニバンチネーの二等は4束、サンバンチネーの三等は2束、と本数が決められていた。長さは4尺、太さは10cm程であつた。旧暦の3~4月にかけてサトウキビを収穫すると、各家庭では綱引き用のテービーとしてサトウキビの搾り殻を保管していた。集められたテービーは、束にして綱引き場であるソンドウ (村道) に向かう時や、もしくは会場で灯した。テービーの本数は、メンダカリ、クシンダカリともに特に決まらなかつた、7~8本程であつた。テービーは綱引き場を明るくしたり、相手側の不正を見回るだけではなく、シーチェー (ガーエーの項参照) や、綱引き開始の合図にも用いられた。

ハ. 綱引き場に向かうまで

メンダカリは屋号前ヌ平良 (メヌティーラ) に、クシンダカリは屋号大佐久川 (サクガー) に集合した。集合すると、「ブージャンナー」と言う人員点呼が行われた。字内にとどの程度、男性がいるということは把握されているので、ブージャンナーの時にいないと酒一升の罰金が科せられた。点呼をとるのは、筆ができる人が行った。ブージャンナーが済むとソンドウ (村道) に向かつて綱を担ぎ、ドラや太鼓を叩きながらミチジュネーをした。メンダカリは屋号前ヌ平良から出発し、屋号加那津覇からソンドウに出た。クシンダカリは屋号大佐久川から出発して、屋号高江洲 (タケーシ)、屋号三良平良小 (サンラーティーラグラー) の前を通り、屋号加那津覇からソンドウに出た。ミチジュネーは、メンダカリ、クシンダカリ共に同じ道を通るので、メンダカリから先に出発した。ソンドウに出ると、綱の上でカチャーシーを踊りながら向かつた。綱の上には踊りの上手な人が上がった。落ちそうになることもあつたが、綱を担いでいる人が側で踊り手の足を掴まえていた。メンダカリの場合、ソンドウに出て屋号下花城 (シチャハナグシク) の前まで来ると折り返してクシンダカリと向かいあつた。

ニ. ガーエー

ミチジュネーをして綱を運んでくると、カニチグチ付近に綱を置いてシーチェーを行つ

た。下勢頭では、綱を2回引いたが2回とも引く前にシーチェーを行った。シーチェーは字の男性がメンダカリとクシダカリとに分かれ、腕から肩を使って互いにぶつかりあう競技で、相手側を4～5m程押すと決着がついた。シーチェーはただ押し合うだけでなく、テービーでの叩き合いや、水掛けもあった。水をかけられて全身ずぶ濡れの状態であったが、シーチェーが終わる頃には着物は乾いていた。そのためメンダカリは屋号下花城のイケ（溜め池）、クシダカリは、屋号前ハギ花城（メーハギハナグシク）のイケの水に浸かって再び濡らした。下勢頭の場合、綱引きはクシダカリが勝つが、シーチェーはメンダカリが勝つと大方決まっていたようである。

綱を引き終えると、屋号下花城の前の物置場で青年達が角力をとった。角力には、余所からの見物人も参加することができた。

④ 衣 装

テービーの火の粉が落ちてくるので、男女とも木綿の冬物を着ていた。また頭には、濡れたタオルで頬被りをした。

⑤ 綱の引き方

イ. 綱寄せとかんぬきの合わせ方

雌雄それぞれのメンバーが、踊手を乗せた一番綱と、二番綱を担いでソンドウ（村道）に入場してくると、一番綱と二番綱を連結させ、雌雄の綱をつぐカニチグチをはさんで双方が向かい合った。しばらくすると双方の青年たちによるシーチェーがはじまった。その後、「ユシレー、ハーイヤ」のかけ声にあわせて綱寄せが行われた。綱を寄せる場合、相手側の方に綱を寄せ過ぎると不利になるといって、双方ともなかなか綱を寄せようとはしなかった。そのため、綱寄せにはかなりの時間を要した。雌雄の綱をつぐ際には、雌綱を雄綱の横まで寄せ、カニチ部分の輪を立てたままの雄綱に、雌綱のカニチ部分を横のほうからかぶせるようにして連結した（図3-3参照）。中央のカニチ棒を貫くのはカニチ棒を保管するクシダカリの男性と決まっていた。カニチ棒を貫くと同時に綱引きの合図があった。

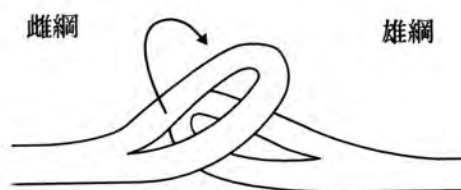


図3-3

下勢頭では、字の男性のみで綱を引き合うが、女性のなかには男装してまで綱を引こうとする人もいたという。しかし、双方には見回りがいたので不正はできなかった。また、メンダカリ側は道が下りになっていたため、一見、引きやすそうに思われるが、クシダカリ側が綱を上にあげて引くため、メンダカリが不利になり、クシダカリが勝つことが

多かったという。さらに、特別なシタクなどは出なかったが、年齢には関係なく、綱の上には踊りの上手な人が上って踊りを披露した。

ロ. 綱引きの時刻と引く回数

下勢頭では、夕食をすませ、外が暗くなる9時か10時頃に綱を引くユルジナ（夜綱）であった。綱引きは2回行われたが、2回とも真剣に綱を引いた。1回目を引き終わると、勝った組の男たちが一番綱の上で踊ったり、雌雄の綱をつぐ中央のカニチ棒をはずして、一番綱のカニチ部分を持ち上げたりした、という。

⑥ 双分組織と綱引きの運営

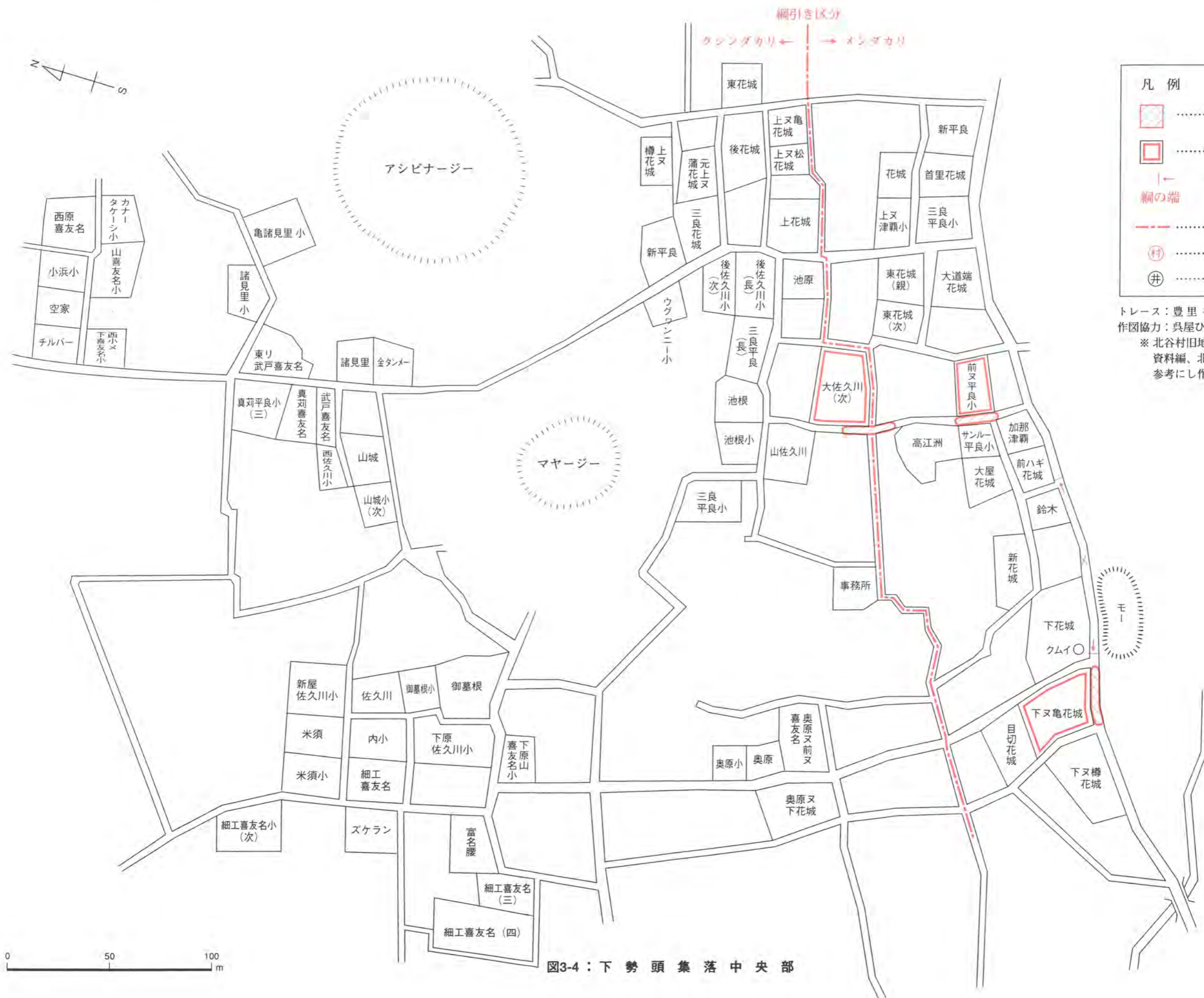
綱引きは、集落をメンダカリ（前村渠）とクシンダカリ（後村渠）に二分して行った。メンダカリは雄綱で1組、2組で構成され、クシンダカリは雌綱で3組、4組で構成された。下勢頭には行事責任者としてのチナガシラはいなかった。綱引きの準備にはムラの男性全員が参加した。綱打ちには、若い青年が綱の本体を作り、ティーンナ（手綱）は年寄りたちが作った。女性の組織はなかった。

綱引きには他ムラの人の見物は許されたが、実際に綱を引くのは下勢頭の男性のみであった。女兒であっても女性が綱引きに加わることはなかった。そのような中で伊礼千代さん（屋号津波）は、男性の格好をして、水で濡らした手ぬぐいを頭からかぶりメンダカリの綱を引いた。見回りの男性に見つかりすぐに逃げたが、再び戻って引いた。昔は女性も綱を引くことができたようだが、綱引きの翌日まで双方の女性たちが喧嘩をしていたことがあったといい、それ以来カリークジーヤー（吉祥をくじいた者）ということで、女性には綱を引かせなくなったという。

綱引き終了後、屋号シチャヌハナグシク前の広場で角力が行われた。このときは他ムラの見物人も参加してよかったが、ここでも下勢頭の女性たちは見物に徹した。ムラアシビでの踊りにしても男性だけで踊った、という下勢頭は、首里から「ムラ落ち」した士族によって立てられたムラであるから、士族社会の習慣（風習）の名残りが行事にも根強く反映されているという。もし下勢頭で、女性が綱を引くことがあれば、結婚した人は実家ではなく、婚出先の綱を引くだろうという。また次三男が別の組へ分家した場合には実家側でなく、住んでいるところの綱を引いた。

⑦ 祭祀儀礼

下勢頭では、綱引きに関連する特別な拌みはなかった、という。しかし、綱引き当日の旧暦6月16日には、各家庭では必ずミーマミー（収穫した新しい大豆）でつくった豆腐を神仏に供え、ウサンデー（直会）してから綱を引いた。古老たちは、大豆の収穫にあわせて、綱引きを行ったのではないかという。



凡例

 綱をうつ場所
 綱の保管場所
 綱の端
 綱引き区分
 村屋
 湧井

トレース：豊里 初江
 作図協力：具屋ひとみ
 ※北谷村旧地籍図、『北谷町史』第五巻資料編、北谷の戦争体験記録(下)を参考にし作成した。

図3-4：下勢頭集落中央部

(3) 平安山

① 期 日

綱引きを「チナヒチ」といい、旧暦の6月24日に行った。平安山では、1936（昭和11）、37（昭和12）年頃までエイサーが行われていたので、綱引きもその頃まで行われていたのではないかと、字の古老たちはいう。綱引きの由来や起源などについての伝承はない。

② 綱の材料と綱の形態

イ. 綱

綱は雌雄それぞれが1本ずつで、材料は稲ワラであった。材料の稲ワラは集落内でまかなえた。綱は、綱引き会場となるナカミチ（中道）で、前年の綱を修繕して使用した。綱の修繕は、ノロ殿内前の十字路で行われた。また、新たに綱を打つ場合もノロ殿内前の十字路で行った。

綱の寸法は雌雄それぞれの長さが約50m程、直径は大人が一抱えできる太さであった、ということから60cm程であったと推定される。ティーンナ（手綱）はついていたとの証言は得られたが、その本数や、寸法などについては不明である。綱を引き終わると、雌雄の綱とも、屋号ノロ殿内小（島袋家）のクラ小（畜舎の中二階）に保管した。

ロ. カニチ棒

カニチ棒の長さは、5尺から6尺（150～180cm）程で、太さは約40cm程であった。カニチ棒にはリュウキュウマツが使用され、綱引き後は綱とともに屋号ノロ殿内小（島袋家）に保管されていたようである。

③ 備え・示威行為

イ. 旗頭と楽器

平安山の綱引きに旗頭は用いなかった。

綱引き当日の午後12時頃、綱引き場のナカミチ（中道）に尋常小学校5年生～6年生の男子生徒が集まり、大太鼓やドラガニを打ち鳴らした。楽器類は、屋号西糸村（イリーイトムラ）に保管されていた。

ロ. テービー（松明）

綱引きには、綱引き場を明るくするためテービーが使われた。テービーには、各家庭から集められたワラや、ウージンガラ（サトウキビの搾り殻）が使われたが、大半がウージンガラであった。また、綱引き終了後のシーチェー（次項参照）の際には、テービーでもって双方が叩き合うこともあったので、相手に怪我を負わせるような竹を用いたテービーは危険ということから禁止されていた。テービーを持つのは年配の方々であったが、特に年齢は決まっていなかった。

ハ. ガーエー

平安山の綱引きにはミチジュネーはなく、ムラ人たちは綱引き場であるナカミチに三々五々集まった。綱はメーバーとクシペーに分かれて2回引いたが、2回目の綱引きを終えると、その場でシーチェーを行った。シーチェーとは、メーバーとクシペー合わせて20人程の青年男性たちが、互いにぶつかりあって押し合う競技であった。青年の中でも力が強い者が前方になった。シーチェーが終わると、テービーで火傷をしていることもあったので家に帰って水浴びをした。

④ 衣装

シーチェーに参加する男性は、メーチャー（短い布）という褌に似た肌着や、マルサナジ（7尺程の布）というものを巻き、濡れたタオルで頬被りをしていた。メーチャーやマルサナジなどは、各々の体格にあわせて各自で準備した。綱引きの際には、力がはいるように強く引き締めて着用した。他の人々は、普段着に、手ぬぐいなどでコーガーキ（頬被り）をして綱を引いた。

⑤ 綱の引き方

イ. 綱寄せとかんぬきの合わせ方

午後の12時頃から、屋号ヌルドウンチグラーのクラグラー（倉小）に保管していた綱をナカミチに出して来て、綱引きの準備をした。その際には、綱を点検して修繕なども行った。子どもたち（学生）もナカミチに出て来て、太鼓やドラ鐘を鳴らした。

綱引きの時刻になるとナカミチに用意された綱を、「ハーイヤ」の掛け声にあわせてカニチグチ（屋号ヌルドウンチ前の十字路）まで寄せてきた。カニチグチまで雌雄の綱を寄せると、雄綱をたて、雌綱をかぶせるようにして雌雄のカニチをあわせた（図3-1参照）。あわせたカニチ部分にカニチ棒が貫かれると、ムラガシラ（村頭、今の区長にあたる）の合図で綱を引いた。平安山の綱引きは男女総出で引いた。シタクは出なかった。また、負けないようにと、綱の最後尾を木に括ったりすることもあったようだが、双方の組には相手側の不正を見回る係がいたので、すぐに発見された。

ロ. 綱引きの時刻と引く回数

綱引きは、日が暮れた午後の8時～9時頃にかけて行われ、2回勝負であった。1回目の勝負が終わってもカニチ棒をはずしたり、双方のメンバーが場所を入れ替わったりして綱を引くことはなかった。勝負は2回とも真剣に行われ、引き分けであっても2回で終了した。

⑥ 双分組織と綱引きの運営

平安山では、屋号玉城小の前から、屋号東門小までの道を境に、メーバー（アガリ）の

雄綱と、クシペー（イリ）の雌綱に分けて綱を引いた。しかし、実際には当時の40戸程の戸数をメーペーと、クシペーの人数が平等になるよう調整などもおこなわれたので、毎年変わる流動的な組分けであったともいう。例えば、ヤーワカヤー（分家）などでアガリの人数が増えたら、アガリの人であってもイリを引いて人数のバランスをとったという。昭和以前に、一度だけ他ムラの人も参加させて綱を引いたことがあったようだが、その後はムラの老若男女に限定した綱引きに戻った。

綱引きには、チナガシラやニーセーガシラなどの行事責任者はいなかった。平安山では、字の有志らが綱引き行事での役割を分担した。字の有志らは年齢によって呼び方が異なっていた。25歳までの男性を「青年」、30～40歳代の男性を「若長老」、それ以上の男性たちを「長老」といった。綱引き行事は、長老の指示のもと、若長老と青年たちが実際の運営にあたった。また、松明（テービー）を持ったのは、主に長老たちであった。さらに尋常小学校6年生から高等科までの子どもたちが太鼓や銅鑼を担当するなど、ムラ全体が綱引きの行事に関わっていた。

平安山では、男女ともに綱引きに参加できたが、妊婦に関しては「綱を引いてはならない」、「綱を跳び越えてはいけない」というようなタブーがあったようである。

⑦ 祭祀儀礼

戦前の平安山には、砂辺・浜川・伊礼・桑江・平安山の五カ字を管轄する平安山ノロがいた。平安山ノロは、5月ウマチーと6月ウマチーの二ウマチーには、五カ字を回って祈願をおこなった。しかし、旧暦6月24日の綱引きに関連するノロの拝みや、平安山ムラのヤクミ（役目）らによる祈願などはなかった。ただし、平安山でも綱引きの行われる旧暦6月24日をカシチーウユミと称して、各家庭では白カシチーや、豆腐ンブサーなどを神仏に供えて家族の健康を願った、という。

(4) 桑江

① 期日

旧暦6月24日のカシチーの日に、カシチージナ（綱）として毎年綱を引いた。桑江の例年の綱引きは、1943（昭和18）年頃まで行われていたようであるが、戦後は途絶えてしまった。桑江では、ヤードゥイ（屋取集落）の桑江又前・桑江又中・桑江又後の人々も参加して綱を引いた。

桑江では、6月カシチーを定日とする例年の綱引きのほか、保守・革新の選挙絡みの「字綱」という綱引きがンマイーで行われた、という（仲村渠吉三さん談）。この字綱には、桑江本字のメンダカリに屋取集落の桑江又前が加わり、クシンダリには桑江又中・桑江又後が加わった。この字綱が何時頃行われたのかは不明である。

② 綱の材料と綱の形態

イ. 綱

昭和18年頃の綱引きは、稲ワラで作った雌雄1本の綱を引いていた。材料となる稲ワラは集落内で十分まかなえた、という。綱引き後の綱は、メンダカリが屋号アガリスルペーチングワー（大城家）のアサギに保管し、クシンダカリは屋号ナカミチザチングワー（座喜味家）に保管した。ただし、クシンダカリの綱については、屋号イリー（伊礼家）に保管したとの証言もあった。新たに綱を打つ場合には、メンダカリがムラの神屋である屋号ユナグシク（与那城）の角にあったガジマルの木を利用して打ち、クシンダカリは屋号ナカミチザチングワーの角にあったシークワサーの木を利用して打った。綱の長さは雌雄の綱とも50～60m程で、各綱にはティーンナ（手綱）が付いていたようであるが、その本数や寸法などについては不明である。

1970年代に、大正時代の桑江の綱引きについて調査した平敷令治によれば、大正の中頃までは、雌雄の綱は、いずれも、メージナ（前綱）・ナカジナ（中綱）・クシジナ（後綱）の3本からなっており、雌雄の綱の前綱は桑江本字で、中綱と後綱は小字に割り当てられ、前綱と中綱には両端にカナチ（かんぬき用の輪）があり、後綱は頭の部分だけがカナチであったという。そして、その後の綱の変化について平敷は、水田面積の減少から雌雄1本ずつの綱になったと述べている（平敷、1990：21-22）。

ロ. カニチ棒

雌雄の綱1本を引くようになってからは、1本のカニチ棒を使用した。カニチ棒の長さは6尺（180cm）程で、直径は約25cm程であった。材質はリュウキュウマツで、保管場所は屋号ナカミチザチングワー（座喜味家）であった。

③ 備え・示威行為

イ. 旗頭と楽器

桑江の綱引きに旗頭は用いなかった。屋号与那城（ユナグシク）には、旧暦8月15日の村芝居で使った衣装や小道具等の他に旗頭も保管されていたようだが、綱引きにそれを使うことはなかった。

綱引きで使う楽器類には、ドラガニとボラがあった。メンダカリとクシダカリの双方でドラガニとボラを綱引き場であるナカミチ（中道）で使った。ショウグや太鼓はなかった。1937（昭和12）、38年頃には、ドラガニだけが使われていたようである。このドラガニは、メンダカリとクシダカリとでは形が異なっていた。メンダカリのドラガニは、“イシガニー”と言っていた。イシガニーとは硬いカネのことである。クシダカリのは、メンダカリより直径の幅が大きかったが厚み自体はそうなかった。そして、綱を引く時には、年配の男性が使った。これらの楽器は、旗頭と同様に屋号与那城に保管されていた。

ロ. テービー

綱引きに使われたテービーには、ウージンガラ（サトウキビの搾り殻）やトゥブシ、ワラ、カヤ、ヤンバルダキのいずれかを束ねて使った。1937（昭和12）、38年頃はウージンガラが使われていた。綱引き当日になると、ニーセーガシラの指示で尋常小学校5年～6年生の男子がドラガニを打ち鳴らしながら字内をまわり、テービーに用いるサトウキビの搾り殻を各家から2本ずつ集めた。集められたウージンガラは、10本程束ねてテービーとして使った。綱引きの時にテービーを使う人は、タオルで頬被りをしていた。

ハ. ガーエー

綱を引く前にはナカミチ（中道）で10分～20分程、メンダカリ、クシダカリの青年男性が互いに押し合ったり、棒を使ったりするガーエーを行った。その時、テービーも使われた。興奮してテービーでもって相手の頭や背中を叩いたりすることもあったが、翌日には相手に労いの言葉をかけた。ガーエーで使う棒には、三尺棒と六尺棒があった。桑江には廃藩置県の頃に鹿児島県から移住してきた“ナカダのボンサン”と呼ばれていた方がおり、この方が三尺棒を使っていたようである。婦人たちがチヂンを打ったりすることはなかった。そして、綱引きが終わるとシマ（角力）をとった。

1937（昭和12）、38年頃の綱引きには、綱を引く前に、ドラガニの合図で“メーカタ”（舞方）が行われた。メンダカリ、クシダカリのいずれかの青年が1人出てきて、相手を威嚇するようにメーカタをみせた。メーカタには、特に決まった型はなく、個々人によって上手下手があった。これに対して相手が出てくると、レスリングのように相手を倒す“トーセー”となった。綱引きのメーカタの時にはドラガニで音頭をとるが、モーアシビ（毛遊び）の時には、三味線に合わせて行った。

メーカタで対戦相手が出てこなくなると、次にメンダカリ、クシダカリの青年たちが

互いにぶつかりあう“シーチェー”を行った。仲村渠吉三さんが、かつて先輩から教えていただいた相手にぶつかる方法は、左手を曲げて自分の胸を守り、左の肩から二の腕で相手にぶつかる。そして右手で相手を叩くという。メーカタやシーチェーには、字内の男性が参加し、他字の者は参加しなかった。テービーを使って綱引き場を明るくしていたが、時にはテービーでもって相手を叩くこともあった。綱引きを終えると、ンマイー（馬場）に場所を移し、他字の人も参加してシマ（角力）が行われた。

④ 衣 装

男女とも普段着のスティチラーやバサーチン（芭蕉衣）を着て、頭からは手ぬぐいなどで頬被りをしていたが、女性のなかには、タティアヤーやアカズミという柄の着物を着ている人もいた。しかし、ユカッチュ（旧土族）ではないので、大きな柄ではなかった。昭和にはいると洋服姿も多くなり、着物姿と半々であった。子どもたちは学生スガイ（白のシャツにズボン）をしていた。

⑤ 綱の引き方

イ. 綱寄せとかんぬきの合わせ方

午前10時頃から役員や青年らが準備に取りかかり、それぞれの綱の保管場所（1. 綱の材料と綱の形態参照）から綱を出して来て、綱引き場のナカミチに用意した。綱引きの時刻になるとナカミチには人が集まり始め、メーカタがあり、ガーエーへと続き、綱引きが始まった。綱を引く前には、雌雄の綱を連結するための綱寄せがあった。綱寄せは、カニチ部分の輪を横に向けた態勢で立てた雄綱と（写真2-130参照）、カニチの輪を上に向けた態勢で後ろに反らせた雌綱を（写真2-131参照）向かい合わせてから、「ハルイヤ、ハルイヤ」の掛け声で綱を寄せていった。カニチの合わせ方について聞き取り調査では、雌綱をかぶせるように連結したという意見や、雄綱を貫いて連結したという意見があったが、どちらも記憶が曖昧であるとのことであった。カニチ棒を貫くのは、40歳代の力に自信のある男性がメンダカリから1人、クシンダカリから1人出てきて、カニチ棒をわきに抱えて貫いたという。シタクは出なかった。

ロ. 綱引きの時刻と引く回数

メンダカリとクシンダカリに分かれて引いた桑江の綱引きは、夕食をすませた午後8時頃から引く、ユルジナ（夜綱）であった。綱引きは1回で勝敗を決めた。下り側に位置し、応援も多いメンダカリがよく勝っていた、という。

⑥ 双分組織と綱引きの運営

綱引きは、集落の中央を走る道を境に北側をクシンダカリ、南側をメンダカリに二分して行った。屋取集落の、桑江又中・桑江又後などの人々も参加することができた。桑江又

後はクシダカリの雄綱に加わり、桑江ヌ中はメンダカリの雌綱に加わった。綱引きには、ニーセーガシラと呼ばれる行事責任者がいた。ニーセーガシラはメンダカリ、クシダカリ双方の25、6歳～40歳までの男性の中から1人ずつ選ばれ、綱打ちや綱引きの合図など行事の全日程に関する責任者であった。

ところで戦前はムラの中で結婚が行われることが多かったので、ほとんど親戚同士で綱を引いた、という。メンダカリの女性がクシダカリへ嫁いだ場合、嫁ぎ先の綱を引いた。しかし、他の字に嫁いだ女性は、実家側の綱を引いた。また、結婚後は綱を引いた覚えがないという方もいた。

⑦ 祭祀儀礼

桑江や平安山では6月24日をカシチーウユミと定め、各家庭では白カシチー（新米で炊いた御強）をつくって神仏に供えた。桑江では昭和18年ころまで、カシチーウユミの日に綱を引いた。綱引きやカシチーに関連するムラからの拌みなどはなかったという。他の字より一日早くカシチーを供えることについて桑江では、白カシチーを6月25日につくり、神仏に供えたら直ぐに腐れてしまったため、それからは一日早くカシチーを供えるようになったと伝えられている。

綱引きは1回で勝敗を決め、メンダカリが勝てばユガフーといわれた。数本のカニチ棒で連結した綱を引いていた大正の中頃までは、子どもたちがあらかじめ作った「大」の字に似たワラ製の人形を竿の先につけ、カナチグチまでスネーイし、それをカニチグチで焼いた。カニチ焼きを担当したのも子ども達であった（平敷、1990：22-23）。雌雄各1本の綱を引くようになってからは、綱作りで残ったワラを集めて、それを焼くようになった。



凡例	
	綱をうつ場所
	綱の保管場所
	綱の端
	カニチ
	綱の端
	綱引き区分
	村屋
	湧井

トレース：豊里 初江
 作図協力：呉屋ひとみ
 ※北谷村旧地籍図、『北谷町史』第五巻資料編、北谷の戦争体験記録(下)を参考に作成した。

図3-6：桑江集落

(5) 北 谷

① 期 日

字北谷では、旧暦6月25日のカシチーウユミの日に綱引きを行った。字単位で行う綱引きをはじめ、年中行事の期日について字北谷の仲村渠敏子さんから興味深い話が聞けた。仲村渠さんによると、かつての北谷トンネルを境に、北側の字では、南側の字よりも行事の期日が一日早くなるという。たとえば、南側の字北谷や、伝道・玉代勢の三カ字では旧暦6月25日のカシチーウユミに綱引きが行われたが、北側の桑江や、平安山・野里では、旧暦6月24日にカシチー行事を行い、綱引きもその日に行ったという。また、ムーチー行事も北側の字では一日早く行われていたのを記憶しているという。敏子さんの母親は字野里から字北谷に嫁いできたので、敏子さんは、一日早い野里での行事と、翌日の字北谷での行事と、二度も行事に参加することができたうえ、御馳走も二度食べることができたので、子ども心にも非常にうれしく印象深く残っているという。

② 綱の材料と綱の形態

イ. 綱

綱は雌雄、いずれも1本ずつであった。材料は稲ワラであった。材料の稲ワラは集落内でまかなえた。雄綱の長さは40～50m程、直径は30cm程で、ティーンナ（手綱）が付いていた。雌綱の長さや太さについては確認できなかったが、雄綱とほぼ同じであったと推測される。また、1本のティーンナの長さは3尺（90cm）ほどで、太さは3寸（9cm）ほどであったというが、本数については不明である。

綱の材料となる稲ワラは、米の作付け面積の多寡に応じて各家毎に提供する量が決められていた。たとえば、作付け面積が少ない家からは3タバイ（1タバイは指を3本合わせた太さ）、多い家からは10タバイというように割り当てられていた。

綱打ちは、メンダカリが組合の敷地内で行われた（『北谷町史 第三巻』には、ムラヤーの大きなガジマルの下で行われたとあるが、確認できない）。クシンダカリは北玉小学校の敷地内で綱を打った。北玉小学校では、直径2寸5分（7.5cm）ほどの綱を3本打ち、その綱をンマイ（馬場）に運んで、そこで3本の綱をひとつに束ねて本綱に仕上げた。その際には直径3寸ほどの縄を用いて、2尺～3尺ほどの間隔で3本の綱をひとつに束ねた。そして、その縄を延ばしてティーンナにした。また、カニチグチから約4～5尺（120cm～150cm）ほど後方までは、細い縄を利用してきれいに巻いた。

綱は保管して次の年に使う。綱の保管は、メンダカリが屋号キチンミ（吉味家）で、クシンダカリが屋号イリパーチングワーであった。イリパーチングワーでは、アサギの天井に保管したようであるが、キチンミでの保管場所については確認できなかった。なお、次の年に綱を新調する予定がある場合には、入札を行い、引き終えた綱を売却した。また、

落札したものが綱引き後の片付けもおこなったようである。

ロ. カニチ棒

カニチ棒は1本で、長さ6～7尺（180cm～210cm）ほどであったが、太さについては不明である。材質はリュウキュウマツで、朽ちて折れると危険なので毎年新調した。

③ 備え・示威行為

イ. 旗頭

例年の綱引きには、旗頭は用いなかった。旗頭は寅年の大綱引き（ウーナ）の時にメンダカリ、クシダカリ各2本ずつの計4本用いた（大綱引きに使う旗頭については、第二章2・備え・示威行為を参照のこと）。

ロ. テービー

綱引きに使うテービーには、サトウキビの搾り殻（ウージンガラ）が使われた。長さは6尺ほどで、3～4本を縄で束ねて使った。その直径は2寸5分程であった。ウージンガラは各家庭から提供され、メンダカリが組合敷地で、クシダカリは北玉小学校での綱作りの際に作った。本数は決まっていなかった。綱引きがはじまると、見物人をテービーを使って急き立てて綱引きに参加させた。また、“チナヒチガー”あるいは“ウーナイ、クーナイ”と言って、日頃何らかの恨みを持っている人が、綱引きにはテービーで、その相手を叩いたりしても許された。

ハ. ガーエー

綱引きに使われた楽器はドラガニで、メンダカリ、クシダカリに各1個ずつあった。メンダカリ、クシダカリで1本1本作られた綱は、綱引き場であるンマイ（馬場）で組み立てられた。そのためミチジュネーはなかった。そして綱引きが終わると、その場でメンダカリ、クシダカリ双方が、“サーサーガーエー”と言ってシーチェー（押し合い）を行った。シーチェーはメンダカリ、クシダカリ、あるいは男女関係なく入り交ざって「サーサーサーサー」と叫びながら背中や腕を使って押し合う競技であった。

これが終わると、“メーカタ（舞方）”が行われた。このメーカタには、先のサーサーガーエーとは異なり腕力のある青年男性が参加した。メンダカリがクシダカリに対して、クシダカリがメンダカリに対して意地を表す競技であった。青年男性が出て空手の型を相手に示した。これを“メーカタ”と言った。型は特に決まっておらず、個々の型を披露した。そのため上手な人、下手な人がいたようである。型の囃子は「タチミソリ、メーカタ…」などと三味線のリズムに合わせて歌を歌ったりすることはなく、ドラガニを使った。そして「トー、ナイシガ ウラ ンジレー」と言って相手を誘い出した。相手が「トー、クレーワーガ ナイン」と思って出てくると、組み手となり、相手を倒す勝負となった。これを“トーセークルバセー”といった。メーカタとトーセークルバセーを含めて“メーカタ”と言った。このトーセークルバセーは、相手を転ばした時点で勝負はついたが、メ

一カタの型を示した後に必ず行われるわけではなかった。例えば相手側から自分より年齢の離れた年配者が出てきた場合等には、お互いにメーカタの型を披露するだけで、そのまま退場することもあった。メーカタの周囲を円になって取り囲んで見物し、誰も双方の加勢には加わらなかった。このメーカタで勝つことは名誉なことであった。メーカタは、綱引きだけに行われるのではなく、モーアシビ（毛遊び）にも行われた。この時は歌や三味線のリズムに合わせてメーカタをし、そのままトーセークルバセーが始まった。

④ 衣装

ムラ人の多くがヤーカラチャー（普段着）のまま綱を引いた。しかし、女性のなかには黒地にユチゲー（小さな水玉模様に似た柄）の入ったおしゃれ着を着ている人もいた。お年寄り（男性）の場合は、バサー（芭蕉布）のボウジマー（2本綾）やスティチラーが主であった。

⑤ 綱の引き方

イ. 綱寄せとかんぬきの合わせ方

綱引きの前日には、綱の保管場所からシマイに綱を出して来て修繕などを行った。修繕を終えた雌雄の綱は、綱寄せのためにカニチグチに間隔をあけて置かれた。当日は、「ユシレー、ヒーヤー」の掛け声にあわせ雌雄の綱をカニチグチまで寄せていくと、雄綱のカニチ部分を立て、雌綱のカニチ部分をかぶせるようにして連結させた（図3-1）。カニチ棒は双方から力のある者が5人ぐらい出てきて10人程で貫いた。綱引きの合図は区長、あるいはスーガシラの役目と決まっていた。北谷の綱引きは「イーカタシデー」といって、男女、他ムラ関係なく誰でも参加できた。毎年の綱引きにはシタクは出なかった。

ロ. 綱引きの時刻と引く回数

綱引きは夜の10時～12時頃おこなわれた。綱を引く回数は1回と2回という意見があったが1回勝負だったという意見が多かった。クシンダカリ（雄綱）が勝つとユガフーといわれたという。綱はカニチグチから少しでも動けばそこで勝敗が決まった。

⑥ 双分組織と綱引きの運営

綱引きは、集落内のスージ道によってメンダカリとクシンダカリに分けて行われた。このスージには特に名称はない。メンダカリはイリ（西）で雌綱、クシンダカリはアガリ（東）で雄綱であった。綱を新しくする場合には、クシンダカリが学校敷地（北玉小学校）を利用し、メンダカリは組合敷地を利用して綱を打った。

字北谷には、ムラのヤクミ（役目）として区長が1人、スーガシラがメンダカリとクシンダカリに1人ずつ。さらにニーセーガシラがメンダカリとクシンダカリに2人ずついた。区長は、字の行政に関する責任者（『北谷町史』第三巻：59）で、スーガシラは綱引き

をはじめ、年中行事などの責任者であった。また、1号、2号、3号（「号」とは、戦争直前に字北谷の旧集落を1号・2号、分家が多かったカニク・メーヌハルを3号として分けたムラの下位区分、『北谷町史』第三巻：58）からはサジと呼ばれる連絡係が1人ずつ出た。綱引きは、2人のスーガシラを中心に、4人のニーサーガシラらを補佐役として運営された。綱引き後のカニチ焼きも男性役員らが行った。

毎年の綱引きには、カネは使用したようだが、特別な綱引き歌やそのリズムを取るチヂンなどはなかったようである。綱の保管は、イリパーチングワウのアサギや、キチンミの空き家などを利用した。

⑦ 祭祀儀礼

戦前の字北谷では、綱引き当日（旧暦6月25日）になると字のヤクミ（区長・スーガシラ・ニーサーガシラなど）らが、村屋の敷地内にまつられる火ヌ神を拝み、綱引きの成功を願った。ノロ殿内では、6月カシチーウユミと称して白カシチーやお汁などを供えて、家族の健康を願うほか、北谷ノロがノロ殿内の神仏に綱引きの安全と、その加護を願った。

昭和13、4年ころまで毎年行われていた字北谷の綱引きは、集落を南北に二分し、北側をクシンダカリ（雄綱）、南側をメンダカリ（雌綱）として勝負を2回おこない、クシンダカリの雄綱が勝利をおさめると、豊作になるといわれた。また、綱を引き終わると雌雄の綱組のメンバーらがカニチグチ付近で、ワラ束を焼くカニチ焼きの儀礼があった。カニチ焼きとは、あらかじめ準備したワラ束に火を点け、そのワラ束を高くかざしてぶつけ合った後、ワラ束を川や溜め池に投げ入れる儀礼であった。クシンダカリ（雄綱）は、戦前の集落北側に位置したスーガー（塩川）近くのローラー橋（ティーイ橋）の上からワラ束を用水路に投げ入れたり（照屋正吉さん談）、屋号川小ヌ上近くのガジマルの木の下に放置したりした（仲村新正さん談）。メンダカリ（雌綱）は、綱引き会場であるンマイー（馬場）の南端に位置したンマアミシグムイ（馬を浴びせる溜め池）にワラ束を投げ入れた。カニチ焼きの儀礼は、スーガシラや、ニーサーガシラ（二才頭）を中心に字の男たちによって行われる儀礼であった。

さらに、戦前はこの日に実家の兄弟が婚出した姉妹に対し、新米で炊いたご飯を御馳走したり、お土産としてムイブン（スンカンマカイに大盛りにしたご飯）を持たせたりする「シチュマカミラシ」の行事もあったが、現在は行われていない。

戦後は例年の綱引きは途絶えてしまったが、北谷ノロ殿内では、1988（昭和63）年の「綱のカヌチ根軸」の石碑建立以来、旧暦6月24日には、この場所において綱の神への拝みを行うようになった。翌25日には6月カシチーウユミとして、ご飯、ソーキ汁、刺身などをノロ殿内の神仏や、母屋の仏壇に供えて、家人の健康や字民の健康、そして字の繁栄などを願う。旧字北谷郷友会からは、郷友会の三役をはじめ、郷友会の有志らが綱引きに関する拝みを、戦前の村屋に代えてノロ殿内で行っている。



凡例

- 網をうつ場所
- 網の保管場所
- ← × →
網の端 カニチ 網の端
- 網引き区分
- 村 村屋
- 井 湧井

トレース：豊里 初江
 作図協力：兵屋ひとみ・与那嶺 寿
 ※北谷村旧地籍図、『北谷町史』第五巻資料編、北谷の戦争体験記録(下)を参考に作成した。

図3-7：北谷集落

(6) 伝道

① 期日

旧暦6月25日に行われていた例年の綱引きは、尋常小学校1年生から高等科2年生までの子どもたちを中心に行うワラビジナ（子ども綱）であった。ワラビジナの由来などについては伝承されていない。

② 綱の材料と綱の形態

戦前の綱は雌雄それぞれ1本ずつであった。材料の稲ワラは集落内で賄えたようである。稲ワラは各家から5束ずつ集められた。雌雄の綱の長さは、それぞれ5～10m程で、太さは50cm程であったという。カニチ棒の詳細については不明である。

③ 備え・示威行為

イ. 旗頭

例年の綱引きに旗頭は使われなかった。寅年に行う大綱引きに旗頭を1本用いた（大綱引きに使う旗頭については、第二章 2・備え・示威行為を参照）。

ロ. 楽器とテービー

綱引きに使った楽器は、アガリ（イーンダカリ）とイリ（シチャンダカリ）に1個ずつのドラガニだけであった。このドラガニを“ムラガニ”と言った。綱引きには双方のメンバーがよく鳴るドラガニを取り合った。ドラガニ打ちを担当したのは尋常小学校高等科2年生程度の少年たちであった。

テービーは、1本の竹を芯にして、5～6本のウージンガラー（サトウキビの搾り殻）を被せて使った。伝道の綱引きは、子どもたちを中心とした綱引きではあったが、青年や年配の方々も綱引きに加わることができたため、周囲で見物していると、テービーでもって綱を引くように促された。ガーエーも綱引きで勝ったところの青年がメーカタをした。

④ 衣装

多くのムラ人がバサーや緋の着物を着ていた。テービーを持つ者は、濡れたタオルで頬被りをしていた。

⑤ 綱の引き方

イ. 綱寄せとかんぬきの合わせ方

イーンダカリ（上村渠）、シチャンダカリ（下村渠）双方とも綱打ち場から綱を担いできた。それぞれ「ワッショイ」「ヨイショ」な

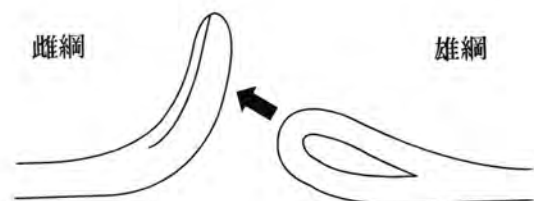


図3-8

どと声を掛けて大人たちが手助けしながら、子どもたちが綱引き場のナカミチまで担いできた。ワラ集めから綱作りまですべて子どもたちで行ったが、まかせきりというわけではなかったという。

カニチグチまで綱を寄せると、雌綱の輪を上に向けた状態で後ろに反らせておき、雄綱を立てて、そのまま差し込むようにして連結させた(図3-8参照)。屋号メーヌヤー(前ヌ屋・イリ)と屋号カーヌウィー(カーヌ上・アガリ)辺りがカニチグチであった。カニチ棒を貫くのは青年たちがおこない、子どもたちにはさわらせなかったという。シタクは出なかった。

ロ. 綱引きの時刻と引く回数

綱引きは、夕食をすませた午後8時頃から引くユルジナ(夜綱)であった。綱引きは2回行われたが、2回とも真剣に勝負を行った。母親たちは応援をしながら綱の後ろを引いて加勢したという。

⑥ 双分組織と綱引きの運営

字伝道の綱引きは、字内の子どもを中心に引くワラビジナであった。綱引きの中心となる子供たちの年齢については、尋常小学校の男子だけという人や、小学校1年生から8年生(高等科2年)までという人もいた。

また、綱打ちをはじめ綱引きの準備などは、父親やムラの男たちの指導の下、アガリとイリの子どもたちが行った。アガリはリンドーガー(村川)のすぐ側のガジマルを利用して綱を打ち、イリは屋号バシガーイリーと、屋号ナガタイの間にあったガジマルを利用して綱打ちをおこなった。

綱引きは、幅2間程(360cm)の道を境にして、イリ(屋号メーヌヤー側)の雌綱とアガリ(屋号カーヌウィー側)の雄綱に分かれて引いた。また、アガリをイーダカリ、イリをシチャンダカリともいった。綱を引くときは、父母や他の大人たちも加勢して両方勝たせてあげたが、あくまでも綱引きの中心は子供たちであった。女性が綱を引く場合は後方で引いた。大人は字の綱引きが終わると、字北谷の綱引きを見物に行った。

⑦ 祭祀儀礼

伝道でも、豊作などの願いを込めて綱を引いたという。大綱引き(ウーナ)のメーウガミ(前拝み)のようにムラをあげて拝所を巡拝することなどはなかったが、子どもたちの綱引きが終了すると、ムラのヤクミ(役目)や有志らによって、豊作とムラ人の健康を願うカニチ焼きの儀礼が行われた。イーダカリはカーニーモー、シチャンダカリはモーグラーメーでカニチを焼いた。カニチ焼きには、ワラ束を焼くこともあれば、あらかじめ準備したワラ人形を焼くこともあった、という(伊礼勝善さん談)。

各家々では、6月カシチーウユミといって、白カシチーを作ってお供えしたり、他家に嫁いだ姉妹に対し兄弟からの、「シチュマカミラシ」もおこなわれた。



トレース：豊里 初江
 作図協力：呉屋ひとみ
 ※ 北谷村旧地籍図、「北谷町史」第五巻資料編、北谷の戦争体験記録（下）を参考に作成した。

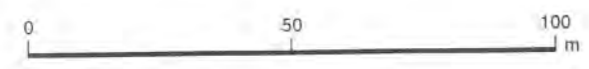


図3-9：伝道集落

(7) 玉代勢

① 期 日

昭和16年頃まで行われていた毎年の綱引きをワラビジナといい、旧暦の6月25日のカシチーウユミ（折目）の日におこなった。綱引きは子どもたちと17、8歳の青年を中心に行われた。綱引きについて、ある古老は、綱引きを取りやめたある年に良くない出来事が起こったことから、毎年綱を引くようになったといい、玉代勢では「カリー」をつけるという意味で綱を引いたのではないか、という。

② 綱の材料と綱の形態

イ. 綱

戦前の綱は雌雄それぞれ1本ずつで、材料は稲ワラであった。稲ワラは集落内でまかなえた。ワラは、子どもたちがドラガニを叩きながら集落内の家々を回って集め、大人の指導の下、子どもたちが綱を作った。アガリ（イーンダカリ）はムラヤー（村屋）で綱作りを行い、イリ（シチャンダカリ）はヒージャーイーと呼ばれる場所で綱を作った。綱の長さは14～15m程であったようだが、太さについては不明である。ただ、カリーであるということで綱を引いたことや、毎年綱を作り替えたという話からさほど大きくなかったのではないかと推測される。

ロ. カニチ棒

カニチ棒は1本で、石持ち棒と同じという証言から長さ5尺（150cm）ほどで、太さは直径9cmほどであったと思われる。材質はリュウキュウマツで、毎年作りかえた。

③ 備え・示威行為

イ. 旗 頭

玉代勢の例年の綱引きに旗頭は使われなかった。寅年に行う大綱引きに旗頭を2本用いた（第二章 2・備え・示威行為を参照）。

ロ. 楽器とテービー

楽器類はドラガニだけで、アガリとイリ、双方に1個ずつあった。テービーはワラで作った。叩いても痛くないように所々を結んだ。そうすると簡単には燃えつきなかった。テービーの本数に制限はなかったが、そう多くもなかった。尋常小学校高等科程度の子どもたちを中心に17～18歳の青年たちが使った。そして、綱引きが終わると、綱をその場に置き、ガーエーが行われたが、その際には、テービーを使って相手を叩いたりもしたという。

④ 衣 装

バサーヌタテシマ（芭蕉布）やスディチラーを着ていた。男性は白のYシャツに白のズボンをはいていた。

⑤ 綱の引き方

イ. 綱寄せとかんぬきの合わせ方

アガリ、イリともそれぞれの綱打ち場から、「サーサーサーサー」とかけ声を掛けながら綱を肩の上まで持ち上げて、綱引き場のナカミチまで連れてきた。カニチの合わせ方について聞き取り調査では、ナカミチに雌雄のカニチの部分を平行にして並べておき、その状態から雌綱を後ろに反らせ、雄綱にかぶせるようにして連結させた（照屋光久さん談）という話や、カニチグチまで綱を寄せてくると、雌綱の輪を上に向けた状態で後ろに反らせて、雄綱を立ててそのまま差し込むようにして連結させたという話もあった。

カニチ棒を貫く人は、決まっていなくても、子どものなかでも力のある者が出て来て貫いた。大人は側から教えるだけで手助けはしなかったが、スムーズに出来た。カニチグチは監視がないと危険なので、カニチ棒を貫いた後は大人が確認してから引き始めた。玉代勢の綱引きは、周辺の屋取集落や他ムラからは参加させなかったという。シタクは出なかった。

ロ. 綱引きの時刻と引く回数

朝から家々をまわってワラを集め、綱作りをする。綱作りの方法は大人が教えるが、作るのはすべて子どもたちが行った。綱引きは、夕食をすませた午後7時頃から行われ、家族みんな集まって子どもたちの応援をした。綱は2回引くが、2回とも真剣に勝負する。1回目終了後、カニチ棒をはずしたり、合わせ直したりはしなかった。

⑥ 双分組織

毎年の綱引きはムラの中央を走るナカミチで、イーンドカリ（上村渠）とシチャンダカリ（下村渠）に分かれて引いた。イーンドカリはアガリ組の雄綱、シチャンダカリはイリ組の雌綱であった。毎年の綱は、子供を中心とするワラビジナで、小学生から17、8才ぐらいまでの男女が参加した。しかし17、8才でも結婚している人は引かなかったという。他に、綱引きには年齢の制限はなかった、という話も聞いた。綱を引くときは、綱のしっぽを木にくくりつけるまでして勝負に挑んだという。家族も応援に駆けつけた。

綱を寄せる時や、引く時には「ユイサー、ユイサー」、「ユサユサ」と掛け声をかけた。カニチ棒を貫いた途端、「ヤー」と叫び、綱を引きはじめることもあったが、ケガをしないように、世話役の合図を待って引くことが多かった。世話役にはムラの役目の人がなったのではなく、綱引きが好きな人や、それに適した人が世話をした。綱引きの準備をしているうちに、世話役を引き受ける人が必ず出たという。子ども中心の綱引きではあるが、

嫁いだ女性が綱を引く場合には、嫁ぎ先の綱を引くという。

⑦ 祭祀儀礼

昭和16年ころまで毎年行われていた玉代勢の綱引きは、旧暦6月25日のカシチーの日を定日に、子どもたちを中心に行うワラビジナ（子ども綱）であった。綱の材料となるワラ集めや、綱の製作も子どもたちがおこなったが、不幸のあった家庭の子どもは一年忌が済むまで綱引きに参加することはなかった、という（宮平苗さん談）。

玉代勢でも、綱を引き終わるとカニチ焼きの儀礼があった。イーндаカリ（アガリ・雄綱）は村屋の敷地内広場で、シチャンダカリ（イリ・雌綱）はヒージャーイー（タメーシヒージャーガーの上）で、あらかじめ準備したワラ束を焼いた。焼いたワラ束の灰はその場所に放置された。カニチ焼きにはムラのヤクミや有志らが付き添い、豊作や、ムラ人の健康などを願った。また、子どもたちはその火の上を跳び越えるなどしていたという。

各家庭では、新米で炊いた白カシチーを神仏に供えて、家族の健康や、豊作を願い、ウサンデー（直会）してから子供たちの綱引きを見物した。また、婚出した姉妹に対して実家の兄弟からムイブン（新米で炊いたご飯を大盛りにしたもの）を届ける「シチュマカミラシ」の習俗もあった。



凡例

	網をうつ場所
	網の保管場所
	網の端 カニチ 網の端
	網引き区分
	村屋
	湧井

トレース：豊里 初江
 作図協力：呉屋ひとみ
 ※ 北谷村旧地籍図、『北谷町史』第五巻資料編、北谷の戦争体験記録(下)を参考に作成した。

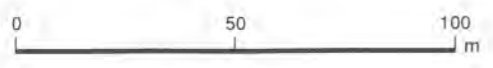


図3-10：玉代勢集落中央部

(8) 野 里

① 期 日

例年の綱引きは、旧暦6月24日のカシチーウユミ（折目）の日に綱を引くカシチージナ（綱）であった。野里でも五穀豊穡や、ムラ人の健康を願って綱を引いた。野里ではカシチーの日を定日とする綱引きのほか、日照りがつづくとき臨時に綱を引く雨乞い綱や、3年越、13年越、25年越に綱を引くマールジナ（マールシー）があった、という。毎年の綱引きは1937年に廃止となったが、1955年に野里共進会によって復活された（平敷、1990）。

② 綱引き次第（1997年度）

現在の綱引き行事は、野里共進会による祈願を中心とした行事である。以下、1997（平成9）年7月28日（旧暦6月24日）に行われた綱引き行事を時間の経過に沿って報告する。

- 16:09 野里共進会の有志らがノロ殿内に集合。
- 16:18 ノロ殿内での祈願を終えると、庭に祀られる火ヌ神を拝した。共進会事務局長（喜屋武吉伸さん）が各香炉の前に白紙を置き、合掌した。次にその白紙に酒をかけ、再度合掌したのち、花米を白紙の上に供えた。その後、火ヌ神に向かって左側で白紙を焼いた。
- 16:22 火ヌ神での祈願が終わると、再びノロ殿内に戻り、供物の直会があった。
- 16:45 野里の合祀所（嘉手納小学校裏〈北側〉）へ移動。
- 17:00 野里の合祀所での祈願。各香炉には白紙と線香15本を供えた。
- 17:09 参加者全員で合掌したのち、香炉の前に花米を供えた。
- 17:11 次にビジュルの祠に供物を供えた。
- 17:13 ビジュルに手を合わせ、花米を3回供えた。その後、酒を3回ずつ供えた。
- 17:16 拝所の出入口に移動し、ワラ束を供えてイシンミクルク（石嶺久得・北東方向）に向かって遥拝を行った。
- 17:20 ボラ、太鼓、ドラが各1個ずつ用意され、綱引きの準備を行う。
- 17:22 合祀される拝所に向かって左側がイリで女性（雌綱）、右側がアガリで男性（雄綱）である。双方がロープ綱を持って揺らしはじめるとカニチ棒が差し込まれ引き始めた。その周囲では太鼓やドラの「トン、トン、ハーイヤ」のリズムが鳴り響く。綱引きは2回行われ、2回ともイリが勝った。
- 17:30 綱引きが終わり、拝所の広場内で直会が行われた。



写真3-7 ノロ殿内の火の神での祈願



写真3-8 野里拝所での祈願



写真3-9 イシミクルク(石嶺久得)への祈願



写真3-10 綱引きの様子(カニチ棒を合わせる)

③ 綱の材料と綱の形態

イ. 綱

戦前の綱は雌雄それぞれ6本の綱をカニチ棒で連結したものであった。綱1本の長さは5～6間程度で、6本の綱を合わせると60m程になった。綱の太さは、雌雄の綱を連結するカニチ部分の綱が最も太く直径約50cm程あった。また、カニチ棒を貫く輪の部分の直径は2m程であった。

綱の材料は稲ワラで山原方面から購入したようである。綱は毎年新調されるのではなく、前年に使った綱を修繕して使用した。綱引きが終わると、メーは屋号メーヌイリー（前又伊礼）、シリーは屋号ウフイリーグワー（大伊礼小）に保管した。

戦後は集落の全域が米軍用地として接收されているため、かつてのような綱引きは行われていないが、共進会の有志らによる儀礼的な綱引きが行われている。現在の綱は市販のロープで、長さは雌雄それぞれ5m、太さはカニチ付近が9cmで、ほかは7cmである。ティーンナ（手綱）は雌雄5本ずつ付いており、長さは17cmから40cmである。

ロ. カニチ棒

前述したように戦前の野里の綱は雌雄合わせて12本の綱を使用していた。そのため、綱をつぐカニチ棒は、雌雄の綱をつぐ中央のカニチ棒と、双方それぞれに5本ずつの計11本のカニチ棒が使用された。雌雄の綱を繋ぐ中央のカニチ棒には、リュウキュウマツ

が用いられ直径約20cm、長さ7尺(210cm)程であった。このカニチ棒は毎年新調するのではなく、池(クムイ)に沈めて保管した。他のカニチ棒に関する材質や、寸法などについては聴取することが出来なかった。

戦後の綱引きは、合祀所で儀礼的に引く綱のため、カニチ棒は1本である。現在のカニチ棒の長さは70cm、太さが13cmである。

④ 備え・示威行為

イ. 旗頭

旗頭(ハタガシラ)は、シリー(ニシ・雄綱)とメー(フェー・雌綱)に各1本ずつあったようだが、ハタガシラと言うより、“テークドゥールー”と呼んでいた。このテークドゥールーは、丸く太鼓の形をしており、その下に水平に葉のようなものがついていた。骨組は竹で作り、その上に紙を貼りつけた。中にロウソクを入れて、灯りを灯すようなことはなかった。また、旗やバランスを保つための縄はついていなかった。トゥールーは丸いといっても、メーとシリーとで若干の違いがあり、メーがシリーよりも大きな形をしていたという。野里の場合、旗頭⁽²⁾は旧暦7月17日のハタスガシに使ったが、綱引きには使わなかった。

ロ. 楽器

綱引きに使った楽器類は、ショウグや太鼓、ドラ、ボラがあった。これらはみな字所有だった。楽器の類は、屋号ウフヤモーシーに保管されていた。そこには、綱引きで使う楽器の他にも旗頭や、ムラアシビで使う衣装や小道具等も保管されていた。綱引きになると、シリー、メー双方が鳴りのよい楽器を取り合った。特にドラはよく競った。そのため綱引き当日には、朝早くから取りに行った。ドラはシリー、メーとも1個ずつで、ショウグは各2個程であった。

ハ. テービー

テービーは、サトウキビの搾り殻(ウージンガラ)で作った。その数はシリー、メーで400本程であった。このテービーを使う者は、頭からタオルを被っていた。テービーを使う場面は、主に相手側の見回りと、ガーエー(後述)のときであった。

ニ. ミチジュネー

野里では綱引き場であるナカミチ(中道)に、二番綱以下の綱が用意され、カニチ棒が繋げられたままの状態置いてあった。そして、メーは屋号前伊礼(メーイリー)近くの十字路に、シリーは屋号大伊礼小(ウファイリーグワー)近くの十字路に集合し、シリーから先にテークドゥールーを先頭にメージナ(一番綱)を担いでスネーを開始した。その後メーが続いた。シリーはカニチグチの前にあたる屋号古波蔵屋敷(クファングワヤシチと言ひ、空屋敷だった)近くまで来ると、折り返してメーと向かい合った。

綱引きが始まると、テークムッチャー(太鼓持ち)が太鼓を打ちながら、テービームッ

チャー（松明持ち）と一緒に綱の周りを見回った。野里の綱引きは、他字の者に引かせなかった。そのため他字の者が引いていないかどうか見回った。余所からの見物人は、木の上などから見物していたという。

ホ. ガーエー

二度にわたる綱引きが終わると、勝利した側は一番カニチ（雌雄の綱を繋ぐ中央のカニチ）をはずして、メージナをみんなで担いだ。その際には「ワワワワワ、サー、ファイ、ファイ…」と掛け声を出し、ドラや太鼓を叩いた。綱の上にはシタクとして、踊りの上手な者と空手のできる者が乗って踊ったり、空手の型を披露したりした。

次にテービーでもって相手と叩き合うムンドー（ガーエー）となった。このガーエーには、青年男性をはじめ、年配者も参加した。時には女性同士のムンドーもあったようである。青年男性によるガーエーは、テービーで叩きながら押し合うもので、中にはテービーを持って向かってくる者からテービーを奪い取って逆に打ち返す者もいた。テービーの熱で周囲の木の葉が無くなったという。ガーエーが終わる頃には、身体が真っ黒になっていた⁽⁴⁾ので、参加した男たちは揃って、集落の西側にあるマルグムヤーに水浴びに行った。水浴びをしている時は、互いに冗談を言い合い労った。

⑤ 衣装

丈の短い普段着か、あるいは作業着のようなものを着け、頭にはサージを巻いたり、濡れたタオルで頬被りをしたりしていた。着物の柄は、地味なクンジーに縦縞が主であった。女性は、バサージンやクロスディチラーが多かった。当時は、ガーエーからリンチオーイに発展していき、この日とばかりに相手の着物の裾にテービーで火をつけられることもあったので、一番着古したヤナチンを着て、綱を引いたという。

⑥ 綱の引き方

イ. 綱寄せとかんぬきの合わせ方

野里では、「ユシレー（掛け声）、ポンポン（鳴り物）」、「ハーイヤ（掛け声）、ポンポン（鳴り物）」の囃子にあわせて綱寄せをした。二番綱以降は、あらかじめカニチをついでナカミチに用意されていたので、雌雄とも一番綱だけを担いで綱引き場のナカミチまでスネーしてきた。一番綱の上にはシタクが乗っており、空手や踊りを披露し、一旦綱をおろしてイナグモーイ（女踊り）などもあった。

雌雄のカニチを合わせる際には、雄綱を立てておき、雌綱をかぶせるようにして連結させ（図3-1参照）、カニチ棒を貫いた。その勢いで綱引きが始まる。ところが、雄綱側（シリ）はすぐには綱を引かさないようにカニチ棒を立てようとし、逆に雌綱側（メー）はカニチ棒を倒して綱を引こうとするため、なかなか綱引きが始まらず、時には勢い余って

喧嘩沙汰に発展することもあったという。カニチ棒が立てられたまま綱が引かれると、雌綱側の地面には、カニチ棒が引きずられた跡が残ったという。また、カニチ棒を貫く人は誰という決まりはなく、1～2人、力持ちが出て来て肩に担いで貫いたという。

綱引きの際、雌綱はゆるやかな坂の上り側に引かなければならないが、不思議と雌綱側が勝っていた。また、カニチの合わせ方は雌綱をかぶせて連結しているので、雄綱側は下に、雌綱側は胸のあたりに抱えるようにして上に引いたという。

ロ. シタクと示威行為

雌雄の一番綱がナカミチに入って来る際には、それぞれの綱の上にシタクが乗って、空手や踊りを披露した。綱は持ち上げられて跳ね上がるので、シタクは落ちないように綱に足を挟んでいたが、落ちることもあった、という。シタクには、20代の男性のなかから踊りがうまく、空手のできる者になった。シタクを経験したという知念光良さんは、シタクの人数について双方二人ずつであったというが、他の伝承者から三人ではなかったかという意見もあった。

戦前の野里では、毎年の綱引きのほか「マーラシー」といって3年越、13年越、25年越とマールジナ（まわる綱）があったという。これは人生儀礼の年忌に関連しているというが、最後の33年は長すぎるので25年マーラシーで一巡としたという。マーラシーにあたる年の綱引きには、雄綱にはイキガスガイ（男衣装）、雌綱にはイナグスガイ（女衣装）のシタクを乗せたという。イキガスガイは紋付きの着物に刀、イナグスガイは羽織になぎなたを持った装いであったという。

ハ. 綱引きの時刻と引く回数

午後の12時頃から部落の人たちがノロ殿内に集まり、双方からカシラが1人ずつ出て綱を下ろしてきた。午後3時頃、綱引き場に集まって準備が始まった。

綱引きは2回行われた。1回目を引き終わると、雌雄の綱をつぐ一番カニチをはずし、勝った方は二番カニチもはずして、一番綱にシタクを乗せて持ち上げた。持ち上げられた綱の上では、シタクの男たちが踊ったりした。2回目を引くときは、再度カニチ棒を貫いて始めた。

⑦ 双分組織

野里では、ムラのナカミチを境に集落を南北に分け、北側をニシ、あるいはシリーと呼び、南側をフェーあるいはメーと呼んだ。綱を引く場合には、南側のメーをアガリの雌綱とし、北側のシリーをイリの雄綱に分けて綱を引いた。また、ある古老によれば、クシは東の雄綱と呼び、メーは西の雌綱であるという。ムラを分ける呼び名には何通りもあるらしく、「メーとアガリに分かれる」、「クシとは言わない」とする伝承者もいた。

⑧ 祭祀儀礼

戦前の野里では綱引き当日（6月24日）の午後2時ころから、字の区長や6人のヤクミ（ムクミ）らがイシンミクルク（石嶺久得）に赴き、ワラジカ（ワラ束）を供えて、五穀豊穡やムラ人の健康を願った。各家庭では、カシチーウユミと称して、マージンメー（黍を入れて炊いたご飯）や、豆腐ンブサーを神仏に供えて、家族の健康、農作物の稔りを願った。綱引きは、男たちの拝みが終了する午後の4時ころから行われた。

現在は、共進会会長や事務局長をはじめ、字の有志らが参加してノロ殿内の神棚と、火ヌ神（殿内の外）、嘉手納小学校裏手にある拝所合祀所での祈願の後、形ばかりの綱引きがおこなわれる。ノロ殿内での拝みは、ノロ神と称する男性（当山正善さん）を中心に、二つに区切られた神棚を左側から順次拝む。神棚にはノロ殿内からのウチャワキ（お茶うけ）と、共進会からの餅や肴を詰めた重箱一対が供えられた。殿内内の神棚を拝み終わると、参加者全員が殿内の庭にまつられる火ヌ神へ移動し、同様の供物を供えて祈願を行い、その後で白紙を焼いた。

次いで一行は、戦前の野里集落内に点在したムラの拝所を合祀する嘉手納小学校裏手へと移動して祈願を行った。合祀所には、ビジュル（遊び神）、東ウタキ、御嶽、西御嶽、カミサギモー、ユウシ之御嶽、地頭火ヌ神、御嶽ガー、元ウブガー、ウブガー、村ガー、ヌールガー、マミクガー、シリーガー、前之カー、後之カー、天願ガー、獅子などがまつられているが、綱引きに関する拝みでは、まず地頭火ヌ神を拝み、次いでビジュルを拝む。その後で、合祀所の出入口付近外側からイシンミクルクへの遥拝を行い、祈願を終了した。イシンミクルクへの遥拝の際には、ワラ束が供えられた。

綱引きは、2回行われるが、常に雌綱の方が勝つようになっている。雌綱が勝つとユガフーになると言われている。野里では6月24日を定日とする綱引きのほか、早魃の時にも綱をつくって雨乞い綱を引いた、という。

註

- (1) 大抵の話者が綱引きに旗頭を使わなかったとの証言であったが、照屋助吉さんによると、メンダカリ、イリンダカリとも“テークルー”と呼ばれるものがあったという。これはハタスガシーとムラアシビに使う旗頭とは別に製作した。骨組みは竹を使って円形に作り、その周囲に紙を貼りつけ、「東」、「西」と文字が書かれていた。中にはロウソクを入れていた。竹竿に掲げる旗には、絵ではなくて、文字が書かれていたが何と書いていたのかはわからない。吹流しはついていなかった。また竿のバランスを保つために縄が3本ついていた。旗竿の長さは3m程で根所に保管されている旗頭よりも短かった。このテークルーは、メンダカリ、イリンダカリそれぞれがナカミチ（中道）まで運び、綱の近くに立て、綱引きが終わると、その場で燃やしたという。

現在、砂辺の旗頭は、竿頭の飾りに円形で八卦が記されており、旗には「創農」と書かれている。

サトウキビの絵は描かれていない。現在の年中行事では、旧暦8月15日に立てる。普段は根所に保管されている。

- (2) 野里の旗頭は、“コーラキ”と言い、組踊で按司が被る兜のような形をしていた。コーラキの語意は不明である。旗には「飛龍」の文字と、龍の絵が描かれていたという。戦前は、屋号ウフヤモーシーにアシビで使う衣装や小道具等と一緒に保管されていた。
- (3) 『嘉手納町史』(1990:37)によると、ヌグンバシの下の方は、字内を流れる川と野国川との合流地点にマルグムヤーがあり、子ども達の遊泳場でもあったという。

参考文献

北谷町史編集委員会編、『北谷町史 第三巻 資料編2 民俗上』、北谷町役場、1992。

『北谷町史 第五巻 資料編4 北谷の戦争体験記録下』、北谷町役場、1992。

『北谷町史 第三巻 資料編2 民俗下』、北谷町役場、1994。

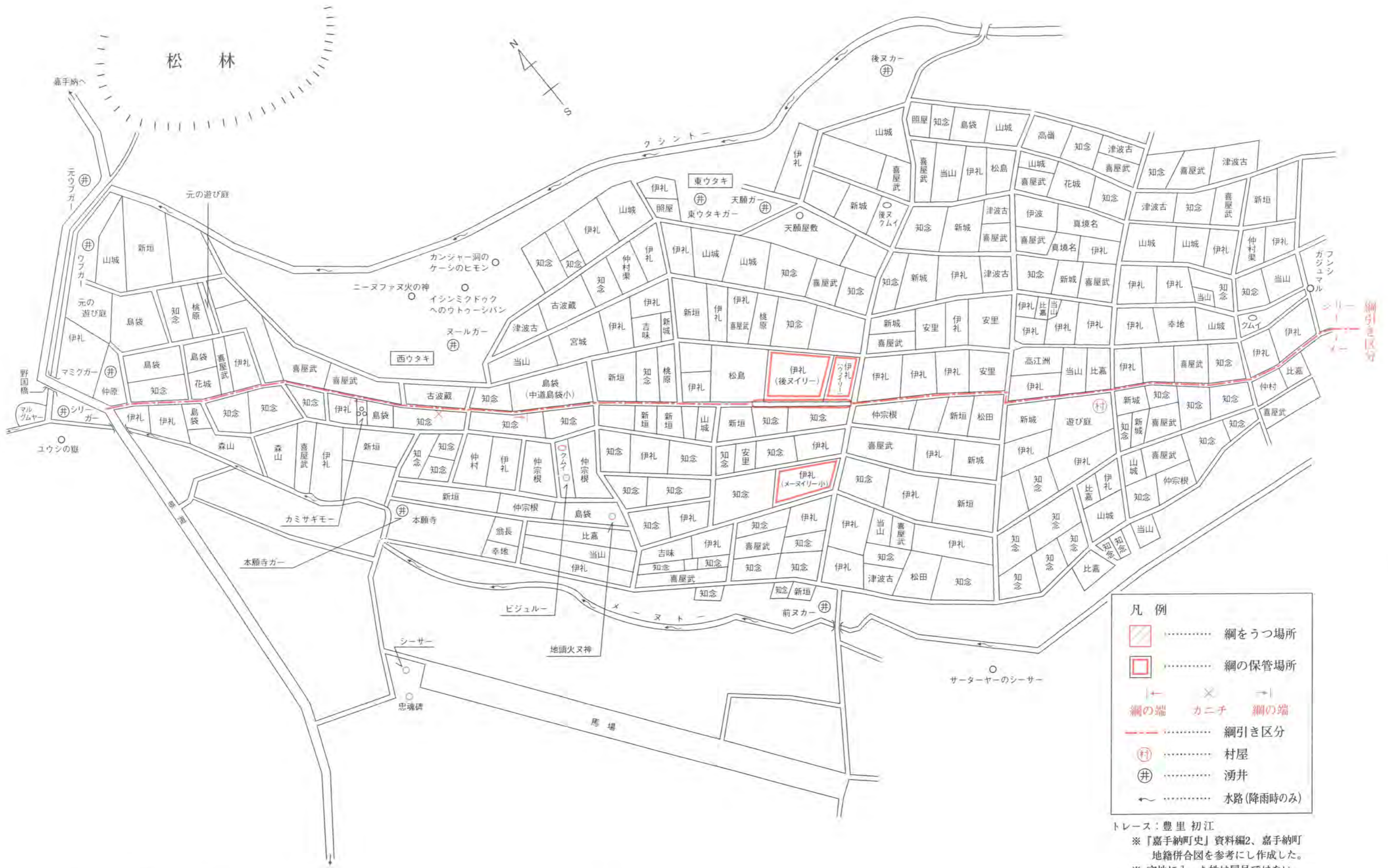
嘉手納町史編纂委員会編、『嘉手納町史 資料編2 民俗資料』、嘉手納町役場、1990。

辻合喜代太郎、『琉球芭蕉布』、はくおう社、1973。

辻合喜代太郎・橋本千栄子、『琉球服装の研究』、関西衣生活研究会、1991。

平敷令治・恵原義盛、『沖縄・奄美の衣と食』1974。

平敷令治、『沖縄の綱引きー備え・怒り・祈り』『沖縄の祭祀と信仰』、第一書房、1990。



- 凡例
- 網をうつ場所
 - 網の保管場所
 - 網の端
 - カニチ
 - 網の端
 - 網引き区分
 - 村屋
 - 湧井
 - 水路(降雨時のみ)

トレース：豊里 初江
 ※「嘉手納町史」資料編2、嘉手納町地籍併合図を参考に作成した。
 ※ 宅地に入った姓は屋号ではない。
 ※ シリーの網の保管場所は後ヌイリーとの伝承もあり

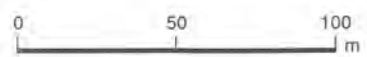


図3-11：野里集落

解 説

平 敷 令 治

一、沖縄の綱引き概説

わが国の綱引き習俗は、青柳真智子（1964）、小野重朗（1972）、坂田友宏（1986）、^{つる}霧理恵子（1986）の業績によれば、北は青森から南は沖縄まで34都道府県に分布している。山陰（とくに鳥取）と九州が濃密地域（なかでも鹿児島と沖縄）である。日本本土の綱引き習俗を見ると、綱引きを行う期日には20種の異なる期日がある。小正月・五月節句・旧盆・八月十五夜に引くところが多い。綱引きの目的は、豊作、健康、^{くじょ}驅邪、雨乞い等である。

わが国で最も綱引きの盛んな地域は沖縄である。沖縄の綱引きがいつごろはじまったのかはわからないが、史料上の初見は1713年に編纂された『琉球国由来記』巻四（事始）の綱引きの項である。1719年に册封副使として来琉した^{じょほこう}徐葆光は、『中山伝信録』巻第六「風俗」の六月の項に、「此月有月之夜、士民皆拔河争勝」と記している。18世紀初めの王府の記録だけでなく、册封使の記録にも見えているので、17世紀に綱引きが盛んに行われていたことは間違いない。「北谷三カ村大綱引き実行委員会会則」では第2条（目的）で「300年余の歴史を持つ北谷三カ村大綱引き」と記している。

綱引き伝承は中頭・那覇・島尻に豊富である。今でも毎年行うところは島尻地方が圧倒的に多い。1989年現在、年中行事として綱引きを行うところは170カ所であった（平敷、1990）。綱引きを行う年中の折り目によって、正月綱、6月ウマチー綱、6月カシチー綱、7月綱、8月カシチー綱、8月15夜綱、に大別される。もとは農耕儀礼であったが、今では地域共同体の繁栄を祈願する行事として意味づけられている。5年・7年・13年マール（周り）ごとの定日に行うマールジナ（綱）もある。かつては不定期危機儀礼としての雨乞い綱も行われた。

綱引きは雌雄の綱からなり、それぞれ綱頭のカニチ（かんぬき）を棒で連結するのが一般的で、なかには雌雄の綱が各2本以上もあり、複数のカニチ棒で連結して引く「かんぬき複数型」の綱引きもある。綱引きのスネー（備え）の先頭に旗頭を出すのは沖縄の綱引きの特色であろう。スネーの出し物は楽器、舞踊、獅子舞、ミルクなど多様である。スネーイ前後におこなうガーエー（威勢の誇示）も綱引きにはつきものである。綱引きの後で、綱を処理する特定の儀礼（綱をトグロ巻にして放置したり、川や海に流したり、綱の一部・小綱・人形・蛇型を焼くなど）を行うところが多い。

沖縄の綱引きの特色として、綱を引く期日が多様であること、年に2回以上の綱引き定

日があるムラが少ないこと、6月中の綱引きが最頻型であること、カンヌキ複数型の綱の形が見られるなどの諸点をあげることができる。沖縄諸島では稲作儀礼として行われたのであるが、稲作をやめてしまった地域（それが大部分であるが）で、ワラを購入してでも綱引きをおこなうところに、現代沖縄の綱引きの特色がある。

韓国のジュルタリキ（綱引き）は沖縄の綱引きによく似ている。任東権（1969）、萩原秀三郎・崔仁鶴（1974）、及び池春相（1994）によれば、稲作の予祝儀礼として旧暦1月15日前後に引く例が多い。部落対抗、あるいは男女別に、東西か上下に分けて、引き合うという。一本綱を引くところもあるが、一般に雌雄の別の綱をつくる。沖縄と同じで綱頭をかんぬき型にして、雄綱の頭を雌綱のかんぬきに入れ、かんぬき棒を差し込んでつなぐ。雌綱の勝ちをもって豊作の予兆とする例も多いという。悪疫祓いや雨乞いのための綱引きもあった（『せきてん きう あんたく ぜんらなんどう 積奠・祈雨・安宅』）。全羅南道の一部と慶尚あきしょう南北道の一部で、綱の先端部に若者を乗せて双方の綱先をぶっつけあって、相手の綱先を地面におしつけた方を勝ちとするコサウムとよばれる行事がある。ところによってはジュルタリキの前にコサウムを行う。

中国大陸における綱引き習俗の歴史は古く、戦国時代末期の紀元前3世紀に楚国で「けん 牽強」が始められたと伝えられる（『けいそさいじき 荊楚歳時記』）。南北朝時代には「たごう 拖鉤」と呼ばれ、隋代ずいの「けんこう 牽鉤」を経て、唐代以後「ぼっか 拔河」とよばれるようになった。隋代までは清明に引くならわしであったが、唐代以後に上元じょうげん（正月15日）に引くようになったという（黄華節、1967）。直江廣治（1967）によると、湖北では近代に拔河が行われていた。

二、北谷の綱引き

1 北谷三カ村の大綱引き

北谷三カ村の大綱引きは寅年に行われる。1938（昭和13）年に引いてから中断し、戦後の1974（昭和49）年に36年ぶりに復活した。1998（平成10）年には戦後3回目の大綱引きが行われた。なぜ寅年に行うのか、そもそもの初めにはそれなりの契機あるいは意味づけがあったのであろうが、既に伝承は失われている。

戦前の北谷三カ村とは北谷・玉代勢・伝道である。沖縄戦後に三カ字はムラごとアメリカ軍の基地として接収された。旧字民の多くが北谷町内に散在している。旧字民で組織された郷友会が中心となり、北谷町当局の支援のもとに、「北谷三カ村大綱引き」をとりおこなうのである。

北谷三カ村大綱引き実行委員会は実行委員長以下16人で、各字から4人宛選ばれた。第1回実行委員会が開かれたのは1997（平成9）年12月であった。実行委員会の下に、大綱、

旗頭、カニチ、衣装・チヂン・舞踊、の4専門部会が置かれた（総勢49人、そのうち16人が女性）。さらに各郷友会ごとに字実行委員会が組織された（本文117頁の「北谷三カ村大綱引き実行委員会組織図」を参照）。郷友会の実行委員会の専門部会の役員は三カ村大綱引き実行委員会委員を兼ねることができた。

1998年度の大綱に用いるワラは金武町字屋嘉から購入した。15トンであった。綱打ちには正味15日を要した。綱のカニチの作り方は宜野湾市大山の方の指導を受けたけれども、カニチの形態は大山と異なり、飾りはない。高江洲敦子の補足調査によれば、1926（大正15年）の三カ村大綱引きの綱は雌雄とも各3本から成る「かんぬき複数型」の綱であったという。それ以後の綱は1998年まで雌雄各1本の綱であった。

本文23頁の「旗頭変遷表」で明らかなように、北谷の旗頭の構造・旗字は1974年度・1986年度・1998年度ごとに若干異なる。玉代勢と伝道の旗頭は1974年以来基本的に同じであった。1998年度の練習用の旗頭には古タイヤがくくりつけられていた（本文42頁）。今様の変化である。ミチジュネーの演目については、1926年、1938年、1974年、1986年、1998年度別に、字ごとに、一覧表にまとめられている（本文69～70頁）。今回のミチジュネーの演目の練習が開始されたのは6月中旬であった。正日のミチジュネーには、旗頭を先頭に、ボラチリ（北谷・玉代勢は小学生男女、伝道は7～17歳の男女）、ソグチリ（中学生を含む男子青年）、テークチリ（15歳以上の青年）、チヂン（50～70歳代の女性）、舞踊（女性）、フェーヌシマが続いた。稲摺り節他13演目の踊り手は30歳以上60歳未満の女性であった。ミチジュネーの演目中のミルクについて、玉代勢の伝承がはっきりしない。

フェーヌシマ系の芸能は沖縄全域で27カ所に分布しているという。北谷町では北谷にのみ伝わる。大綱引きにはメンダカリとクシンダカリの2組でるのがしきたりであったが、今回は15歳～43歳の男性24人からなる1組だけ出場した。フェーヌシマ棒も従来の106cmから126cmに変えた（フェーヌシマの演目については本文52～67頁を参照）。

演目の衣装には時代の変化がつきものである。旗頭をもつ男衆の衣装が1998年度から那覇大綱挽にならってムムヌチハンターになったこと、黒島口説にバサージン（芭蕉衣）を用いなかったことが印象的である。ミチジュネーのこれらの衣装については各郷友会で用意したという（本文71～98頁）。

綱を引く前のガーラシでシタクが登場する。シタクに選ばれた若者23人について、1914年以來の綱引きごとに氏名・生年・年齢がまとめられている（本文101～102頁）。シタクをめぐる伝承には偏りがあり、シタクをチヌブに乗せたことについて伝承者間で異論がある（本文105頁）。また、1998年度から廃止された按司の覆面姿について、1974年度・1986年度いずれの写真にも覆面姿が写っているのに、覆面に関する伝承が得られなかったという（本文107頁）。大綱引きでは、シタクは綱を引く前に双方カニチ口で対峙し、一度退いてから、再度対峙する。シタクの出し方には大別して首里型と那覇型がある。首里型は綱の上にシタクを乗せる形式で、那覇型は栈敷にかついでくる形式である。1998年度の大綱

引きのシタクの出し方は那覇型であった。シタクの出し方には他にもバリエーションがある。たとえば、与那城町字屋慶名では、未就学男児をワカスと称して双方合わせて30人くらい綱に乗せる。

三ヵ村大綱引きに先だって、旧三ヵ字の神役に実行委員も加わって、念入りな祈願が行われたことに注目したい。カニチ棒の用材となる松の伐りだしの拝み、完成した綱の拝み、三ヵ字それぞれの拝所の巡拝が行われた（本文118～133頁参照）。綱引き前（北谷・伝道）と当日の基地内拝所巡拝（玉代勢）に際して、アメリカ海兵隊キャンプ・パトラーに基地内立ち入りの許可を求め、許可書が発行された（これらの文書の写しが巻末に収載されている）。拝所の一つ「綱のカヌチ根軸」は1988年に旧北谷字民一同によって、「マタジ」（湧水神）は1989年に北谷ノロ殿内の家人によって碑が建てられ、以来ムラの聖地に加えられて拝むようになったという（本文124～125頁）。

戦後の過去2度の綱引きでは、綱を引く回数は1回であった。今回は2回引いた。戦前は、6月24日に字北谷のンマイーで、次の日に字玉代勢のナカミチで引いていた。それで、今回は当日2回続けて引くことになったという（「三ヵ村大綱引き実行委員会議事録」を参照）。

2 各字の綱引き —戦前と戦後—

現在、年中行事として綱を引くのは、砂辺と野里（現嘉手納町字野里）である。砂辺は1本のロープ綱、野里は雌雄各1本のロープ綱である。戦前の綱は、平安山・北谷・玉代勢・伝道が雌雄各1本の綱で、砂辺と下勢頭が雌雄各2本、桑江が雌雄各3本、であった。今回の調査によれば、野里の綱は雌雄各6本であったという（本文184～185頁）。ワラ綱の全長と両端にカニチをもつ5本のワラ綱の太さと長さはそれぞれどれくらいであったのか、連結した綱の強度はどうか、もっと詳しく知りたい伝承ではある。戦前の野里の綱引きは南風原町喜屋武の綱引きと似ていて、坂で引いたが、喜屋武とは逆に雌綱が坂の上の方で、坂下が雄綱であった。しかも雌綱が勝つのが通例であったという。雌綱に勝たせる綱ということになるが、北谷では雄綱が勝つとユガフー、桑江では雌綱が勝つとユガフーと伝えられていた（本文164, 169頁）。

戦前の北谷村では、同じ村内でも、①引く期日、②綱の形、③双分組織、④綱の引き手、⑤旗頭の有無、⑥ガーエー、⑦引く時の掛け声、には字ごとに若干の相違があった。6月ウマチー綱を引いた字、6月カシチー綱を引いた字があった。旧土族系の屋取集落「下勢頭」では男だけの綱引きであったという（本文152頁）。首里の綱引きにならったのであろうか。伝道と玉代勢はそれぞれ村落を上と下に分け、上が雄綱、下が雌綱を引いた。他字の双分組織は村落を前と後にわけた。前組が雄綱とされた字は砂辺・下勢頭・平安山で、前組が雌綱を引いたのは桑江・北谷・野里であった。北谷・玉代勢・伝道では、カシチー当日に実家の兄弟から、婚出した姉妹にムイブン（新米で炊いたご飯の大盛り）を届ける

シチュマカミラシと呼ばれる習俗があった（本文134頁）。興味深い伝承である。

概して戦前の北谷村の綱引きでは、桑江、野里、北谷三カ字の綱引きに特色があった。旧桑江では小字ごとに綱をつくり、それを連結して引く「かんぬき複数型」であった。旧野里も同様であるが、野里では「マーラシー」といって3年越、13年越、25年越に大綱を引いたという（本文187頁）。沖縄では年忌習俗の普及にともなって、祝い事でも3年・7年・13年・25年・33年目に行うことがあった。たとえば、神役就任後の祝い、墓の竣工後の祝い、龕（ガン・野辺送りの際に棺をのせてかつぐ屋形）の祝い、等がそうであった。旧野里のマーラシーは3度の年回りに引く珍しい事例であった。マール綱の綱は大きいので、野里に限らず、シタクを乗せるのが一般的であった。

旧北谷村で昼綱を引いたのは野里と北谷三カ村の大綱だけで、あとはすべて夜綱であった。野里では、綱を引くのに「ワワワワワ、サー、ファイ、ファイ、ファイ・・・」という掛け声をだしたという（本文186頁）。綱引きの雰囲気伝わってくるような、他に例を見ないイトウ（えと・掛け声）である。

3 北谷の綱引きの特色

北谷の綱引きも、前記の沖縄の綱引きの一般的特性をそなえていた。しかし、北谷三カ村大綱引きには特筆すべき要素が少なくない。①戦前、「かんぬき複数型」の綱をつくるムラが4カ字もあったこと、②戦前、野里でマーラシーと呼ばれる年回りの綱引きが行われたこと、③寅年に北谷・玉代勢・伝道の3郷友会（かつては字）による大綱引きが行われること、④1926（大正15）年までは北谷三カ村の大綱も「かんぬき複数型」の綱であったこと、⑤大綱引きのミチジュネーにフェーヌシマを演ずること、⑥大綱引きのシタクのガーラシでシタクが二度対峙すること、が際だった特色といえるだろう。

県内では、糸満市字大里の6月カシチー綱は5年マール（年回り）、中城村字当間、豊見城村字保栄茂・字翁長では卯年と酉年（7年マール）、南風原町字津嘉山は子年と午年（7年マール）、大里村字大里の6月26日の綱引きは13年マールで卯年に行われる。マール綱には年中の綱よりも大きな綱をつくり、行事としての規模も大きくなる。

旧三カ字の郷友会役員と字実行委員数は、北谷が95人（女性11人）、玉代勢が112人（女性31人）、伝道が116人（女性29人）であった。女性の実行委員は衣装・舞踊・チヂン専門部の責任者である。7本の旗頭にかかった人数は総勢80人であった。ボラチリ、ソーグ、締太鼓、チヂンなどの鳴り物や、稲摺り節他13の舞踊に参加した会員は老幼男女合わせて、メンダカリが350人、クシンダカリが278人、合計628人に及んだ。フェーヌシマを演じた青壮年男性は24人であった。大綱引き直前の郷友会の世帯数・会員数は、北谷が362世帯・1,476人、玉代勢が123世帯・475人、伝道が71世帯・302人、合計556世帯・2,253人である。三カ村大綱引き実行委員（専門部会を含め65人）・郷友会役員・字実行委員・ミチジュネー参加者は、未就学児童及び高齢者を除く三カ字郷友会会員の過半を優に超えたと思

われる。

北谷三カ村大綱引きは、①ムラの歴史再認識の機会であり、②重層化した実行組織をとおして年齢集団間の交流が強化され、③郷友会の多くの成員が参加する地域活性化事業、である。郷友会で行う年中行事は、玉代勢が1回（ニングウチャー）、伝道が2回（ニングウチャー他）、北谷が5回（ニングウチャー他）にすぎない。しかし、三カ村大綱引きになると8ヵ月前に実行委員会を発足させて、三カ村をあげて準備が始まるのである。綱引きの2ヵ月前から毎晩のように老いも若きも集まり、それぞれの役割に取り組む。13年目ごとの大綱引き、それは、永い時間と労力、意欲と情熱をかけた永遠回帰の儀礼であり、その過程で、アメリカ軍基地にムラをとられた人々はバーチャル・コミュニティをリアルな空間に変えつつ、原郷意識を共有し、連帯を強化していく。

三、北谷町教育委員会の調査委嘱について

1996（平成8）年5月に、北谷町教育委員会教育長當山憲一氏と平敷令治の間で、「民俗文化財調査委託契約書」を交わした（1997年及び1998年に契約更新）。平敷は、高江洲敦子をキャップとする調査団を組織した。団員は、新里まゆみ、平敷兼哉、田場勝也、比嘉敦子、赤嶺朋子、高宮城ひとみ、の7人である。団長の平敷は、調査計画の策定、調査要領、報告書のまとめ、に際して助言し、報告書の監修をおこなった。高江洲以下のメンバーは1996（平成8）年度に砂辺・桑江・旧平安山・下勢頭の調査を行い、平成9年には旧北谷・旧玉代勢・旧伝道・野里の綱引き習俗について調査した。平成10年には、旧北谷・旧玉代勢・旧伝道の聞き取り調査を行ったが、主たる調査対象は北谷三カ村大綱引きであった。大綱引きの調査に団員として儀間淳一が新たに加わり、さらに調査補助員として沖縄国際大学文学部社会学科稲福ゼミの3年生、宮里真由美・高良都・宜野座亜紀・新城明彦、それに与那原町教育委員会の崎山須磨子が協力した。

1999（平成11）年1月には、RBCビジョンの撮影した大綱引きのビデオ「北谷ウーナ」のナレーション案を比嘉敦子氏（北谷町文化課嘱託職員）と調査団全員で検討し、ビデオ映像については北谷町教育委員会文化課長嘉手納昇氏・係長中村愿氏・主事東門研治氏とともに、団員全員で意見をだしあった。ビデオ「北谷ウーナ」を見ながら、調査団員はそれぞれの分担項目の事実確認を行うことができた。また、北谷町教育委員会の企画による同年10月から11月にかけての北谷町中央公民館講座で、団員は分担調査の成果について発表する機会を与えられた。講座参加者の多くが北谷三カ村大綱引き実行委員会のメンバーであり、発表後の質疑応答をとおして、団員は新たな資料を得ることができた。

本報告書には、写真が188、図版が42、表が14、地図が9、掲載されている。綱打ちや当日の大綱引きの時間的経過の記録など、どの調査項目をとりあげても調査者の熱意が伝

わってくる。惜しむらくは、収載すべき二、三の基礎資料が紙数の関係で割愛されたことである。同一の調査項目について、字ごとの記録に精粗も見られる。ともあれ、北谷町教育委員会の委嘱をうけてから3年余、戦前と戦後の綱引き習俗を調査し、さらに大綱引きの準備から綱引き当日まで、調査団は誠実に記録を続けた。

巻末の「三カ村大綱引き実行委員会議事録」(200～209頁)、「1998年北谷三カ村大綱引き関係文書目録」(212～216頁)、「1998年北谷三カ村大綱引きへの取り組み」(224～227頁)、「北谷町綱引き調査団ミーティング記録」(230～235頁)で明らかのように、北谷町教育委員会、北谷三カ村大綱引き実行委員会、各郷友会(または戸主会)の実行組織の全面的な協力のおかげで、調査目的を達成することができた。教育長當山憲一氏をはじめとする教育委員会の関係者、大綱引き実行委員長照屋信正氏以下の実行委員及び大綱引きに参加された郷友会の会員、ご教示をたまわった伝承者各位にたいし、調査団を代表して衷心よりお礼申し上げます。なお、亀谷長久氏・金良宗吉氏・仲米政雄氏・新垣カメ氏・伊禮康雄氏・當山憲一氏には貴重な写真を提供していただいた。大城清太氏・住福一郎氏・豊里初江氏は図版を仕上げてくださいました。ご協力有り難うございました。

参考文献

- 青柳真智子、「綱引きについての一考察」、『石田英一郎教授還暦記念論文集』、角川書店、1964。
- 小野 重朗、『十五夜綱引の研究』、慶友社、1972。
- 黄 華節、『中国古今民間百戯』、台北・台湾商務印書館、1967。
- 坂田 友宏、「山陰の綱引について」、『山陰民俗』46、1986。
- 宗懐著・守屋美都雄訳注・布目潮風・中村裕一補訂、『荊楚歳時記』、平凡社、1978。
- 任 東権、『朝鮮の民俗』、岩崎美術社、1969。
- 池 春相、「韓国と沖縄の綱引きについて—比較民俗学的見地から—」、『復帰20周年記念沖縄研究国際シンポジウム
沖縄文化の源流を探る—環太平洋地域の中の沖縄—』、「復帰20周年記念沖縄研究国際シンポジウム」実行委員会、
1994。
- 朝鮮総督府編、『積奠・祈雨・安宅』、国書刊行会、1972(復刊)。
- 霧 理恵子、「綱引の習俗—九州地方の事例を中心に—」、『日本民俗学』163、1986。
- 直江 廣治、『中国の民俗学』、岩崎美術社、1967。
- 萩原秀三郎・崔仁鶴、『韓国の民俗』、第一法規、1974。
- 平敷 令治、『沖縄の祭祀と信仰』、第一書房、1990。

大綱引き実行委員会議事録

第1回				平成9年12月28日(日) 15:00～				
三カ村大綱引き実行委員会				場所：中央公民館休養室				
〈出席〉				事務局長	田場健儀	○		
1	照屋信正	○	6	津嘉山正則	○	11	伊禮喜市	○
2	照屋正吉	×	7	仲本朝廣	×	12	座喜味功	○
3	新垣秀一	○	8	比嘉林浩	○	13	伊禮喜俊	○
4	照屋明弘	○	9	島袋雅夫	○	14	伊禮智清	×
5	上間盛一	○	10	島袋雅秀	○	15	津嘉山貞雄	×
<p>〈内容〉</p> <p>① 会則の改正について</p> <p>② 書記・会計の選任について 実行委員会の役員とは別におく</p> <p>③ 実行委員長及び役員の選出(添付資料)</p> <p>④ 三役は、現在綱引きをしている市町村に行き、運営・綱の確保等の調査をし2月に実行委員会をもつ。</p> <p>⑤ 各字は、ニングラチャーに多くの先輩方が集まるので、その時にある程度報告できるように段取りを進める。</p> <p>⑥ その他</p>								
<p>◇ 備考</p> <p>調査員：高江洲・新里・高宮城・平敷・比嘉</p> <p>文化課：中村係長</p> <p>取 材：沖縄タイムス</p>								

第2回						平成10年2月25日(水) 19:00～		
三カ村大綱引き実行委員会						場所：中央公民館 2F 講習室		
〈出席〉						事務局長	田場健儀	○
1	照屋信正	○	6	津嘉山正則	○	11	伊禮喜市	○
2	照屋正吉	○	7	仲本朝廣	×	12	座喜味 功	○
3	新垣秀一	○	8	比嘉林浩	×	13	伊禮喜俊	○
4	照屋明弘	×	9	島袋雅夫	○	14	伊禮智清	×
5	上間盛一	○	10	島袋雅秀	代	15	津嘉山貞雄	○
<p>〈内容〉</p> <p>① 三役の変更について 副委員長 座喜味さんから伊禮喜市さんへ</p> <p>② 町への補助金要請・後援依頼について 町に400万円の補助金を要請し、負担金については三カ村のナナクミワイで算出する。 要請内容の協議後、実行委員会の承認を得たので、町長の日程調整後、実行委員会三役と文化課長で要請。</p> <p>③ 任務分担について 調査・発注・製作等の担当者として、「カニチ」「旗頭」「大綱」「衣裳」のグループをつくって役割を決める。</p> <p>④ 期日は平成10年8月16日(日)に決定。 本来の綱引き日の旧暦6月25日が、今年ちょうど日曜日にあたるので、考案の必要はない。</p> <p>⑤ 場所の決定について 実行委員は、第1希望であるハンビー地域の電線・スペース等を調査した上で検討する。</p> <p>⑥ その他 ・カニチ棒、大綱、旗頭は、保管する方法を考えて、文化課などで展示ができないか。 ・新庁舎が完成したら、ロビーで写真展を催し、前盛り上げをしたらどうか(文化課長より)</p>								
<p>〈備考〉</p> <p>調査員：高江洲・新里・平敷・赤嶺・高宮城・比嘉 文化課：松田課長・中村係長 取材：RBCビジョン</p>								

第3回				平成10年3月22日(日) 14:00～				
三ヵ村大綱引き実行委員会				場所：中央公民館・ハンビー地内				
〈出席〉				事務局長	田場健儀	○		
1	照屋信正	○	6	津嘉山正則	○	11	伊禮喜市	○
2	照屋正吉	○	7	仲本朝廣	×	12	座喜味功	○
3	新垣秀一	○	8	比嘉林浩	×	13	伊禮喜俊	×
4	照屋明弘	○	9	島袋雅夫	×	14	伊禮智清	×
5	上間盛一	○	10	島袋雅秀	○	15	津嘉山貞雄	×
<p>〈内容〉</p> <p>① 中央公民館 休養室集合 →照屋実行委員長から今日の日程説明とRBCビジョン製作部長外間さんから映像収録に関するあいさつ。</p> <p>② 会場候補地視察(ハンビー地域) →そば屋鶴小～フリーマーケット通り～安良波公園</p> <p>③ 協議(中央公民館 休養室) 鶴小前：交通規制・電線等は不可能に近い。 長老山前：米軍側の協力も得られそうだが、一番に地元字北谷地内ということ考えた方がいい。</p> <p>安良波公園：交通規制・見学者・電線等あらゆる面でベターではないか。大綱や仮設トイレの設置も公園内だと前準備が可能。何より公園内北側は字北谷地内である。</p> <p>④ 今日のまとめ 現地調査をふまえて安良波公園内に内定とし、評議員や先輩方に意見をうかがってから、次回の実行委員会にて決定ということにする。</p> <p>次回実行委員会は、4月10日を目安にし、各字実行委員会での取り決め等を行ってほしい。 各専門部会を結成し、役割分担をする。</p>								
<p>〈備考〉</p> <p>調査員：高江洲・田場・高宮城・比嘉 取材：RBCビジョン・琉球新報・沖縄タイムス</p>								

第4回				平成10年4月14日(火) 19:00~				
三カ村大綱引き実行委員会				場所：中央公民館 休養室				
〈出席〉				事務局長		田場健儀		○
1	照屋信正	○	6	照屋久康	○	11	伊禮喜市	○
2	照屋正吉	○	7	比嘉林浩	○	12	座喜味 功	×
3	新垣秀一	○	8	嘉手納永周	○	13	伊禮喜俊	○
4	照屋明弘	×	9	金城英雄	○	14	伊禮利治	○
5	上間盛一	×	10	知念政勝	×	15	津嘉山貞雄	○
<p>〈内容〉</p> <p>① 実施場所について→「安良波公園」決定</p> <ul style="list-style-type: none"> ・カニチ口は、昔からの位置を意識して、できるだけ近いところでできたらいい。 ・公園内の植栽については、公園内での位置決定した上で、再度現地調査をし、町と調整する。 <p>② 任務分担について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・三カ村共通経費から発注するもの(大綱・旗頭・カニチ棒・衣装)に関しては、三カ村実行委員の中から各専門部代表として出てもらい、三役と一緒に下調べ、交渉、発注等の責任を持ってもらう ・代表者の名簿は、後日プリントするので、住所・氏名・TELを事務局に連絡してもらう。 <p>③ その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ・戦前はウーナを2日にまたがって引いていたが、今回はどうするのか。2日間は厳しいので、2回戦にしてはどうか。 ・ワラ・綱の発注は、どこに何をするのか。 ・旗頭の棹は、こいのぼりの時期以前におさえておかないと、いいのはなくなる。 								
<p>〈備考〉</p> <p>調査員：高江洲・新里・平敷・田場・赤嶺・比嘉</p> <p>取材：RBCビジョン・琉球新報・沖縄タイムス</p>								

第5回				平成10年5月7日(木) 19:00～				
三カ村大綱引き実行委員会				場所：中央公民館 保養室				
〈出席〉				事務局長	田場健儀	○		
1	照屋信正	○	6	照屋久康	○	11	伊禮喜市	○
2	照屋正吉	○	7	比嘉林浩	×	12	座喜味 功	×
3	新垣秀一	○	8	嘉手納永周	○	13	伊禮喜俊	○
4	照屋明弘	○	9	金城英雄	×	14	伊禮利治	×
5	上間盛一	○	10	知念政勝	○	15	津嘉山貞雄	×
<p>〈内容〉</p> <p>① 沖縄国際大学 平敷令治学長あいさつ</p> <p>② 大綱製作について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・15r発注することに決定。 ・大綱専門部代表者 照屋信正/伊禮喜市/照屋久康/照屋正吉 <p>③ 旗頭製作について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・玉代勢は前回のを保管しているので、修繕して使いたい。 ・旗頭専門部代表者については、後日部会を開いて代表者を決定し、発注に関わる協議をする 								
<p>〈備考〉</p> <p>調査員：平敷先生・高江洲・新里・平敷・高宮城・赤嶺・比嘉</p> <p>取 材：RBCビジョン・琉球新報</p>								

第6回				平成10年6月16日(火)				
三カ村大綱引き実行委員会				場所：安良波公園視察～中央公民館休養室				
〈出席〉				事務局長		田場健儀		○
1	照屋信正	○	6	照屋久康	○	11	伊禮喜市	○
2	照屋正吉	○	7	比嘉林浩	○	12	座喜味功	○
3	新垣秀一	○	8	嘉手納永周	○	13	伊禮喜俊	○
4	照屋明弘	×	9	金城英雄	○	14	伊禮利治	×
5	上間盛一	○	10	知念政勝	○	15	津嘉山貞雄	○
<p>〈内容〉</p> <p>(1) 安良波公園視察(現地調査)</p> <p>(2) 協議：議題①補正予算可決</p> <p style="padding-left: 40px;">議題②・カニチ場所→多数決にて可決</p> <p style="padding-left: 80px;">安良波公園D地点(ステージ前)</p> <p style="padding-left: 40px;">・集合場所について</p> <p style="padding-left: 80px;">〔北側〕北谷の後ン渠と伝道</p> <p style="padding-left: 80px;">〔南側〕北谷の前ン渠と玉代勢</p> <div style="display: flex; align-items: center; margin-left: 100px;"> <div style="font-size: 3em; margin-right: 10px;">}</div> <div> <p>A地点=0票</p> <p>B地点=0票</p> <p>C地点=2票</p> <p>D地点=9票</p> <p>(会長・田場さん・上間さんを除く)</p> </div> </div> <p>※考案事項：綱の大きさ／観客動員数(2.5～3万人を予想)／保安(救護)</p> <p style="padding-left: 40px;">道路占用／トイレ／ミチジュネーのコース及び集合場所／招待者控え室及びテント</p> <p>※公園内A・B・C・Dについて(地図参照)</p> <p>A地点：直線で最適だが、海に近すぎる危険性。観客を収容できない。</p> <p>B地点：くぼんだ場所なので、ミチジュネーが上り下りで困難。綱を引く場所とミチジュネーの場所を別々の場所でやることになる。</p> <p>C地点：カニチ口が一番近い。だが、インディアンオーク号や植栽にかかりスペース的に不可能に近い。</p> <p>D地点：カニチ口が北前に入ってしまうということだが、スペース的に4地点の中で一番広い。</p>								
<p>〈備考〉</p> <p>調査員：高江洲・平敷・新里・比嘉</p> <p>取材：RBCビジョン</p>								

第7回				平成10年7月7日(火) 19:00～				
三カ村大綱引き実行委員会				場所：中央公民館 休養室				
〈出席〉				事務局長	田場健儀	○		
1	照屋信正	○	6	照屋久康	○	12	伊禮喜市	○
2	照屋正吉	×	7	比嘉林浩	×	13	座喜味功	○
3	新垣秀一	×	8	嘉手納永周	○	14	伊禮喜俊	×
4	照屋明弘	○	9	金城英雄	×	15	伊禮智清	×
5	上間盛一	○	10	知念政勝	○	16	津嘉山貞雄	×
			11	津嘉山正則	○			
<p>〈内容〉</p> <p>① 大綱制作について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ワラの搬入がおこなわれているので、綱づくりの日数と人数を増やさなければいけない ・ナナクミワイで北谷40人・玉代勢20人・伝道10人を目安に綱づくり作業員をあつめる。 ・地元小・中・高生や商工会青年部などにボランティアを呼びかける。 ・一週間前までには綱づくりを終えて、会場に持っていき、そこで本綱の仕上げをする。 ・7/11(土) 9:00～旧役場にて、綱うちのための作業場づくりをして、綱づくりを開始する。 (火)(木)は午後から、(土)(日)は朝から作業。 ・7/9(木) 大山の綱づくり指導員を招いて、打ち合わせをする。 <p>② 会場設営について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前ン渠と後ン渠のテントの位置 ・救護班の設置場所→救急車は町消防、医師は地元出身者に依頼。 ・テントの確保 <p>③ その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ・植栽について警察側から危険を伴うとの指摘を受けた。一時、移設するなら300万の移設費がかかり、もどした後は、植え付くまでの責任とのこと。 ・ROKから番組取材の依頼。 								
<p>〈備考〉</p> <p>調査員：高江洲・新里・高宮城・田場・赤嶺・比嘉</p> <p>取材：RBCビジョン</p>								

第8回				平成10年7月24日(金) 19:00～				
三カ村大綱引き実行委員会				場所：中央公民館 講習室				
〈出席〉				事務局長		田場健儀		○
1	照屋信正	○	6	照屋久康	○	11	伊禮喜市	○
2	照屋正吉	○	7	比嘉林浩	○	12	座喜味 功	×
3	新垣秀一	×	8	嘉手納永周	○	13	伊禮喜俊	×
4	照屋明弘	○	9	金城英雄	○	14	伊禮利治	×
5	上間盛一	○	10	知念政勝	○	15	津嘉山貞雄	×
<p>〈内容〉</p> <p>① 勝敗について</p> <p>時間優先にして、20分以上引く目安で、実行委員長が状況判断して終了合図をおくる。開会の合図と終了の合図は大会長がやる。</p> <p>1回引くか2回引くかは、各字検討。</p> <p>② シタクについて</p> <p>トラックでのミチジュネーはやめた方がいい。できれば本来のやり方にもどした方がいい。</p> <p>③ リハーサルについて</p> <ul style="list-style-type: none"> ・婦人部と相談して、当日衣装を着るか決める。 ・反省会はやった方がいいので、リハーサル終了後に各演目でおこなう。 								
<p>〈備考〉</p> <p>調査員：高江洲・比嘉</p>								

<p>第9回 三カ村大綱引き実行委員会 (出席)</p>	<p>平成10年8月14日(金) 19:00～</p>			
	<p>場所：字北谷大綱引き事務所</p>			
	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="816 310 1016 365">事務局長</td> <td data-bbox="1016 310 1271 365">田場健儀</td> <td data-bbox="1271 310 1317 365"></td> </tr> </table>	事務局長	田場健儀	
事務局長	田場健儀			
<p>(内容)</p> <p>※出席者 { 実行委員 12名 専門部代表 5名 婦人部代表 5名</p> <p>① 前日(15日)スケジュール</p> <ul style="list-style-type: none"> ・15:00 旧役場集合して、立て看板搬入。 ・16:00 安良波公園清掃、大綱の下のまくら木を取り、カバーをはずすなど諸準備 <p>② 当日スケジュール</p> <ul style="list-style-type: none"> ・10:00スタートで、保険センターから中央公民館バスがピストン運行する。 ・14:00の写真撮影はカニチロ付近で行う。 ・公園前は駐停車禁止とする。 ・中通りの交通規制なし。駐車場案内等の看板設置(15日に作業)。 ・役員は13:00集合。 <p>③ 翌日(後片づけ)スケジュール</p> <ul style="list-style-type: none"> ・13:00公園清掃 ・大綱の処理 →石川市第一畜産から、2万円を寄附した形を取って引き取りたいという要望があった。 <p>④ その他、ミチジュネー等に関する再確認。</p>				
<p>(備考)</p> <p>調査員：高江洲・新里・高宮城・田場・比嘉 取材：RBCビジョン</p>				

第10回				平成10年11月27日（金）19:00～				
三カ村大綱引き実行委員会 及び慰労会（20:00～三星レストラン） 〈出席〉				場所：中央公民館 保育室				
				事務局長		田場健儀		○
1	照屋信正	○	7	照屋久康	○	13	座喜味 功	×
2	照屋正吉	○	8	比嘉林浩	×	14	伊禮喜俊	×
3	新垣秀一	×	9	嘉手納永周	×	15	伊禮利治	○
4	照屋明弘	○	10	金城英雄	×	16	津嘉山貞雄	×
5	上間盛一	○	11	知念政勝	×			
6	松島良光	○	12	伊禮喜市	○			
<p>〈内容〉</p> <p>実行委員会</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 監査終了の報告（田場さん） 2. 決算概要説明（照屋会長） 3. 質疑応答～決算承認 <p>慰労会</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 照屋会長あいさつ 2. 乾杯（照屋正吉さん） 3. 玉代勢あいさつ（照屋久康さん） 4. 伝道あいさつ（伊禮喜市さん） 5. 調査員・文化課あいさつ（比嘉） 6. 座談 <ul style="list-style-type: none"> ・文化課で記録した写真を見る機会がほしい（写真展） ・RBCビジョンのビデオ試写会を開いて、注文受付まで段取りしてほしい。 								
<p>〈備考〉</p> <p>調査員：田場・新里・比嘉</p>								

平成10年 寅年
北谷三カ村大綱引き実行委員会

1	委員長	照屋 信正	北 谷
2	副委員長	照屋 久康	玉代勢
3	副委員長	伊禮 喜市	伝 道
4	委 員	照屋 正吉	北 谷
5	委 員	新垣 秀一	北 谷
6	委 員	照屋 明弘	北 谷
7	委 員	上間 盛一	北 谷
8	委 員	比嘉 林浩	玉代勢
9	委 員	嘉手納 永周	玉代勢
10	委 員	金城 英雄	玉代勢
11	委 員	知念 政勝	玉代勢
12	委 員	座喜味 功	伝 道
13	委 員	伊禮 喜俊	伝 道
14	委 員	伊禮 利治	伝 道
15	委 員	津嘉山 貞雄	伝 道
16	事務局	田場 健儀	北 谷



北谷三カ村大綱引き実行委員会名簿

平成10年4月

No.	役職	氏名	住所	電話番号	備考
1	委員長	照屋信正	北谷町字桑江350番地の14	936-1705	北谷
2	副委員長	照屋久康	北谷町字吉原937番地	936-2045	玉代勢
3	副委員長	伊禮喜市	北谷町字吉原936番地の10	936-1954	伝道
4	委員	照屋正吉	北谷町字吉原987番地	936-2637	北谷
5	委員	新垣秀一	北谷町字吉原997番地	936-2397	北谷
6	委員	照屋明弘	北谷町字吉原958番地	936-3047	北谷
7	委員	上間盛一	北谷町字桑江482番地の28	936-1386	北谷
8	委員	比嘉林浩	北谷町字桑江595番地の12	936-6253	玉代勢
9	委員	嘉手納永周	北谷町字北谷2丁目17番地の3 2F	936-2788	玉代勢
10	委員	金城英雄	北谷町字桑江650番地の6	936-6112	玉代勢
11	委員	知念政勝	北谷町字桑江617番地の6	936-8913	玉代勢
12	委員	座喜味功	北谷町字浜川136番地	936-5318	伝道
13	委員	伊禮喜俊	北谷町字吉原936番地	936-1984	伝道
14	委員	伊禮利治	沖縄市南桃原3丁目13番地の14	933-6230	伝道
15	委員	津嘉山貞雄	北谷町字北谷1丁目13番地の14	936-6235	伝道
16	事務局長	田場健儀	北谷町字吉原1058番地の2	936-2124	北谷

1998年北谷三カ村大綱引き関係文書目録

文 書 ・ 資 料 名	関 係 所
実 行 委 員 会 関 係	
北谷三カ村大綱引きに対する町補助金要請並びに後援依頼について	受信者：北谷町長 H10. 2. 27 発信者：北谷三カ村大綱引き実行委員長
予算・運営等計画案	北谷三カ村大綱引き実行委員会
北谷三カ村大綱引き事業費補助金交付申請書	受信者：北谷町教育委員会教育長 発信者：北谷三カ村大綱引き実行委員長 10. 6. 30
北谷三カ村大綱引き事業費補助金交付について(起案)	北谷町教育委員会文化課 H10. 7. 3
平成10年度北谷三カ村大綱引き事業費補助金交付決定通知書	受信者：北谷三カ村大綱引き実行委員長 H10. 7. 6 発信者：北谷町教育委員会教育長
普通財産貸付申請書	受信者：北谷町長 発信者：北谷三カ村大綱引き実行委員長
北谷三カ村大綱引き実施計画書	北谷三カ村大綱引き実行委員会
借用書（北谷大綱引きビデオ）	受信者：北谷町文化課長 H10. 6. 11 発信者：北谷三カ村大綱引き実行委員長
北谷三カ村大綱引き実行委員会負担金の請求について	受信者：旧字玉代勢郷友会長 旧字伝道郷友会長 発信者：北谷三カ村大綱引き実行委員長
北谷三カ村大綱引き実行委員会会議録(全10回)	北谷三カ村大綱引き実行委員会
北谷三カ村大綱引き実行委員会の開催について(通知)	受信者：実行委員各位 発信者：北谷三カ村大綱引き実行委員長
北谷三カ村大綱引き実行委員会会則	北谷三カ村大綱引き実行委員会
北谷三カ村大綱引き実行委員会名簿	北谷三カ村大綱引き実行委員会
各種専門部会名簿(大綱/旗頭/カニチ/衣装・チヂン・舞踊)	北谷三カ村大綱引き実行委員会
字北谷舞踊専門部会会議録	字北谷舞踊専門部
旗頭専門部会会議録	旗頭専門部
旗頭の発注について	発信者：旗頭専門部各位 受信者：北谷三カ村大綱引き実行委員長
借用書（旗頭装飾品）	受信者：北谷町文化課 H10. 7. 22 発信者：コクバヤサン 国場永健
大綱製作指導員の派遣協力願いについて	受信者：宜野湾市大山自治会長 発信者：北谷三カ村大綱引き実行委員長
雄綱・雌綱組上げ図(約1/100)	宜野湾市大山自治会
ヤーマを使った綱作り作業工程表	与那原大綱曳き実行委員会
安良波公園計画平面図	北谷三カ村大綱引き実行委員会
北谷三カ村大綱引きへのご協力願いについて	受信者：北谷町商工会議所会長 発信者：北谷三カ村大綱引き実行委員長
北谷三カ村大綱引き開催に対する警察官の派遣願いについて(依頼)	受信者：沖縄警察署署長 発信者：北谷三カ村大綱引き実行委員長

北谷三カ村大綱引きに対する救護隊の対応について	受信者：北谷町消防本部消防長 発信者：北谷三カ村大綱引き実行委員長
物品ご寄贈願いについて	受信者：(株)サンエーハンピータウン総合店長 発信者：北谷三カ村大綱引き実行委員長
案内状（案内文／会場地図／来賓専用駐車券）	受信者：関係各位 発信者：北谷三カ村大綱引き実行委員長
北谷三カ村大綱引き招待者リスト	北谷町教育委員会文化課
北谷三カ村大綱引き当日資料	北谷三カ村大綱引き実行委員会
<ul style="list-style-type: none"> ・大綱引き役員名簿 ・当日の保安要員名簿 ・当日の保安要員配置（案） ・安良波公園会場内の本部席・各控テント ・大綱配置図 ・旗頭・メンダカリ・クシンダガリの道ジュネー スタート前配置図 ・安良波公園会場内の道ジュネー順路図 ・北谷三カ村大綱引き（ウーンナ）概要 ・北谷三カ村大綱引きプログラム ・道ジュネー順序（前ン渠・後ン渠） ・道ジュネー順序ステージ前配置図 	
北谷三カ村大綱引きの慰労会について	受信者：関係各位 発信者：北谷三カ村大綱引き実行委員長
お礼状	受信者：来賓・寄付者・ボランティア協力者各位 発信者：北谷三カ村大綱引き実行委員長
三カ字郷友会以外からの地謡協力者名簿	北谷三カ村大綱引き実行委員会
北谷三カ村大綱引き実行委員会決算剰余金処分	北谷三カ村大綱引き実行委員会
北谷三カ村大綱引き決算書	北谷三カ村大綱引き実行委員会
北谷三カ村大綱引き監査について	受信者：旧字玉代勢郷友会長 旧字伝道郷友会長 発信者：北谷三カ村大綱引き実行委員長
北谷三カ村大綱引き実行委員会決算監査報告書	北谷三カ村大綱引き実行委員会
北谷三カ村大綱引き歳入歳出予算書	北谷三カ村大綱引き実行委員会
補助事業等実績報告書	受信者：北谷町長 発信者：北谷三カ村大綱引き実行委員長 H11.2.1
北谷三カ村大綱引き事業実績報告書	受信者：北谷町教育委員会教育長 発信者：北谷三カ村大綱引き実行委員長

立 ち 入 り バ ス 関 係

立ち入り申請文書英訳依頼及び回答	受信者：E. E. C上間氏 発信者：北谷町文化課
字北谷メーウガミ（8月9日）の立ち入り申請資料 <ul style="list-style-type: none"> ・ Japanese Religious and Sacred Area Entry From Facilities Engineer Division, Public Works Branch, Real Estate Section ・ REQUEST FOR ACCESS TO CAMP FOSTER FOR RELIGIOUS OBSERVANCES ・ PERMISSION TO ENTER CAMP FOSTER FOR PRECEREMONIAL RELIGIOUS PURPOSE 	To:Provost Marshal From:PAUL K. GINOZA Real Estate Director Facilities Engineer MCB, Camp Smedley D, Butler 1101 14C/500 7AUG98 To:Superintendent, Chatan Town Bord of Education From:Assistant Chief of Staff, G-5, MCB Camp Butler 11000 G-5 7AUG98 To:G-5 community planning policy & diaison Marine Corps Base From:Superintendent, Chatan Town Bord of Education

・Visitors list & Entry Area Map	北谷町教育委員会文化課
字玉代勢(8月13日)・字伝道(8月16日)メウカミ立ち入り申請資料	To:Grase Williams, G-5, MCB, Camp Smedley D. Butler
・ PERMISSION TO ENTER CAMP FOSTER FOR PRECEREMONIAL RELIGIOUS PURPOSE	From:Camp Commander, Camps Foster/Lester, MCB, Camp Smedley D, Butler 1101 CS/JB 11AUG98
・ PERMISSION TO ENTER CAMP FOSTER FOR PRECEREMONIAL RELIGIOUS PURPOSE	To:G-5 community planning policy & diaison Marine Corps Base
	From:Superintendent, Chatan Town Bord of Education AUG-10-98

委 託 調 査 関 係

北谷の綱引き調査業務委託実施計画書(北谷の綱引き調査)【平成8・9・10年度】	北谷町の綱引き調査団
工程表(北谷の綱引き調査)【平成8年度】	沖縄国際大学教授 平敷令治
民俗文化財調査委託契約書【平成8・9・10年度】	委託者:北谷町教育委員会教育長 受託者:沖縄国際大学教授 平敷令治
北谷の綱引き調査計画書【平成8年度】	北谷町の綱引き調査団
北谷三カ村大綱引き調査員名簿	北谷町の綱引き調査団
民俗文化財調査委託契約について(起案)【平成8・9・10年度】	北谷町教育委員会文化課
北谷の綱引き調査成果概要報告【平成8・9・10年度】	北谷町の綱引き調査団
日程表(北谷町の綱引き調査)【平成8・9・10年度】	沖縄国際大学教授 平敷令治
引渡書【平成8・9・10年度】	委託者:北谷町教育委員会教育長 受託者:沖縄国際大学教授 平敷令治
費用精算報告書【平成8・9・10年度】	委託者:北谷町教育委員会教育長 受託者:沖縄国際大学教授 平敷令治
業務完了報告書【平成8・9・10年度】	委託者:北谷町教育委員会教育長 受託者:沖縄国際大学教授 平敷令治
請求書(北谷の綱引き調査業務委託の精算払い)【平成8年度】	委託者:北谷町教育委員会教育長 受託者:沖縄国際大学教授 平敷令治
北谷の綱引き調査業務委託の支払いについて(起案)【平成8・9・10年度】	北谷町教育委員会文化課
請求書(北谷の綱引き調査業務委託の概算払い)【平成9年度】	委託者:北谷町教育委員会教育長 受託者:沖縄国際大学教授 平敷令治
北谷の綱引き調査業務委託の概算支払いについて(起案)【平成9年度】	北谷町教育委員会文化課
公民館使用許可申請書(大綱引き調査ミーティングの為)	受信者:北谷町中央公民館長 発信者:北谷町文化課長

映 像 化 事 業 関 係

対米請求権地域振興事業助成金交付要綱	(社)沖縄県対米請求権事業協会
平成10年度対米請求権地域振興事業実施計画調査について	受信者:各市町村 H9. 9. 25 発信者:(社)沖縄県対米請求権事業協会長
平成10年度対米請求権地域振興事業実施計画調査表	受信者:(社)沖縄県対米請求権事業協会長 発信者:北谷町長
参考資料(契約書・見積書・作品総目録等)	シネマ沖縄・沖縄映像センター・RBCビジョン H11
債務負担行為見積書	北谷町教育委員会文化課
北谷の綱引き調査映像化事業製作見積書	シネマ沖縄・沖縄映像センター・RBCビジョン H9. 11. 10
北谷大綱引き調査映像化事業委託業者の選定について(起案)	北谷町教育委員会文化課 H9. 12. 8

北谷大綱引き調査映像化事業委託業者選考委員会	北谷町教育委員会文化課	
北谷の綱引き調査映像化事業（要綱）	北谷町教育委員会文化課	
選定結果報告書	北谷町教育委員会文化課	H10. 2. 25
北谷大綱引き調査映像化（ビデオ制作）事業委託締結について（起案）	北谷町教育委員会文化課	H10. 2. 25
業務委託契約書	委託者：北谷町教育委員会教育長 受託者：㈱RBCビジョン代表取締役社長	H10. 2. 25
北谷ウーンナ記録ビデオ企画案	㈱RBCビジョン	
北谷三ヵ村大綱引き映像化事業打ち合わせ 沖縄国際大学 平敷令治ほか調査団代表	㈱RBCビジョン・文化課・調査団代表	
平成10年度対米請求権地域振興事業助成金実績報告書の提出及び助成金の請求について（起案）	北谷町基地対策課	H10. 4. 5
平成10年度対米請求権地域振興助成事業助成金の内定通知について	受信者：北谷町長 発信者：（社）沖縄県対米請求権事業協会	H10. 4. 13
平成10年度対米請求権地域振興助成事業助成金の交付申請について（通知）	受信者：各市町村長 発信者：（社）沖縄県対米請求権事業協会	H10. 4. 15
平成10年度対米請求権地域振興助成事業助成金交付決定通知書	受信者：北谷町長 発信者：（社）沖縄県対米請求権事業協会	H10. 6. 8
平成10年度対米請求権地域振興助成事業助成金交付申請書	受信者：（社）沖縄県対米請求権事業協会 発信者：北谷町長	H10. 5. 11
平成10年度対米請求権地域振興助成事業助成金の交付申請について（回答） 平成10年度事業計画書（北谷綱引き調査映像化）	受信者：北谷町基地対策課長 発信者：北谷町文化課長 北谷町教育委員会文化課	H10. 5. 11
北谷大綱引き映像化事業（ビデオ制作）委託契約書	委託者：北谷町教育委員会教育長 受託者：㈱RBCビジョン代表取締役社長	
北谷町大綱引き調査映像化（ビデオ制作）工程表	㈱RBCビジョン	
工程表（北谷町の大綱引き調査映像化事業）	北谷町長	
「北谷大綱引き調査映像化（ビデオ制作）事業委託」の改定契約について（起案）	北谷町教育委員会文化課	H11. 1. 5
改定託契約書	委託者：北谷町教育委員会教育長 受託者：㈱RBCビジョン代表取締役社長	H11. 1. 13
対米請求権軍用地跡地利用計画策定事業助成金事業実績報告書	受信者：（社）沖縄県対米請求権事業協会 発信者：北谷町長	H11
北谷ウーンナ記録映像挿入歌「いのり」	㈱RBCビジョン	
公民館使用許可申請書（大綱引き映像チェックの為）	受信者：北谷町中央公民館長 発信者：北谷町文化課長	H11. 2. 26
米軍空撮写真の借用について（依頼）	受信者：沖縄県史料編集室長 発信者：北谷町教育委員会教育長	
映像編集資料	㈱RBCビジョン 北谷町教育委員会文化課 沖縄国際大学 平敷令治ほか調査団 北谷町教育委員会文化課	
・ナレーション原稿（原本） ・ナレーション原稿・字幕スーパー修正案 ・ビデオ仮編試写会後の編集案 ・ビデオケース表紙案		
業務完了報告書	受信者：北谷町教育委員会教育長 発信者：㈱RBCビジョン代表取締役社長	H11. 2. 1
納品書	受信者：北谷町教育委員会教育長 発信者：㈱RBCビジョン代表取締役社長	H11. 2. 1

引渡書	受信者：北谷町教育委員会教育長 H11. 2. 1 発信者：㈱RBCビジョン代表取締役社長
検査調書(北谷大綱引き調査映像化(ビデオ制作)事業委託)	北谷町教育委員会文化課 H11. 2. 1
平成10年度対米請求権地域振興事業の助成金請求について	受信者：(社)沖縄県対米請求権事業協会長 H11. 4. 12 発信者：北谷町長
平成10年度対米請求権地域振興事業助成金実績報告書	受信者：(社)沖縄県対米請求権事業協会長 H11. 4. 12 発信者：北谷町長
完成払金の請求について	受信者：北谷町教育委員会教育長 H11. 3. 30 発信者：㈱RBCビジョン代表取締役社長
北谷の綱引き調査映像化(ビデオ制作)事業の支払いについて(起案)	北谷町教育委員会文化課 H11. 3. 31

写 真 展 関 係

「12年前の大綱引き(ウーナ)写真展」の開催について(起案)	北谷町教育委員会文化課
「12年前の北谷三カ村大綱引き写真展」企画書	北谷町教育委員会文化課
北谷三カ村大綱引き記録写真リスト(公文書館・町史収蔵写真資料)	北谷町教育委員会文化課
作業工程表	北谷町教育委員会文化課
「12年前の大綱引き(ウーナ)写真展」開会式典の御臨席について(依頼)	受信者：関係各位 発信者：北谷町教育長
「12年前の大綱引き(ウーナ)写真展」のご案内	受信者：関係各位 発信者：教育長
「12年前の大綱引き(ウーナ)写真展」のご案内	受信者：関係各位 発信者：北谷三カ村大綱引き実行委員長
借用書(開会式典テーブルカット用品)	受信者：北谷町老人クラブ連合会長 発信者：北谷町文化課長
「12年前の北谷三カ村大綱引き(ウーナ)写真展」開会式典次第	北谷町教育委員会文化課
写真展受付シフト表	北谷町教育委員会文化課
会場レイアウト図	北谷町教育委員会文化課
展示内容一覧	北谷町教育委員会文化課
案内状発注者名簿	北谷町教育委員会文化課
来場者名簿	北谷町教育委員会文化課

米軍基地立ち入り許可申請書コピー

From: Superintendent, Chatan-Cho Board of Education

To: G-5 community planning policy & liaison Marine Corps Base.

Subj: PERMISSON TO ENTER CAMP FOSTER FOR PRECEREMONIAL
RELIGIOUS PURPOSES

1. Date of request:

6 Aug. '98

2. Name of facility or area to be visited:

Camp Foster

3. Date and anticipated duration of the proposed visit(s):

9 Aug. '98 Sun (9 00-1600)

13 Aug. '98 Thu (~~8 00-1600~~) → 11 00-13 00

16 Aug. '98 Sun (~~8 00-1600~~) → 08 00-10 00

4. Purpose of Visit:

An area sacred to the Okinawa people is located Camp Foster. We are requesting permission to enter the military installation to visit these holy grounds for worship as part of the historical preceremonial ritual of the "Orunahiki"(Chatan Tug of War).

The preceremonial worshipping has a significant relationship with this event. In ancient times the event was designed for these communities to come together and share fellowship. They met at the holy grounds and prayed for rich soil, a plentiful crop, prosperity, and safety for all of the community. Later, participating in the tug of war. The tug of war takes place once every twelve years with the Chatan, Tamayose, and Dendo communities participating every time for hundreds of centuries. The tug of war is one of the five most important historical events that take place on Okinawa. This meeting for the tug of war is the third reunion of those communities post-WWII. The customs of this event was passed down from the ancestors of these communities. Each community has an older representative to decide when this event will take place. They are considered a god servant or a human descendant of a god and decide when everything takes place. Their decisions are final for the communities and this event so, we must abide by their decisions as close as possible.

Chatan-cho Board of Education is attempting to preserve this ethnic custom and

ensure this heritage continues to be passed on for future generation. We plan to document these rituals by filming and taking photographs all aspects of the event.

The elders decided the dates for the worshipping and events to as follows:

Tug of War August 16th
Worshipping August 9th, 13th, 16th

We apologize for the delayed permission request and once again thank you for your consideration and understandings of the Okinawa history, culture, and way of life.

5. Visitor(s):

As per attached list.

6. Media representative(s): None

7. Will any photographs, video tapes, measurements, tests, samples or other recordings be used or taken during the visit ?:

Yes, photographs and video

8. What assistance are you requesting ?:

None

9. If you are permitted aboard the installation, you must provide your own interpreters for each vehicle or group of visitors. What type of vehicle (s) will you be using ? Provide license numbers in your request or at a minimum, the day before the visit to the MCB visit coordinator:

<u>Type of Vehicle</u>	<u>License Number</u>	<u>Name of Interpreter for All Visitors</u>
Toyota wagon	Okinawa 44 wa 18-17 18-37	Mr. Sunao Nakamura

10. Please attach a map of the proposed location of the visit. The map should show building in clearly taken and any proposed stops along the route:

The map is attached with all the information requested.

11. Point of contact for the visit:

NAKAMURA, Sunao: Subsection Chief of Cultural Section Chatan-Cho Board of Education. TEL 098-936-3159 or 982-7706

Kenichi Toyama

KENICHI TOYAMA

Superintendent

Chatan-Cho Board of Education

米軍基地立ち入りパスコピー

4

Japanese Religious and Sacred Area Entry Area Entry Form
Facilities Engineer Division, Public Works Branch,
Real Estate Section

11011
14C/500
7 Aug 98

To: Provost Marshal

1. Personnel and vehicle listed in paragraphs 2a and 2b are authorized to enter the circled locations of paragraph 3 on 9 August 1998 during the hours 1000 - 1500.

2. Personnel authorized for entry.


a.	<u> Name </u>	<u> Phone No. </u>	<u> Name </u>	<u> Phone No. </u>
	Higa, Atsuko and 11 other (See attached)	933-1665		

b. Vehicle No. OKINAWA 44 WA 18-37

3. Japanese Religious and Sacred Area Locations on USMC Camp Butler.

- a. Narukawa Adjacent to building #410 at Camp Lester
- b. Hinokan Adjacent to building #6237 at Camp Lester
- c. Chatan Choroyama Adjacent to building #205 at Camp Foster
- d. Aniyagusuku Adjacent to building #1132 at Camp Foster
- e. Chatangusuku Adjacent to building 350 at Camp Foster
- f. Futukiabu (Utinjuku) Adjacent to building #633 at Camp Foster
- g. Hiruzan Adjacent to building #840 at Camp Foster
- h. Reikamori Adjacent to building #4419 at Camp Courtney
- i. Kushimori Adjacent building #4435 at Camp Courtney
- j. Others (tomb, former tomb and home sites, etc.)

4. The point of contact is the Real Estate Director at 645-3035.


 PAUL K. GINOZA
 Real Estate Director
 Facilities Engineer
 MCB, Camp Smedley D. Butler



UNITED STATES MARINE CORPS
MARINE CORPS BASE
CAMP SMEDLEY D. BUTLER, OKINAWA
UNIT 35001
FPO AP 96373-5001

IN REPLY REFER TO:
11011
CS/jw
11 Aug 98

FIRST ENDORSEMENT on MCB, G-5 fax dtd 10 Aug 98

From: Camp Commander, Camps Foster/Lester, MCB, Camp Smedley D. Butler
To: Grace Williams, G-5, MCB, Camp Smedley D. Butler

Subj: PERMISSION TO ENTER CAMP FOSTER FOR PRECEREMONIAL RELIGIOUS
PURPOSES

1. Returned approved.

J. A. Watts
J. A. WATTS
By direction

CF:
PMO

TO MS. GAHANA
OR

8月11日

MR. NAKAMURA-SUNAO.

8月13日(木) 11時～1時

8月16日(日) 8時～10時

スクランルの立川許可が出ました
ので報告いたします。

ワシントン・ウィリアムズ

渉外官

海兵隊基地キャンプ・ブロー

外交政策部(65)

892-5111 内645-4220



UNITED STATES MARINE CORPS
MARINE CORPS BASE
CAMP SMEDLEY D. BUTLER, OKINAWA
UNIT 38001
FPO AP 96373-5001

IN REPLY REFER TO:

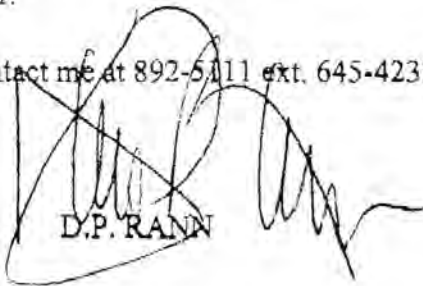
11000
G-5
7 Aug 98

From: Assistant Chief of Staff, G-5, MCB Camp Butler
To: Superintendent, Chatan Town Board of Education

Subj: REQUEST FOR ACCESS TO CAMP FOSTER FOR RELIGIOUS OBSERVANCES

Ref: Your Request ltr dated 6 Aug 1998

1. Marine Corps Base G-5 approves the subject request to enter Camp Foster 1200-1500, on 9 August 1998 only. The other dates will be verified by separate correspondence following coordination with the Camp Commander.
2. If you have any questions, please contact me at 892-5111 ext. 645-4233.


D.P. RANN

CC:
Camp Foster Camp Services

北谷三カ村大綱引き掲載資料目録

新聞・広報記事				
年号	月	日	記事見出し	掲載誌
明治 35	7	25	田舎の綱曳	琉球新報
明治 35	8	1	綱引一束	琉球新報
明治 35	8	3	北谷間切の綱曳	琉球新報
大正 3	8	9	北谷の綱曳	琉球新報
大正 3	8	17	北谷の綱曳	琉球新報
昭和 61			大綱で郷友意識を 3日に伝統のウーナ再現	沖縄タイムス
昭和 61	5	22	かつての名水田地帯 古里消えても続く村行事	沖縄タイムス
昭和 61	7	28	〈石敢當〉	沖縄タイムス
昭和 61	8	4	各地で伝統の大綱日にぎわう 〈与那原〉〈北谷〉	沖縄タイムス
昭和 61	8	5	“万余の力” 豊年を祈る 勇壮な踊りも披露 北谷3カ村大綱引き 12年に1回の伝統再現	琉球新報
昭和 61	9	1	13年に一度の伝統、北谷3カ村大綱引き 戦後2回目再現・8月3日・ハンビー飛行場跡	広報ちやたん
昭和 61	9	月号	“万余の力” 豊年を祈り大綱引き	オキナワグラフ
平成 9	10	30	寅年の「北谷大綱」準備始動-北谷、旧字伝道、玉代勢の3カ字-郷友会が初会合	沖縄タイムス
平成 10	1	5	伝統の“三カ村大綱引き” 12年ぶり開催向け実行委	沖縄タイムス
平成 10	3	25	北谷三カ村大綱引き 開催は8月16日に 会場は安良波公園に内定	沖縄タイムス
平成 10	3	26	8月に北谷大綱引き 12年ぶり、準備着々と	琉球新報
平成 10	4	20	8月16日に〈北谷大綱〉安良波公園で 実行委が本格準備へ	琉球新報
平成 10	7	16	村民のきずなを写した 亀谷長久さん	沖縄タイムス
平成 10	7	18	祭りの熱気12年ぶりに三カ村大綱引き前に写真展	沖縄タイムス
平成 10	7	19	三カ村郷友会 ウーナ通し団結図る	琉球新報
平成 10	8	月号	8月の本番を前に、前回の綱引きを振り返ってみましょう!	広報ちやたん
平成 10	8	14	北谷三カ村大綱引き16日、安良波公園で開催 綱打ちなど準備着々	琉球新報
平成 10	8	15	必見12年に一度! 北谷3カ村大綱引き	沖縄タイムス
平成 10	8	15	あす北谷3カ村大綱引き 12年に一度の開催	琉球新報
平成 10	8	16	三カ村大綱引ききょう開催 北谷町	沖縄タイムス
平成 10	8	17	12年ぶりふるさと再現 北谷町で3カ村大綱引き	琉球新報
平成 10	8	17	豊年願い大綱 300年の伝統、北谷3カ村	沖縄タイムス
平成 10	8	19	勇壮に、優雅に伝統行事	沖縄タイムス
平成 10	10	月号	12年に一度、行われる北谷の伝統行事 北谷三カ村大綱引き	広報ちやたん
平成 10	10	月号	12年に一度行われる北谷三カ村大綱引き	県広報 大きな和
平成 10			ホームページ「三百年の伝統 北谷三カ村大綱引き」	(財)北谷町公共施設管理公社

文 献 資 料

- 『北谷町史 第三巻 民俗 上』 北谷町役場 1992
 『北谷町史 第三巻 民俗 下』 北谷町役場 1994
 『北谷町史 第四巻 新聞集成』 北谷町役場 1985
 『北谷村史』 北谷村役場 1961
 『字誌北谷』 金城至盛 1986
 北谷町史編集資料9 『北谷町関係新聞記事目録 第1集』 北谷町教育委員会1996
 崎原恒新 「北谷三カ村大綱引き」 『まつり31』 まつり同好会 1978
 パンフレット 『北谷三カ村大綱引き』 1986年北谷三カ村大綱引き実行委員会
 平敷令治 「沖縄の綱引き(1)」、『沖縄国際大学文学部紀要 社会学科篇』4-1、沖縄国際大学、1976。
 「沖縄の綱引き(2)」、『沖縄国際大学文学部紀要 社会学科篇』6-1・2、沖縄国際大学、1978。
 『沖縄の祭祀と信仰』 第一書房 1990

A V 資 料

- VHS・BATA 「1986年北谷三カ村大綱引き(2本)」1986 北谷町文化課撮影
 VHS・BATA 「1986年北谷三カ村大綱引き」1986 字北谷郷友会撮影
 VHS 「北谷ウーナ-北谷三カ村大綱引き-(普及用)」1998 ㈱RBCビジョン撮影
 VHS 「北谷ウーナ-北谷三カ村大綱引き-(記録編上・下巻)」1998 ㈱RBCビジョン撮影
 VHS 「〈北谷ウーナ-北谷三カ村大綱引き〉記録映像製作素材(全13本)」1998 ㈱RBCビジョン撮影
 VHS 「字北谷メウガミ(2本)」1998 ㈱RBCビジョン撮影
 VHS 「道ジュネーチハーサル」1998 ㈱RBCビジョン撮影
 カセットテープ 「北谷町の綱引き合同聞き取り調査(調査地全8カ字)」1996~1998 北谷町の綱引き調査団

1998年北谷三カ村大綱引きへの取り組み

【平成8年】

- 5月16日 町文化課長と綱引き調査団長平敷令治先生との間で、綱引き調査委託契約。
- 6月14日 第1回綱引き調査団ミーティング（調査団）。
- 6月30日 旧字北谷・砂辺の5月ウマチー調査（調査団）。
- 7月5日 第2回綱引き調査ミーティング（調査団）。
- 7月23日 字砂辺の綱引き合同聞き取り調査（調査団）。
- 7月29日 字砂辺の綱引き見学調査（調査団）。
- 9月21日 旧字桑江の綱引き合同聞き取り調査（調査団）。
- 9月28日 旧下勢頭の綱引き合同聞き取り調査（調査団）。

【平成9年】

- 4月5日 旧字平安座の綱引き合同聞き取り調査（調査団）。
- 7月18日 字砂辺の綱引き見聞調査（調査団）。
- 7月28日 旧字野里（現嘉手納町）の綱引き見聞調査（調査団）。
- 9月5日 第3回綱引き調査団ミーティング（調査団）。
- 9月25日 旧字野里の綱引き聞き取り調査（調査団）。
- 10月24日 文化課と実行委員との間で事業調整。
旧字北谷評議員会。
- 10月25日 第4回綱引き調査団ミーティング（調査団）。
- 12月28日 第1回北谷三カ村大綱引き実行委員会。

【平成10年】

- 1月21日 文化課と実行委員との間で事業調整。
- 1月23日 旧字北谷評議員会。
- 2月4日 文化課と実行委員との間で事業調整。
- 2月13日 旧字北谷評議員会。
- 2月16日 文化課と実行委員との間で事業調整。
- 2月25日 第2回北谷三カ村大綱引き実行委員会。
- 2月27日 町への補助金要請・後援依頼（文化課長・実行委員三役）。
- 3月8日 旧字玉代勢ニングワチャャー。
- 3月11日 文化課と実行委員との間で事業調整。
- 3月15日 旧字北谷・伝道ニングワチャャー。
旧字伝道の綱引き合同聞き取り調査（調査団）。
- 3月22日 第3回北谷三カ村大綱引き実行委員会。

- 3月23日 安良波公園内施設の立地状況調査（文化課）。
- 3月26日 文化課とRBCビジョンとビデオ制作委託契約の調整。
- 4月 3日 旧字玉代勢大綱引き実行委員会。
- 4月 9日 旧字北谷大綱引き実行委員会。
- 4月14日 旧字玉代勢の綱引き合同聞き取り調査（調査団）。
- 4月19日 第4回北谷三カ村大綱引き実行委員会。
- 4月20日 旧字北谷の綱引き合同聞き取り調査（調査団）。
- 5月 7日 大綱引き取材要請（沖縄映像センター）。
- 5月11日 第5回北谷三カ村大綱引き実行委員会。
- 5月13日 文化課と調査団との間で平成10年度調査計画。
- 5月14日 旗頭専門部会。
- 5月18日 ワラの発注。
大綱引き取材・資料提供要請（沖縄映像センター）。
- 5月19日 旧字玉代勢評議委員会。
旧字玉代勢評議委員会。
- 5月21日 フェースシマ専門部会。
- 5月23日 文化課と写真提供者亀谷さんとの間で大綱引き写真展事業調整。
- 5月24日 旗頭・フェースシマ用具の現物調査・発注交渉。
- 6月 3日 旧字北谷・玉代勢郷友会総会（大綱引き説明会）。
- 6月 5日 字北谷舞踊専門部会。
文化課と写真提供者亀谷さんとの間で大綱引き写真展事業調整。
- 6月 6日 旧字北谷舞踊練習始動。
- 6月 7日 旧字玉代勢舞踊練習始動。
- 6月 8日 旧字伝道郷友会総会（大綱引き説明会）。
- 6月14日 与那原の大綱作成用具（ヤーマ）借用依頼。
- 6月16日 旧字北谷男性部会。
- 6月17日 第6回北谷三カ村大綱引き実行委員会。
- 6月20日 フェースシマ練習始動。
- 6月23日 旧字玉代勢旗頭・ボラチリ等練習始動。
- 6月27日 旧字伝道舞踊・旗頭・ボラチリ等練習始動。
- 7月 5日 第5回綱引き調査団ミーティング（調査団）。
- 7月 7日 ワラ搬入（第1回目）。
- 7月 9日 第7回北谷三カ村大綱引き実行委員会。
- 7月11日 宜野湾市大山指導員に実行委員が綱作り始動依頼及び打ち合わせ。
- 7月12日 綱打ち作業開始（役場旧庁舎にて）。

- 7月13日 綱打ち2日目。
- 7月14日 「大綱引き写真展」開催式典。
綱打ち3日目。
- 7月16日 綱打ち4日目。
- 7月18日 綱打ち5日目。
- 7月19日 綱打ち6日目。
- 7月21日 綱打ち7日目。
- 7月23日 綱打ち8日目。
文化課とRBCビジョンと実行委員との間で大綱引き当日取材計画・日程等の調整。
- 7月24日 「大綱引き写真展」最終日。
第8回北谷三カ村大綱引き実行委員会。
- 7月25日 綱打ち9日目（ナカユクイ）。
- 7月26日 綱打ち10日目。
- 7月27日 社会福祉協議会デイ・ケアでの舞台発表（旧字北谷舞踊）。
- 7月28日 綱打ち11日目・カニチ棒の松の木伐採。
- 7月30日 綱打ち12日目・松の木皮はぎ作業。
- 8月1日 綱打ち13日目・カニチ棒製作。
第6回綱引き調査団ミーティング・各字演目練習風景見聞調査。
- 8月2日 綱打ち14日目。
旧字玉代勢舞踊部会衣装合わせ。
- 8月3日 旧字玉代勢の旗頭修繕見聞調査。
- 8月4日 綱打ち15日目。
- 8月5日 キャンプフォスターG5と文化課との間でメーウガミ調査のための基地内立ち入りについて調整。
- 8月6日 綱打ち16日目（完了）。
メーウガミ調査のための基地立ち入り申請。
- 8月7日 綱の移動作業（役場旧庁舎から会場安良波公園へ）。
- 8月8日 大綱仕上げ作業開始（会場にて）。
北谷グスク清掃作業（北谷ヌンドウルチ家人・文化課・調査団）。
- 8月9日 大綱仕上げ作業2日目。
ミチジュネーリハーサル。
旧字北谷メーウガミ。
当日に向けての段取り・調整（文化課）。
- 8月10日 大綱仕上げ作業3日目。
ミチジュネーリハーサル反省会（実行委員・各専門部代表・文化課）。

- 8月11日 大綱仕上げ作業4日目。
- 8月12日 大綱仕上げ作業5日目・大綱完成祝（シースピー）。
調査団打ち合わせ。
- 8月13日 旧字伝道メーウガミ。
会場内保安係・当日接待等打ち合わせ。
- 8月14日 第9回北谷三ヵ村大綱引き実行委員会。
第7回綱引き調査団ミーティング。
最終調整（文化課・実行委員会・RBCビジョン）。
- 8月15日 最終確認・ミチジュネーアナウンス打ち合わせ。
会場下見・撮影機材等準備（RBCビジョン）。
- 8月16日 旧字玉代勢メーウガミ。
「北谷三ヵ村大綱引き」本番。
字伝道慰労会。
- 8月17日 安良波公園清掃作業。
大綱引渡し。
- 10月 2日 字北谷郷友会慰労会。
- 11月27日 第10回北谷三ヵ村大綱引き実行委員会（解散）。
- 11月28日 平成10年度沖縄県広域学習サービス事業中頭地区主催講座。「北谷三ヵ村大綱引きを再興して」北谷町教育委員会教育長 當山憲一。
- 12月 9日 「北谷町の綱引き」報告書についての調整（文化課・調査団）。
- 12月24日 綱引き映像のナレーション原稿・BGM・改定契約等の調整（RBCビジョン・文化課）。
- 12月25日 ナレーション原稿チェック（綱引き映像監修 沖縄国際大学教授 平敷令治）。
- 【平成11年】
- 1月22日 北谷ウーナナ普及用映像（仮編）試写会（RBCビジョン・文化課・監修 平敷令治）。
- 2月17日 北谷ウーナナ普及用映像（仮編）試写会（北谷町の綱引き調査）。

調査および、本報告書の編集にあたっては、多くの方々からのご教示をいただき、また写真・図版、資料などの提供をうけた。以下にお名前を列記し、お礼を申し上げます。

伝承者名簿（五十音順）

【砂 辺】

糸数 和子氏（大正7年生） ・ 糸数 基氏（大正4年生） ・ 伊礼 良雄氏（昭和4年生）
 喜屋武義信氏（明治45年生） ・ 国場 永信氏（大正14年生） ・ 国場ノブ子氏（大正14年生）
 知念 正一氏（昭和23年生） ・ 知念 敏子氏（昭和5年生） ・ 照屋カマド氏（大正6年生）
 照屋 助吉氏（大正3年生） ・ 照屋 千代氏（昭和3年生） ・ 照屋 徳吉氏（大正3年生）
 比嘉 ハル氏（大正8年生） ・ 松田 カミ氏（明治44年生） ・ 松田 カメ氏（明治38年生）
 与儀 カマ氏（明治38年生） ・ 与儀 正仁氏（昭和7年生）

【下勢頭】

池原 善光氏（大正3年生） ・ 伊礼 千代氏（大正11年生） ・ 喜友名朝市氏（昭和23年生）
 喜友名朝永氏（大正8年生） ・ 源河 朝正氏（大正10年生） ・ 佐久川政賢氏（大正3年生）
 佐久川政善氏（大正8年生） ・ 佐久川 弘氏（昭和2年生） ・ 高江洲義真氏（大正6年生）
 花城 可盛氏（昭和6年生） ・ 花城 可祐氏（大正11年生） ・ 屋我 平和氏（大正13年生）

【平安山】

糸村 昌仁氏（昭和11年生） ・ 小渡 新平氏（大正13年生） ・ 小渡 善昌氏（昭和7年生）
 島袋 正昌氏（昭和8年生） ・ 島袋 盛仁氏（昭和13年生） ・ 島袋 善助氏（大正8年生）
 島袋 鉄雄氏（昭和23年生） ・ 島袋 敏雄氏（大正13年生） ・ 島袋 豊吉氏（昭和13年生）
 玉城 清松氏（昭和10年生） ・ 照屋 永幸氏（大正15年生） ・ 照屋 正喜氏（昭和4年生）
 照屋 文吉氏（大正9年生） ・ 名嘉座元正氏（昭和11年生） ・ 比嘉 忠光氏（大正15年生）
 比嘉 ヒロ氏（大正8年生）

【桑 江】

座喜味朝雄氏（昭和12年生） ・ 座喜味次郎氏（昭和5年生） ・ 座喜味ヨシ氏（明治43年生）
 照屋 新昌氏（大正15年生） ・ 仲村渠 浩氏（大正10年生） ・ 仲村渠吉三氏（大正9年生）

【北 谷】

新垣 カメ氏（大正5年生） ・ 伊禮 秀子氏（昭和4年生） ・ 伊禮 孫一氏（大正11年生）
 伊禮 康雄氏（昭和24年生） ・ 上間 シズ氏（大正3年生） ・ 上間 盛英氏（大正9年生）
 栄田 安貞氏（大正10年生） ・ 金城 至佑氏（昭和14年生） ・ 新城 智氏（昭和32年生）
 末吉 清信氏（昭和13年生） ・ 末吉 文氏（大正8年生） ・ 末吉 雪子氏（昭和12年生）
 津嘉山かめ氏（大正9年生） ・ 津嘉山孫栄氏（大正3年生） ・ 津嘉山哲雄氏（昭和29年生）
 津嘉山篤信氏（明治43年生） ・ 津嘉山フジ氏（大正5年生） ・ 照屋 正吉氏（大正10年生）
 照屋 正光氏（大正7年生） ・ 當山 苗盛氏（大正14年生） ・ 仲村 新正氏（大正5年生）
 仲村渠敏子氏（昭和2年生） ・ 山川 直徳氏（明治44年生）

【伝道】

伊禮 勝善氏（大正3年生） ・ 伊禮 喜市氏（昭和22年生） ・ 伊禮 喜栄氏（大正9年生）
伊禮 喜正氏（昭和19年生） ・ 伊禮 幸子氏（大正8年生） ・ 伊禮 静子氏（昭和12年生）
伊禮 正義氏（大正4年生） ・ 伊禮 ツル氏（大正3年生） ・ 伊禮 輝子氏（昭和23年生）
伊禮 弘氏（大正8年生） ・ 座喜味忠次郎氏（大正10年生） ・ 座喜味忠正氏（大正14年生）

【玉代勢】

上間 カミ氏（明治42年生） ・ 大城 喜信氏（大正9年生） ・ 嘉手納喜明氏（大正5年生）
嘉手納千代氏（大正9年生） ・ 知念 千代氏（大正15年生） ・ 津嘉山シズ氏（大正15年生）
津嘉山政徳氏（大正11年生） ・ 津嘉山正則氏（昭和27年生） ・ 照屋 光久氏（大正3年生）
照屋 久康氏（昭和9年生） ・ 仲村渠敏雄氏（大正10年生） ・ 仲村渠ナベ氏（大正5年生）
宮平 苗氏（大正3年生）

【野里】

伊礼 真徳氏（昭和14年生） ・ 伊礼 雄吉氏（大正12年生） ・ 喜屋武吉伸氏（昭和31年生）
知念 光助氏（大正2年生） ・ 知念 光良氏（明治41年生）

残念なことにこの報告書編集中、聞き取り調査でお世話になった数名の方がお亡くなりになりました。
心からご冥福をお祈りいたします。

協力者名簿

【調査協力団体】

旧字砂辺戸主会 旧字下勢頭郷友会 旧字平安山郷友会 旧字桑江郷友会
旧字北谷郷友会 旧字伝道郷友会 旧字玉代勢郷友会 旧字野里共進会
北谷三ヵ村大綱引き実行委員会（1998年度） 本町企画課（写真提供）

【写真】

亀谷 長久氏 ・ 金良 宗吉氏 ・ 仲米 政雄氏 ・ 伊禮 康雄氏 ・ 新垣 カメ氏
菅山 憲一氏

【図版製作】

大城 清太氏 ・ 住福 一郎氏 ・ 豊里 初江氏

北谷町綱引調査団ミーティング記録 －平成8年～平成11年－

平成8年（1996）

6月14日（金）17時～

第一回ミーティング（沖縄国際大学厚生会館3F）

- 1 調査・執筆者顔合わせ
団 長：平敷令治先生
調査員：平敷兼哉・田場勝也・比嘉敦子・新里まゆみ・赤嶺朋子・高宮城ひとみ
・高江洲敦子
- 2 これまでの経緯について
① 委託契約について（比嘉敦子〈北谷町文化課〉・平敷令治先生）
② 綱引き調査に対する基本的な考え方（高江洲）
- 3 調査員のリーダー選出
キャップ：高江洲 敦 子
会 計：新 里 まゆみ
- 4 調査・執筆項目分担（案）
総活及び監修 （平 敷 令 治 先生）
綱の材料と綱の形態（田 場 勝 也）
備え・示威行為 （平 敷 兼 哉）
衣 装 （高宮城 ひとみ）
綱の引き方 （比 嘉 敦 子）
双分組織 （新 里 まゆみ）
綱引の期日 （赤 嶺 朋 子）
儀礼としての意味 （高江洲 敦 子）
- 5 平成8年度の調査地と日程について
砂 辺：6月～7月（旧6月14日字砂辺の綱引き見学予定）
桑 江：8月～9月中聞き取り調査
平安山：10月～11月中聞き取り調査
下勢頭：12月～1月中聞き取り調査
- 6 協力者へのお土産（タオルに決定）

7月5日（金）17時30分～

第二回ミーティング（沖縄国際大学厚生会館3F）

- 1 字北谷・砂辺の5月ウマチー見学について
- 2 協力者へのお土産（タオル）の発注について（新里）
- 3 調査項目レジュメ発表
綱の材料と綱の形態（田 場 勝 也）
備え・示威行為 （平 敷 兼 哉）
衣 装 （高宮城 ひとみ）

綱の引き方	(比 嘉 敦 子)
双分組織	(新 里 まゆみ)
綱引の期日	(赤 嶺 朋 子)
儀礼としての意味	(高江洲 敦 子)

平成9年(1997)

9月5日(金)18時30分～

第三回ミーティング(沖縄国際大学厚生会館3F)

- 1 北谷町文化課へ平成8年度調査成果報告(概要)につて(高江洲)
- 2 会計報告(平成8年度収支、新里)
- 3 平成9年度の調査について
調査地：字北谷・玉代勢・伝道・野里
：旧暦6月24日野里の綱引き見学(予定)
：各字調査日程調整について
- 4 協力者への記念タオル追加発注について(新里)

11月25日(火)18時30分～

第四回ミーティング(喫茶店パプロ)

- 1 調査進捗報告

平成10年(1998)

6月27日(金)13時～

第五回ミーティング(北谷町中央公民館)

- 1 事務局から(比嘉・北谷町文化課)
委託契約更新について
これまでの三カ村実行委員会の動き
- 2 各字の総会参加報告
北谷の総会(赤嶺)
玉代勢の総会(新里)
- 3 今後の各部会の練習日程(比嘉)
北 谷：月・水・金(旗頭)
伝 道：火・土(舞踊)、火・木・土(旗頭)
玉代勢：土・日(舞踊)
- 4 平成10年度調査成果報告について(高江洲)
平成11年3月末日例年同様町文化課に概要を報告する
平成11年8月末日平成8年～10年までの調査成果報告
- 5 調査補助員について
沖国大稲福ゼミ3年生4人依頼(決定)
- 6 合同補足調査について
大綱引き終了後、各字(北谷・伝道・玉代勢)1回ずつ(予定)

8月1日(金)15時～

第六回ミーティング(北谷町中央公民館)

- 1 補助員紹介(沖国大稲福ゼミ3年生4人)
宮里真由美・高良都・宜野座亜紀・新城明彦
- 2 三ヵ村大綱引き実行委員会及び部会の動き(比嘉)
 - ① 第8回実行委員会決定事項(比嘉)
8月9日(日) 予行演習午後3時スタート
綱を引く時間20分以上
引く回数1回乃至2回(保留)
 - ② カニチ棒部会
カニチ棒の伐採:7月28日午前10時～予定
カニチ棒の製作:8月1日午前9時～予定
- 3 大綱に関連する各字の御願(予定)
北谷:8月9日(日)メーウガミ(時間等未定)
:8月16日(日)当日の拝み(時間等未定)
伝道:8月13日(木)メーウガミ(午前10時ウフヤ集合)
玉代勢:8月14日(金)メーウガミ(時間等未定)
- 4 調査員役割分担
 - ① 予行演習(8月9日)
ミチジュネーの次第記録
クシンドカリ:新城明彦・調査員3名
メンダカリ:宜野座亜紀・調査員3名
綱の動き
クシンドカリ:宮里真由美・田場勝也
メンダカリ:高良都・田場勝也
 - ② 旧字北谷のメーウガミ(8月9日)
ビデオ(比嘉・平敷兼)、赤嶺・新里・高江洲
 - ③ 大綱引き当日
北谷ノロ殿内での拝み(全員参加)
ミチジュネーの次第記録
クシンドカリ:新城明彦(会場のみ)
メンダカリ:宜野座亜紀(会場のみ)
綱の動き
クシンドカリ:宮里真由美・田場勝也
メンダカリ:高良都・田場勝也
各字の集合場所での動き
北谷:ノロ殿内・健康保険センター(比嘉・高江洲)
伝道:屋号ウフヤ(平敷兼・新里)
玉代勢:北玉小学校体育館(赤嶺・高宮城)
ビデオ撮影:会場のみ(儀間淳一)

8月14日(金)21時～

第七回ミーティング(北谷町文化課〈文化財係〉)

1 綱引き当日の役割最終確認

① 各字集合場所

北谷：北谷ノロ殿内(比嘉・高江洲)

伝道：ウフヤ(平敷兼・新里)

玉代勢：北玉小学校体育館(赤嶺・高宮城)

② ミチジュネー(会場)

次第：クシンダカリ(新城明彦)

メンダカリ(宜野座亜紀)

衣装：雌雄(赤嶺・高宮城)

歌：雌雄(新里・高江洲)

ガーラシ：雌雄(比嘉)

旗頭・楽器：雌雄(平敷兼)

③ 綱の動き

次第：雄綱(宮里真由美・田場)

：雌綱(高良都・田場)

④ カニチ焼き(宮里・高良・高江洲)

⑤ ビデオ：雄綱(儀間淳一・崎山須磨子)

：雌綱(与那嶺・儀間〈町文化課〉)

⑥ 字玉代勢のメーウガミ

平敷先生・平敷(兼)・比嘉・赤嶺・新里・高宮城・高江洲・儀間・

東門(町文化財係)

⑦ 北谷ノロ殿内

カシチーウユミ(田場)

旧字からの拝み(平敷先生・儀間・高江洲)

ガーラシ(支度)の着付け(比嘉)

8月26日19時～

第八回ミーティング(居酒屋・飛衣羽衣)

1 大綱引きを終えた感想と今後の課題

平成11年(1999)

4月22日(木)18時30～

第九回ミーティング(沖縄国際大学厚生会館3F)

1 会計報告(新里)

2 普及用ビデオ完成について(比嘉)

3 平成10年度大綱引き調査成果概要報告について(高江洲)

4 執筆項目（当初の項目から下記に変更）

① 執筆項目の構成と分担（決定）

口 絵	（プロの写真を使用〈案〉）
発刊によせて	（比嘉）
凡 例	（高江洲）
目 次	”

第一章 北谷三カ村大綱引き（ウーンナ）の概要

1 三カ村の概況	（田場）
2 大綱引きの由来	（赤嶺）
3 大綱引きの進行過程	（高江洲）

第二章 北谷三カ村大綱引きの構造

1 綱の材料と綱の形態	（田場）
2 備え・示威行為	（平敷〈兼〉・儀間淳一・新里）
3 衣 装	（高宮城・赤嶺）
4 綱の引き方	（比嘉）
5 組 織	（新里）
6 祭祀儀礼	（高江洲）
7 綱の処理儀礼	（高江洲）

第三章 旧北谷村各字の綱引き

1 はじめに
2 各字の綱引きの構造
（1）字砂辺

① 字の概況	（田場）
② 期 日	（赤嶺）
③ 綱引きの次第	（平敷〈兼〉）
④ 綱の材料と綱の形態	（田場）
⑤ 備え・示威行為	（平敷〈兼〉）
⑥ 衣 装	（高宮城）
⑦ 綱の引き方	（比嘉）
⑧ 双分組織	（新里）
⑨ 祭祀儀礼	（高江洲）

以下（2）下勢頭・（3）平安山・（4）桑江・（5）北谷
（6）伝道・（7）玉代勢・（8）野里

解 説 （平敷令治先生）

1 沖縄の綱引き概説
2 北谷町の綱引きとその特色

付 録

1 大綱引き実行委員会会議録（比嘉）
2 各郷友会関係資料（比嘉）
3 北谷町の綱引き関係資料（比嘉）
4 協力者名簿（高江洲）

5 調査団会議録・合同調査日誌（高江洲）

あとがき（高江洲）

- ② 重複項目の調整について（高江洲）
- ③ 執筆要領の説明（平敷〈兼〉）
- ④ 文中での名称→ウーンナ（大綱引き）に統一する
- ⑤ 写真の取り扱い方→文中で扱う

5 原稿の発表と提出について（予定）

第一回発表会：6月19日（土）

第二回発表会：7月17日（土）

原稿最終提出：8月21日（土）

6月19日（土）14時～

第十回ミーティング（沖縄国際大学厚生会館3F）

- 1 北谷町中央公民館講座での調査報告について
- 2 調査成果第一回発表と原稿提出

8月17日（火）18：30～

第十一回ミーティング（沖縄国際大学厚生会館3F）

- 1 第三章旧北谷村の各字の綱引き（まとめは高江洲）
- 2 表記の統一（決定）
ノロ殿内・カニチ・メンダカリ（前村渠）、クシンダカリ（後村渠）・
ミチジュネー・ガジマルに統一する
- 3 写真のサイズ
縮小（1頁に6枚を最大とする）
- 4 執筆要領の留意点（平敷令治先生）
- 5 原稿最終提出日：9月14日（決定）
- 6 北谷町中央公民館講座日程について（高江洲）
- 7 会計報告（新里）
- 8 調査費用配分について（高江洲）

綱引調査団合同調査日誌
—平成8年～平成10年—

平成8年(1996)

6月30日(日)

旧字北谷5月ウマチー見学

7月23日(火) 19:00～

字砂辺の聞き取り調査(砂辺公民館)

伝承者:伊礼良雄さん・糸数基さん・照屋助吉さん・松田カメさん・松田カミさん
、照屋カマドさん・比嘉ハルさん・糸数和美さん・喜屋武義信さん・与儀正仁さん

次 第

- 1 砂辺区長(与儀正仁さん)あいさつ
- 2 北谷町文化課課長(松田盛)あいさつ
- 3 調査団リーダー(高江洲)調査趣旨の説明と調査員紹介
- 4 調査員各担当項目に沿って聞き取り調査
田 場 勝 也:綱の材料と綱の形態
平 敷 兼 哉:旗頭・楽器の有無や担当者について
高宮城 ひとみ:綱引きの装いにつて
比 嘉 敦 子:綱引きの時刻・引く回数・カンヌキの合わせ方
新 里 まゆみ:綱の分け方
赤 嶺 朋 子:綱引きの由来・綱引きの期日
高江洲 敦 子:綱引きに関する御願・綱引き後の綱の処理儀礼

7月29日(月・旧暦6月14日)

字砂辺の綱引き見学

9月21日(土) 15:00～

字桑江の聞き取り調査(桑江郷友会事務所)

伝承者:座喜味次郎さん・座喜味朝雄さん・照屋新昌さん・仲村渠浩さん

9月28日(土) 14:00～

字下勢頭の聞き取り調査(下勢頭郷友会事務所)

伝承者:池原善光さん・喜友名朝永さん・佐久川政善さん・花城可祐さん・
源河朝正さん・佐久川弘さん・花城可盛さん・喜友名朝市さん

平成9年(1997)

4月5日(土) 17:00～

平安山の聞き取り調査(照屋文吉さん宅)

伝承者:島袋善助さん・照屋文吉さん・玉城清松さん・比嘉忠光さん・

島袋豊吉さん・照屋永幸さん・糸村昌仁さん・島袋敏雄さん・
照屋正喜さん・島袋鉄雄さん・島袋正昌さん・島袋盛仁さん・
小渡新平さん・名嘉座元正さん

7月28日（月・旧暦6月24日）17：00～

嘉手納町字野里の綱引き見学

場 所：ノロ殿内・旧字野里の合祀所（嘉手納小学校裏）

9月25日（木）19：00～

字野里聞き取り調査（野里共進会会館）

伝承者：知念光良さん・知念光助さん・伊礼雄吉さん・伊礼真徳さん・
喜屋武吉伸さん

平成10年（1998）

3月15日（日）17：00～

伝道の聞き取り調査（北玉公民館）

4月9日（木）16：00～

玉代勢の聞き取り調査（北谷町中央公民館）

伝承者：照屋久光さん・大城喜信さん・津嘉山正則さん

4月19日（日）14：00～

北谷の聞き取り（照屋正吉さん宅）

伝承者：照屋正吉さん・末吉清信さん

8月9日（日）9：00～

北谷のメーウガミに同行

8月13日（木）

伝道のメーウガミに同行

8月16日（日）

玉代勢のメーウガミ（8：00～）及び北谷三ヵ村大綱引き本番

北谷町文化財調査報告書第19集
「北谷町の綱引き」

—北谷三ヵ村大綱引き（ウーンナ）を中心に—

2000年（平成12）3月31日発行

編集・発行 沖縄県北谷町教育委員会 文化課
904-0192 北谷町字桑江226番地
電話098-982-7706

印刷・製本 有限会社 北谷印刷
電話098-936-1068
